

Fate/Arie night

無限の槍製

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

狩野真琴は魔術師である。そして彼は知らないが転生者でもある。まあここではほぼ関係ないが。

彼が挑むのは『第5次聖杯戦争』

しかしそれは我らが知るものとは異なる『ありえない』戦いとなる。

目次

プロローグ	1
英霊召喚	6
サーヴァントとマスター その1	12
二人のアーチャー	16
時のある間に薔薇を摘め	24
アーチャーの秘密？	32
炎神の咆哮VS因果逆転の呪い	38
壊れた幻想VS静止した世界の救世主	45
同盟	52
それは彼らの昔話	59
過去と縮地とアロハ	65
王と復讐者とコンビニ弁当	71
斬り決る戦神の剣	78
学園決戦 序	84
学園決戦 憑依	90
学園決戦 期待	95
学園決戦 結	102
休息 くとある喫茶店にて	110
復讐者は殺人鬼となりて	116
サーヴァントとマスター その2	125
桜と桜	132
友を救うため、もう一度正義を	139
ムーンセル	146
終末剣VS射殺す百頭	153

黒き日輪よ、死に随え	158
説明と衛宮邸決戦と金髪十赤い瞳	166
ネバー・セイ・ネバー	174
雪を染めるもの	180
それぞれの壁	188
太陽面爆発を凌駕する究極の女子力	192
俺と私の一番の英雄	203
無限の剣製	211
unlimited blade works	
助っ人	216
決着と正義の味方と世界	223
現状確認・サーヴァントとマスター その3	234
休息	247
↳ 薔薇の皇帝	
休息	258
↳ あの夜の続きを	
休息	264
↳ 真琴を探して	
冬木聖杯グランプリ	271
最終決戦 序章	280
最終決戦 開幕	289
誰かの為の物語	296
最終決戦 真実	304
収斂こそ、我が理想の証	309
絶対なる勝利をもたらす星の聖剣撃	315
倒してしまっても……	321
最終決戦 途中休憩	326
最終局面始動	330

取り戻す力

このバッドエンドに私達の気持ちを

エピソード

335

343

352

プロローグ

始めに話しておこう。俺はまだ『Fate／GO』のサポート枠を全てうめていない。アーチャー枠だけが余っている。俺の端末にはアーチャーが一人も来ない。もはやバグとか言うレベルではない。

オール ジャンヌ・ダルク「オルタ」

セイバー 沖田総司

アーチャー なし

ランサー デイルムツド・オディナ

ライダー 坂田金時「ライダー」

キャスター エレナ・ブラヴァツキー

アサシン ジャック・ザ・リツパー

バーサーカー フランケンシュタイン

ここまで揃えて、なおかつフレンドにも使われている。しかしサポートが全て埋まってないがゆえにフレンド申請をしても拒否られてしまう。伝えたい。『違うんだ！俺の端末にはアーチャーがいないんだ!!』と。

しかしそれももう関係ない。俺は死んだのだ。車と正面衝突。迂闊だった。明日からギルガメッシュのピックアップアップ、やつとアーチャーが当たると。それに浮かれた俺がバカだった。

だって『ピックアップは仕事しない』のだから。

フワフワした気持ちの俺は、本当にフワフワと天に召された。

そして俺は受け付けにいます。他にも受け付けに並んでいる人がたくさんいる。白装束の人もいれば、俺のように制服の人や、全裸の人もいる。どうやら死んだ時と同じ服装らしい。

「それでは次の方」

「あ、はい」

俺の番になる。目の前にはわっかを頭につけ、背中からは羽が生えている。俗にいう天使だろう。

「それでは希望のコースにお名前を」

希望のコース。それは二つあった。

その一、『このまま天国で過ごす』

その二、『別人として、別の世界で生きる』

俺が選んだのはその二だ。まだ高校生なのだから、やりたいことはたくさんある。まだアーチャー枠をうめてないし。

「それでは、あちらの扉にお進みください。貴方の人生に幸福があらんことを」

扉に進む。とても分厚い扉だ。他の人間はエスカレーターで上に向かっている人間が殆どだ。扉に向かう人間はほとんどいない。いるのはブサメンが殆どだ。俺？俺は彼女いたから……………うん。

扉をあける。中は真つ暗。おいおい、これお先真つ暗って意味じゃないよな。不安になりながらも扉に足を踏み入れる。そこは……………足場がなかった。

「うわああああ!!!」

目が覚める。今は冬だというのに汗をかいている。落ちる夢をみるといつもこうだ。春夏秋冬いつでも汗が……………うん、病気だわ。「なんなんだ今の夢。もしかして俺の前世？」

汗を拭いながらベッドをおりる。時刻は午前6時。起きるには丁度いい時間だ。そしてこの時間なら、

「真琴ちゃん、ご飯ですよー」

「ウイ、着替えたらいくー!」

ドアの向こう側からお婆ちゃんの声が聞こえる。いつもの返事を返して俺は着替える。

「え、うそ!?何これ?」

寝間着を脱いだ俺の目に入ったのは左肩を中心に描かれている『羽の模様』だった。腕の方に三枚、胸の方に二枚、背中の方に二枚ずつ羽の模様が伸びている。イタズラで書くには無理がある。となると、「魔術刻印が影響している?」

俺の家系は魔術を扱う家系だ。まあぶっちゃけ俺も何ができるのか分からないのだが。取り合えずそれっぽい理由で納得させ、居間に向かう。

こうして俺Ⅱ狩野真琴の日常は非日常に塗り替えられようとしていた。

◇

今日はいつもより早くに学校Ⅱ穂群原学園に到着する。教室の人間は少ない。今朝のタトウを気にするが、まあ今日は体育ないしバレないだろ。

「あ、おはよう真琴」

「ん？ウイ、おはよう衛宮」

挨拶してきたのは衛宮士郎。俺のクラスメイトでダチだ。その後ろには柳桐一成。最近ホモ疑惑のある人だ。

「よう柳桐。相変わらず衛宮を使ってるのか？ブラウニーでも過労死するぞ？」

「衛宮はこの程度では死なんし、死なせん。大事なクラスメイトだからな」

やはり疑いは深まる一方だ。

「いつもより不機嫌だな。遠坂にでも会ったか？」

「そうなんだ。珍しく遠坂を見たよ」

遠坂凜。この学園最可愛と呼ばれる奴だ。最近学校には来ていなかったけど……

「まあそれなら仕方ない？」

「ふん。俺が気に入らんのは奴の態度だ。何が『ごきげんよう柳桐君』だ！」

「まあそれも遠坂の挨拶なんだからさ、そう怒るなよ」

衛宮が柳桐の怒りを静めようと努力するも空しく、その怒りは更にヒートアップする。

ホームルームのチャイムが鳴り響く。その音に気がついたのか全員席につく。柳桐も怒りを静め席につく。衛宮も俺の前の席につく。そして教室に入ってくる一匹の猛獣。

「おっはよう皆!! 今日も元気!」

藤村大河。このクラスの担任であり、英語教師だ。いつもは気の抜けた虎だが授業中はシヤンとしている。さて一時限目はなんだったかな。

――――
いつかの夜

それは深い夜に着々と進んでいる。

三日前。暗い地下。視界の悪いそこは一瞬のうちに輝く部屋となる。輝きはその中央にいる紫のライダースーツを身にまとった男から放たれている。そして側にいる紫の髪の少女に問い掛ける。

「問うぞ。お前が俺のマスターか?」

■
一週間前。ここも暗い洋館。その一室が光に包まれる。その部屋にいたのはスーツの女と紅い槍をもった男。その男も同じ質問をする。

「問うぜ。あんたが俺のマスターか?」

■
とある森の中の城。そこには一人の少女と赤いフードを被った男。その男の顔は包帯が巻かれておりよくわからない。

「もうすぐだよ……お兄ちゃん」

「……………」

■
男は煙草を吸いながら月を見上げる。その回りには無数の人間の死体。その中で立っているのは黒いコートの女。手にはナイフと拳銃。女はフードを被ると男に向かって、

「終わった」

と一言。その一言に男は煙草を捨て立ち上がる。その瞳の先には大きな城。

「さあ、おっ始めるか」

二人は城へ向かって歩き出す。

「よし！確かな手応え!!」

二日前、遠坂凜は自分の家で儀式を行っていた。それは先祖代々行われてきた大事な儀式。凜自身もこの日のために準備は続けてきた。

「さて、どんなサーヴァントが来るか!!」

しかし光がはれるとそこには誰もいない。その部屋にいるのは凜だけである。どうしたのかと首を傾げていると、上の階から大きな物音がする。

「ちよー！もう襲撃!?!」

上の部屋をあけると、そこは家具が散らかり、天井に穴が開き、男がソファにふんぞり返っていた。

「やれやれ。こんな手荒な召喚をされるとはね」

「あ、あんた『セイバー』なの?」

「いいや、私はセイバーという最優のサーヴァントではない。どちらかと言うと扱いにくいほうさ。だが安心したまえ。君が呼び出したのは中々の当たりだぞ?」

目の前の男はニヒルな笑みを浮かべる。凜はその表情に不安と期待を半々抱いた。

—————

「残るサーヴァントは2騎。しかしここまできると面白いな。さてこちらも準備をしなくては」

暗闇に浮かぶ男のシルエット。また別の暗闇には別の男のシルエット。

「ふん。お前が何を考えているか知らんが・・・退屈だけはさせるなよ?」

「分かっているさ英雄王。誰一人退屈はさせん」

舞台はもう少しで整う。あと二人の役者が揃えば。

英霊召喚

「何だったんだらうあの夢」

帰り道にふとそんなことを考えてみる。第一『Fate』は日本語で『運命』って意味だ。『GO』は『行く』とかそんな感じだったかな？

「しかも歴史上の人物ばかりだったな。てかオルタってなんだ？」

残り枠が『アーチャー』と夢の中の俺？は言っていた。アーチャー……日本語で『弓兵』かな？取り合えず弓を使えばアーチャーになるんだろう。俺の知る限りアーチャーになれそうなのは……ロビン・フット、アタランテ、美綴綾子、いや美綴は弓道部の部長だ。

「そういや衛宮も弓道部だったな。あと間桐も」

そういう考えるうちに家に着く。今日から暫くお婆ちゃんは旅行でいない。まったく元気だね〜

居間に寝転がるが……暇だな。せつかくの機会だ。アーチャーとやらを考えてみるか。

「アーチャー、アーチャー、アーチャー。うーんよくわからん」

絵に書いてみたがまったく書けない。想像は出来ている。それを絵にできないのだ。

「……………」

取り合えず想像してみた『僕の考えた最強アーチャー』を文字に現してみた。

弓がデカイ。

矢を何発も同時に放てる。

矢じやないものも放てる。

弓で近接格闘。

最早弓を使わず徒手空拳で戦う。

必殺技がライダーキック。

水色の髪でショートの貧乳。あと赤目

最早最後のは俺の趣味だ。てか全て俺の願望だな。こうあってほしいという。中々カオスだ。

「……何やってんだか」

我にかえり書くのをやめる。これこそ究極の時間の無駄だ。さつさと飯食って寝るか。

◇

「おいおい。今度は右手かよ」

朝起きると俺の右手にはまた妙なタトゥーが描かれていた。今度も1枚の羽の模様。本当に誰がやったんだ？まさかオバケ!?

「まさかな……でも左肩のも消えてねえんだよな」

左肩の模様も消えていない。むしろ色が濃くなっているか？

「本当にどうすればいいんだ……」

◇

今日の学校は特に何もなかった。いつも通りの学校。少なくともいつも通りに衛宮が間桐にコキ使われる程度には普通だった。

そう家に帰るまでは、

「……」

「……ねえ」

「え？俺？」

「令呪もあるのに、早く召喚しないと死んじやうよ？」

それは家への帰り道。横を通りすぎた銀髪の少女から言われた一言。それが何を意味するのか分からなかった。

「令呪？この右手のか？」

「そう。分かっているなら早く召喚して。ああ。もしかしてまだ自分がどんな状況にあるのか分かってないのね」

「……？」

「分からないなら、分からせるだけよ」

明確な殺意。それは一般人の俺でもわかるものだった。その瞬間左肩が熱くなる。

「……っ！なんだ!？」

《ほら、早くしないと死ぬわよ？貴方》

「はあ？誰だよ!？」

「もう遅いよ」

背後に気配。振り向いた俺の首目掛けてナイフが飛んでくる。ギリギリかわすが少しかすったのか、首から血が流れる。

「なんなんだよ!おい!」

「ほう。今のを交わすか」

暗闇から現れたのは赤いフードを被った男。顔は包帯が巻かれていてわからない。手にはナイフと……マシンガンか!?

「一撃で仕留めろと言った筈よ『アサシン』」

「すまないマスター。僕としては『殺った』と思っただけどね」

「まあいいわ。今度は外さないでよ」

アサシンと呼ばれた男はマシンガンをこちらに向ける。あ、これ死んだ?

《早く逃げなさい。貴方、今度こそ死ぬわよ?》

(そんなこと言っただって動けねえんだよ!)

《はあ。いっつもイケメン発言をしているわりには、案外チキンなのね》

謎の声にバカにされる。アサシンは俺にジリジリ詰め寄ってくる。

《そうね……逃げられないなら戦いなさい。力ぐらいは貸してあげる》

その声を聞き終える前にマシンガンの銃口が火を吹いた。でもその弾丸は俺には届かなかった。

「何!？」「嘘……」

「なんだ……この剣は!？」

《この私、『竜の魔女 ジャンヌ・ダルク』がね!》

剣から放たれた炎がアサシンと少女を怯ませる。逃げるなら今しかない!

そこから陸上部もビックリなスピードで家に戻った。

◇

「はあ・・・はあ・・・なんなんだよ・・・あれ」

《結局逃げたのね。チキン》

「うるさい!!誰なんだお前は!!」

《さつきも言ったじゃない。ジャンヌ・ダルクとね》

訳がわからない。ジャンヌ・ダルクだって?ジャンヌ・ダルクは聖女のはず。竜の魔女なんて二つ名聞いたことがない。歴史とは難しいものだ。

《まあ次に攻めてきても私は『戦うときだけ』力を貸してあげるわ。それ以外はさつきとサーヴァントを召喚してどうにかしなさい。じゃ》

それ以降ジャンヌ・ダルクの声は聞こえなくなった。俺の耳には時計の動く音しか聞こえない。

「何が力を貸してあげるだ。上から目線で言いやがって」

でも戦うときだけにしかジャンヌ・ダルクは力を貸してくれない。もし次襲われたら自分の力で何とかしなくてはいけない。

「いや・・・サーヴァントか。そういうのはお婆ちゃんの本棚にある筈」

ジャンヌ・ダルクはサーヴァントが云々と言っていた。どうにかしてそのサーヴァントを召喚するしかないか。

お婆ちゃんの本棚でサーヴァントの本について探す。その中で見つけたのが、

「ん?聖杯戦争?」

聖杯戦争の記録と書かれた本。ごく丁寧に日付まで書いている。丁度60年前。中を見ると『サーヴァント』や『聖杯』についてかかれていた。

『サーヴァントには7つのクラスが存在する。セイバー、アーチャー、ランサー』ってこれ!夢のゲームと同じ!」

夢のゲームも7つのクラスが存在した。その中にはさつきの『アサシン』もある。間違いない。あれはサーヴァントだ。

『サーヴァントの召喚には触媒が必要』ってそんなのねえぞ」

触媒なしでも召喚は出来るらしいが、目当てのサーヴァントを引き

当てるためには触媒があつたほうがいいみたいだな。

「まあいいか。とつとと召喚するか。えーと呪文みたいなのは」

『素に銀と鉄』だろ。最初は」

「そうそうそれそれ!・・・え?」

「見届けたい気持ちもあるが、マスター命令だ。ここで死んでもらう」

「どうやらここでゲームオーバーみたいだ。ご丁寧にコンテンドーの銃口を俺の額に当ててやがる。」

「殺すのか?」

「神秘は秘匿する。それも聖杯戦争のルールだ」

おいおい。こんなところで死ぬるかよ。

「ふざけんな。テメエに殺されて!たまるかよお!!」

その時右手の令呪が光る。この時アサシンは驚かずにさっさと俺を殺せば良かったんだ。

何処からともなく矢が飛んでくる。それはコンテンドーを貫くとコンテンドーこと消滅した。

「はーい。そこまでだよアサシン」

「お前は・・・サーヴァントか」

今度は声のする方、いやそこにいる『少女』にマシンガンを向ける。その少女の手には『矢だけ』が握られている。

「ふふ。お姉さんと殺る?殺らない?」

「・・・生憎、こちらも昨日から戦つて、この後も戦うんだ。今日は退いておくよ」

アサシンはマシンガンをおろすと『煙』のように消え失せた。

「大丈夫マスター?」

「え!?あ、ああ大丈夫だけど・・・お前は?」

「おっと、名乗るのが遅れましたね。」

サーヴァント、アーチャー。召喚に応じ貴方の『空いたアーチャー
枠』として馳せ参じました。貴方が私のマスターですな?」

それが俺とアーチャーとの出会いで、戦いの始まりだった。

—————

今俺は土蔵にいる。それは魔術の鍛練のためじゃない。槍をもつ
た男の一撃で、ここまで吹っ飛ばされたからだ。そして俺の目の前に
は、『鎧を纏った少女』が立っていた。

「問おう。貴方が、私のマスターか?」

少女は静かに、凜とした声で俺に聞いた。

サーヴァントとマスター その1

狩野真琴

本作の主人公。アーチャーのマスター。魔術師の家系なのは知っているが、魔術を使ったことのないため基本的にはあまり使えない。しかし何らかの力で『ジャンヌ・ダルク』の力を使うことが可能。他にも5人の力を使うこともできるらしい。

容姿は『ウルトラマンオーブ』の『クレナイ ガイ』がイメージ的には一番近い。わからない人はググろう。

アーチャー 真名 不明

筋力 C 耐久 C+

敏捷 A 魔力 B

幸運 B+ 宝具 C+

対魔力 C 単独行動 A

真琴のサーヴァント。自らを『真琴の空いたアーチャー枠』と言う。戦闘方法はアーチャーらしく弓で戦う。がその使用方法は近接武器として使う。勿論矢も放つが。

宝具は一つだけ。詳細は不明。

容姿は『IS』の『更識楯無』、服装は『FGO』の『アルジュナ』の衣装を半袖にした感じ。

ジャンヌ・ダルク

真琴に話しかけてきた声の主。念話のように真琴の頭に直接話しかけるため姿は不明。ジャンヌの剣は大量の魔力を解放することで様々な用途に使える。

衛宮士郎

原作主人公。セイバーのマスター。『正義の味方』を目指す高校2

年生。真琴とは友達。原作では凧と同盟を結ぶが？

セイバー 真名 不明

筋力 B 耐久 C

敏捷 C 魔力 B

幸運 A 宝具 C

対魔力 A 騎乗 B

士郎のサーヴァント。皆さんご存じのあの騎士。今回もあまり変わらず、士郎を守る剣となる。今回は幸運がワンランクアップしている。

宝具はアレとアレとアレの三つ。三つ目のアレは現在所持していない。

遠坂凧

〇〇〇〇ーのマスター。ここで隠しているのはネタバレになるため。原作と変わらずにニヒルなアイツと聖杯戦争に挑む。

〇〇〇〇ー 真名 不明

筋力 D 耐久 C

敏捷 C 魔力 B

幸運 E 宝具 ?

対魔力 D 単独行動 B

凧のサーヴァント。皆大好き『赤い外套』のあいつ。今回もアイツをぶっ殺すために頑張る。しかし敵にアーチャーがいるが？

宝具はいつものアレと、新しく追加されもうひとつ存在する。

〇〇〇〇

ランサーのマスター。今回は闇討ちにあっていないためランサーのマスターとしてハッスルする。それにしてもダメツトは直らない。

ランサー 真名 不明

筋力 B 耐久 A

敏捷 A 魔力 C

幸運 D 宝具 B

対魔力 C 神性 B

いつもの聖杯戦争の常連さんの兄貴。今回はどんな強敵と戦えるのか。マスターが麻婆ではないためステータスが若干変わっている。宝具はいつものアレ

銀髪の少女

アサシンのマスター。皆大好きのあの子です。初戦から思わぬ強敵と戦っている。原作ではサーヴァントはバーサーカーだったが、何故アサシンなのか？

アサシン 真名 不明

筋力 D 耐久 C

敏捷 A+ 魔力 C

幸運 E 宝具 B++

気配遮断 A+ 単独行動 A

赤いフードを被った男。その顔は包帯でよくわからない。近代武器を多く使うため、近代の英霊なのがわかる。

まあここまで言えばわかる人は分かるよね。しかし彼は本来聖杯戦争には呼ばれない筈だが？

宝具はあのカッコイイあれ。

????
○○○○○○○のマスター。聖杯戦争が完全に始まる前にアサシン陣営と対決している。その性格は何人死んでいても動じない。その存在は異形に近い。

○○○○○○○ 真名 不明

筋力 C 耐久 C

敏捷 A+ 魔力 D

幸運 D 宝具 B+

気配遮断 B 復讐者 A

もはやクラススキルでクラスがバレバレのサーヴァント。この真名をもつ英霊は別のクラスで召喚される場合がある。彼女は誰かを探すために召喚に応じたらしい。

宝具は一つ。別のクラスで召喚された場合は宝具も変更する。

○○○

ライダーのマスター。今回は代理を用意せず自分自らも戦う予定。勿論あの娘です。映画楽しみにしてるよ！

ライダー 真名 不明

筋力 A 耐久 A

敏捷 EX 魔力 E

幸運 D 宝具 EX

対魔力 D 騎乗 A

チートサーヴァントキターー!!!でも幸運低いからランサーの宝具ならワンチャン?

容姿は『仮面ライダードライブ』のあいつ。てかその物。

宝具は三つ。アレとアレとアレに『変身』する宝具。

二人のアーチャー

「……………とりあえず、お茶」

「わ、ありがとー！マスターなのにゴメンね？」

今現在、もうすぐ日付が変わる頃。俺とアーチャーは机を挟んで座っていた。

アーチャーは白い半袖の服を見にまとっている。髪は水色で瞳は赤……………あれ？これどつかで……………

「マスターは聖杯戦争について、どれくらい知っているのかしら」

「え？えーと、とりあえず『聖杯をめぐる争うバトルロワイヤル』だろ？」

「ええ簡単に言うそうよ。でもね、聖杯戦争にも細かいルールがあるの。例えば『戦うのはだいたい夜』だったりね」

「なんで夜なんだ？」

「あのねマスター。昼間からドンパチャやっていたら、ニュースで取り上げられて、一瞬で私達はテロリストよ？それに昼間のほうが人が多いから被害者が増えるのよ」

なるほど。しかしアーチャーは『だいたい夜』と言っていた。つまり、

「だいたい夜なんだから、昼間から仕掛けてくる奴もいるんじゃないか？」

「でしょうね。まあその時は魔術の秘匿に関わるから、いろんな組織が動くでしょうね。教会とか協会とか宇宙警備隊とか？」

「サーヴァントはウル○ラマンに勝てるのか？」

絶対無理ね、とお茶を一気に飲み干すアーチャー。いい飲みっぷりだ。

「さて、教会に報告に行きますか？」

「え？…なんで？」

「ゲームに参加するって言われてなくて、いざ飛び入り参加されたら、イラッてきますよね？それと同じです」

「??？」

そう言うとアーチャーは外へ出た。俺も慌てて外へ出る。今日は月が綺麗だ。

「マスター。足ありますか？」

「足？この足じゃないよな・・・悪いけどバイクとかは」

《あるぞ大将！俺っちの『ゴールデンベアー号』がな！》

また変なのが出てきた。あきらかにジャンヌとは別の声。どちらかというとヤンキーっぽい声だ。

（誰だお前？）

《坂田金時。分かりやすくいうと『金太郎』ですよ》

（また出た！今度は誰だ!?!）

《申し遅れました。私はデイルムツド・オディナ。フィオナ騎士団が一番槍でございます》

《まあとりあえずドライブと洒落こもうぜ！大将!!》

すると目の前に一台のバイクが姿を現す。これがゴールデンなんちやら号か・・・けっこうイカスな。

「なんだあるじゃない！それにしても一瞬で『投影』するなんてスゴいじゃない！」

「いや俺じゃなくて金太郎が「さあ行くわよ。後ろに乗って!」・・・聞いてねえ」

仕方なくアーチャーの後ろに乗り込む。こういうのは男の俺が運転したほうが格好がつくのだが、事故が恐ろしい。

「運転できるのかアーチャー？」

「いいえ！さっぱり!!勘とノリで行くわ！」

大丈夫かこの脳筋アーチャー・・・

バイクは凄まじい音を出しながら新都へ向かう。行き先は教会だ・・・

◇

「はいとうちやーく！」

わずか10分で到着した。思いの外安全運転なのは驚いた。いや速度制限丁度で走っていた。

「何やってんだこの人？」

教会の敷地前の門に黄色い雨合羽を着た女性が立っている。こちらを一瞥すると更に警戒の色を強くする。

「お留守番ってどこね。彼女もサーヴァントよ」

「え？サーヴァント!？」

「そういう貴女もサーヴァントですわ」

「ええ。アーチャーよ」

「サーヴァント、セイバーです」

意外と好印象？いやそれはない。これから殺しあう仲なのに、仲良しこよしなんて出来ない。

「まちたまえ。『アーチャー』は私だ」

セイバーの近くに姿を現したのは赤い・・・なんだろう。とりあえず高身長の方だ。肌は日焼けかな？

「・・・マスター。先に中に行きなさい」

「お前は？」

「教会なんてつまんないじゃないですか」

アーチャーが行こうって言ったのに。言い出しつpegが来ないのなら俺一人でいくしかない。仕方なくアーチャーを置いて一人でいく。いや一人じゃないな。

《なんなんだよ大将！おもいつきり安全運転じゃんかよ！いや違反しろって訳じゃねえけどよー!》

《ならいいではないか。それに文句ならあのサーヴァントに言いなさい。主に言っても無駄ですよ》

《ちよつとうるさいんだけど！静かにしなさいよ、焼き殺されたいの!?!》

《わ、わりい》《む、すまん》

《あんたもなんか言いなさいよチキン。元はと言えば貴方のせいよ?》

(そこで俺に振るか?)

《私は事実を言っただけよ》

俺の頭のなかでは絶賛口喧嘩の真っ最中だ。金太郎とデイルムツドをジャンヌが一蹴する。もうそろそろ俺の頭もパンクしそうだ。

(中で話すときは静かにしてろよ！)

《ええ、静かにしてるわ。『私は』ね》

(あとの二人も静かにしてろよ)

《おう、まかせな！》《了解した》

今後の生活が不安になる。教会の扉を開けようとする、向こうから開いてくれる。開けたのは衛宮と遠坂？

「なんでお前ら」

「え、真琴？なんでここに？」「あら狩野君じゃない。まさか貴方もマスターなの？」

「同時に喋るな。まあ俺もマスターだ」

右手の令呪を二人に見せる。すると衛宮は驚き、遠坂は「なるほど、やっぱりね」と小さく呟いた。

「これから、一応の報告？みたいなのをしてくる」

「そう。なら気を付けなさい。こここの神父は性格悪いから」

そういうと遠坂はスタスタと歩いていった。いやズカズカかな？取り合えず学校で見せるような優雅さはなかった。

「俺は聖杯戦争を止めるために戦う。真琴は・・・聖杯が欲しいのか？」

「いや、よくわからない。まあいまいちパツとしないからだと思うけどな。でも、出来れば平和に過ごしたいよ」

「そうか。それじゃ俺は行く。また明日な」

そうだ。聖杯戦争が始まったからといって、学校が休みになる筈がない。もうそろそろ日付も変わっただろう。早く帰って寝ないと。

教会の扉を開く。思い音が教会内へ響き渡る。中には一人の男。あれがこの教会の神父か。

「ほう、今日は客人が多いな」

その神父の瞳は、深い闇のようだった。

「どちらがアーチャーに見えます！」「どちらがアーチャーに見えるかね！」

外へ出ると遠坂がアーチャーと自称アーチャーに詰め寄られている。あれが真琴のサーヴァントなのだろう。でもアーチャー？

「なあセイバー。聖杯戦争で同じクラスのサーヴァントが召喚されることってあるのか？」

「私はそのような事例は聞いたことがありません。恐らくどちらかが嘘をついていることになる。シロウはどちらがアーチャーに見えますか？」

「どっちかかって言われたら、そら二人ともアーチャーに見えない」

「ええ!？」

「そらそんな格好してたら分かんない。弓でもあつたら分かりやすいけど」

そう言った瞬間二人は弓を手元に呼び出す。アーチャーのは黒い洋弓。自称アーチャーのは巨大な弓だ。恐らく自称アーチャーの身長くらいはある。

「でもこうなるとどっちもアーチャーに見えるわね」

「いつそのことの当てでもやったらどうだ？」

「良いわね、やりなさいよ的当て」

いきなりの無茶ぶりにたじろく二人のアーチャー。すまん俺のせいだな。

しかし二人のアーチャーは気が変わったように弓を構える。アーチャーは和弓の撃ち方で、自称アーチャーは地面に弓を突き刺して固定する。両手撃ちなのか？いやそれより弓というものの使い方が微妙に間違っている。

「ちよー何処に撃ってるのよー」

二人のアーチャーは真つ直ぐに矢を放つ。放った先には何もなかった。これでは勝負にならないはずなのだが、

「ふーん。アサシンの気配遮断に気づいたんだ」

その矢を弾くように金属音が響く。そこにはさつきまではいなかったはずの男と少女がいた。

「また来たのね？今度は逃がさないぞ♪」

「あまり私を見くびらないほうがいい。しかし…アサシンときたか」

二人のアーチャーは休むことなく矢を放ち続ける。それを全てナイフで落としていくアサシン。これが聖杯戦争。そしてそこに加わ

る一陣の風。

「シロウ、下がって！」

セイバーが俺の前に立った瞬間、暴風が吹き荒れる。その右手にはうつすらと風が『握られている』。そのまま跳躍。一瞬でアサシンの目の前に降り立ち右手を振るう。

「はあっ！」

「!!やるな」

セイバーの一撃一撃を全てナイフで防いでいく。家で戦ったランサー程ではないが、アサシンもやはり『英霊』だ。しかし所詮はナイフ。次第にセイバーが有利になってくる。

「たあっ！」

「ぐっ！」

「何をやってるのアサシン！貴方の戦い方で殺りなさい！」

「言ってくれるねマスター。相手は『騎士王』様だよ？僕のトラップに引っ掛かるとは思えないね」

「なっ！何故……騎士王と言った」

「僕は覚えている。生前は君と一言も話したことがないことも」

「!!そんな！まさか貴方は……切っ」

セイバーが何かを言おうとした瞬間、アサシンのマスターから大量の魔力が放出される。少女の顔には赤い模様が浮かび上がっている。「勝ちなさいアサシン。この私に勝利を！」

少女の魔力がアサシンに注がれる。アサシンの気配が変わっていく。『暗く鋭い気配』は『全てを壊す暴風』へと変わっていく。

「嘘、そんなことが、『クラスチェンジ』ができるっていうの!?!」

「違うわリン。これはクラスチェンジじゃなくて、クラスの重ねがけ。つまりこのサーヴァントは『バーサークアサシン』ってこと。こんな秘術は遠坂には出来ないでしょうね」

二人がそんな会話をしている間にもアサシンは赤いオーラを纏っていく。その目も赤く染まっけいき、

「ぐっ！があああッツツ!!」

「これ、不味いやっね」

「怖じ氣ついたのか？」

「マスターが心配だから。ほら、お姉さん心配性でしょ？」

「はあ。勝手にしたまえ」

「ありがとね」

自称アーチャーは教会のほうへと跳躍する。多分真琴を助けに行っただろう。

「ふむ、戦力が少し減ったが。凜、どうするつもりかね」

「どうするもこうするも、向こうは逃がしてはくれなさそうよ」

既にアサシンとセイバーは戦闘を再開している。さっきまでの力の差は感じられない。アサシンの攻撃は荒々しきがあるが、それでもアサシンの時の鋭さもある。

「ぐあつー！」

「セイバーー！」

アーチャーの援護射撃も全てサブマシンガンで相殺していく。正直勝機が見えない。遠坂もどうするか考えている。

(くそっ！俺は何も出来ないのか！)

そんなとき、

「衛宮！遠坂！伏せろ!!」

「え??」

「いけ！アーチャー！」

「かしこまり！」

自称アーチャーの一撃は最早弓矢というよりも、レーザーか何かだった。それはアサシンに直撃し、吹き飛ばした。

俺には、真琴があの中の時の『親父』のように見えた。

—————

アーチャーがいきなり飛び込んできたときは驚いた。だけど外で暴れているならこの物音にも理解できた。

「いけ！アーチャー！」

「かしこまり！」

アーチャーは弓を地面に突き刺して固定し、そこから両手で弦を引っ張って放つものだった。しかし弓がこんなにでかくていいのか

？

「ジャストミート！やりましたマスター！」

「まだ倒してないだろ！」

アサシンはまだ立ち上がってこっちに向かってくる。アーチャーは弓を引っこ抜き、接近戦を仕掛ける。

巨大な弓とナイフがぶつかり合う。アーチャーは巨大な弓を振り回すが隙が大きすぎる。案の定アサシンに弓を吹っ飛ばされる。

「ありやりや」

「・・・オワリダ！」

アサシンのナイフがアーチャーの首筋目掛けて迫る。しかしそれが届くことはなかった。

「ほりや!!」

「フグツ!!ゴアツ！」

アーチャーのボディブローがアサシンに炸裂する。そのあとも何度も何度も拳を叩き込んでいく。アーチャーは徒手空拳の使いでもあるのか。ん？やつぱりこれって・・・

「さあ、覚悟しなさい。お姉さん、今回は見逃さないわ」

ここからアーチャーとアサシンの本気の戦いが始まった。

時のある間に薔薇を摘め

アーチャーとアサシンの戦いは激しさを増すばかりだった。更にセイバーまで参加するんだからもう大変。教会周辺の木々が粉々になっていく。

「アーチャー!」

「かしこまり!」

セイバーの攻撃をアサシンは飛んで避けるが、そこにヒットしたのはアーチャーの一撃。更にそこへ叩き込まれるもう一人のアーチャーの攻撃。サーヴァントが四体揃うと、ここまで激しい戦いになるのか。

「グッ……ドウヤラ狂化モ切レテきたらしい」

「アサシン!」

「このまま決めましょう!」

「分かったわ、お姉さんにお任せ!」私に任せてもらおう

相変わらず二人のアーチャーは仲が悪いようだ。

「……風よ、荒れ狂え!!ストライク・エア風王鉄槌!!」

「あ!!」

そんな二人をよそにセイバーは宝具を発動させる。吹き荒れる暴風の一撃。その中で一瞬光が見えた。

「……まったく。そんなに風を吹き荒らしたら、」

森の中で次々と爆発が起きる。アサシンの罠か何か? そうだとしたらアサシンはここまで予想していた?

「なっ!おのれ!!」

「悪いが、これが僕の殺り方だ」

爆発に紛れてアサシンが姿を消す。サーヴァントたちが辺りを見渡すが姿が見えない。だが撤退した様子ではない。

「何処にいった!姿を見せろアサシン!」

「アサシンは元々姿を見せずに『マスターを殺す』ために動くんだ。叫んだところでアサシンは……そうか!」

サーヴァントが全員こちらを見る。そうか『マスターを殺す』サー

ヴァント。それがアサシン。だったら、

「衛宮、遠坂!」「狩野君、衛宮君!」「遠坂、真琴!」「伏せろ!!」「俺たちマスターは全員気づいたみたいだ。全員が伏せた瞬間、地面に弾が刺さった。何処からかアサシンが狙っていた。サーヴァントたちは一瞬でそれが『彼処から』放たれたことを理解し、アサシンを倒すため全員がそこへ向かう。

残ったのはマスター四人だけだった。

「追うわよ衛宮君!」

「あ、ああ!」

「あら、行かせると思った?」

追う衛宮と遠坂だが、アサシンのマスターの攻撃が遮る。マスターの回りには銀色の鳥が二匹。

「でしょうね。こうなることぐらい分かってたわよ」

「じゃあこの後の結末も分かるわよね」

「当然!私の圧勝よ!」

まさに一触即発。首を突っ込んだらこっちまで巻き込まれそうだな。でも衛宮がなんだかおいてけぼりになってるぞ!?

「遠坂!ここは俺に任せて、衛宮とサーヴァントを追え!」

そしてつい首を突っ込んでしまう。ああもう、俺のバカ!でもジャンヌの力があれば。

(ジャンヌ!頼む力を貸してくれ)

《ジャンヌ殿なら寝ていますが・・・》

(H A H A H A H A! オウマイガツ!!)

「そう?じゃ頼むわね。こっちも無駄な出費は抑えたいし。行くわよ衛宮君」

「大丈夫なのか真琴?やっぱり俺たちも残って」

「だだだだ大丈夫だ!!ももも問題ない!」

言ってしまったものは仕方ない。とりあえず限界ギリギリまで逃げ続けるか。

衛宮と遠坂は『終わったら迎えに行く』なんて言いながら走っていったが、お前らが迎えに来る前にあの世から迎えが来そうだ。

「大丈夫？ 足が震えてるよ？」

「ふん！ 余計なお世話だ。ガキンチョ相手にどうするか考えてただけだ」

「へえ、優しいんだね」

「そ、そりゃあ俺だって人間だし？ 小さい子には優しくするっていうか？」

「でもそういう人から死んでいくんだよ？」

俺の真横を通り抜けるモノ。それはさっきまでの鳥の形をしていたもの。しかし今、それへ鳥ではなく、剣の形をしていた。

（あれ？ 詰んだ？）

《大丈夫ですか我が主！ このデイルムツドの宝具を！》

しかし希望はまだある。俺の右手に握られている赤い槍。これが俺の武器か……でもねデイルムツド君。

「これ近接武器じゃん」

—————

アサシンは教会の屋根からマスターたちを狙っていた。しかし攻撃は交わされ、サーヴァントによる反撃を許してしまう結果になってしまった。

（やっぱり、宝具で殺したほうが早かったか）

アサシンの宝具は『大勢の人間を瞬間的に暗殺する』という宝具。それを応用すればこの場からの離脱も出来るだろう。だがマスターは逃げる気はないようだ。現に今もアーチャーのマスターと戦闘している。

（今は赤いアーチャーがいない。マスターを連れて撤退するなら今のうちか……）

アサシンがそう考えているうちにもセイバーとアーチャーの攻撃は勢いを増していく。何故アーチャーのサーヴァントが二体いるのか不思議だったが、今のアサシンにそれを考える余地はない。

（仕方ない。やるか……）

「たあっ!!」

「はい、そこ!!」

動きを止めたアサシン目掛けて、セイバーの剣とアーチャーの拳が迫る。その中、アサシンは小さく呟く。

「時のある間に薔薇を摘め」

それはアサシンの切り札。生前これで何度も窮地を切り抜けてきた『逃げるため』の切り札。しかし今は、サーヴァントである今は違う。マスターを勝利へ導くため、他のサーヴァントを倒すための切り札。それがアサシンの宝具。

「なっ！何処へ行つた！」

「クロノス・ローズ……まさか宝具!?!」

「正解だ」

気づくとアサシンの姿が目の前に、そして瞬きをした瞬間にはその姿は無かった。

「僕の宝具は」

今度はセイバーの隣。

「誰も着いてこられない」

更にアーチャーの後ろ。

「『迅速に殺す』ための宝具」

次々と姿を現しては消え。

「それが時のある間に薔薇を摘め」

遂にはその姿が無数に存在するように見える。

「ちよ！多すぎないこれ?」

「高速で動いて分身しているように見せている。アサシンの機動力なら可能な宝具です」

「流石セイバーだ。なら、僕の勝ちなのも分かるね」

無数のアサシンは一斉にセイバーとアーチャーへと攻撃を開始する。応戦しようとするが本物のアサシンは一体のみ。どれも本物か分からず、次々とダメージが蓄積されていく。

◇　そしてそれを……センタービルから眺める影が一つ

「ほう。あれがアサシンの宝具か」

センタービルから戦っている様子を眺めるアーチャー。彼は本来のアーチャーの戦い方で戦闘に加わろうとしている。しかし彼が放つのは一撃のみ。最大限までに魔力を高めた一撃のみだ。

「さて、頃合いか」

とある剣を『投影』する。それは螺旋状の剣。真名を螺旋剣^{カラドボルグ}。しかしアーチャーのソレは本物の螺旋剣ではない。改造に改造を加えた、言うなれば『偽・螺旋剣^{カラドボルグ}』

(凜。今からそこへ宝具を叩き込む。巻き込まれるから離れている)
(はあつ? ちよ、待ちなさいよ!)

しかしアーチャーは待てなかった。あの男だけは、ここで消しておかなくてはならない。たとえそれが、彼の八つ当たりだとしても。

そして彼は唱える。自分に言い聞かせるように。

「I a m ^我 t h e ^骨 b o n e ^子 o f ^は m y ^捻 s w o r d ^う」

そしてアーチャーは矢を放った。

—————

デイルムツドの宝具『破魔^{ゲイ}の紅薔薇^{ジャルグ}』でなんとか攻撃を回避しはじめて何分たったか。こちらから攻撃できない以上、回避に専念するしかない。

「くそっ! これじゃジリ貧だ!」

「もう終わり? なら、ここで死になさい」

本当に終わった。そう思った瞬間、マスターの姿が消えた。

「……え?」

驚きのあまり間拔けな声が出てしまった。いや、それにしても一体何が……

「マスター!!」

「あ、アーチャー。そっちは終わっ「ちよつと失礼!!」え??」

アーチャーが突然走ってきたと思ったら、俺を担いで更にスピードを上げる。よくみると衛宮はセイバーと遠坂の手を引いて逃げている。おいおい、まさか隕石でも降ってくるのか?

「不味い……マスター! 伏せて!!」

「え? おぶつ!!」

急に地面に投げ飛ばされる。その事でアーチャーに文句を言おうとした瞬間、

巨大な爆発が起きた。

最早それは教科書で見るとような爆発そのものだった。爆風で吹き飛びそうになるがアーチャーが俺の手を掴んでくれて助かった。

辺り一面は火の海と化している。まさしく地獄絵だ。

「一体いまのは」

「恐らく赤いアーチャーの宝具でしょうね。アサシン、途中でマスタ―連れて逃げたのよ」

だから途中でいなくなったのか。アサシンのスピードならここから離脱するのは簡単なことだろう。しかしあんなに破壊力がある宝具なんて、町中で使ったら被害がとてつもないことになるぞ!?

「シロウ!シロウ!!」 「衛宮君?しっかりしなさい衛宮君!」

「どうした遠坂!」

「衛宮君、私たちを庇って」

衛宮に意識がない。しかも傷口から血が出ている。怪我じたいは大丈夫そうだが、とりあえず手当ては早めの方がいい。俺達は衛宮を家に連れて帰ることにした。

こうして、聖杯戦争の初日は引き分けで終わった。

「ありがとアサシン。私としたことがあんな魔力の塊を感知できないなんて」

「無理もない。どうやら久々に夢中になっていたみたいだけど?」

「ええ。驚いたわ。あの宝具、『本物』よ。ただの魔術師が宝具を使うなんて聞いたことがないわ」

「そうか。僕もそれは聞いたことがない。アーチャーが二体いるのも気になるし。どうやらこの聖杯戦争には裏がありそうだ。どうする

マスター。アーチャーのマスターを殺すかい？」

「そうね、ここで消すのはまだ勿体無いわ。まだ暫くは置いておくべきね」

「そうか。それじゃあ行こうか」

「ええ、次は負けないわシロウ。このイリヤスフィール・フォン・アインツベルンが、直々に殺して上げる」

■ 「ほう、どうやらもう戦っているらしいな桜」

「そうだねライダー。私たちも戦わなくちゃいけない。ライダーは大丈夫？」

「準備は出来ている。あとは桜。お前次第だ」

■ 「スゲーな！アーチャーが二人だつてよ！」

「アーチャー……いや、そいつらじゃない」

「なんだ？まだ捜してるのか？本格的に捜すならロンドン位に飛んでこいよ」

「たわけ。今の時代、奴が生きていると思うか？死んでいるに決まっている。だからこそ聖杯で呼ぶんだ」

「その執念さ、最早『アヴエンジャー』じゃなくて『リベンジャー』だな！」

「ふん。奴を殺すのにクラスなど関係ない。私にとってはこの真名こそ忌々しい！」

「ハハハッ。まあ、気長に行こうぜアヴエンジャー」

■ 「おう、どうやらアーチャークラスに二体目がいるみたいだな」

「アーチャーに二体目？それはおかしい。聖杯戦争でそんなことは『ああ、『ありえない』な。でもまあ生きてりやそんなこともあるだろ」

「そうですか……それじゃあ、いつ、仕掛けますか？」

「早くて明日がいいな……無理でも明後日だ。あの二人目のアーチャー。中々に面白いぜ」

そして戦いは二日目へと流れていく。

アーチャーの秘密？

朝の四時ぐらい。ぶつちやけ寝たりない。だが朝からガタガタゴトゴト音がしていたら目が覚めるだろう？

「何やってんだ？二人はまだ帰ってきてないし」

二人とは俺の両親のことだ。現在旅行ナウだ。帰ってくるのは今日だが、こんなにも早くから帰ってくるわけがない。となると犯人は一人だけ。

「アーチャーか・・・」

台所を覗くとアーチャーが何か作っている。しかもかなり慌ただしい。料理スキルは0のようだ。俺も人のこと言えないけど!!

「大丈夫かアーチャー？」

「あ、おはようございますマスター。こっちは大丈夫だから二度寝でもなんなりと」

いやこの時間から二度寝したら何時に起きるか分かったもんじやない。仕方なく学校の用意をするために部屋に戻る。

昨日は衛宮を届けたあとすぐに家に戻った。衛宮は途中で目が覚めたから大丈夫だと思う。それに遠坂もいるから大丈夫だろ。朝になれば間桐も来るしな。あそこまで女子がいたらハーレムもいいとこだな!!

「あ、これ・・・」

机の上に置かれた一枚の紙。そこには『最強アーチャー』なんて書かれている。そういえばここに書いたこと全てアーチャーに当てはまってるんだよな。

弓がデカイ。

矢を何発も同時に放てる。

矢じゃないものも放てる。

弓で近接格闘。

最早弓を使わず徒手空拳で戦う。

必殺技がライダーキック。

水色の髪でショートヘアの貧乳。あと赤目

この項目が全て当てはまるなんてスゲー偶然だ。いやもしかしたら俺のアーチャーはマスター好みにカスタマイズみたいなことができるのか？思い立った俺は項目を追加する。

服装がメイド服

一番分かりやすく服装について書き込む。これでアーチャーの服がメイド服になっていたら確定だ。もし変わってなくても問題ない・・・うん、問題ないよ。

もう一度台所を覗く。そこには『いつもの白い服装』のアーチャーが弁当にご飯を詰め込んでいた。かわりは無いようだ・・・残念！

「弁当まで作ってくれてありがとな・・・」

「?何やら元気がないけど」

「ふっ、夢は夢だけにしておくよ」

「??」

◇

「え?アーチャー学校に来るの?」

「え?そこで驚く?サーヴァントなんだから、マスターの守護をするのは当然よ?」

朝ごはんの途中でアーチャーが切り出してきた。いやそうかもしれないけどさ。どうすんの?いろいろあるだろ。

「大丈夫だろ。学校は夜まで続かねえし、それに遠坂や衛宮がいるんだ。何も心配は」

「勘違いしてない?衛宮君や遠坂さんは『友達』と言っても聖杯戦争では『敵同士』なの。まあ同盟を組めば暫くは大丈夫でしょうけど」

同盟か・・・確かに昨日の戦闘からみて、セイバーと赤いアーチャーのコンビはかなり強敵だ。それが敵になるとかなりヤバイ。いや待てよ・・・

「まてまてまて！俺は聖杯戦争に参加はするけど、積極的に戦いには行かないからな！神父にもそう言った」

「あら？マスター案外戦いは嫌いかしら？」

「好き嫌いの問題じゃない。こんなバカげた儀式がこれで五回目なんだから？それこそ衛宮の『聖杯戦争を止める』って目的もあながち間違いないじゃない」

「まあそこはマスターに従うけど。聖杯には興味ないの？なんでも願いが叶うのよ？」

「そんなのない。大体は努力でなんとかなる」

「努力家なのね」

アーチャーはパクパクとご飯を食べると立ち上がりリビングを出ていった。機嫌を損ねたか？でも俺は決めたんだ。『聖杯戦争を止めて、聖杯をぶっ壊す』って。

◇

いつもよりかなり早く学校に着く。生徒はかなり少ない。そこで見かけた一人の生徒。

「あ、狩野先輩。おはようございます」

間桐桜。弓道部の次期部長で、衛宮の家に通っている。今日は朝練らしく、弓道部の服装だ。

「ああ、間桐か。衛宮は大丈夫か？」

「え？先輩なにかあったんですか？」

「(話してないのか) いや何でもない」

まったく無茶する奴だ。まあ間桐みたいな奴が聖杯戦争に関わることを衛宮は嫌うだろうし。当然ちや当然だな。

「よう狩野！今日は早いじゃないか」

「む、ワカメー！」

「朝っぱらから失礼だなお前！」

次に声をかけてきたのはワカ・間桐慎二だ。間桐という名字で分かるように桜の兄だ。でもたいして似てないよな。主に髪型。

「まあいいよ。で、なんでこんなに早いんだよお前」

「早く来たらダメなのか？それこそ失礼だぞ」

「別に。ただお前がいるから、遅刻したんじゃないか焦っただけだよ」
「遅刻ってな、俺が遅刻の常習犯みたいなこと言うなよ！」

「実際そうだろう!!」

まあいいだろう。遅刻なんて一週間に四回しかしない。なんら問題はないだろ。

それから少ししたち、衛宮が教室に入ってくる。

「お、衛宮。怪我は大丈夫か？」

「ああ、なんか傷治ってた」

「?!?!」

!?!?!
何だか分からないが無事ならいいけど。いやでも凄いな。魔術を

使ったのだろうか？それこそ、どんな怪我でも治す物があるのかもな。いや衛宮の家の土蔵ならありそうだな……

「とりあえず無茶するなよ？遠坂や間桐が心配するからな」

「そうだな。藤ねえも心配性だからな。気を付けるよ」

しかし衛宮のそんな決意をよそに、藤村先生は元氣よく教室に入ってくるのであった。

◇

昼休み

「ねえ狩野君」

「どうした遠坂」

たったそれだけの会話。でも遠坂の顔を見れば何となくわかる。聖杯戦争のことにに関してだろう。

遠坂に連れてこられたのは屋上。昼休みなのに珍しく生徒が誰一人いない。

「貴方魔術に関して何ができるの？」

「いきなりだな。えっと、家が魔術の家系なのは知ってるけど、俺自身魔術に関してはサツパリ」

「そう。それじゃあ、あの時持ってた槍は何かしら？まさかその辺の木の棒なんて言うんじゃないでしょうね」

拷問みたいだ。でも『デイルムツドの宝具』なんて言っても遠坂は信じそうにないし……

「悪い。企業秘密だ」

「そう。なら狩野君。最後に提案よ。私と同盟を組まない？」

◇

放課後。結局昼休みの中に同盟に関して答えが出せなかった。やはりここは組むべきか。それともアーチャーの意見を聞くべきか。

アーチャー×2。遠坂と同盟を組めばそこら辺のサーヴァント位は簡単に倒せるだろう。昨日のアサシンの戦いの時を思い出せば分かる。

「わっかんね。やっぱアーチャーに話すか」

何やら上の階がドタバタしているが、何をしてるんだ？

《どうやら上の階で、あの時の二人が戦ってるみたいね》

（あの二人？衛宮と遠坂か？てかあの時起きてたなら手伝えよ!!）

《仕方ないでしょ、眠たかったんだから・・・ほら、サーヴァント来たわよ》

教室を出て廊下を見る。廊下には二人。スーツの女と青いタイトルの男。女は何か筒状の物を持っている。男の方は赤い槍。間違いないあの男が『ランサー』だ。

「おう、テメエが二人目のアーチャーのマスターか」

「だったらどうする？」

「テメエには用はねえ。アーチャーをだしな」

「悪いな。今日は連れてきてない。また今度にしてくれ」

「そうか。まあ嘘は良くねえよ、なあ!!」

ランサーが一気に駆け出し、槍をこちらに向けている。普通の人間には交わせない。だからと言って俺にも交わせるものじゃない。槍が俺の心臓を抉ろうとしたとき、

「確かに、嘘は良くないけどね。マスターは『霊体化』を知らないから」
ランサーの槍を間一髪、アーチャーが『矢』で弾いた。さつきまでいなかったのにいつの間に来たんだ？

しかしその疑問は、アーチャーの服装を見てからは頭のなかになかった。

「テメエ本当にアーチャーか？メイド服の英霊なんぞ、聞いたことあ

ねえけど」

「当然よ。私は貴方が絶対に知らない存在。そして貴方を冥土に送る者よ」

今現在、アーチャーの服装はいつもの白い服ではなく、『メイド服』だった。

炎神の咆哮VS因果逆転の呪い

「アーチャー、その格好……」

「マスターのご要望でしょ？私はサーヴァントだからね。マスターの命令には従うわ」

アーチャーは当然でしょ？みたいな感じで言ってくるが、俺はアーチャーにメイド服について話していないし、アーチャーは知らないはずだ。となると、

(サーヴァントって、自由にカスタマイズ可能だったのか！)

《バカ？いいえ大バカね》

(だって事実だろ?)

《はあく、もう知らないわ》

ジャンヌが引つ込むと俺は目の前のことに集中する。ランサーはアーチャーに任せるとして、

(問題はランサーのマスターか)

上の階の衛宮と遠坂を巻き込んで三人で戦えばそれなりに勝機は見えてくるだろう。でも俺としては巻き込むのはなんか嫌だ。

「おう、テメエとやりあいたかったんだ二人目」

「あら、私は一人目よ。お姉さんに誤魔化しなんて通用しないわよ?」

「お姉さんって……テメエ俺より年下だろうが!」

アーチャーとランサーが再び武器を交える。ランサーの槍とアーチャーの矢。いや矢を近接武器で使うとかマジパネエす!!そのまま窓を突き破ってグラウンドに出ていくサーヴァントたち。追おうとするけど、やっぱり敵マスターが立ちはだかる。

「サーヴァントはサーヴァント同士。マスターはマスター同士ですか」

「やっぱり戦わなくちゃダメか?」

「当然です。貴方もマスターなら武器をとりなさい。それくらいは待ってあげます」

武器か……ここは廊下。長物の槍は使えない。いや使ってるやついるけど!素人の俺にはこの狭い場所では難しい武器だ。出来れ

ば遠距離武器が欲しい。

(なあ！誰か遠距離武器ないか?)

《よくってよ。私が手伝ってあげる!》

また新しい声が聞こえる。何とも頼りになりそうな、アーチャーよりもお姉さんっぽい声だ。

(一応聞くけど、誰?)

《私のことはエレナでいいわ!さあ行くわよ!》

手元に現れたのは一冊の本。しかしサイズ適にデカイ。てか本でどうやって戦うんだよ!

《本を構えてこう唱えるの。『第一の光!』ってね!》

「だ、第一の光!」

本を取り合えず敵マスターに向け、呪文?を唱える。するとあら不思議。本からビームが出たではありませんか!しかも物の見事に交わされました。更に突っ込んでくるではありませんか!

「全然意味ねえ!!むしろ遠距離武器を無力化する人だこの人!!」

「そこっ!!」

降り下ろした拳をギリギリ交わすが、変わりに廊下が犠牲になった。具体的に言うところ穴が開いた。いやこんなことってあるんだな。

「交わすとは。やりますね」

「まぐれだよ、マ・グ・レ」

本を両手で持ちいつでもガード出来るように準備する。正直もう少し何かあってもいいんじゃない?

《やるわねあの娘。残念だけど確かに私の力じゃ難しいわ。変わりにジャックの力を使って!》

(ジャック?ウルト○マンか?)

《呼んだ?お母さん?》

《ええ呼んだわ。この人にジャックの力を貸してあげて》

《分かった!》

すると本は消え、変わりにナイフが手に握られる。無骨なサバイバルナイフみたいだな。恐らくジャックでナイフといったら『ジャック・ザ・リツパー』か。

「そう言えば申し遅れましたね。私はバゼット・フラガ・マクレミッツです」

「狩野真琴だ。よろしくバゼットさん？」

「ええ、よろしくお願いしますね真琴君」

飛び出したのは同時、な訳がねえ！圧倒的にバゼットの方が早くて、俺が出遅れている。

バゼットはボクシングでもしてるのか？動きに無駄がない。それに比べて俺は……ナイフというハンデがあるにも関わらず、当てれるか当てれないかの狭間をいつたり来たり。つまりバゼットにはノーダメージです！

「くそっ！」

「動きに無駄が多いです！」

本気のボディブローはこんなにも痛いのか。いや喧嘩で不良がやるような大振りパンチなんてまだ可愛いものだったんだ。本当のパンチとはこういうものか。

—————

アーチャーは焦っていた。ランサーの技量、ステータス、何もかもが自分よりも上だったからだ。それに加えて廊下ではマスターがランサーのマスターと戦っている。戦闘経験が皆無な真琴には、あの女は危険すぎる。早くランサーを倒してマスターを救出しなくては。

「そらっ！」

「くうっ！」

ランサーは大振りに槍を振り回すが、やはり隙がない。荒々しくも冷静に状況を判断し、その時の最適解を見つけ出す。これこそが本物の英霊。

「おい、さっきからマスターのこと気にしてるみたいだが」

「ええ、そりゃあ不安よ。貴方のマスター、まるで人間バーサーカーみたいなもの」

「ハハッ！そいつは違いねえ！だがまあ大丈夫だろ」

「何故そう言いきれるの」

「至るところの骨は折るが、殺しはしねえ」

「どのみち最悪じゃない」

再び武器を交えるサーヴァント。アーチャーも本気なのか弓と矢を『二刀』と見立ててランサーを攻撃する。ランサーも槍に加えて、自身の体術をおり混ぜながらアーチャーと武器を交える。

「そらそらそらっ!!!」

「このこのこの!!!」

槍による突き。ただの普通の突きだが、ランサーがそれを行えばただの普通の突きは怒濤の嵐となる。

しかしアーチャーも負けていなかった。全てを見切り紙一重で交わしていく。しかし次第に突きのスピードは早くなっていきアーチャーも見切れなくなってきた。

「あうっ!!」

「ほうら、ガラ空きだぜ!!」

ランサーに蹴りあげられ天高く舞うアーチャー。しかしこれはアーチャーにとっても好機だった。

いつものデカイ弓ではなく、普通サイズの白い弓をつがえ矢を添える。そこから打ち出すのは最大級の魔力を込めた一撃。赤いアーチャーにも勝るとも劣らない一撃。その名は、

「炎神の咆哮!!」
アグニ・ガンデーヴァ

それはアーチャーの宝具。本来それは弓の『名前』だが、アーチャーにとってそこから放たれる一撃こそが炎神の咆哮だ。

「へえ、おもしろえ」

ランサーは矢が放たれる前から槍に魔力をためていた。それは自分の宝具を解放するため。しかしこれは有名すぎるがゆえに『真名』がすぐにバレてしまう。しかし今のランサーにはそんなことはどうでもよかった。

「刺し穿つ…い」

『死力を尽くして強者と戦うこと』その目的の前には、真名の縛りなぞ関係ない。この一撃に今日すべての魔力を込めて。そして矢が迫るなか、ランサーはその宝具を叫ぶ。

「死棘の槍!!」
ポルル

ゲイ・ボルク。それは因果逆転の呪いの槍。真名を解放すると『心臓に槍が命中した』という結果をつくってから『槍を放つ』という原因を作るというまさに『一撃必殺』。

使い方は様々で投擲するもよし、そのまま刺しに行くのもよしと実際に使い勝手がいい宝具だ。

しかし当然メリットばかりではない。その真名はかなり世に知られている。それ故にその使用者である彼の真名もバレてしまう。

『打ち落とせぬものない弓』の一撃と『因果逆転の呪い』の一撃がぶつかり合う。見るものからしたら同等の威力に見えるだろう。現に宝具のランクは近い。しかしこの聖杯戦争、宝具のランクだけで決めるのは早計だ。

「やば……」

アーチャーの吹き通りアーチャーの一撃は因果逆転の呪いには勝てなかったのだ。槍はそのままアーチャーの心臓を抉ろうとする。誰もが勝敗は決したと思った瞬間、

「……………」

「何!？」

ランサーの槍が一発の銃弾に『弾かれて』ランサーの元に戻ってきたのだ。この状況にアーチャーも困惑している。

「いったい何が……」

「チツ！何処のどいつだ!！」

アーチャーとランサーが辺りを見渡すが銃弾の主は見つからなかった。お互い不満が残る結果となったゆえにこのまま戦闘を続けようとしたとき、廊下から大量の魔力が溢れだす。それは『宝具』の魔力の流れと同じだった。

「……………」

アーチャーの宝具？はランサーの槍の投擲によって打ち消されアーチャーに槍が刺さろうとしたとき、槍は何か弾かれランサーの元へ戻っていった。

「？また当たりませんでしたねランサー。やはり幸運ランクが低いからか?！」

「よくわかんねえ。なんだ幸運ランクって?」

「簡単に言えば運の良さです……まさか貴方マスターなのに自分の
サーヴァントのステータスも確認してないの?」

ステータス?アーチャーにもそんなものがあつたのか。でもそう
なると余計に最強になつてしまうな!!

「家に帰ったら確認するさ」

「このまま帰れると?」

バゼットの両手足が青白く光る。見るからに決着を付けにきてい
る。だつたらこつちも切り札を使わないと。

(誰か切り札ないか?)

《それなら私の二槍を!》《俺っちのベアー号を使えよ!》《よくつて
よ。とつておきを見せてあげる!》《バラバラにしちゃつていいの?》
(一斉に言うな!)

《……. そうですね。フランの宝具を使えばいいわ》

《>~?~?>》《……. ウウ?》

(よし、それだ!)

《いいフラン?本気で!全力で!思いつきり!宝具を放つ。大丈夫。
夫。ここでは貴女は傷つかないわ》

《……. ウ……ン!》

さあ準備は整つた。向こうも準備万端だな。

「先攻は譲ります。いつでもどうぞ」

「あとで後悔するなよ!」

《両手を前に出しなさい。そして足に力入れて踏ん張りなさいよ》

このとき気づいておけばよかった。

《さあフラン、今よ!》

これはジャンヌなりの、

プラスチック・ツリー

《磔刑の雷樹イイイイイイ!!!》

警告だつてことに。

アーチャーが廊下に駆けつけたとき、真琴はほぼ黒焦げだった。何
があつたのか廊下全体が真っ直ぐに抉れている。何かビームでも発

射しなければこうはならないだろう。

「まさかマスターが？」

「ええ、真琴君がやりました」

教室からバゼットが出てくる。教室の窓を突き破って回避したの
だろう。もつともガラスというガラスは全て割れているが。

「驚きました。こんな力が真琴君にあるとは」

「ええ、私も驚いたわ」

「どうすんだバゼット。この小僧にトドメさすのか？」

「いいえ、今日はこれで終わりにします」

警戒するアーチャーに背を向けバゼットとランサーは廊下を歩いていく。アーチャーは二人の姿が見えなくなると真琴を担いで学校を出た。

「ん？今の魔力は……」

いけない、今はこっちに集中しなくちゃ。今日の前にはアーチャーが雑木林でライダーと戦っている。でもそのライダーが奇妙だった。何故ならそのライダーは『仮面』をつけたライダーだったのだから。

壊れた幻想VS静止した世界の救世主

「あきれた……今聖杯戦争中って分かってるの？」

「それくらい俺だって知ってる。でも学校にセイバーを連れてくるわけにはいかないだろ」

「だったら学校を休むとか、いろいろ方法はあつたはずよ？」

今日の授業を終えて家に帰ろうとしたとき、遠坂が俺を呼び止めた。多分俺が学校にセイバーを連れてきていないことに怒っているみたいだ。

でもセイバーは『霊体化』が出来ないらしい。だったらセイバーが学校に来るのはムリだと判断した。でもそれがこんなことになるとは……

「とにかく、私はそんな生半端な覚悟で聖杯戦争に参加していることが許せない」

「生半端ってな、俺は真剣に『聖杯戦争を止めたい』んだ。生半端な覚悟で来るわけがないだろ！」

「いいえ半端よ生半端よ！それこそどうするか考えておきなさいよ！」

遠坂は俺に指先を向ける。でもここは学校だ。しかも夕方。これじゃ人目に、

「周りを見てみなさい」

「誰も、いない!?!」

「そりや新都には連続殺人鬼、通称『冬木の切り裂きジャック』がいるのよ？部活はしばらく中止。当然学校には人がいなくなる。いるのは私と衛宮君、それと一部の先生ぐらいでしょ」

「それでも誰かにバレたら！」

「少人数なら私が暗示でもかけとくわよ。少しは自分の心配をしなさい」

遠坂の指先から紫の魔力の塊が放たれる。それは俺の目の前に着弾する。今のは威嚇射撃だ。次はない。

「くそ、こんなところで！」

一気に階段を飛び降りる。また飛び降りる。繰り返していく度に衝撃が走るが、

「コラー!!待・ち・な・さ・い・よ!!」

気にしていたら死んでいる。

(こうなったら防御に転じる!)

一階の教室に入り机を盾がわりにする。勿論これだけだったら俺は死ぬ。だからこそその『強化』の魔術だ。

「同調、開始トレス・オン———!」

机を強化して一時的な盾にする。これでいつまで防げるか。廊下で足音が止まる。どう考えてもこの教室の目の前だ。

「衛宮君、今おとなしく出てくるなら、少しだけですむわよ?」

いったい何が少しだけですむって言うんだ。

「……そう出てこないなら」

(くる!)

「え、ちよ!アーチャー!!」

(??どうした?)

遠坂は教室を襲撃しなかった。いや出来なかった。突然の来訪者のせいだ。

「—————!」

教室の壁を壊しながら突っ込んでくる二人の男。

一人はアーチャー。もう一人は紫のライダースーツの男。多分サーヴァントだ。

「凜!衛宮士郎を連れて下がっている!」

「分かったわ!衛宮君こつちよ!」

遠坂に連れられるまま教室の窓から外へ出る。ドスンと重い音をたてながら外へ脱出するが、

「—————!!」

「くっ!」

今度は教室そのものを破壊しながらアーチャーが飛ばされてくる。無論吹き飛ばしたのは紫のサーヴァント。

「遠坂、あれもサーヴァントなのか?」

「ええ、ライダーのサーヴァント。向こうから仕掛けてくるとは思わなかったわ」

「これは俺の独断だ。マスターはまだ戦う覚悟が出来ていないからな」

ライダーが瓦礫を踏み碎きながら外へ出てくる。当然ながらそれはサーヴァントである証拠。

「ほう、お前のマスターは臆病者と見える」

「卑怯者よりかはマシだろう」

アーチャーは夫婦剣を構えながら立ち上がりライダーに剣先を向ける。あのアーチャーをここまで推しているあいつは当然ながら強敵だ。ここはセイバーを呼ぶか？

「衛宮君。折角だから、ここでアーチャーの実力を見せてあげるわ。アーチャー!!」

「まったく……その小僧に見せるものなどないのだがね。マスターのオーダーなら仕方ない。よく見ておけ衛宮士郎。これが『お前の取り柄』だ」

そこから先はまさに『光速』の戦いみたいだった。アーチャーはライダーの背後に一瞬で回り込み切りつける。でもライダーもそれに反応し体を反らすことで回避する。

「ー、ー、ー」

「……え?」

その詠唱は俺は聞いたことがある。いやそれは俺の言葉だ。何でアーチャーが?でもその疑問はあつという間になくなる。

アーチャーの回りに剣が出現しライダーを襲う。ライダーはそれら全てを徒手空拳で払い除けていく。これがサーヴァント同士の一対一。セイバーとランサーの時はよく覚えていない。ごめんなセイバー。

「なるほどな。これがお前の『取り柄』か?」

「何故そうなる?」

「さっきお前はそこの小僧とやらに『お前の取り柄』と言った。それはアーチャーの『取り柄』だからこそ見せれるものだろう。違うか?」

「ふむ、確かに見事な推理だ。誘導尋問のスキルでもあるのかね？」
「確かに、生前は警察関係の仕事に関わっていた。が俺は『吐かせる』
のではなく『倒す』のが主な仕事だったが」

警察関係の英霊？それこそ『警察』が出来たのはだいぶ昔だけど、警察に『近い』仕事ならそれよりもっと前から存在する。むしろそっちの方が英霊になるような人物は多いんじゃないか？

「警察関係か・・・それこそ調べればいくらでも情報が出てくるぞ？」
「無駄だ。俺の事はこの時代では誰も知らない。俺に近い存在はいるがな」

「近い存在だと？それも警察か？」

「いいや違うな。まあ俺の真名を教えてやっても構わないが・・・名乗る必要はないか。これから倒される相手に」

ライダーは『ベルト』を自分の腰に巻き付ける。それはヒーローベルトのようなオモチャみたいなもの。でも何となくわかる。あれはきつと宝具。

「静止した世界の救世主」

ライダーの姿が変化していく。まさにヒーローのように『変身』している。遠坂もアーチャーも驚いている。

「少しヒントをやろう。俺は都市伝説の一つだ」

「都市伝説・・・ライダー・・・ベルト・・・そうか！」

「アーチャー！敵の真名が分かったの？」

「大方の予想はな。悪いが凜、この勝負負けるかもしれん」

まさかあの存在が英霊になるとは。いや彼らならライダーの英霊として呼ばれる可能性はゼロではない。

「ひとつ走り付き合ってもらおう」

ライダーが突っ込んでくる。そのスピードはさっきの比ではない。間違いなくあのベルトは宝具。全体のステータスの上昇がああ宝具の力。この力に対抗するには・・・

「はあっ！」

ライダーに莫耶を弾かれる。剣はそのまま木に突き刺さる。

「なるほど、この手があるか）凜！別に、ここら一带を吹き飛ばしても構わんのだろう？」

「ええいいわ。事後処理なら綺礼に任せたらいいんだから。それにもう吹き飛ばしたでしょ！」

確かに。だったら構わんな。ライダーの技量なら十分に可能な攻撃だ。さて、少しばかり手伝ってもらおう。

剣を連続で投影していく。その度に剣は弾かれ木や地面に刺さっていく。飽きることもなく、止まることもなく、魔力が限界に近づくまで、剣を振り、剣を投げ、剣を作る。この作業の間に凜は衛宮士郎を連れて退避している。これで遠慮なくできる。

「さてライダー、ここで問題だ。何故私はお前に剣を弾かれても諦めないと思う？」

「さあな。ただ単に諦めが悪い、とも思えん。この作業に意味があるんだろ？」

「そうだ。ここで私の切り札を特別に見せておこう。もつとも全てのサーヴァントが行える切り札。お前を倒せるとは思えんが、それなりのダメージはあるだろ」

弾かれた全ての剣の魔力を増幅させる。この時ライダーは気づいていたのか、それとも気づいていなかったのか分からない。それでもライダーが、

「弾ける！壊れた幻想」
ブローケン・ファンタズム

爆炎に包まれたのは事実だ。

学校の雑木林が火の海となった。アーチャーが弾かれた全ての剣を爆発させたのだ。弾かれた剣の数、約50。流石にライダーも、
「つてーなんで生きてるのよ！」

「当然だ凜。奴の真名は『仮面ライダー』。この日本、いや世界中で都市伝説として日々悪と戦う正義の味方。私のような贗作の攻撃が通用するはずがない。なにせ仮面ライダーなのだから!!」

「なんか楽しそうねアーチャー……」

でも名前ぐらいなら聞いたことがある。仮面ライダー。全国の人

間に聞いたなら九割の人間が知っていると答える存在。都市伝説のクセにとんでもない知名度をほこる。まさか聖杯戦争に参加してくるとは。

「遠坂、俺のセイバーを呼べば」

「確かに、セイバーならライダーと中々対等に戦えるでしょうね。でもあのライダーの宝具が一つとは思えないの」

本来ライダーのサーヴァントは数多くのスキルや宝具を所持している。当然このライダーも三つぐらいはもっているはず。仮面ライダーとなれば尚更多い。そんな相手の事がよくわかってない状況で衛宮君のセイバーを呼ぶのはよくない。

「アーチャー……ここは撤退よ。ライダーを撒いて」

「了解した」

アーチャーは弓に矢をつがえる。引き絞り放った矢は真つ直ぐライダーに向かって、

「……………」

「何!？」

行くまえに撃ち落とされた。それはアーチャーの矢と同じものに。犯人はすぐに分かった。アーチャーとライダーの間に降り立つ一人の女性。間違いなくサーヴァント。

「サーヴァント、アヴェンジャー」

「何?アヴェンジャーだと?」

「珍しい奴がきたな」

「なんだ遠坂。あのアヴェンジャーって珍しいのか?」

「珍しいもなにも、今までの聖杯戦争では一度しか召喚されていないエクストラクラスよ。ぶっちゃけ激レアってところね」

でもそんなサーヴァントが来るなんて。今回の聖杯戦争は何だかおかしい。

二人のアーチャー

エクストラクラスのアヴェンジャー

クラスの重ねがけ

いやクラスの重ねがけはまだアインツベルンが何かしたと考える

べき。何でもやりかねないし。でも二人のアーチャーはあり得ない。どっちかが嘘をついている。

「ライダー……いやお前ではない。奴がそんな姿をしていたとは思えない」

「奴？俺を誰だと思っていた」

「お前には関係ない。アーチャーお前にもな」

「まさか赤原フルンディング猟犬を撃ち落とすとはな。それがお前の宝具か？」

それとはアヴェンジャーの手に握られている拳銃のことだろう。確かに撃ち落としたのだから拳銃が順当だ。

「そうだな。それは答えておこう。確かに撃ち落としたのは私だ。まあ殺したのは、お前の宝具だがな」

「殺したのは？」

「質問はここまでだ。いずれ殺す。奴を殺すために」

アヴェンジャーは姿を消した。霊体化したのだろう。ライダーも変身を解いて元の人間の姿に戻っている。

「どうやらここまでのようだ。警察も来たことだしな」

確かに遠くからパトカーと消防車のサイレンが聞こえる。ここにいたら私たちも不味いわね。

「アーチャー、帰るわよ。見つかったら面倒だわ」

「そうだな。さっさと帰るとしよう」

アーチャーは遠坂を連れて跳んでいきながら帰っていった。ライダーもバイクで帰っていった。そして俺は思った。

「あれ、もしかしなくても……置いていかれた？」

その日、今だ経験のしたことのないスピードで家に帰った。

同盟

「……………ん？……………あれ？」

「あ、やっと目覚めた？どう、体動く？」

「っ、んああ。なんとかな」

現在俺のベッドの上。フランの宝具を解放してからの記憶がない。まあアーチャーが連れ帰ってくれたんだろうけど。なかなか体が痛い。特に殴られたとこ。

「無茶はダメよマスター。貴方が死んだら私も消えるんだから」

「わかってる。次は気を付ける」

アーチャーに怒られる。でもあれはフランの宝具の力が強すぎるのがダメだ。いやフランは悪くない。

（おい、なんでフルパワーで宝具やらせたんだ）

《あら、怒ってるの？むしろ感謝すべきでしょ》

（はあ？）

《貴方は切り札を欲した。だから私たちは貴方に宝具を貸した。そして逆転できた。ほら私たちは感謝されるべきなのよ》

（まあ、それもそうだな）

《嫌なら貴方自身力をつけるのね。きっと次は死ぬから》

（なんて不吉な予言だ……………）

《まあこれはジャンヌ殿の助言のようなものですから。あまり攻めないでください》

《ちよつと！私は助言なんてしてないわよ！勝手に言ってる燃やすわよ!!》

頭の中で喧嘩が始まった。でもジャンヌの言い分も一理ある。俺自身が力をつければジャンヌたちの力を借りずにすむ。となると特訓か。

「なあアーチャー」

「ええ分かってるわ。ご飯でしょ。ちよつと待っててねー」

「え……………違うんだけどな……………」

『ええ分かってるわ』の時点で少し期待した俺を笑いたい。まああと

で話しやいいか。

「あ、そうだ。コレ！」

「あ？なにこれ？日記？」

「タンスの裏に落ちてたわ」

アーチャーは俺に日記帳を渡すと部屋を出ていった。日記はかなり古びている。かなり昔の日記みたいだけど・・・なんで俺の部屋に？しかもタンスの裏って。いや見つけたアーチャーも凄いな。

「えっ・・・と、聖杯・・・戦争、聖杯戦争!？」

それは聖杯戦争の日記だった。書いた人は分からない。あの時みた聖杯戦争の記録と書かれたものとはまた違う。本当の日記だ。

◇

聖杯戦争一日目

今日から聖杯戦争が始まった。教会も開始を合図している。私が召喚したのはランサー。第三者に見られる可能性もあるのでここでは真名は伏せておく。

警戒すべきはアインツベルン。そしてエーデルフェルト。どちらも強敵だ。特にアインツベルンは要注意。

聖杯戦争二日目

今日はバーサーカーと戦った。奴の宝具を見るに真名は『ベオウルフ』で間違いないだろう。いきなり武器を捨てて殴りにきたのは驚いた。今回は取り逃がしたが、ランサーの敵ではない。

聖杯戦争三日目

ランサーとの話し合いの結果、明日アインツベルンの城に攻め混むことになった。アインツベルンのサーヴァント、アヴェンジャーはかなりの強敵の予感がする。慎重に物事を進めよう。

聖杯戦争四日目

ランサーの宝具でアインツベルンの城を粉々にする。しかしアヴェンジャーは出てこない。でもサーヴァントがこの程度で死ぬと

も思えない。警戒は怠らないようにしよう。

聖杯戦争五日目

やはりアヴェンジャーは生きていた。マスターと一緒に家に奇襲を仕掛けてくるが、『角と尻尾をもったサーヴァント』に倒される。アヴェンジャーがとてつもなく弱いのか、それとも自称『アイドルのサーヴァント』が強すぎたのか。ともかくアイドルには要注意だ。

サーヴァント残り6騎（ランサー、セイバー、アーチャー、アサシン、バーサーカー、アイドル?）

聖杯戦争七日目

聖杯戦争が始まってから一週間が経過した。アイドルのサーヴァントは『エリザベート・バートリー』ということが判明した。まさか一度の聖杯戦争で『エクストラクラス』が二体も現れるとは。しかもアイドルって・・・

聖杯戦争十日目

聖杯戦争もそろそろ正念場だ。残りサーヴァントは3騎。ランサー、アーチャー、アイドルだ。明日アーチャーとアイドルが激突するのは分かっている。決着をつけるならそこだ。



「アイドルのサーヴァントって・・・そんなのありかよ」

「でも第三次聖杯戦争は戦いの最中、聖杯が破壊されて無効試合になったのよ」

「聖杯が壊された?じゃあなんで今聖杯戦争が行われているんだ?」

「聖杯戦争にはね、小聖杯と大聖杯があるの。壊されたのは小聖杯。でも大聖杯が存在して、小聖杯が用意できたら聖杯戦争は続行できるの」

「つまり『賞品が用意できてたら、イベントは行える』って感じか?」

「おおざっぱに言えばね」

アーチャーの用意してくれたご飯を食べながら日記の内容を確かめる。書かれていたのは最初の数ページ。そこからずっと書かれていない。ランサーのマスターが死んだのか。それとも聖杯戦争がその時に終わったのか。

「なあアーチャー。ここに載ってるサーヴァントの真名、全部わかるか？」

「少しはね。ランサーは『カルナ』、アサシンは『ハサン・サツバーハ』、あとはそこに書いてる。セイバーとアヴェンジャー、アーチャーは分からないわ」

「カルナ・・・インドの神話の大英雄だな。たしかマハバラータ？」

「マハーバラータね。マスターは神話について少しは分かるの？」

「少しだけな。本がいくつかあるだけだし」

「そういえば俺の頭の中のやつらも英雄だ。やっぱりあいつらの力を借りるにあたって、少しでもあいつらのことを勉強すべきだな。」

「ごちそうさま。美味しかったよ。弁当もな」

「そう？それはありがとね」

「まあ、話しは変わるけどさ」

「同盟のこと？それとも特訓のこと？」

「両方だ。同盟の件はアーチャーの意見も聞いとこうと思って」

「そうね。遠坂凛との同盟は組むべきと思った。でもそれ以上にランサー陣営が魅力的なのよね」

確かに、遠坂とバゼットさんなら圧倒的に格闘センスはバゼットさんの圧勝だろう。でも魔術限定の勝負なら遠坂に分があるだろう。

バゼットさんは『言葉で話すより、拳で分らせる』人だ。

対する遠坂は同学年だし顔見知りだ。それなりに上手くいくだろう。でもやっぱり、

「俺は魔術は全くだしな。そうなると格闘限定になるわけだが・・・
そう考えると」

『遠坂凛とマスター』と『バゼットとマスター』に別れるわね」

「それも同盟を組めればの戦法だ。遠坂は向こうから言ってきたからあり得るけど、バゼットさんの方はコッチから提案をしに行くことに

なる。うーっ、困った」

「ここはやはり向こうから言ってきた遠坂と組むべきか、そう思っていると、」

「すいませーん！真琴君いますかー!!」

「!?!」

この声には聞き覚えがある。今日の敵は忘れない。この声は間違いない。バゼットさんだ。

◇

「同盟ですか？」

「ええ、今日の真琴君を見て確信しました。君はまだまだ成長しがある。だから私が鍛えます。だから同盟を組みましょう」

「いやいやいやいやちよつとまって！そんな理由で!?!」

「勿論それもありますが。この同盟を提案したのはランサーです。ランサーはそのアーチャーが気に入ったようで」

「あら？やっぱりお姐さんの魅力に負けたのかしら？」

それは違うと思う。きつとバゼットさんも考えている。

「こつちも同盟を組みたいのは山々なんだけど、実は先約がいて」

「先約？遠坂凛ですか。彼女なら衛宮士郎と同盟を組みましたよ」

「ええ!?!結局衛宮と同盟組んだのかよ！てかなんでしってんの！」

「大声で話していたので外まで聞こえました。『狩野君とも同盟を組みたいけど、それは後回しよ』とか」

「マジかよ．．．あとに回されたのか．．．」

となるともう答えは決まってる。

「なら組む。バゼットさんとの同盟」

「本当ですか！ありがとう真琴君！」

バゼットさんは笑顔になる。おいおい可愛いじゃないか。バゼットさんは満足したのかそそくさに家を出ていった。とある約束をして。

「．．．」

学校でのアーチャーの言葉を思い出す。

『これがお前の取り柄だ』

そしてアーチャーはあの言葉を言った。

『トリス・オン投影、開始』

じいさんには『役に立たないから別のにしなさい』なんて言われたっけ。でもその役に立たないものを使って、アーチャーは戦った。恐らく何回も投影したのだろう。でなければ贋作であそこまでの強度を誇るのをおかしい。

「……っ！」

久しぶりにしたためか、それともイメージがあやふやなのか。投影が安定しない。これじゃアライダー、アヴェンジャー対策に折角遠坂と同盟を組んだのに足を引っ張ってしまう。

「シロウ、ここにいたのですか」

「ん？ああ、セイバーか。どうかしたのか？」

「いえ、ただ何処にいるのかと。なるほど、ここはシロウの鍛練の場所なのですな」

鍛練の場所。確かにここにいると落ち着く。だからここで魔術の特訓をしている。そういう意味では道場よりも付き合いが長いかもしれない。

「邪魔をしてしまいましたね。どうぞ続きを。ですがシロウは超人ではない。無理に鍛練をし続けてはいけませんよ」

「ああ、適当に切り上げるよ。明日も学校があるからな」

「はい。ではおやすみなさいシロウ」

「おやすみセイバー」

セイバーは土蔵を出ていった。セイバーが無理をしなかったためにも俺が力をつけなくちゃな。

—————

「土郎は？」

「はい、土蔵で鍛練を」

「そう。もう夜中なのに遅くまでご苦労だわ」

サクラから聞いたがシロウはよく夜遅くまで土蔵にいるらしい。恐らく、いや確実に魔術の鍛練をしているからだろう。

「夜中まで起きているのは君もだろ凜。早く寝なさい」

「あんたは保護者かつつの。おやすみなさいセイバー、アーチャー」
「おやすみなさいリン」「おやすみ凜」

リンは同盟を組むにあたってこれからしばらくの間ここに泊まるらしい。反対するアーチャーを押しきったリンはすごいと思う。

そして今は私とアーチャーの二人で居間にいる。

「君は寝なくてもいいのかセイバー」

「サーヴァントに睡眠は必要ありません。マスターを守るのに、サーヴァントが寝てしまつてはもとも子もない」

「といつても・・・君はそれが必要じゃないのか」

「・・・そういう貴方はどうなんです」

「なにがだ？」

「リンにまで嘘をついて。このまま嘘で突き通すのですか！」

「・・・勘のいい彼女ならすぐに私の真名に気づくからな。出来れば終わるまでバレない方がいい」

それはつまり嘘を突き通す。そういう意味だ。

「ともあれ、私がこの聖杯戦争ですることはひとつだ。その邪魔をするならセイバー、君だろうと容赦はしない」

「・・・アーチャー」

アーチャーは部屋を出ていった。リンをここに泊めるのを反対したアーチャーだ。次会えるのは明日以降だろう。

「過去の自分を殺したところで、貴方は消えない。既に『座』にいる貴方は消えはしない。でも、それを知っていてもやるのでしょうね。それがただの八つ当たりだとしても」

一人呟いて、私は部屋に戻った。

それは彼らの昔話

夢を見た。

炎の中、一人立っている男を見た。

誰一人、助けられなかった男を見た。

その男は、泣いていた。

幼い頃、約束した『夢』を思いだし。

だから男は誓った。

次は誰も死なせない、と。

そして男は・・・英雄となった。

◇

その男は幼い頃、父と二人でとある島に住んでいた。島の人々と共に、平和に過ごしていた。その中でもとある女の子と仲良くなった。

とある夜。男はその女の子と未来の話をした。

『■■■■はさ、どんな大人になりたいの？』

男は迷わず答えた。

『僕はね、正義の味方になりたいんだ！』

◇

男は大人になった。思っていた夢とは違ったが、それでも他人から見れば正義の味方に見えただろう。

そんな中、男はとある儀式に参加する。そこで出会ったのは『昔の英雄』。今の時代にはまずいまいであるろう騎士の姿。

『問おう。貴方が私のマスターか？』

男と英雄は一言も喋ることはなかった。いや喋る機会がなかっただけだった。互いの不運が重なりあい、二人は言葉を交えることがなかった。それでも二人はベストパートナーと呼べる存在だった。

◇

大規模な儀式が終わった。その中で見たのは、死だった。たくさん人間が死んだ。大切な人も死んだ。仲間からも裏切られた。そして戦友も、■■■を勝ち取れず、夢半ばに散っていった。

だから男は誓った。誰も死なせないと。

◇
そして十年後。男は再び儀式に参加する。呪いに犯された体を動かし、血を流しながらも、新たな戦友と共に、他の六人の英雄を倒した。しかし今回の儀式は違ったのだ。六人倒しても■■■は現れなかった。そして気づいた。

『■■■■■は世界中にいる。世界を救うためには、全ての■■■■■を殺すしかないのか』

それは怒りか、それとも嘆きか。男は、正義の味方になるために。世界を救うために。誰かを死なせないために。世界を、歴史を築いてきた英雄を、殺した。

◇
男はその時、英雄になった。そう英雄を殺した『反英雄』に。たとえその英雄達が霊だとしても英雄を殺したことには変わりなかった。その結果『世界』から『反英雄』の称号を与えられた。

男は泣いた。結局彼女との約束を守れなかったことに。男は、自分の頭を銃で吹き飛ばした。

『こんな人生に、意味はなかった……』
そう言葉を残して。

――――
まだ朝日が見えぬ頃、私は目を覚ました。理由はさっきの夢。顔がわからなかったがあれは間違いなく、

「起きたのかいマスター」

アサシンが声をかけてくる。まだ暗いせいもあってか余計にフードに隠れた顔は分からなくなる。

「ちよつと夢をね」

「夢か。僕たちサーヴァントは夢を見ないからね」

「それでも生前は夢を見た筈よ。理想の夢を」

「……確かに、人は皆理想を夢みる。でも行き過ぎた理想は人生を破壊する。そして関わった人の人生もね。だからできれば夢なんてものは、『ただの夢』にしておくのがいいんだ」

「……貴方は後悔してるのアサシン？」

「どうだろう。あまり意味はなかったような気もするけど」

『こんな人生に、意味はなかった……』

さっきの夢の言葉が頭をよぎる。私は考える。意味のない人生なんてあるのかと。否、そんな筈はない。人生には必ず意味がある。

「まあこれは僕個人の意見さ。あまり深く考えないでくれ」

アサシンはきつと一人で抱え込んでしまうタイプだ。こんな人には誰かが手を差し出してあげないと、きつと潰れてしまう。それくらい脆い人間だ。

「もう少し寝るねアサシン。何時もより遅く起こしてね」

「分かったよイリヤ。おやすみ」

ただ、そんな脆いこのサーヴァントは、キリツグのような優しい声で私と接してくれる。それだけは間違いなかった。

ライダーは正義の味方だった。

今から少し未来。そこでライダーは戦っていた。

ライダーは元々正義の味方だったが、敵に敗北して洗脳されたらしい。その時ライダーは死神になった。

でも他の『ライダー』に助けってもらって、最終的には元の正義の味方に戻った。

その中でもライダーは人間になったり、恋をして失恋もして、運転免許書も取得した。

そんなライダーの最期は、大切な『ダチ』を助けて、その命を散らしていったらしい。

「あれ……今の、ライダーの？」

目が覚めると自分の布団の上だった。制服のまままで寝てしまっていたらしい。時刻を確認する。午前五時。先輩の家に行くには丁度いい時間だ。

「今日も奴の家に行くのか」

声をかけてきたライダー。いきなり現れるのは心臓に悪いからやめてほしい。

「うん。今日は放課後部活ないからお迎えはいらないから」

「そうか。して桜。お前は衛宮士郎と遠坂凜がマスターなのは知ってるのか?」

「・・・うん。家にセイバー、さんがいたからね。多分姉さんも聖杯戦争に参加してる」

何故こうも巡り合わせが悪いのか。先輩や姉さんが聖杯戦争に参加してなかったら、私は間桐の人間として戦えたかもしれないのに。何度こう思ったことか。

「聖杯戦争ではマスターを殺す必要はない。サーヴァントを倒せば終わる話だ」

「でも先輩や姉さんは願いがあるから参加してるんでしょ!それだったら私が辞退した方が」

「・・・ハア。やはりまだ戦う覚悟は出来ていないようだな」

「え?ライダー何をやる気?」

「暫くお前はマスターを辞めろ。そして聖杯戦争に参加した理由を思い出せ」

ライダーはそう言うのと部屋を出ていった。参加した理由。それは一つだけだ。

「戦う覚悟か・・・ハア」

私はモヤモヤした気持ちを抱きながら、先輩の家に向かった。

まさかその日に、ライダーが先輩たちを襲撃するとも思わずに。

—————

それはバゼットが真琴の家に向かったあと。

ランサーは一人森にいた。それは何故か。ランサー自身もわかってはいなかった。ただ言うならば『獣の気配がした』だろう。そして獣は存在した。

「へえ。少しは楽しめそうじゃねえか」

ランサーの目の前には一匹の獅子。しかしその獅子は普通の生き物ではなかった。下半身は山羊になっており、腰からは山羊の頭が覗いている。尻尾は蛇そのものと化している。一言でこの生き物を表すなら『怪物』。

「今日はちよいと不完全燃焼だな。まあ少しは楽しませてくれや」
「■■■■■■■■!!!」

最早獣の鳴き声ではない。普通の人間ならそれを聞いただけでも失神するだろう。しかし怪物の目の前にいるのはサーヴァント。しかもこの聖杯戦争でもトップクラスのサーヴァントだ。

「んじやまあ、ぶちかますかねえ!!」

怪物との間合いが一気に縮まる。ランサーからすればたった一呼吸の行動。しかし怪物からすればランサーが瞬間移動したように見えただろう。

「そらっ!」

ランサーの槍が怪物の左目を抉る。次に右前足を切り落とす。

怪物も負けじと蛇の尾を伸ばすが、それさえも切り落とされる。

「■■■■■■■■!!!」

怒り狂う怪物は山羊の頭から魔力の塊を吐き出す。それも連続で。それは全てランサーに命中した。怪物から見ればの話だが。

「あ、何?今の攻撃?悪い悪い。久々にルーンを使うからよ。ちよつと集中してて分かんなかったわ」

「■■■■!!!?」

怪物からすればそれは絶望。そしてその絶望がもつ槍は死。本能が叫んでいる。逃げろ、奴には勝てないと。しかし死は待ってくれない。

「んじや終わるか。呪いの朱槍をぐ所望かい?」

そして絶望が死を放つ。

「刺し穿つ死棘の槍!!」

ランサーの槍は怪物の心臓を抉った。万物全ての生き物は心臓を抉られると死に至る。それがたとえ怪物だろうと、サーヴァントだろうと同じだ。

「紅い棘は棘の如くってな」

既に怪物は絶命していた。動かぬ怪物を見下ろしランサーはため息をつく。こいつは食べられないと。ランサーは今日一日でこんなにもストレスが貯まったのは初めてのことだろう。

「つたく。何だよ呆気ねえ……なあそこで見てねえでよ、今度はあんたが相手してくれや」

ランサーは森の中に話しかける。そして帰ってきた返事は、
「ほう、自ら寿命を縮めるのがケルトの英雄か？」

金髪の男と共に現れた。

「テメエなら少しは楽しませてくれるんだろ？」

「貴様と戯れるつもりはない。槍兵なら槍兵らしく槍でも振り回している」

「ふうん。んじゃ勝手に振り回すかねえ！」

ランサーは槍を金髪の男に向かって打ち付ける。金髪の男は腕で槍を受け止める。この瞬間ランサーは確信する。

「テメエ、サーヴァントか」

「貴様より格上のな」

金髪の男の背後の空間が歪む。その歪んだ空間から現れたのは無数の武具。その数は計り知れない。

「我は王の中の王。英雄王ギルガメッシュ。貴様ら雑種どもでは太刀打ちできぬと知れ！」

ギルガメッシュは無数の武具をランサーに向ける。流石に不味いと感じるランサー。そう、これは無数の死。一つ食らえば全てを食らう。一度でも当たればそれで終わりだ。

「さあ、舞うがいい！^{ゲート・オブ・バビロン}王の財宝!!」

その日、その地帯の森は跡形もなく消え去った。

過去と縮地とアロハ

彼女には家族がいた。夫と子供が一人の三人家族。けっして裕福だとは言えないが、幸福ではあった。その日も夫は仕事に向かい、家で子供とすごしていた。奴が来るまでは。

◇ 「……柄にもなく」

昔を思い出していたサーヴァントが一騎。アヴェンジャーだ。古びたソファに寝そべっていたら、いつの間にか昔を思い出していたようだ。

「早いところ全て倒して、奴を殺さなくては」

『倒す』のはサーヴァント。では『殺す』のは誰なのか。これを知っているのはアヴェンジャーのみだった。

「ん?……また一つ無くなったか」

アヴェンジャーが見つめる先には割れたビン。そこから点々と続いていく足跡。逃げた『兵器』を壊すのもお前の仕事だ。マスターに言われた言葉を思い出す。

「仕方ない。これも仕事だ」

アヴェンジャーはフードを深くかぶり外へ出た。そして驚愕する。逃げ込んだであろう地帯が跡形もなく消し飛んでいることに。

—————

「寝てんのか?」

「ええ、寝ているわ。行くなら今のうちだけど」

アーチャーに親の様子を見てきてもらう。バゼットさんが帰ったあとすぐに帰ってきた我が両親。鉢合わせしなかったのか不思議だったが。

しかしこちらにも問題があった。アーチャーだ。

『俺の友達のアーチャーだ』なんて言えるわけもなく。結局部屋に押し込んだまま内緒にしてしまった。そして霊体化すればよかったと後から気づいたのだ。

「まあメモは残してるし、家出って訳じゃないんだから」

「そうだけど、やっぱり私も挨拶を」

「いいから、しなくていいから!!」

これから俺達は学校をサボってバゼットさんの家に向かうことになっている。同盟を組むに当たって互いに同じ拠点のほう色々と便利、という向こうの意見でこうなった。正直お泊まり会みたいで楽しみだ。

「何とかバレずに家を出れたが」

「家の場所分かるの?」

「一応道のりは教えてもらったから大丈夫だ」

道のりが描かれている紙を頼りに家を目指す。しかし問題が発生した。

「ええつとここを曲がって・・・あれ?行き止まりだ」

「飛び越えたんじゃないの?」

「マジかよ。でも向こうは人の家の敷地内だぞ」

「バレたら面倒ね。迂回しましよ」

と、このように『超人バゼットさん基準』で描かれた地図はあまり役に立たず、結局一時間遅れで到着した。

◇

「おや、やつとつきましたか」

「あなたの基準で地図を書くから遅れたんだよ!」

「まあバゼットはそういうのよくあるからな。我慢しねえとついでにねえぞ小僧」

「よく我慢できるわねランサー」

辿り着いた先には立派な洋館。かなり古びた洋館だがそれでも立派なのはかわりない。ここに二人で住んでるのか?

「それじゃあ早速段取りをしましょうか。まず我々の目下の敵はアサシン陣営。それは他も同じでしょう。次にセイバー、アーチャー陣営。ここは強敵ですから細心の注意をはらって。とここまでいって気づいたことは?」

「え?あーあとの二つは?」

「つまりライダー、キャスター、バーサーカーのどれかでしょ。どのク

ラスか分かつてるの?」

「ライダーがいるのは違いねえ。あとは、アーチャーか」

ランサーの発言に目が点になる。何?アーチャーがもう一人?つまりこの聖杯戦争にはアーチャーが三人いるつてののか?ははっ、アーチャーのバーゲンセルだ!

「真名はギルガメツシュ。古代メソポタミアの英雄王です。ランサーは昨日戦ったと言っています」

「昨日デケエ音したろ。あれ俺だ」

「ギルガメツシュは無数の宝具を所持しているようです。それで森の一部が消し飛んだよう」

アーチャーが三人。俺のアーチャー、遠坂の赤いアーチャー、あとは英雄王ギルガメツシュ。かなりの激戦ですハイ!

「野郎はかなり厄介だぜ。倒すならセイバーの所とも共闘しなきゃ勝てねえ」

「貴方がそこまで言うとはね。無事なのが不思議」

「まあ俺に当てるには武器が少なかつたけどな!!」

笑い飛ばすランサーに呆れるバゼットさん。真剣に悩むアーチャーに取り合えずヤバイってことしか分からない俺。うむ、これは不味いでござる。

「まあ、考えても仕方ありません。真琴君、朝御飯食べましたか?」

「いや起きて速効来たから。まだ食べてないけど」

「それじゃあ食ベに行きましょうか。勿論年配者であるランサーの奢りで」

「ハハハハッ、ちよつと釣り行つてくらあ!」

「逃げましたね」

「逃げたな」

「逃げたわね」

◇

朝御飯の牛丼を平らげ少しゆっくりして、

「よし、特訓だ」

特訓を開始する。バゼットさんは仕事があるとの事で自分の部屋

に籠っている。よって相手するのはアーチャーになるわけだが。

『ええーそんな殴る蹴るの特訓なんて嫌よ。やるなら木でやりなさい。木で』

なんて言われて仕方なく大きな木を見つける。流石に殴る蹴るで木を倒すのはほぼ無理だから、

(なんかいい特訓の方法ないか?)

《ああ！沖田さんの団子食べましたね！もう許しません！》

《ええ？何あれアンタの？ごめんなさい『沖田団子』かとおもって食べちゃったわ(笑)》

《まあまあ喧嘩は程々に》

《おい、俺のゴールデンプリンどこいった？》

《皆喧嘩・・・バラバラにしちやう？》

《やめなさいジャック！それだけはダメ！》

《・・・ウウ・・・》

(うっわ！誰も聞いてねえ!!あともう一人増えてる！)

《あ、どうも沖田総司です！気軽に沖田さんでいいですよ!》《そんなことないわよ。ちゃんとフランが聞いているじゃない。あんたこそちゃんと聞きなさいよマヌケ!》

(同時に喋るな!!あとありがとうフラン!!)

《・・・ウ・・・ン・♪》

(ってそうじゃない!誰かなんかないの!?)

《それなら『縮地』なんてどうでしょう。沖田さんも隊に入った時は近藤さんにまずさせられましたし》

縮地・・・頭の中で検索する。縮地あれ?沖縄のテニス部が使うあれ?つまり瞬間移動みたいなもんじゃん。無☆茶☆ブ☆り☆キタコレー!!

(って無理だろ!!)

《出来ますよ。沖田さん四時間ぐらいで出来ましたよ?》

(流石幕末の天才剣士!でも俺は天才じゃないんだけどなあ!)

《そんな天才だなんて。褒めても菊一文字しか貸しませんよ》
手元に現れたのは日本刀。沖田総司の刀か。てか日本刀重っ!

《それで牙突するんですよ》

(縮地しながらか? ほぼ無理だから)

こうして俺の縮地特訓が始まった。大丈夫、中学生が出来るんだもん。俺にだって出来るさ。

「まさかあそこまで怒られるとは」

ライダーはズキズキする頭を押さえながら海岸沿いを歩いていた。

昨日の夜、遠坂凜と衛宮士郎を襲撃したと言った瞬間、

『このおバカーーーー!!!』

フライパンで一撃。ライダーは家を追い出された。ライダーにとっては戦う覚悟の出来ていないマスターの代わりに色々やってやろうと思つての行動だったか、

「裏目に出るとは。やはり何も変わってないな」

生前を思い出す。ダチのためにやっていた行動が裏目に出たことがあるライダーにとって、これはなんともないこと。もっとも家から追い出されたのは初めてだが。

「よう兄ちゃん。頭押さえてどうしたよ」

「……アロハーか」

「ランサーだよ!」

ライダーに声をかけたのはアロハシャツをきたアロハーもといランサー。今日はまだ日が出ているとはいえ、今は2月。半袖のアロハシャツで過ごすにはまだ早いと考えるライダー。

しかしライダーは夏だろうが長袖のライダースーツだった。

「んで、こんなところで何やってんだよ」

「マスターに家を追い出された」

「ハハハハハハツ!! 追い出された!? そいつは傑作だな!」

ライダーにとってみればこの笑いはバカにしているものだと分かる。手に宝具を具現化する。

「まあ待てや。今日は戦う気はねえ。ちよつと釣りの気分だな。どうだ、一手遊んでくかい?」

「……気分は晴れるか」

そしてここにサーヴァント同士の釣り対決が始まった。しかしランサーは分かってなかった。ここが釣りの名スポットであることに。全ての野郎共が集うことになるとは……ある意味最大の決戦が始まる場所になるうとは。

—————
(もう一人のアーチャーのマスターは学校に来ていないのか?)

学校を霊体化して散策するアヴェンジャー。マスターの命令とあるトラップを仕掛けてこいとのことだ。何でも『形のない島の怪物』に関係のあるトラップとのことだが。

(しかしどういつも抜けている。本当に聖杯戦争に参加しているのか?)

セイバーのマスターはずっと寝ている。アーチャーのマスターは猫かぶり、もう一人のアーチャーのマスターはサボリ。唯一ライダーのマスターだけがまともだ。

(しかしこうしてみると、確かに学校に仕掛けるのは正解だな。まさか半分のマスターが高校生とは)

トラップを仕掛け終わり学校を出る。恐らくアーチャー位にはバレルだろうが、見つけることは出来ない。トラップは五日ぐらいかけて竜脈から魔力をすいとりながらゆっくりと起動するらしい。

「ほう、復讐者がいると聞いて来てみれば、本当にただの復讐者とはな」

アヴェンジャーが振り向くとそこには見たことのないサーヴァント。こんな奴は見たことがない。いったい何者なのか。

「ハッ、雑種ごときが我に刃を向けるか。よかろう、ただの人間風情が、我にどこまで食らいつけるか、見せてみるがよい!!」

サーヴァントは空間を歪ませて一本の剣をもつ。あれは宝具なのか。それとも『歪んだ空間』が宝具なのか。しかしアヴェンジャーにとってはどうでもいいこと。奴を殺すための通過点でしかない。

「いくぞ……」

「よかろう、力の差を知るがよい!」

白昼の中、王と復讐者の戦いが始まった。

王と復讐者とコンビニ弁当

冬木市にある大きな橋。それは深山町と新都をつなぐ唯一の場所。しかし今現在、それは橋ではなく、サーヴァント同士の戦いの場所と化していた。

「ハッ、達者なのは口だけか復讐者！」

ギルガメツシユは所構わず財宝を打ち続ける。これが彼の基本。ほぼ尽きることものない財宝の嵐。それは行き交う車を破壊しながら復讐者、アヴェエンジャーを狙う。

(無駄に数が多い。これでは私の宝具も意味がない)

財宝を交わしながら次の一手を考えるアヴェエンジャー。しかし傲慢の宝具は『宝具の1対1』で真価を發揮するためここでは意味がない。

「動きが止まっているぞ。ほれ足を動かせ！」

「これが王のやることか！」

ギルガメツシユはあえてアヴェエンジャーのギリギリのところを狙う。それはアヴェエンジャーを焦らしたいのか、それとも単なる余興なのか。

しかしそんな余興でも掻い潜るチャンスは存在した。

「(今だ!) ふっ！」

「ほう、やっと見つけ出したか」

「なんだと!?!」

しかしギルガメツシユにとって、その抜け道も単なる余興に過ぎない。唯一の希望を無数の絶望で多い尽くす。勿論アヴェエンジャーに交わす術はない。

「串刺しだ」

「おのれっ!!」

それでもアヴェエンジャーはナイフで財宝を弾いていく。だが財宝は無慈悲にも追加されていく。一つ、また一つと財宝がアヴェエンジャーの体を貫いていく。生涯味わったことのない痛みを顔を歪めるが、

「ぐうう、うあああつ!!」

なおナイフで財宝を弾いていく。その行動を理解できないギルガメツシュ。何故そこまで必死になるのか。何故我の前に膝間つかないのか。

「ほう、単なる雑種の復讐者ではないようだな」

何を思ったのかギルガメツシュは財宝を発射するのを止める。代わりに取り出したのは二本の黄金の剣。それを連結させ『弓』にする。「少しばかり貴様に興味が湧いた。何故貴様は復讐者を名乗るのか。誰に復讐するのか。何故復讐するのか」

「お前には……答えない!」

「だろうな。ならば我からの褒美だ」

ギルガメツシュは弓から矢を放つ。それも空へ。矢はずつと空へ突き進んで行き、遂には見えなくなつた。

「我に齒向かつて生き残つたこと。そしてレアなサーヴァントのクラスとして我の前に姿を現したこと。些細なことだろうが我が褒美と言つたのだ。ありがたく受けとれよ」

「貴様の褒美なぞ必要ない!!」

「必要か必要でないかではない。貴様は受けとるしかないのだ。七日後だ。それまで首を長くして待つがよい」

それだけ告げるとギルガメツシュは立ち去ろうとする。しかしそれを逃すアヴェンジャーではなかった。が、

「!!足が、動かん!」

「ハハッ、恐怖で足が動かんか?……まあ当然よな。確かに貴様に直撃しなかった財数多くある。がしかしだ。確実に貴様にダメージは与えてある」

「足の健が……切れているのか!」

「それに気づかず我の首を狙いに来るとはな。余計に面白くなつた。十年前ならこんなことは言わなかったであろうな。やはり時代と共に我は『ぐれーどあつぷ』したらしいな!!」

大声で笑い続ける英雄王。もし生前の、もしくは十年前の知り合いが今のギルガメツシュを見たらどんな反応をするのか。『こんなのは

英雄王じゃない!』と全員が全員同じ答えを出すだろう。

しかし英雄王も一応は人間だ。人間は変わるものだと、全員理解するだろう。時間はかかるが。

「ではな復讐者。余興にしては楽しめた。百点中二点だ。喜べ、昨日の狗よりは点数が高いぞ」

「一点も二点も大して差がないだろ!」

「いいやあるぞ?例えるならば蝮とイカぐらいな」

訳のわからないことを話す英雄王。後に『AUOジョーク』というギルガメツシユ自身の十八番だと分かるのは、もつと先である。

「ではな雑種。精々生き長らえろよ」

ギルガメツシユは燃え盛る車の数々を財宝で完全に吹き飛ばしながら深山町へと歩いていく。アヴェンジャーは霊体化して姿を隠す。(ここまで深傷を負うとは。やはりアサシンの時のようにはいかないか)

霊体化したアヴェンジャーはギルガメツシユとは逆に新都の方へと姿を消していく。残ったのは燃え盛る車の数々と『車だったもの』。当然警察と言峰は胃が纏れるように痛かったそうな。

—————

「ふむ、どうやら戦闘があつたらしいな」

「誰が戦ったか分かりますかアーチャー」

「一人はアヴェンジャー、もう一人は分からん」

学校の屋上。そこに二人はいた。学校には不釣り合いな格好のアーチャーと私服のセイバーだ。士郎を守るということで私服で学校に潜入しているのだ。

「しかし私服で来るとは。いや君のことだから凜に制服を借りて潜入すると思っていたが」

「私もそうしようと思ったのですが、学校に編入するにはそれなりに準備が必要と分かったので」

「こうして私服で潜入と。成る程な。確かにいろいろと手続きが必要になるからな」

霊体化が出来ないセイバー。不便ながらそれでもなんとかマス

ターを守ろうとする。それ故に『最優のサーヴァント』と呼ばれるの
だろう。

「しかし重大な問題が発生してしまして」

「どうしたセイバー？」

「お昼ごはんが、ないのです」

「……」

真剣な表情でアーチャーに相談するセイバー。

それに対して呆れるアーチャー。

「衛宮士郎に用意してもらえばいいだろ」

「シロウには迷惑がかかると思ったので『弁当は結構です』と言ってし
まいました」

「それは君が悪い。自分の体の事は自分が一番分かってるだろうに」

「面目ないです……」

「仕方ない。少し出払ってくる。昼には帰ってくる」

「もしやアーチャー!!」

「同盟相手に、いざというとき動いてもらわねば困るのでね」

「アーチャー!!!」

『やれやれ仕方ない』と言いたげなアーチャーはセイバーのお昼ごはんを取りに行く。しかしセイバーはコンビニ弁当で満足するような奴じゃない。ならば最高傑作を作ってやろう。

アーチャーが帰ってくるまで、セイバーは固い地面の屋上で正座して待っていたそうなの。

「ふむ……桜は許してくれるだろうか」

ライダーは大きな魚を担いで家の前に立っていた。ランサーに仲直りのきっかけとして譲り受けた魚。敵ながら優しいやつだと思いつつながら家の玄関を開ける。

「今帰ったぞ桜」

「あー？桜なら買い物だよ」

たまたま玄関の近くを通っていた慎二と鉢合わせる。何処か不機

嫌そうな慎二だが。

「お前が帰ってこないから桜怒ってたぞ」

「追い出されたのだから・・・」

「取り合えず桜が帰ってきたら謝っとけよ。とぼっちり受けるの僕なんだからな!!」

「そうだな。過ちを犯したのなら謝る。それが人間のルールだからな」

そのまま台所に魚をおくライダー。冷蔵庫に入れようにも大きすぎるために入らない。ならば切り落として分解すれば。そう思っ
て構えたのはライダーの宝具の力の一部、巨大な斧だ。

「ふぎけた武器だが、破壊力は一流だからな」

「ちよ!ライダーストップ!!」

「おかえり桜」

「え、あ、ただいまライダー。じゃなくて!斧下ろして!」

「ああ、降り下ろす!!」

「ダメえー!」

しかし無慈悲にも斧は降り下ろされる。勿論魚は真つ二つに。ついでに台所も真つ二つに。桜の口が空いたまま塞がらない。

「・・・すまん桜」

「・・・ラ・イ・ダァー!!!」

「許せ。ほら、美味しそうな魚だぞ」

その日、間桐家に雷が落ちたそう。そしてしばらくのあいだ間桐家のご飯はコンビニ弁当になったそう。

「・・・なんだこれは」

「コンビニ弁当だが?」

「そうではない。何故我の晩ごはんがコンビニ弁当なのだ!!」

「お前が麻婆豆腐は嫌だと言うから、わざわざコンビニでコンビニ弁当を買ってきたんだぞ」

「確かに言った!あんなものは人間の食べるものではないからな!だがコンビニ弁当って!」

「文句があるなら食べなくてもいいんだぞ?」

「たわけ! 誰も食べぬとは言っておらんだろう! ああ食べるさ! 食べてやるぞ!」

ついでに英雄王の今日の晩ごはんはコンビニ弁当だったそうなの。

「……………あたためますか?」

「……………言うのが遅い」

「今…………戻った」

「おう派手にやられたな。どうした? 赤いアーチャーにボコられたか?」

「違う。金色の…………サーヴァントだ」

「金色…………ああはいはい。そいつ英雄王だろ」

「!? わかるのか」

「おう、十年前の聖杯戦争で最後まで勝ち残ったはずだ。確かそんなスキのマスターは遠坂だったな」

「……………対抗策は」

「ねえな。まずお前じゃ勝てない。だからアインツベルンの『アレ』が必要なんだよ」

「そうか……………それと学校のトラップは仕掛け終わっている」

「お、流石だな。あれは『他者封印・鮮血神殿』ブラッドフォート・アンドロメダって言ってるな。要するに血の結界だ。まあ本物じゃなくて俺がちよいと細工して再現しているだけだけだな」

「それが起動すればマスターたちは死ぬのか?」

「一般人なら死ぬだろ。でも魔術師は死なない。だからそこをお前が狙うんだ。簡単だろ?」

「……………」

「なんだ不満か?」

「別に」

「可愛くないねえアヴェンジャー。心配しなくてもアイツは呼び出してやるよ。その為にマスターを殺す。簡単な仕事だろ? 殺人鬼さん」

「ッ!!」

「おお恐い恐い。マスターだろうが殺すつてか？」

「いずれ殺す。お前は人を殺しすぎた。私もな」

「そうかねえ。そうだアヴェンジャー。コンビニ弁当あるぞ」

「……………そこに置いておけ」

マスターは嫌い。でもご飯は好き。だからこんな発言ばかりになつてしまう。今のアヴェンジャーの悩みのひとつだった。

斬り決る戦神の剣

おつかい。それは頼まれたものを買ってくる。実に簡単な作業だ。しかし現実にはそれが出来ないものがある。

そう、俺の前に正座しているバゼットさんとか

「……………あのさあ」

「……………はい」

「いやお金出すのはそっちだし、むしろこっちは泊めてもらってる立場だからあまり言いたくないんだけどさ」

「……………はい」

「なんで余計なもの買ってくるの？」

バゼットさんの家？に泊めてもらってる立場なので、俺はせめても
の恩返しとして料理を少し振る舞っていた。その生活も早二日。今日も晩ごはんを作るためにバゼットさんにおつかいに行ってもらっていた。

しかしだ、

「何これ？」

「トイレットペーパーですが……………」

「明日が特売日なんでしょ？てかバゼットさんがチラシに赤丸してたよね！」

「そうですねですよ。思い出したのが買ったあとで」

「あとこれ、何これ？」

「えつと……………めんつゆですね」

「なんでめんつゆ？俺が頼んだのドレッシングだよ？」

「安かったの！」

「だからって頼まれたもの買ってこないのはちよつと……………」

バゼットさんはダメツトさんでした。いや薄々気づいてたけど。

よくランサーはついていけるな……………」

「ま、まあ明日はうどんで」

「うん、うどんないけどね」

「また買ってきますよ。それでは今日もお願いしますね」

逃げるように部屋を出ていくバゼットさん。いやもう文句は言わない。次はちやんとするだろ。

「さて……作るか」

《はい冷蔵庫まで縮地!》

「ハッ!!イデエ!!」

《顔面強打!?大丈夫ですか?》

《ほっときなさい。頭は頑丈なのよ?》

(心配する気なしかよ)

時おり沖田さんが『はい縮地!』とか無茶なオーダーを叩きつけてくる。ぶつちやけ冷蔵庫まで縮地とか無理すぎる。大体あれは『かなり』距離が離れているのを一気に縮めるための奥義だ。なのにすぐ近くの冷蔵庫にはちよつと……

(ぶつちやけ冷蔵庫すぐそこだから縮地の意味ないよね?)

《何を言ってるんですか!こういう積み重ねが大事なんですよ?はい縮地!!》

(はい無茶ぶり!てか何処に縮地すんの!?)

《はあ、あんたこんなのも出来ないの?私なら出来るわよ?ねえディルムツド?》

《え?いや俺が見たのは……いや言うまい》

《顔面強打して号泣してたなあんだ》

《な!?金時……ぶっ殺す!》

《また始まった……とにかく積み重ねですよ真琴君》

積み重ねか……取り合えずカレーとサラダを作るのに縮地は必要ないな。

◇

「今日のお詫びと言ってはなんです、明日真琴君の特訓に付き合いますよ」

「え、それはありがたいんですけど。仕事の方は?」

「それは一段落しましたから。実践形式で特訓しましょう」

(そんなことになったら死んでしまう!!)

《いいじゃない。一度死んでみたら?》

(なんてブラックなこと言うんだジャンヌ！)

《まあ冗談抜きにしても、実践形式の特訓は大事よ。相手が木ばかりの訳じゃないんだし》

(確かにそうだけどき)

確かにジャンヌの言うことは正しい。しかしバゼットさんとの実践形式の特訓？ いやいや手加減絶対しないじゃないですかヤダー。

「わかりました。明日はよろしくお願いします」

と何だかんだでお願いする俺であった。

◇

「準備はいいですか真琴君」

「ええ、いつでもどうぞ」

俺は刀を構える。それは沖田総司の愛用の刀。その銘は『菊一文字則宗』。最近いつもこれを使って特訓をしている。内容は簡単なものだが。

「それでは、こちらも本気で行きましょう」

バゼットさんは自身の周りに一つの球体を浮かびあげる。それは彼女のまわりをグルグル浮遊している。上着も脱いでシャツの姿になるあたり、

(やっぱり本気だな)

《沖田さんがみっちり教えたんです。大丈夫ですよ》

《それが一番不安なのよ。それに浮いてるアレ。アレには気をつけなさい》

ジャンヌが珍しく真面目に忠告してくる。そんなにヤバイのかアレ？ ただの鉄球に見えるけど……

「それでは……仕留める」

「はやッ！」

一瞬の間に懐への侵入を許してしまう。おいおい早すぎるだろ！

「くっ！」

菊一文字で風ぎ払うが素人の俺では隙しか生まない。隙だらけの俺に容赦なく拳が叩き込まれる。

「おや？ 私が手加減するともっ？」

「しないだろうな……」

「今は同盟関係であっても、同盟が無くなれば敵同士です。余計な情があるなら今ここで捨てなさい」

「そんなの、ねえよ!!」

沖田さんが教えてくれたのは縮地だけじゃない。キチンとした攻撃方法も教わってる。

「はあっ!!」

「!!(確実に頸動脈を狙っている。成る程、真琴君も本気になりましたか……殴りがいがある)」

「おうりゃ!!」

「甘いー」

バゼットさんはルーンで手足を硬化させ菊一文字の突きを弾いていく。(沖田さんからしてみれば) 隙の少ない攻撃だが俺ではやはり難しい。

《(何か不味いわね) とにかく気をつけなさい。特に切り札は》
「こうなりや一気に決めてやる!」

菊一文字にフランの電撃をまとわせる。そして腰をおとし刀をバゼットさんに向ける。呼吸を落ち着かせて……

「一步音越え、二歩無間」

沖田さんみたいには出来ない。それでも真に迫ることはなんとかできる。

「三步絶刀! 剣狂・三段突き!!」

「……それを、待ってました。」

この時に気づいておけばよかった。バゼットさんの鉄球が電撃を纏って背後に浮遊していることに。

「後より出でて先に絶つもの」

《不味い! 今すぐ止めなさい! 死ぬわよ真琴!》

「斬り決る戦神の剣!!」

「なっ!!」 《くそっ!!》

バゼットさんの鉄球からビームが出た。しかしそれは突然地面から吹き出した炎でかき消された。てか今の炎ってまさか、

「戦神の剣を、かき消した!？」

(今の炎ってジャンヌか?)

《まあね。あの宝具は所謂『切り札に反応する切り札返し』ってところね。私が炎で消さなかったら心臓を貫かれてたわよあんだ》

(そうか。そいつはありがとなジャンヌ)

《別に。あんたが死んだら私たちも消えるでしょ。だからよ》

「しっかしやるなあ小僧!」

「確かに。こんなことは初めてです。成る程、発動後ならこういう対処も出来るでしょうね。改善が必要か……」

「まあ大体そいつは『一対一』が前提だからな。しかもバゼットは五つの力のうち二つしか引き出せてねえ。そこもラッキーだったな」

「俺がやったんじゃないんだけどな」

「でも凄いわマスター。もう半分ぐらい縮地が出来てるじゃない」

「そうか?あんまり分かんなかった」

《そうですね。私も土方さんに言われるまであまり実感ありませんでしたし》

まあ取り合えず命の危機は過ぎた。いや本気じゃんバゼットさん。本気で殺しにかかってくるとは。これが聖杯戦争か。サーヴァントだけじゃない、マスターもしっかりしてないと勝ち残れない。

まあこんなふざけた儀式、俺が止めてやるんだけどな。

「今回はここまでにしましょう。真琴君の課題も見つかりましたし。さあラーメンでも食べましょうか!」

「……昨日うどんって言ったのーれ?」

「うどん買ってきます!!」

まあここぐらいは勝たせてもらわないと。

「いやしっかし、本気でバゼットがアレを使うとはな!」

「ほんとよ。もしマスターを殺したら、私がバゼットを殺してたところよ」

「ふうん。確かにアーチャーだから『単独行動』のスキルで殺れるが……殺らすと思うか?」

「でしようね。まあそれはそうとして。ねえ気にならない？マスターの武器について」

「小僧の武器？あの日本刀か？あれ自体は普通の日本刀だろ？何の魔力も感じなかったぜ」

「それじゃあ、刀に纏わせた雷とか、斬^フり抉^ラる戦^ガ神^{ラッ}の剣^クを防いだ炎とか」

「アレはテメエがやったんじゃねえのかよ？」

「そう思ったでしようね。でも今回私は手を出してない」

「はあ？でもアレは確かに」

「そう。確かにアレは『宝具』だった。マスターにそんなことが出来るとは思えないんだけど」

「……まさか、小僧に手を貸している第三者でもいるってのか？」

「そこはなんとも言えないわね。いるかもしれないし、いないかもしれない。第一私もマスターのことはあまり知らないし」

「なんで知らねえんだよ」

「だって、喋る機会ないし」

「いっつも喋ってんじやねえか」

「それは普通の談笑よ。私がいつてるのはお互いのことよ」

「ふうん……まあ俺は興味ねえし。そこんところはテメエでなんとかしな」

「……分かってるわよ」

学園決戦 序

戦いはいつだって突然だ。

誰かが寝ていようが、

「……zzz」

《いつまで寝てるのよこいつは……》

(ずっと寝てるわねマスター)

誰かが特訓していても、

「トレス・オン投影、開始……っと、シャーペンぐらいなら余裕になったかな」

普通に授業を受けていても、

(さて、目下のところ一番の難所はアインツベルンか……どうするアーチャー?)

(攻めるところは君が決めたまえ。前線で戦うのは私とセイバーなのだから)

(ライダー、今日の弁当何がいい?)

(いや弁当より前の魚が……)

(何……が……い……い……?)

(……唐揚げ弁当)

屋上で素振りをしていても、

「おや、今日の学食はカレーですか」

戦いは突然始まる。

「!？」

異変に気づいたのは寝ている途中に頭痛がしたとき。ふと目が覚めると辺りは、いや学校は異空間できな何かに包まれていた。

「って、皆倒れてる!？」

「マスター! 恐らくこの結界よ。この学校を覆っている結界が、人間の生命力を吸いとってる!」

「なんともご都合展開だな!」

辺りを見渡すと衛宮がない。あいつのことだ、事の元凶を叩きにいったのだろう。なら俺は特にあせる必要もないのだが、

「!・・・マスター、廊下にはサーヴァントよ。それと・・・変なのが一体」

「一体? そのサーヴァントのマスターじゃないのか?」

「多分マスターなんでしょうけど・・・聖杯からの受け売りじゃよく分からないわ」

廊下に出て確認すべきなんだろうけど・・・まず、人間は一体とは滅多に言わない。一人が普通だ。『一体』の時点で人間じゃない可能性が・・・それともうひとつ。滅茶苦茶殺気を感じます! 多分十人が十人振り替えるレベル。

「アーチャー、廊下に出たら一気に狙撃しろ」

「あいあいさー。あ、メイド服から変えますね」

そう言うアーチャーの服がメイド服から戦闘服になる。でも最初の頃と少し違い、白いのにはかわりないが。

「・・・スカート・・・か」

「ええ、スカートよ」

スカートだった。しかも少し長め。どうせならミニスカートがよかった・・・あと長袖になった。

《注意してください。これ、かなりヤバイ人の殺気ですよ》

《今回は手を貸してあげる。死なないでよ》

菊一文字とジャンヌソード(仮)を装備し警戒する。敵がいきなり教室に入ってくる可能性もあるからだ。

(いつせーので、ドン! でいくぞ)

(了解マスター)

(いつせーん「ドーン!!」)

「いや早いよアーチャー!!」

勢いよく廊下に飛び出て狙撃するアーチャー。俺も急いで出ていくが既に煙幕で覆われていた。

「いたのか?」

「ええ、黒いフードの銀髪少女が」

黒いフードの銀髪少女? なんか暗殺者みたいだな・・・ん? それってアサシン? いやアサシンは赤いフードの男だ。となると・・・

「サーヴァントに違いないのか?」

「ええ・・・多分」

「おい! マスター、いや普通の人間だったら死んでるだろ!!」

「・・・いや、私のマスターは簡単には死なない」

「!!」

煙幕の中から現れたのは黒いフードの少女と、背の高い男。何か異様なものを感じるその男が口を開いた。

「おう、テメエらがアーチャー陣営か。俺の名はクリーザ。このアヴェンジャーのマスターだ」

「アヴェンジャー!?」

男の名を『クリーザ』。何処かの宇宙にいそうな名前だが・・・アヴェンジャーのサーヴァント?

ランサーの話と合わせると、セイバー、アーチャー×3、ランサー、ライダー、アサシンの筈だ。このアヴェンジャーを足すと8人。一人定員オーバーだ。

「まあ聖杯戦争だからな・・・死んでくれ」

「来るぞ!」

「ええ、ドンと来なさい」

「・・・覚悟しろ」

「セイバー!」

屋上に待機していたセイバーはライダーと対峙していた。セイバーはライダーに剣を向け、ライダーはセイバーに銃口を向けている。

「シロウ、下がっててください」

「あ、ああ。大丈夫かセイバー?」

「問題ありません」

ライダーのマスターは姿が見えない。ここにいるのは俺とセイバー、ライダーだけか。それにしてもこの異様な気配。

「どう考えても・・・アレだよな」

「でしょうね。私の宝具ならアレごと吹き飛ばせますが」

学校の上。そこには巨大な目玉がこつちを見ている。その目玉を中心に結界が展開されているのだからどう考えてもアレが原因だ。

「恐らくこの結界を起動させるための『何か』が学校中にあると思います。まずはリンと合流してこの結界を止めてください」

「分かった。セイバーも無理するなよ」

遠坂と合流するために屋上を出ようとする。

「おおっと！逃がしませんよ先輩!!とおっ!!」

「何奴!」「誰だ!」

その影は屋上のフェンスをよじ登りながら現れた。服装から見て女性なのは分かる。でも顔は紙袋を被っていてわからない。

「はいはいどうも!ずっとスタンバってました!ライダーのマスターのま・・・BBちゃんです!このBBはどんな意味で捉えても構いませんよ」

「二・・・二・・・二」

「あ、あれ?ちよつとライダー。もしかしてバレちゃった?」

「何故そんな格好なんだ・・・」

「シロウ気を付けて。あのBBちゃん、ただならぬ気配を感じます」

「ああわかってる。BBちゃん、何者なんだ!」

「何故バレない・・・」

ともあれライダーのマスターが出てきたからには俺も残って戦うしかない。投影もかなり練習して感覚も戻ってきた。

「さあ覚悟してくださいねセン・ン・パイ♪」

「間違いを正すための死神。これが俺の二つ目の姿だ」

「負けない。いくぞセイバー!」

「はいシロウ。ここからは我々のステージです!」

「どうやらギリギリ学校に潜入出来ましたね」

「その瞬間に結界が発動したのは……何て言うかアレだな」

「なんですかアレって?」

「いいや、お前の名誉のために黙って……どうやら奴さんはヤル気満々らしいぜ」

学校に潜入したバゼットとランサーの目の前に現れたのはイリヤとアサシン。待ち構えるように仁王立ちしている。

「待ってたわバゼット。案外遅かったのね」

「それはどうもイリヤスフィール。遅かったのはランサーがさっさとホットドッグを食べないからです」

「あの瞬間テメエを殺そうと思ったぜ」

「ホットドッグには犬は入ってませんよ」

「それでもゲツシュに少し引っ掛かるんだよ!」

まるで漫才だ。そうイリヤは思った。しかしこんなコンビだからこそ強いのもかもしれないとも思った。

「行くわよアサシン。ここはもう貴方のフィールドよ」

「分かったよマスター。僕の殺り方で片付けよう」

「来ますよランサー。アサシンは任せます」

「おう。お前はマスターの方が……心痛まねえの?」

「そういう感情は今捨てます。今の私は誰だろうと殴ります」

人間バーサーカーと化したバゼット。

そんなバゼットに引きながらもきつちり自分の仕事をこなそうとするランサー。

同じくバゼットに引きながら「うわあ。今からこんなのと戦うの?」と顔をひきつらせるイリヤ。

そんなイリヤの心情を心配しながらも目の前のランサー敵に集中するアサシン。

◇ 今、学校のグラウンドが戦場と化す。

「もうなんなのよこれ!」

「ほれ、そこにもあるぞ」

「分かってる！」

凜はアーチャーと共にこの結界を起動させている原因を排除している。しかしそれも簡単にはいかなかった。

「くそっ！アーチャー、ちよつと手伝って！」

「了解した。少し離れたまえ」

サーヴァントの力を借りなければ解除できないほどソレは強固なものだった。恐らく凜一人では無理だろう。三日ぐらい前ならば分らないが。

「上は戦ってるのね」

「この気配……アーチャーとアヴェンジャーか」

「わかるの？」

「勘だよ。さ、早く済ませよう」

そのアーチャーとアヴェンジャーの戦いがあるまで熾烈を極めるとは、アーチャーは思ってもいなかった。

学園決戦 憑依

戦況を報告しよう。かなり不味い。

「おうりゃあ!!」

「甘いぜ小僧!!」

菊一文字と拳がぶつかる。いや刀を拳で防ぐとか人間やめてるだろ。

「やっぱり武器の扱いが下手だな。ほうら」

「!!」

「こうやって、気を抜くとすぐに武器を手放しちまう」

まただ。クリーザは俺を殺しに来るのではなく、必ず武器を防ぎ弾き飛ばす。そして俺が拾いにくのを待っている。サーヴァントの方は待ってくれなさそうなのにな。

《もつと力を入れろ、って言ってもダメか。あんたは本気だものね》
《思った以上に不味い。下手したら最初の脱落者になるんじゃない》

《余計なことを考えないで。あんたは全力で相手しなさい。死にそうになったら私たちが何とかするわ》

(そいつは頼もしい、なー!)

ジャンヌソードをクリーザに投げつける。当然弾かれるが問題ない。少しの時間があればいい。

「復讐は剣を狂わせる!」

縮地で間合いをつめる。これがジャンヌ、沖田、フランの合体『宝具』!

「いざ乱れ散れ、ラグロンドメント・ツリー復剣狂・三段突き!!」

普通の三段突きのように『訳のわからない現象が起きて防御が出来ない』ということは出来ない。ただ三人の力を織り混ぜた突きにすぎない。が、英雄三人分の力が混ざっているんだ。それなりには効く筈だ。

「おう、それなりには効いたぜ」

《致命傷にはならないか》

「くそっ!」

「まあ少しは楽しめたぜ。そうだな、俺を追ってきたどっかの特殊部隊よりかは楽しめたな」

クリーザの胸には刀が深く刺さっている。しかも刀を挿んで抜けさせないようにしやがる。しかも右手にはなんかヤバイのを溜め込んでます！

(不味い！)

《ええ、今回はよくやったわ。少し休みなさい》

その瞬間、目の前が暗転した。

—————

アーチャーとアヴェンジャーは廊下と階段を破壊しながら戦闘している。既に3〜1階までは破壊している。

「…………ふっ！」

「おっと、やるわね」

アヴェンジャーは拳銃を牽制しながらナイフで迫ってくる。対してアーチャーはいつも通りに弓と矢を二刀流のように扱っている。やはり弓の使い方を間違えている。

「この結界を仕掛けたのは貴女よね」

「だとしたら？」

「趣味悪いわ。それにありがとね。こんな不完全な状態で起動させてくれて」

「!?…………いつから気づいていた。この結界が不完全なものだと」

「起動した瞬間からよ。完全な状態で起動させたら普通の人ならその瞬間に死ぬわ。」

でも不完全な状態で起動させたから少しの間は皆動けてたわ。マスターのよこの担任の先生なんて暫くは元気だったわ。まあ戦闘の邪魔になるから気絶させたけど」

武器と言葉を交えながらアーチャーはズバリよこの結界について言い放つ。アヴェンジャーは少し驚いたような表情を見せたがすぐにいつものポーカーフェイスになる。

「誰かさんの宝具を真似したんでしようけど。ごめんなさいね、うちのマスターの方が何倍も上手よ！」

「がはっ!!」

アヴェンジャーと罅迫り合いになった瞬間、がら空きになった腹部におもいつき蹴りを叩き込むアーチャー。一瞬の判断の差だ。

「……お前、本当は気づいてたんじゃないのか。私がこの結界を仕掛けていたのを」

「いいえ。今日初めて知ったわ。最初は驚いたもの」

「……お前、嫌いだ」

「あら、私は好きよ?」

アーチャーの『してやつたりの顔』『ドヤ顔』『微笑み顔』全ての表情が気に入らないと思ひ始めるアヴェンジャー。アーチャーの表情は残酷な世界を知らない、そんな表情をしているように思えたからだ。

対するアーチャーはアヴェンジャーが気に入っていた。クールな表情から時おり見せる驚き、怒りの表情もそうだが、極めつけは攻撃してくる際に見せる笑み。アヴェンジャー自身が『確実に殺った』と思つた瞬間に見せる笑みがアーチャーは気に入ったのだ。

「死ねえ!アーチャー!!」

「……そうね、一つ教えてあげる。貴女に足りないものを」

一直線に進んでくるアヴェンジャーを交わし距離をとるアーチャー。

「それは……女子力よ!!」

今度はアーチャーがアヴェンジャーに一直線に突き進みほどよいところでジャンプする。アーチャーは右足を突き出し高らかにその奥義を発動させる。

「太陽面爆発に比類する女子力の発露!!!」

アーチャーの火柱キックはアヴェンジャーに見事命中した。とある良妻狐とコーヒー入れるのが上手な正義の味方が得意とするこの奥義。当然絶大な破壊力を誇るそれが直撃したアヴェンジャーもとんでもない勢いで真琴とクリーザの方に飛んでいき、壁にめり込んだ。

「可愛い顔してるんだからオシヤレしなくちや」

「あ?」

物凄い勢いで吹き飛んできたアヴェンジャー。両手が空いてたら打ち返してたのに。

「おもいつきり飛んできたなアヴェンジャー」

「なら、貴方も飛びなさい」

「あ?・・・今のテメエか?」

『喰らえ!!』

突き刺している剣に魔力をまわし炎を放出する。とびっきりの怨念もこめて。

「ぐっ、があああああ!!」

『アツハハハハ!!』そうよ、燃えなさい!』

「!?テメエ何者だ。さっきの小僧とは違うだろ!」

『なら答えてあげる。竜の魔女、ジャンヌ・ダルクよ。ほらその目に焼き付けなさい。フランスを救った聖女(笑)よ』

自分で言うのもあれだけど・・・ヤバイぐらい楽しいわ憑依^レ現^レ界^レ!

「竜の魔女だあ?くだらん。ただの小僧があ!!」

剣を引き抜き顔を蹴り飛ばす。やっぱり私みたいなサーヴァント擬きでもこの『種族』には有効打になるのね。

『ほら代わりに誰かやる?』

《いえ、今回はジャンヌ殿一人で充分かと》

《そうですね、頑張ってくださいジャンヌ!》

『そう、まあいいわ。元より変わる気もなかったし』

《なら何故聞いた・・・》

『さあ首を切りましょう。おさらばです』

立ち上がったクリーザの首をはねる。案外あつけないわね。

『やだ、私の行為残酷すぎ・・・?』

《ええ、充分すぎるほど》

『ほらいつまで寝てるの早く起きなさい』

「……あれ？俺何してたんだ？」

《よく殺ったじゃない。あの種族相手によくやったわ》

(種族？殺ったって……俺が？)

目の前が明るくなるとクリーザが倒れている。これを俺が殺ったのか……

《首をポーンとね》

(首？いや首なら繋がってるし)

《は？そんなわけ……どういうこと》

もう一度クリーザを見るとそこにやつのはなく、かわりに背後からクリーザの声が響く。

「よくやってくれたな。六連男装がなきや死んでたな」

「おいおい……死んだんじゃないのかよ……」

「ああ一度な。かのヘラクレス程じゃないが、俺にも命のストックがある。今ので一つ減ったが」

それだとあと5つ。面倒にも程がある。

「まあ今回はここまでだ。アヴェンジャーもダウンしてるしな。次会うときはテメエの中の英雄の力、現界まで引き出すんだな」

そう言い残すとクリーザはアヴェンジャーを連れて窓ガラスを突き破った。俺に追いかける気力もなく、その場でヘタレこむのだった。

「お疲れ様マスター。もうすぐ結界も消えそうだし、今のうちに救急車を呼びましょう」

「あ、ああ……」

想像以上に気力を使い果たしたみたいだ。しばらくの間、俺は動けなかった……

学園決戦 期待

「たあっ!!」

セイバーの不可視の剣がライダーの拳銃と激突する。飛び散る火花や衝撃波でその威力が分かる。

「くっ、そこだっ!」

「だあっ!」

しかしセイバーの方が若干押されている。その顔からも焦りが見えている。ライダーは右腕にクローを装備し不可視の剣に対抗する。ライダーの表情は仮面に隠れているため分からない。それがセイバーを余計に追い込んでいるのかもしれない。

(くっ、何を考えているか分からない。体の動きだけで次の攻撃を判断するのが難しくなってきた)

ライダーは戦いの最中徐々にその攻撃スピード、威力、範囲を上げてきている。一撃が重くなっていきセイバーも苦しげになってきた。

「(こうなったら宝具を)っ!」

「考え事をしている場合か?」

ライダーのクローは鞭に変形してセイバーの足を捕らえる。そのままセイバーを地面に叩きつける。苦しそうに喘ぐセイバー。しかしここでやられるセイバーではなかった。

「ふん!!」

剣を地面に突き刺し支えをつくる。そして剣を軸に回転する。当然のごとく足に鞭を巻き付けたライダーも遠心力で飛んでいく。そのままフェンスをぶち破りライダーは落下していく。セイバーも連れて。

「この結果もお前がやったのか?」

「え?いい、いいえ私じゃないわ。私ならもっと優雅な結界を作れるもの! (何言ってるの私!?)」

いつの間にか変なこと言っちゃった! 本当に私何言ってるのよ.....

「それより早くかかってこなくてもいいんですか？（できればかかってこないでください）」

「生憎女の子を殴るってことはできない」

「へえ、案外優しいのね（まあそんなところが好きなんです）」

「だから俺はあの結界を破壊する。手伝ってくれないか？」

「ええ？て、敵に、しかも絶賛交戦中なのに？」

「それは分かっている。でも俺には君が敵には見えないんだ」

先輩……なんて優しいんですか。敵である私のことを思ってくれて。

「まあどうしても戦うってなら、俺も覚悟を決める」

「いいえどうぞ！出来ることなら手伝います！」

「へ？あ、ああ。ありがとな」

「はうっ……先輩」

なんて眩しい笑顔。それなのに私は……こんなジャンクフード臭い紙袋を被って……これじゃただ単にハンバーガー臭い意味不明女に終わってしまう。これでは……ダメだ！

「せ、先輩！実はわた「セイバー!!」くそっ落ちてったぞ………」

先輩はそのまま屋上を後にしました……

「ん？」

「どうしたのアーチャー」

「……凜。君は衛宮士郎の応援に行ってやれ」

「どうしたのいきなり」

「いや、最後ぐらい私一人に活躍させてくれ」

「……出来るの？私でも貴方の手を借りないと出来ないのよ」

「やってやるさ。さあ行け」

凜は渋々向かった。さて最後は図書室だ。と言っても一筋縄ではいかないだろうが。

「やはり……空間を弄って拡張しているのか。巨大な図書館だな。確かアトラス院かそこら辺にコレくらいのがあったが」

『……ウウウウウ』

「唸る獣はいなかったがね」

『ウウウウG A A A A A A A A A A!!!!』

その獣は黒い霧、いや闇に包まれていた。俗に言う魂喰らい^{ソウルイーター}。こんな化け物は現代社会に存在してはいけないだろう。

「……私の魂を喰らっても」

化け物が飛び掛かってくる。それを一閃二閃と切り裂く。四股を失った化け物に投影した剣を全身に突き刺し爆破する。化け物はその姿を無惨な肉片へと変えた。

「腹を下すだけだぞ？」

魔術師^{キャスター}の適性もあるんじゃないかと思いつながら結界の基盤を破壊する。やれやれ凜がいなくて正解だったか。

「さて、気は進まないが合流するか」

しかしここで巨大な魔力を感じる。さっきの化け物以上の。そして強烈な視線も感じる。

「見ているのは……そこだっ！」

弓から連続で矢を放つ。全てがその巨大な目玉に突き刺さる。どうやらこの目玉の化け物が視線の犯人らしい。

『!!』

「お前が私と同じクラスなのが不思議だよ」

もう一度投影する。今度は赤い槍。といつてもランサーの槍程のものでもないが。あの夜、俺の記憶に突き刺さっているあの槍。俺がこの戦いに身を投じた元凶でもあるか。

「アーチャークラスはランサークラスが苦手だね」

目玉の中心に槍を深く突き刺し、図書室を出す。

「さて今度こそ合流しなくては。しかしあの巨大な魔力は目玉ではなかった。となるといったい」

考えながら図書室から離れる。しばらくしたあと図書室は跡形もなく消し飛んだらしい。

◇

「衛宮君！」

「遠坂！無事だったか」

「ええ。セイバーは？」

「ライダーと一緒に屋上から落ちた。あ、それとライダーのマスターも見たぞ」

「どんなやつ？」

「BBちゃんって言うってた。なんか紙袋も被ってたし。それに桜に声が似てた」

「何それ。衛宮君よりふざけてるわね」

「確かにふざけてるな、って俺がふざけてる見たいに言うなよ」

「ふざけてたじゃない。最初の頃とか特に」

「そ、それはだな」

「まあいいわ。それにしてもBBちゃんか。桜にそっくりって、まあ

あの子はそんなことしないし」

「だよな。桜は絶対しないよあんなの」

「はくしよん!!うう、誰か噂してるのかな」

「結界が弱まってる？」

「どうやら他の奴が結界を破壊しているようだな。それはありがたいが、決着も早くつけなくてはな」

ライダーは鞭から弓へと武器を変形させる。更に拳銃に魔力を集中させ地面に叩きつける。そしてその瞬間、私の時間が遅くなる。

「ここから、俺のひとっ走りだ」

「なっ、体が遅くなっ!?」

「悪いが追跡と撲滅はいずれもマツハで片付けるようにしている」

「そのわりには随分と時間がかかってますが？」

「ああ。今回が初めてだ。そこら辺の魔獣ならマツハで片付くが」

何とか会話で時間を稼ぐ。範囲がどれ程か分からないが、ここだけならシロウがリンとアーチャーを連れて来てくれるはず。

「（いや何を考えているんだ私は。シロウに言ったではないか。問題ないと。ならば）ここで負けるわけには、いかない!!」

「いいや、お前の敗けだ!」

ライダーの弓から紫色の矢が放たれる。私は遅くなった時間の中、剣を振るう。しかし遅くなった時間の中ではそれも満足にできない。徐々に迫る矢。万事休すか、そう思った瞬間、

「はん、その程度かセイバー?」

「!?この嫌な声は」

「何者だ!」

「我か?知りたいなら教えてやる」

金色の影が私の目の前に降り立つ。この遅くなった時間の中で奴は普通に動いている。確かにこの英雄ならそれも可能かもしれない。彼は矢を弾き高らかに発言する。

「我こそが人類最古の英雄王、そしてセイバーの夫（仮）であるギルガメッシュだ!!」

「私は貴方の妻ではない!」

「ストーリーカーか。だがお前は」

確かにそうだ。ここにギルガメッシュがいてはサーヴァントは八騎になる。聖杯戦争の数を越えている。

「何故貴方がここに」

「それはかくかくしかじかでな、今は話すのに時間がかかる」

「何?10年前から現界しているだと?」

「よくわかりましたね!」「よくわかったな!」

「高性能の最新型だからな」

そんな理由で片付けるか。確かに過去にライダーのような英雄はいないと思うが。

「そんなことより、騎兵ごときが我に矢を向けるか」

「割って入ったのはお前だが」

「確かに」

「ともかく！我に矢を向けた罪は重いぞ」

英雄王は蔵から一本の剣を取り出す。かつて『竜殺し』が使っていた銀色の剣。その原型。オリジナル彼の宝物庫にはそんな物がたくさんある。

「そう言えば10年前に借りたゲーム機返してませんでしたね。あとで返します」

「よい。最新型を手にいれたからな！」

「なんと！あれの最新版ですか!?今度貸してください」

「………まだか？」

「よい心がけだ。王が待てと言わずとも待つとは。褒美だ。竜殺しの一撃、その身に受けるがよい！」

「静止した世界の救世主。これで終わらせる！」チェンジ・ザ・ドライブ

ライダーは姿を変え宝具、いや対人奥義のライダーキックを発動させる。天高く舞い上がったライダーに英雄王が剣を降り下ろす。降り下ろされた剣から衝撃波が放たれる。

「堕ちろ、バルムンク！」

衝撃波がライダーに直撃しライダーは地に落ちた。その姿も元の人間の姿に戻っている。彼の足下には壊れたベルトも落ちている。

「くそっ………ここまでか」

「フハハハハハ。そうだ尻尾を巻いて逃げるがよい！」

「いえ、貴方も帰るべきです。結界がなくなっている」

「む、確かにここまでか。では我は去るとしよう。それではな！」

ライダーとギルガメッシュはそれぞれのバイクにまたがり学校を去っていった。しかし最後は英雄王に全てを持っていかれた感じがする。これではシロウの役に立てない。

「セイバー!!」

「シロウ、リン。すみませんライダーを逃がしてしまいました」

「セイバーも苦労したんじゃない？何せ相手は仮面ライダーなんだから」

「そ、それなんですが……」

「当たり前だろ遠坂。ライダーは強敵なんだ。でもそれを撃退したセイバーは流石だな」

「え、あのシロウ」

「それもそうね。あゝあ。私がセイバーを引き当てたかったな」

「ですから二人とも」

「あ、救急車きたみたいだ。真琴が呼んだって言ってたし」

「……すみませんシロウ、リン」

知らず知らずに期待が高まっていく。私はこれからこの二人の期待に答えなくてはいけない。覚悟を決めろ■■■■。願いを叶えるために。

学園決戦 結

グラウンドに響き渡るマシンガンの音とそれを弾く金属音。かれこれ5分間ずつとこの状況だ。

「飽きないねえあんたも。ずつとその調子で大丈夫か？」

「飽きる飽きないじゃなくて、これが僕のやり方だから」

「そうか？ 案外一直線に進みそうだけどなあんた」

「人をそうやって決めつけるのはよくないよ」

アサシンはマシンガンからナイフに装備を変えるとランサーに一直線に進んでいく。まるでさっきのランサーの言葉通りに、

交わる槍とナイフ。接近戦はランサーが有利と思われるが、

「(こいつ……どういう原理だ？ 俺の槍捌きについてくるとは) うおらあ!!」

「(流石克蘭の猛犬。イリヤが警戒するだけはある。でもあるときもランサーの敵ではなかった。ならば) そこだ」

「!? テメエ」

ランサーの一瞬、いやそんな隙は存在しなかったはずだ。しかしアサシンはランサーの槍を掴んだ。それもまるで分かっていたように。

「君はいつも槍の扱いが大雑把すぎる。だから簡単に止められる」

「おいおいスカサハの師匠にも言われたぜそんなこと。確か初めの頃だったか？」

「つまり、進歩してないと」

「んなことねえよ!!」

ランサーは槍を手放しアサシンに炎のパンチを叩き込む。ルーンの種類アンサズ。その力で拳に炎をまとわせて叩き込んだのだ。

「まあ師匠からはルーンも教わったしな。キャスターで召喚されてたら……まあ槍がねえとあれか」

「何だかんだでキャスターのときも槍を持って来そうだけどね君は」
「できりゃあいいんだけど、な!!」

槍を持っていないランサーは徒手空拳でアサシンを攻撃する。がアサシンもそれなりに格闘の心得はある。ランサーの攻撃を紙一重

で交わしていくアサシン。

「とつとと返せ！」

「……仕方ない。返してやる」

アサシンは、

「ついてこれたらね」

宝具を発動した。

「手加減はできませんね」

バゼットはそう言いながら天使の詩を破壊する。エンジェルリート今度は破壊されないように念入りに魔力を込めたのに。

「もう終わりですかイリヤスフィール」

「そんなわけないじゃない！」

今度はセラにあまり使うなって言われたアレをやる。バゼットだろがこれを食らえば消し炭になるわ。

「多元重奏飽和砲撃!!!」

空中に描いた魔方陣から魔力の塊を放つ。体が少し痛む。でも負けられない。

「ふう……せいやあ!!!」

でもバゼットはそれを打ち砕いた。硬化のルーンを刻んだ手袋をはめているだけなのに。文字どおり砕いてしまったのだ。

「……もういやあ……」

「今のは凄いですね。私も焦りました」

絶対嘘だよお……簡単に打ち砕いたじゃん。本当に人間バーサーカーだよ。もし英霊になってたら絶対引き当てたのに。絶対バーサーカーのクラスだろうけど。

「さて、私は子供だろうが手加減は……いえ、やっぱり少しは手加減しましょう。さっきのは使い魔みたいなものですから手加減はできませんでしたが」

「子供相手に本気で玩具を壊してるものよ貴女!!」

「何事も全力で。これがモットーです」

それが悪い方向に進んでいった結果がこれか……

「安心しなさい。骨は少し折れると思いますが、ルーンで何とかします」

「そんなのやだよお……」

靴に刻まれた硬化のルーンも発動して『本気バゼット』が誕生した。ああ、私もリズぐらい腕力があれば……いやまだよ。私には切り札がある。

「鬼が出るか蛇が出るか。いでよ異世界の私!」

「!? いったい何を……」

インストリアル
「夢幻召喚!!」

その瞬間私は光に包まれる。その身にまとうのは、

「魔法少女! プリズマ☆イリヤ!!」

そう、あつたかもしれない世界線の私。あり得た可能性の一つ。今回は魔法少女か……。前はロリブルマなんて変なものが出てきたけど……

「なんですかその魔術は」

「アインツベルンに伝わる伝説の秘技よ。アインツベルンの人間は皆出来る……。箒よ。お母様はやってなかったけど、お爺様は前に魔法少女になってたわ」

「お爺さんが……。魔法少女……。気持ち悪い」

「ええ、でもあれは凶悪な宝具よ。対腹筋宝具ね」

あの時のお爺様の顔は忘れられない。とんでもなく顔を赤くしていたから。

「まあいいでしょう。さあ続きです」

「いいわ。今一使い方が分からないけど。来るなら本気で来なさい!!」

この時言っではいけないことを言ってしまった。

「本気で? ……いいんですか?」

「いいわよ。かかってきなさい?」

バゼットが消えた。次の瞬きの後バゼットが現れた。更に次の瞬きの後、私は飛んでいた。

「ちっ！このやる!!」

ランサーは槍を取り戻した。しかしアサシンの宝具で追い詰められていた。ランサーでもアサシンの宝具のスピードにはついていけなかったのだ。

(こいつは面倒だな。ルーンで一带を焼き払うか？それともゲイ・ボルクで仕留めるか?)

しかしゲイ・ボルクとて万能ではない。突き刺す相手を捉えていないとその宝具は真価を発揮できない。もしその必要もなかったら……聖杯戦争は彼の取り合いだろう。

「こっちだ」

「……なるほど」

ランサーは目を閉じる。そして思い出す。あの時の師匠との特訓を……

◇

『馬鹿者。目で見てはダメだ。心の目で、心眼でみるのだ!』

『心眼だと?』

『そうだ。ぶっちやけ心眼のほうが見やすいだろう?』

『いやそんなことねえけど』

『まあ心眼を鍛えることで心身ともに更に成長するだろう。というわけに心眼を鍛えるぞ。まずはゲイ・ボルク一万本を交わしてみろ!はい!!』

『うわ、無理だろこんなああああああああああ!!!!』

◇

あの地獄に近い特訓を耐え抜いたランサーにはこの程度は余裕綽々と言うもの。なら何故最初からしなかったのか。それは……忘れていたからである。

「……!」

アサシンがランサーの頸動脈を確実に狙う。しかしランサーはそれをなんなくと交わした。勿論目を閉じた状態で。

「ふーん。やっぱり狙うところはいつも同じわけだ」

「どういう意味だ」

「べーつにー。ただテメエの癖は理解したってとこだ。まあ良くも悪くも暗殺者だな」

アサシンはランサーから距離をとる。しかしうまく距離がとれない。まるで自分の体が固まったように。

「まさか・・・氷のルーン」

「わかってんじゃねえか。ならこのあとも分かるよな？」

ランサーは朱槍をアサシンに差し向ける。魔力を集中させ狙いを定める。アサシンに交わす手段はない。

「その心臓、貫いけどわっ!？」

「?今のは・・・ランサーのマスターか？」

ランサーが宝具を解放しようとしたところにバゼットが飛んできてランサーを吹き飛ばした。

「自分から飛んできたはずもないが・・・」

「大丈夫アサシン」

「ああ、イリヤかってえ?どうしたんだいその格好は」

「いやーそのー・・・アハハ、ハア」

どうやらイリヤがバゼットを吹き飛ばしたようだ。経緯は分からないがとりあえずランサーを仕留めようとするが、

「・・・逃げられたか」

「たく。まさかお前が飛んできるとはな。でもまあお前を吹き飛ばすとは、やるなああの嬢ちゃん」

「・・・ん、あれ?私は・・・」

「よお、起きたか。今度はこっぴどくやられたな」

「むう・・・ならばリベンジです!勝つまでやりますよランサー!」

「ハハッ。お前はそうでなくちゃいけねえ!」

◇

「大丈夫かいイリヤ」

「うん、まだクラクラする」

「少し寝たらどうだい?結果がなくなってるからそろそろ警察やらがる来るだろう。どのみち今日はここまでだよ」

「そうね。出来ればランサーたちとは戦いたくないわ」
「同感だけど・・・じゃあ当面の敵は」
「いつも通り、アヴェンジャーのところよ。いつまた攻めて来るか分からないんだから」

◇

「救急車来たみたい」
「ああ。よし俺達も帰るか」
「分かったわ」

「・・・なあアーチャー」

「どうしたのマスター」

「俺は聖杯戦争を止めるって言ったよな」

「ええ、それがマスターの願いでしょ？」

「ああ。でもあのクリーザだけは、聖杯戦争を止めてもまた新しい厄介事を持ってきそうなんだ。だからクリーザだけは倒さなきゃいけない。そんな気がする」

「確かにね。あのマスターからは血の臭いしかなかったし。OK マスター。貴方のオーダーに従うわ」

「ありがとうアーチャー。よし帰るか！」

◇

「恥ずかしかった・・・」

「・・・因みにBBの意味は？」

「え？ブラック・・・ブロッサム・・・」

「黒桜か・・・」

「うん・・・」

「多分一生気づかないんじゃないか？」

「うん・・・」

「これからどうするつもりだ？」

「そうだね・・・えーと、アサシン陣営、とか？」

「アサシンか・・・分かった。次はそこを狙おう。因みに言っておくが、アサシン陣営は優勝候補だぞ」

「・・・先に言っよ・・・」

◇
「お手柄ねアーチャー」

「ほとんどは君がやっただろ。私は少し手伝っただけだ」

「いいえ、貴方が手伝ってくれたおかげなんだから。お手柄なのよ」

「そういうものか？」

「そうなの。ところで目下のところなんだけど」

「どこか狙うのか？」

「まずはライダー陣営ね。貴方も一度に戦ってるし。セイバーの話だとライダーの宝具は一つ減ったみたいよ。それにマスターもなんか気になるし」

「了解だマスター。当面はライダー陣営と」

◇

「こつぴどくやられたなアヴェンジャー」

「ふん。お前だつて一つストックが逝ったみたいじゃないか」

「ああ、その件だがな。実はもう一個減ってんだよ」

「なに？」

「多分あの小僧が最初にした……宝具か？あれが効いたみたいでな」

「つまりあと4つか」

「まああの小僧を仕留めれば、おまけもついてきそうだしな。だがまあ、まずはアサシン陣営だ。アレを手に入れてからアーチャー陣営を狙う」

「お前も執着しているな」

「お前程じゃないさ」

◇

「シロウ、お話が」

「どうしたセイバー？」

「はい。当面の間シロウは学校がないと思います」

「まあ確かに、あんなに暴れたら学校だつて休校になるさ」

「それとシロウはBBちゃんに顔がバレています。それにあのしやべり方だと、恐らくシロウの友人かと」

「俺の友達にあんなのはいないけど」

「ですのでここに攻めいつてくる可能性もあります。シロウも警戒を」

「ああ、分かっているよセイバー」

「でしたらいいのですが。それともう一つ」

「なんだ？まだあるのか？」

「・・・・・・8騎目のサーヴァントが現れました」

休息　くどある喫茶店にてく

ここはバゼットの部屋。そこにはパソコンに何やら入力しているバゼットがいる。カタカタと文字を打つ音が聞こえてくる。ついでにバゼットのお腹の音も。

「小腹が空きましたね。時間は午後一時。お昼もまだでしたね」真琴君は何か食べたのかしら」

部屋を出てリビングを指す。だいたいいつも皆ここにいる。

「あれ、バゼットさん仕事終わったの？」

「ええ。少し落ち着きました。なのでお昼を頂こうと」

「ああ、そういえば食べてなかったな。今から作るにも時間かかるし。どっか食べに行きますっ。」

「外食・・・牛丼ですか」

「あのさ、外食イコール牛丼はやめようか？たまにはオシャレなお店とか」

「むう、いいじゃないですか牛丼」

「ダメです。もう飽きました。そうだな・・・あ、ランサーとアーチャーのバイト先は？」

ランサーとアーチャーはバイトをしていた。ランサーは召喚された次の日にはいくつかのバイトに入っていたらしい。アーチャーは昨日の帰り道にスカウトされたらしい。

「確かアーネンエルベと言いましたね。いいでしょうたまには」というわけで、

◇

「来てみたわけだが」

「思った以上に喫茶店ですね」

喫茶店などほぼ経験がない二人。どこか別の国に放り投げられた犬レベルだ。とりあえず店員に誘導される。しかしその店員は、

「ご注文が決まりましたからお知らせくださいニャ」

（猫だ）

（猫だ）

猫だった。しかし何故かこれが『当たり前』と頭が認識してしまい、次第に気にならなかつた。

「なんでしよう・・・お茶なのは分かるのですが」

「あーここまで来てカレーは食いたくないし」

「だったらオススメ紹介しようかマスター？」

真琴は「？誰だ」と顔をメニューから離す。そこにはメイド服姿のアーチャーが立っていた。

「・・・なんか新鮮味がない」

「マスターが設定したんじゃない」

「いやそうだけど・・・あ、オススメって？」

「オススメはね、この『アーネンエルベ特製 ネコネコハンバーグ』よ。あとこれドリンクバーのチケツト」

「んじやそれで。あとドリンクバー二つ」

「かしこまりました〜どうぞアーネンエルベ特製ネコネコハンバーグです！」

「はやつ!!」

どう考えても作りおきがあるんじゃないかと疑問を浮かべる二人に、満面の笑みで『それ以上は詮索するな』と言いたげなアーチャー。仕方なくそれを食べる二人であった。

私の名はセイバーである。真名はまだ言えない。私は訳あって今ここアーネンエルベにてバイトをしている。何故このようになったのか。それは昨日の帰り道まで遡る。

◇

「是非！是非うちで働いてくださいニャ!!」

「働けと言われましても。私にはシロウを守るという義務が」

「いいじゃないかセイバー。働いてみたら？」

「な、シロウ！それでは貴方を守ることができない！」

「大丈夫だよセイバー。家には遠坂もアーチャーもいるんだから」

「し、しかし！」

「あーそれなら、そのボーイも一緒に働くつてのはどうっすか？」

「え、俺？」

「それがいい！賃金を稼げると同時にシロウを護衛できる！そうしましようシロウ。いえそうするべきです！」

◇

回想終わり。しかしシロウは別のバイトが入っておりこちらにはこれないという。これではなんのために働いているというのだ！

「すいませーん」

「あ、はい！ただいま！」

しかし私は働く身。お客様は神様とテレビで見ました。ならば私は神様のために働くとしよう。私は神より位が低いのだから。いや聖槍を持ち続けたら・・・

「おや、リンではないですか」

「あらセイバー。働けて衛宮君に言われた？」

「いえ、この店主に働いてほしいと」

「成る程ね。確かにセイバーの容姿なら欲しいわね」

どういう意味だろうか。

「ご注文は」

「とりあえずコーヒー」

「お食事は？」

「ご飯食べてきたし」

「それではいざというときに動けませんよ!!」

「はあ!?じゃあプリン」

「それだけで足りるのですか!!」

「ああもう!!じゃあホットケーキ!!」

「シロップはかけますか？」

「.....」

しかし私は思う。この人間は何をしに来ているのか。サラリーマンはずっと喋り通し、チャラチャラした学生はマナーが悪い。アヴェンジャーは途中でジュースを嘔き出すし、ライダーにいたっては全然食事を頼まない。私の生きた時代なら大量のマッシュポテトを文句言わずに食べたというのに。むしろ喜んで食べていた。特に湖の

騎士が。泣きながら。

「あ、いらつしやいま「フフフフハハハハハハ!!」来てやったぞセイバー!まさかここでバイトをしているとはな!!」お帰りください」

「セイバーさん、セイバーさん!お客さんだから」

「ここではつと我にかえる。そうだ、例えクソみたいな黄金の王が来店しても接客をしなくてはいけない。」

「ご注文だ。下らん酒をだそうものなら店ごと吹き飛ばすぞ」

「ここは喫茶店です」

「知っておる。わざとといったのだ、笑うがいいハハハハハハ」

「ん?なんだ金ピカがいるじゃねえか」

「おおランサー!この時ばかりは貴方が救世主に見えます!」

「はっ、狗はお呼びでないわ。さっさと日替わりランチを持ってこなか!」

「あーはいはい。ただいまお持ちしますよー」

「あとセイバー、スマイル。ニツ」

「これほどにまでぎこちないスマイルで返したのは初めてでした。」

「セイバーも大変なんだな」

「しかしあの英雄王とセイバー。何やら知り合いみたいですが」

「みたいじゃねえ。ありや知り合いだ」

「ランサーがおかわりのコーヒーを淹れながら答える。」

「ちよつと暇だからお前のパソコン使って調べてみたが、第四次聖杯戦争で英雄王はアーチャーとして参戦してたみたいだな。マスターは遠坂の嬢ちゃんの親父。セイバーの方はアインツベルンの人間らしいが」

「同じサーヴァントが連続で聖杯戦争に現れるのですか?」

「あり得なくはない。サーヴァントだって聖杯が欲しいからな。死ぬほど欲しいならそれこそ連続で来るかもな」

「しかしそれだとあのアーチャーは何者なのか。これは連続で聖杯戦争に参加しているレベルじゃない。もうすでに人数オーバーなのに。」

「おつとセイバーが暴れそうだな。おいアーチャー。止めにいくぞ」
英雄王の席をみると不可視の剣を持ったであろうセイバーが英雄王を殺しにかかっている。それをアーチャーとランサーが必死に止め、英雄王が高笑いするというなんともカオスな空間へと変貌していた。

夜に聞いた話だと英雄王はセイバーに『テイクアウトはお前だ!!』と言ったららしい。結局テイクアウトはアーネンエルベ特製ケーキにしたらしいが。

「さて、そろそろ失礼しますか」

「そうだな。また来るよアーチャー」

「出来ればこれを止めてから帰ってほしいな」

「じゃ」

「この人でなし!!」

お会計を済ませ店を出る。その瞬間にすれ違う二人の女性。一人は金髪で赤い瞳の女性。もう一人は着物に赤い革ジャンを身にまとった女性。どちらも間違いなく美人だ。そして何か恐いものを感じる。

「どうかしましたか真琴君」

「……………いや。あの二人がマスターじゃなくて良かったなつて」

「??」

分かるのは俺だけでいい。あの二人とはきつと二度と会うことはないのだろうか。

「いやー助かったニヤ。いきなりバイトが二人も休んで大変だったニヤ」

「いいのよ。出来ればもつとやりたかったわ」

「はい。英雄王さえ来なければ楽しい一日になったのですが」

「ハハッ。いやそれにしても…………お前ら二人、どっか似てるんだよな」

「私たちが?」

「あ、メイド服が似合うとか？」

「それもあるが・・・もっところ、なんていうかな」

「おお、もしかして。ゴニヨゴニヨゴニヨ」

「ああそれだそれ！お前ら二人共胸が」

その日から暫くアーネンエルベにランサーの姿はなかった。

復讐者は殺人鬼となりて

「あれ？」

今日の朝ごはんは久しぶりにトーストでもしようと思ったのにパンがない。仕方なく結局ご飯になる。でもパンが全部なくなるなんて。こんなことする犯人は、

「セイバー」

「どうかしましたかシロウ」

庭で竹刀で素振りしていたセイバーに聞いてみる。しかしセイバーは知らないという。嘘をついているようにも見えないし。となると……

「おーい遠坂ー」

「……」

「は、入るぞ？」

遠坂の部屋に声をかける。返事はない。大丈夫、一応は声をかけたんだ。怒られても問題ない。

「ってまだ寝てたのか」

「……ん、ふああ……眠い、眠い、眠い。ていうかもうね「いや起きろよ」

遠坂を起こし朝食の準備に取りかかる。そしていつもご飯の時間になるとセイバーが台所にやって来て、

「今日の朝ごはんはなんですか？」

と聞いてくる。そして俺が朝ごはんの内容を答えるとセイバーは食器を並べてくれる。俺の仕事がへって少し助かる。

「ふああ。おはよう衛宮君、セイバー」

「おはようございますリン。食事が出来てますよ」

「あ、なあ遠坂。パン知らないか？全部無くなってる」

「パン？ああそれね。今日のために必要だからもらったわ」

「今日のため？」

「そうよ。衛宮君、セイバー。今日は出かけるわよ！」

◇

「あんまり遅くならないようにね」

藤ねえに言われる。多分一番遅くなるのは藤ねえなんだろうけど。藤ねえは「アートの」とか言ってるし。どうせ一番遅くなる。

「で、どこ行くんだ」

「適当に新都をブラブラするのよ。あ、バス来た」

バスに乗り込み、揺られること20分。到着したのは新都のショッピングモール。俺は特にプランがないので全て遠坂に任せっきりになってしまう。でもまあ遠坂が計画したのだから、遠坂に任せよう。

「あらセイバー。メガネ似合うのね！」

「そうですかリン。私はなんだか、邪魔ですね」

「オシヤレでかける人もいるのよ」

「リンも似合ってますよ。私より可愛らしい」

「ありがとセイバー。衛宮君にはこれかしらね？」

「………色物メガネか」

メガネショップでいろんなメガネをかける遠坂とセイバー。うん、二人とも似合ってるな。

「セイバーにはこのコートもいいわね。セイバーはどっちがいい？」

「そうですね……この白いコートがいいです」

「確かに、セイバーは白が似合うしね。衛宮君もそう思うでしょ？」

「ああ、そうだな」

服屋でセイバーを着せ替え人形の如く服を着せ替えていく遠坂。セイバーも嫌がってはいないそうだ。あれ？着せ替え人形？神代の魔女？うつ……頭が。

「ほっ！」

遠坂三本目のホームラン。

「せいっ！」

俺二本目のホームラン。

「やあっ！」「せいっ！」「はあっ！」

セイバー十本目の空振り。それになんだか腕がプルプル震えてる。「くっ、自分の武器でないだけでここまで使いにくいとは」

「ね、ねえセイバー？向こうでサッカー出来るからそっち行きましょ？」

「そ、そうだぞセイバー。たかがバツテングだ。誰にだって打てないときはある。俺も最初は打てなかったし」

「いえ、私は、負けません!!」

この後無茶苦茶バツテングした。

◇

「セイバーが負けず嫌いとは」

「スミマセン。つい我を忘れました」

公園にてベンチに座り休む俺と遠坂。セイバーはあの後驚くほどに上達し片手でホームランを出すほどだった。そしてそこにたどり着くまでにいくつものボールを犠牲にした。

「まあいいわ。ご飯にしましょ」

遠坂が昼食を出してくる。中身はサンドイッチ。成る程な。だからパンがなかったのか。セイバーの目が輝いている。

「い、頂いてもよろしいのですかリン！」

「ええ食べなさいセイバ」ではいただきます」早いわねこの子は」

「悪いな遠坂。昼食まで用意してくれて」

「いいのよこれぐらい」

サンドイッチを一つ食べる。うんおいしい。遠坂は中華が多いけどこういうのも作れるんだな。

「・・・ねえ衛宮君、楽しんでる？」

「え？どうした遠坂」

「だって土郎ったら、いろんなところ連れていっても素っ気ない返事しかしないもの。そんなので楽しいの？」

「そんなことない。俺だって楽しんでるぞ」

確かに聖杯戦争真っ只中でこうして遊びに出掛けているのは俺達ぐらいだ。確かに昼間から戦いはないけど、それでも警戒はしなくてはいいけない。

「どうせ聖杯戦争のことでも考えてるんでしょ。それで自分達が狙われてるんじゃないかって？大丈夫よ衛宮君。アーチャーが守ってく

れてるもの」

「ええ、アーチャーなら任せられます」

「……」

二人はアーチャーを信用しているみたいだけど、俺は中々信用できない。なんか自分を見ているみたいで。

その後も色々と店をまわり午後4時。時間も時間なので帰ることにした。少しずつ春になっているとはいえ冬は暗くなるのが早い。藤ねえを心配させないためにも早く帰らないとな。

「……今日はありがとな遠坂」

「なんか言った衛宮君？」

「いや、なんでもない」

こうして楽しい時間は過ぎていった。そして、

◇

バスが走ること数分。違和感はすぐにやって来た。

「!?これは」

深山町と新都を繋ぐ冬木大橋が異様な空気に包まれていた。しかもバスは橋の途中で止まり、乗客はおろか運転手までもが姿を消していた。

「間違いなくサーヴァントね」

「そのようだな凜。やれやれ着いてきて正解だった」

「何処にいるか分かりますかアーチャー」

「ああ、目の前にな」

俺達の目の前にはアヴェンジャーと男。恐らくアヴェンジャーのマスターだろう。

「俺に会うのは初めてか？自己紹介しとくが俺の名はクリーザ。アヴェンジャーのマスターだ」

クリーザはタバコを吸いながらこつちに歩いてくる。俺も遠坂も警戒は解かない。しかしクリーザは警戒を全然していない。その表情は余裕そのものだ。

「この結界は貴方ね」

「おう、神代の魔女を参考にしたんだ。今回聖杯戦争に参加しようと

したマスターをぶつ殺して、それからそいつの持ってた触媒を加工して……まあ割合だ」

「案外適当なのね。それだと」

クリーザとアヴェンジャーの死角から赤い矢が飛んでくる。そしてアーチャーの手には黒い弓。

「あつという間に死ぬわよ！」

「かもな。アヴェンジャー」

「自分の命が一つ減っても問題ないだろうが」

しかしアヴェンジャーとクリーザは気づいていた。アヴェンジャーは手にしたナイフで赤い矢を弾く。弾いた矢は地面に突き刺さり、地面が破れる。間違いなく共闘しないと勝てない。それは俺達四人が同時に感じ取ったことだ。

—————

それからのセイバーとアーチャーの行動は早かった。すぐにアヴェンジャーの懐に入り込むと連続で攻撃を叩き込んでいく。いくらアヴェンジャーが強力なサーヴァントとはいえ三騎士の内二人を相手にしているため、少しキツそうだ。

「アーチャー！ 援護を頼みます！」

「やれやれ、君はいつもこうだ」

セイバーが前衛、アーチャーが後衛で攻撃を再開する。アーチャーの弓からは数十のホーミングアローが放たれる。アヴェンジャーはそれら全てを交わし、撃ち落とす。しかし隙は出来てしまう。そしてその一瞬の隙を突かれセイバーに攻撃を許してしまう。

「はあっ！」

「ぐっ（やはり最優のサーヴァントは伊達ではないか）」

「そこっ！」

セイバーに足払いをされ体制を崩す。すかさずセイバーは追撃を仕掛けるがアヴェンジャーのナイフに阻まれる。しかし倒れゆく体は元には戻せず、アヴェンジャーはセイバーに地面に叩き付けられる形に倒れこんだ。

「どけセイバー！」

そこを狙うアーチャー。標的が止まっている今がチャンスだろう。さっきの倍の数矢を打ち込んでいく。

「あらあら、またやられてんのかアヴェンジャー?」

「あら、あんた自分のサーヴァントがやられてるのになにもしないの?」

「まあな。俺はサーヴァントには勝てない。だからと言ってテメエらマスターを殺すのもなかなかなあ」

「とか言ってるけどな、俺の目には『早く殺したい』って願望が見えてるぜ」

「ハハハハハ。正解だ」

そしてマスター同士の間も始まる。しかしマスター同士の間はワンサイドゲームだった。それほどにまでクリーザは強かったのだ。

確かに士郎と凜には部が悪い。士郎はまだ投影が安定せず、クリーザの手刀とぶつかるだけで砕けてしまう。凜も自身の得意とする宝石魔術の宝石を持ち合わせていないため、ほとんどをガンドで対抗しなくてはいけない。

「ぐはっ!」「きゃー!」

「おいおいこれだけか?まだアーチャーのマスターの小僧の方が強かったぞ?」

「アーチャーのマスター?・・・真琴か!」

「ああ、なかなか面白かったぜ?アサシンを潰したらあの小僧も殺してやるよ」

「なん・・・だと・・・」

「心配するな。向こうに逝くのが早いか遅いかだけだ」

クリーザは凜の頭を掴むと、

「やめろ・・・やめろオオ!!!」

地面に叩きつけた。ピクリとも動かない凜。まだ微かに呼吸があることに気づいたクリーザはもう一度地面に叩きつけようとする。しかし、

「その汚い手を離せ」

アーチャーがクリーザの腕を切り凜を救出した。今だセイバーとアヴェンジャーが戦闘しているなか、アーチャーは自分のマスターの身を優先したのだ。しかしこれがセイバーにとって致命傷になった。セイバーは焦っていた。自分のマスターが殺されそうなきに自分は今だサーヴァントを倒せていない。そしてその焦りで、

「風王鉄槌!!」

宝具を発動する。しかし焦っているセイバーの宝具はアヴェンジャーにとって最高のエサだった。

「その焦りが、お前の敗因だ」

アヴェンジャーはセイバーに拳銃を向ける。迫る風の鉄槌に怯むことなく、宝具を発動する。

「復讐者は殺人鬼となりて」

◇

彼女の家族は一人の殺人鬼に殺された。かの有名な殺人鬼。そうジャック・ザ・リツパーだ。

彼女は激しく悲しんだ。しかし周りの人間はこう言った。

『あの殺人鬼なら仕方ない。運がなかったんだ』

と。彼女はそれに疑問と怒りを覚えた。そして彼女は復讐者となった。

それから彼女はジャックを探し続けた。そして見つけた。ジャックを。しかし奴は既に捕まっていた。当然ながら死刑だった。彼女の復讐はそこで終わった。そう彼女自身も思っていた。

でもジャックはまた現れた。今度は彼女の友人の家族が殺された。彼女は友人の悲しむ姿を見て決心した。

『私が・・・殺された皆の復讐者になろう』

と。それから彼女は2代目ジャックを捜した。そして見つけた。初代よりも雑な殺し方が仇となったのだ。そして彼女は2代目ジャックを殺した。友人の家族と同じ殺し方で。

ジャックが死んだ後、彼女はジャックの心臓にナイフを突き立てた。死体の側に手紙を添えて。手紙には、

『我が名はジャック・ザ・リツパー。復讐者なり』

飛び込んだ。アヴェンジャーは橋の上から探すが川は流れが早く見
つからない。

「いやーまさかセイバーを倒すとはな」

「奴は焦りすぎた。まるで私が初めて殺したジャックみたいに」

そして結界が消えると同時に、アヴェンジャーとクリーザの姿も消
え失せた。

サーヴァントとマスター その2

狩野真琴

本作の主人公。アーチャーのマスター。現時点ではランサー陣営と同盟を組む。聖杯戦争以前の問題としてクリーザという危険人物を無視できないために、まずはクリーザを倒すと決意する。

戦闘においては英雄の力を駆使する。真琴自身が特訓し縮地は使える。また剣術もだいたい扱える。

ラグロンドメント：ツリ
復剣狂・三段突き

真琴の合体宝具の一つ。炎と雷を纏わせた剣でぶっさすという簡単な技。クリーザの命を一つ削るほどの威力。

アーチャー

真名 不明

筋力 C 耐久 C+

敏捷 A 魔力 B

幸運 B+ 宝具 C+

対魔力 C 単独行動 A

真琴のサーヴァント。相変わらずの真名不明サーヴァント。矢と弓を二刀流のように扱うのは彼女だけでいい。

宝具は一つだけ。詳細は不明。しかし対人奥義がある。

アケニ・ガンデイヴァ
炎神の咆哮

アーチャーの切り札の一つ。本来別のサーヴァントの宝具なのだが、何故アーチャーが使えるかは現時点では不明である。

フレアスカー・バンカーバスター
太陽面爆発に比類する女子力の発露

アーチャーの対人奥義。これも別のサーヴァントが得意とする奥義だが、こちらは『アーチャーの対人奥義』として存在する。

ジャンヌ・オルタ

真琴と一番話す英雄。基本的には昼寝が好きであまり口は出してくれないが、ここぞというときは的確なアドバイスなどをおくる。勝手

に真琴の体を使って『憑依現界』してくる。

基本戦力は剣と炎。

沖田総司

真琴の縮地先生。基本的に穏やかで団子が好きな人。戦闘においては自身は剣を貸すだけでなにもしない。

デイルムツド・オデイナ

基本ツツコミの人。しかし何故か口調が少々キツイ。戦闘においてはゲイ・ジャルグとゲイ・ボウを真琴に貸している。真琴はゲイ・ジャルグだけで充分らしいが。

坂田金時

ゴールデンライダーその人である。戦闘にはまだ参加していないが真琴にベアー号を貸したりと気前がいい。

エレナ・ブラヴァツキー

真琴の中の英雄のママ。ジャックの遊び相手である。あまり表には出ないが、戦闘にはマハトマビームなどを真琴に教えている。人間バーサーカーには通用しなかったが。

ジャック・ザ・リッパ

ロリアサシン。バラバラにするのが楽しいらしい。真琴にはナイフを貸している。

フランケンシュタイン

通称フラン。何を喋っているかあまり分からないが可愛いからOK、とは真琴の弁。雷技はかなり真琴が使用している。真琴のお気に入り。

衛宮士郎

原作主人公。セイバーのマスター。凜と同盟を組んだ。しかしアヴェンジャーにセイバーを倒されてしまったが？

戦闘は物を強化するのが基本。投影は今だ練習中でその気になれば桜でも破壊できる。

セイバー

真名 不明

筋力 B 耐久 C

敏捷 C 魔力 B

幸運 A 宝具 C

対魔力 A 騎乗 B

士郎のサーヴァント。原作より士郎の家事を手伝っている。しかしアヴェンジャーに倒されてしまった最初の脱落者である。

宝具は風王結界とアレとアレの三つ。三つ目のアレは現在所持していない。

インビシブル・エア
風王結界

剣に風を纏わせて見えなくするもの。不可視の剣の完成である。この風を攻撃用に発射するのが『ストライク・エア風王鉄槌』である。

遠坂凜

アーチャーのマスター。今回の話ではあまり活躍できていない。しかしそれでも戦闘力はかなりのもので、宝具抜きなら真琴を倒せるレベル。

アーチャー

真名 不明

筋力 D 耐久 C

敏捷 C 魔力 B

幸運 E 宝具 ?

対魔力 D 単独行動 B

凜のサーヴァント。順番的には最初のアーチャーだが真琴のアーチャーには『嘘つきさん』と呼ばれているとかいないとか。はたして真相は？

戦闘では投影した武器で戦う。そして切り札として投影した武器の魔力を爆発させる『ブローケン・リアンタズム壊れた幻想』を使う。

宝具はいつものアレと、新しく追加されもうひとつ存在する。

バゼット・フラガ・マクレミッツ

ランサーのマスター。そして人間バーサーカー。その拳は様々なマスターに炸裂していった。恐らく彼女魔術抜きなら最強。それにしてもダメツトは直らない。

ランサー

真名 不明

筋力 B 耐久 A

敏捷 A 魔力 C

幸運 D 宝具 B

対魔力 C 神性 B

バゼットのサーヴァント。いつもの聖杯戦争の常連さんの兄貴。色々あり得ない事態が多発するこの聖杯戦争を楽しんでいる。今のところのお気に入り。相手は真琴のアーチャー。

宝具はいつもの
刺し穿つ死棘の槍^{ゲイボルク}

因果逆転の呪いの槍。当たれば最強。しかし当たらない。ていうか当てさしてくれない。しかし獣相手には最強である。使い方『対人』か『対軍』になる。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

アサシンのマスター。皆大好きイリヤ。魔術関係なら間違いない最強クラス。砲撃魔術などは基本攻撃で、切り札として『夢幻召喚』を使い、別世界の自分の力を使える。

今まで『ロリブルマ』と『プリズマ☆イリヤ』の力を使った。またサーヴァントにクラスを追加することも。

アサシン

真名 不明

筋力 D 耐久 C

敏捷 A+ 魔力 C

幸運 E 宝具 B++

気配遮断 A+ 単独行動 A

赤いフードを被ったイリヤのサーヴァント。その顔は包帯でよくわからない。その生前は聖杯戦争に参加したりとかなり直近の英雄と分かる。バーサークアサシンになると口調が荒々しくなり筋力がA+になる。

宝具はかつこいいアレ。

時^クのある間^ロに薔薇^スを摘^{ロー}め^ズ

超高速で相手に攻撃を加えていく。そのスピードは生前よりも遙かに速くなっており、セイバーとアーチャーを翻弄した。

クリーザ

アヴェンジャーのマスター。恐らく聖杯戦争最恐。色々な英霊を召喚する触媒を改造して、それを武器として扱う。そして身体能力も高い。更に六連男装があるため命のストックが六つある。今は真琴に二つ減らされた。

男装とあるのでクリーザは女です、ハイ。

アヴェンジャー

真名 復讐者ジャック・ザ・リツパー

筋力 C 耐久 C

敏捷 A+ 魔力 D

幸運 D 宝具 B+

気配遮断 B 復讐者 A

クリーザのサーヴァント。作者のお気に入り。戦力として拳銃とナイフを使う。因みに容姿は成長したロリジャック。

真名は復讐者ジャック。殺された人の復讐者として殺人を続けた。その殺害方法は殺された人と同じ殺しかたをする。

宝具は一つ。別のクラスで召喚された場合は宝具も変更する。復讐者は殺人鬼になりて

セイバーを倒した宝具。殺人鬼を被害者と同じ殺しかたで殺す。という部分が宝具となった。

宝具になることで『同じ殺しかた』が『同じ宝具』になり、宝具を相殺するのに特化している。

しかし、ヘラクレスの『十二の試練』などの攻撃宝具ではないものは殺せない。つまりヘラクレスを召喚したら士郎は負けなかった。

間桐桜

ライダーのマスター。士郎や凜にはマスターであることは隠してある。まあ気づくと思うが。戦闘の際は『BBちゃん』という専用の礼装を使う。紙袋は礼装ではない。

ライダー

真名 仮面ライダー？

筋力 A 耐久 A

敏捷 EX 魔力 E

幸運 D 宝具 EX

対魔力 D 騎乗 A

桜のサーヴァント。あまり感情を表に出さない。しかしその瞳の奥には強い信念が見える。しかしうっかりや間違いで桜に多々怒られる。

宝具は三つ。『変身』する宝具。
静止した世界の救世主

仮面ライダープロトドライブに変身する宝具。プロトなのであまり強くはないが、英霊になったことでサーヴァント相手にはかなり強い。

間違いを正すための死神

魔進チエイサーに変身する宝具。超重加速を使うことで自分の力をフィールドを作ることが可能。更に三つの装備のクロー、鞭、弓は強力な武器だ。

ギルガメツシュ

筋力 B 耐久 C

敏捷 C 魔力 B

幸運 A 宝具 EX

対魔力 E 単独行動 A+

黄金のサーヴァント。前回の聖杯戦争からずっと現界しているらしい。戦闘力はこの聖杯戦争中最強クラス。

性格は十年間でかなり変化しており、相手のことを『雑種』とあまり言わなくなった。

宝具は王の財宝と大津波と天地乖離するやつ。

王の財宝

無数の宝具を納めている宝物庫とそれに繋がる鍵剣。だいたいなんでも入っているがそれにも限度はある。ギルガメツシュは基本遠距離からバンバン撃ちまくるが、時々接近戦もする。

桜と桜

「迎えに来たぞ桜」

「ありがとうライダー」

もう時刻は午後五時を過ぎている。最近直ったキッチンでまた料理を作らなくてはいけない。兄さんもお爺様も待っているから。

「それにしても大変だな。学校はなくとも部活動は続けるとは」

「でも場所が遠いからライダーに送り迎えしてもらえないんだけどね」

今現在ここは冬木の総合体育館。新都にあるからそれなりに家から遠い。仕方なくライダーに頼むしかない。

「あ、ライダー。夕飯の材料買うから」

「いつものところでいいのか？」

「うん。それと先輩の家にも行くから」

先輩の家に昨日の夜伺ったら、あまり元気がなかった。それどころかどこか辛そうで悲しそうで。

「先輩、どうしたら元気になるんだろ」

「しばらく間を開けることだ。そうすればすぐに戻ってくる」

「でも話ぐらいは聞いてあげたほうが」

「その結果、辛い出来事を思い出させる形になるぞ？」

確かにライダーの言う通りだ。でも私に何も出来ないとなる
と……

◇

「あら桜じゃない。どうしたの？」

「えっと、コレ」

「ああ、夕飯の。ありがとね。衛宮君すっかり落ち込んでるから」

「何か理由が？」

「うん、まあね……また時が来たら話すわ。今日はありがとね」
—————

「なんて言われた、って話聞いているのライダー!？」

「ああ、キッチンと聞いている。ようは門前払いされたのだろう？」

「うう、事実だけど・・・」

家に帰ってライダーに報告する。ライダーは何か武器を作っている。最近ずつと何か作ってるけど。

「ところでライダー。何作ってるの？」

「これか？お前専用の戦闘礼装だ。あのBB学生服ちゃんではこつちが不安でな」

確かにそうだけど。あれは兄さんが通販で買ったものだし、わざわざプレゼントしてくれたものだし、使わないのは勿体ないし、私も気に入ってるし。

「ってライダー？その材料ってどこから？」

「少し前にエインズワースという家族の娘を助けたことがあってな。そこから縁があつて、いろいろと融通がきくんだ」

「つまりそのお家族に買ってもらうってこと？」

「そういうことだな」

「・・・このおバカ!!」

グーでライダーの頭を殴る。ライダーは痛がる様子もなく、むしろ私の手が痛い。

「たとえば人様を助けたからって、そこに漬け込んで色々を買ってもらうのは許しません！今すぐお金を返してきなさい！」

「待て桜。俺には金がない」

「だったらバイトでもしてお金を貯めなさい！先輩だって、たまにラッサーのサーヴァントもバイトしてたよ？最近は見ないけど」

アーネンエルベでバイトしてたのに。少し前から見なくなつた。

「それにこれは向こうから『貰ってくれ』と言われて俺が貰つたものだ。どうも曰く付きらしくてな」

「え？そんなもの私の武器にしようとしたの？」

「心配するな。徐霊はしてある」

「そういう問題じゃないでしょ！」

「とにかく、もうこれは俺と桜の物だ。それにこいつで最後だ・・・ほら、完成したぞ」

渡されたのは銀色の槍。なんか誰かの足に付いてそうな、そんな感

じの槍。

「パラディオン。アテナの槍らしいが俺も詳しいことは知らん」

「なんでよく分からないのに作ったの!？」

「説明書通りに作るのが人間のルールではないのか？」

そう言つて説明書を渡してくる。うわ全部外国語だ。英語? イタリア語? イギリス語?

「とりあえず、それをもって明日アインツベルンの城に攻めこむ。準備しておけ」

「ええ!? 急すぎるよライダー! 明日は普通に部活が」

「ふむ、ならば明後日だ。明後日は予定をいれるな。いいな?」

鬼気迫るライダーの表情の前では、うんと言わざるをえない。いきなり過ぎるよライダー。

「……………マジで?」

「マジよマスター。セイバーが脱落したわ」

朝起きていきなりセイバーが脱落したと、アーチャーは情報を掴むのがはやいねえ。しかしセイバーが最初に落ちるとは。

「最初はアサシンぐらいかと」

「確かに、技量とか含めたらきつとアサシンが最初に脱落したでしょうね。でもねマスターが強い。マスターが優秀ならどんな雑魚サーヴァントでも最強になれるのよ」

「俺は優秀?」

「……………下の中ね」

「泣きそう」

となると衛宮はもう聖杯戦争には参加しないのか? いや衛宮にはサーヴァントと張り合う程の力はないし、それに参加する理由がない。どちらかという俺と願いはほぼ同じなんだから参加する理由は、

「いや、衛宮はきつと諦めない。ルールなしの喧嘩なら負けなしだしな。どうせ一人でも参加してくるぞ」

「でもちよつと覗いてきたけど、そうとうやられてるわね。精神が」

「つまり？」

「暫くは参加できないわね。それに参加してもアレじゃあつという間に潰される。精神の問題じゃなくて、力の問題で」

確かに。衛宮には俺みたいに英雄の力を借りるなんてことは出来ない。むしろ俺がおかしいんだ。こんなの普通じゃない。

「まあ今後のことはバゼットと話すことね」

「まあそうだな。先に行つててくれ」

アーチャーを先に部屋から出しジャン又たちに話しかける。

(さてこれからどうするかね)

《どうするもなにも、あんたはやるしかないのよ》

《そうですね。我々は力を貸すことぐらいしかできませんし。ジャン

又殿のように憑依現界も出来ませんし》

(え？出来ないの？)

《そうなんだよ大将！折角ベアー号にリアルで乗れると思つたのによ！》

《私も探したい本があつたのに。探しにもいけないわ》

《バラバラにできないね》

《………》

(皆やりたいことあるんだな……あれ？沖田さんは？)

《……それ、聞いちやう？》

あれ？もしかして地雷踏んじやつた？なんか不味いのか？

《消えたわ。菊一文字を残してね》

(………は？)

《言つておくわ。私たちはね、サーヴァントが脱落する度に……消えていくのよ》

(………は？)

《つまりセイバーが脱落したので沖田殿が消えました》

(………は？)

《つまり、ランサーはデイルムッド、ライダーは金太郎、アサシンはジャック、アヴェンジャーは私。それぞれ脱落する度に消えていくわ。エレナとフランは知らないけど》

(そんな・・・じゃあどうすんだよ！これからの聖杯戦争！)

《それは貴方が考えなさい。どのみち貴方が戦わなくても他の奴が消えれば私たちも消える。最終的には遅かれ早かれ消えるのよ私達。問題は、あんたが戦うか戦わないかよ》

(・・・そんなの、戦うさ。それは分かっている。でもさ、こうやってお前たちと話しているのが当たり前になってき、なんか・・・変な感じだよな)

《・・・そうよ、変よ貴方。少し前まで私たちはいなかった。聖杯戦争が終わればその生活に戻るだけ》

(・・・そうだよな。どのみち消えるなら、派手にやって消えていく方が、お前たちのためにはいいよな)

《わかってんじやん大将！》

(覚悟は決まった。俺でいいなら、これからも力を貸してくれ)

《お任せあれ！》

《よくつてよ！》

《ウ・・・ン！》

《うん、わかった！》

《OK大将！》

《そうと決まれば、早速やるわよ真琴》

(ああ、沖田さんも一緒にな)

机の上に置かれた菊一文字と新撰組の羽織り。文字は違うが俺の名前つきだ。さーて、まずは目の前の障害、クリーザをどうにかしないとな。

「どうだ桜」

「嫌、却下します」

「どうしてだ？」

「そんなの！・・・は、破廉恥すぎるよ」

次の日、部活が終わって家に帰った時、ライダーにいきなり見せられた物。それは魔術礼装、なのだが・・・

「だいたいなんでボディコンなの!？」

「昔流行ったらしいじゃないか。それにお前に親近感がある」

「私の前世はボディコン世代!？」

紫のボディコン。それは明らかに丈が足りていない。パンツが見えるレベルだ。そんなの絶対着ない。それを着て『サクライダー』なんて絶対しない。

「なら明日もこれで行くのか？」

「気は進まないけどね。BBちゃんでき対応できないし」

「そうか・・・パラディオンは？」

「ちよつと触ってみただけど、なんとかなりそう」

「そうか、それはよかった」

「・・・ねえライダー？どうしてそこまで親身になってくれるの？」

少し前から疑問に思っていた。どうしてライダーはここまで優しくしてくれるのだろうか。本当なら兄さんに任せようと思ったのに。ライダーは私の方がいいだなんて言っ

「俺を呼んだのはお前だ。お前は求めた。俺のような存在を。そして俺も答えた。俺の願いを叶えるために」

「ライダーの願い？」

「言わずとも叶う夢、いや義務だ」

それだけ言うと紫のボディコンをハンガーに吊るしてダンスにしまう。多分着ないと思うけど。

「明日は早めに出る。何せ山道だからな。それなりに覚悟はしておけ」

「そんなこといったら余計に寝れないよ」

「ふっ、冗談だ。桜は俺が守る。それが俺の使命だ」

ライダーの使命。ライダーの真名と関係あるのかな？どんな触媒を使ったかいまだにわからないし。お爺様は役にたたないし。兄さんは無視するし。

「ああ、心配だなあ」

私の心配をよそに、着々と戦いの時間が迫っていった。

「攻めこむ？アヴェンジャーのアジトに？」

「ええ。昨日ランサーが発見しまして。ここからそう遠くないので、今のうちに仕留めておくのがいいかと」

「確かに悪くないわね。でも仕留められなかったらこっちが狙われるわよ?」

「その為の保険もかけています。心配はいりません」

「本当かあ?お前の『心配ない』は『心配しておけ』って聞こえるからなあ」

「わかる!!」

「分からないでください!とにかく、明日行きますからね!」

友を救うため、もう一度正義を

本を閉じ時刻を見る。丁度11時。奴が兵器を持ってくるのはそろそろだ。もうあれを食らうのはごめんだ。部屋を出て外を確認する。奴はいない。出かけるなら今のうちだ。外に出ればこっちのもの。あつという間にここを去ることができる。

「もう捕まるのはごめんだ」

自分のバイクに乗り込み城を目指す。しかし前方に敵を発見。既に兵器を所持している。逃げるにはトップスピードで逃げるしかない。

「逃げれると思っっているのか?」

「はっ、誰だと思っっている?」

敵は兵器を地面に置き、凶器を構える。もうあとには引けない。

「どうやら・・・一度、寝る必要があるみたいだな」

寝たあとにはあの兵器を食らうのは明確だ。回避するには全力だ。

戸惑う必要はない。自らの本能に従え!

「使いたくはないが・・・天の鎖!!」

「そう来ると思っっていたぞ英雄王!」

そう、ここに麻婆^兵豆腐^器を食うか、回避するかの不毛な戦いが始まった。ギルガメツシユと言峰の戦い、一週間のうちほぼ毎日繰り広げられる避けられない戦い。

食^殺わ^れさ^れる^る前に逃^殺げ^れろ!!

「ライダー・・・まだー?」

「もう少しだ。我慢しろ」

「道がハッキリしてるならバイクでもいいんじゃない」

アインツベルンのお城を目指して約20分。正直歩き疲れた。こんなに遠いとは。軽いとはいえパラディオンも邪魔になってきた。

「ん、見えてきたぞ桜」

眼前に見えたのは大きなお城。それこそ童話に出てきそうなお城

だ。

「早速乗り込むか」

「ちよつと休もうよライダー。いざつてときに動けなくなるよ?」

「・・・確かに。俺はともかく桜は休むべきか」

やつと分かつてくれたのか休憩タイムをとってくれるライダー。お弁当も作ってきた。お昼には丁度いいかな。

「はいライダーの分」

「む、すまんな桜。しかしこれほどの量を持つてくるとは」

「よく食べないと体動かないよ?」

「逆に動けなくなりそうだな」

そんなことはないと思う。栄養も考えてるし、なにより今全て食べるわけじゃないし。うん、問題ないね。

「まあ残すのも失礼か」

「残さず食べてね」

「ごちそうさま」「はやつ!?!」

◇

お城の門の前まで来た。ライダーのことだから壊すのかと思っただけどころかとノックしてる。

「・・・・・・返事はなしか」

でも返事がないからつて門を壊さなくてもいいと思う。しかもライダーはお城に入った途端に銃でお城を撃ちまくる。

「何やってるのライダー!!あとで請求来ちゃうよ!?!」

「ここは既にアサシンのフィールドだ。どんなトラップがあるか分からないからな。とりあえず壊した」

「とりあえず壊すのはやめようよ」

ライダーはズカズカとお城を散策する。私もあとに続いて散策する。

「・・・・・・」

「何処にもいないね」

「そうだな。アサシンのことだ。既にこの城を空けている可能性もあるな」

「ええ!? それじゃあここまで頑張った意味は!?!」

「そう焦るな。とりあえず外に出るか」

ライダーと共に外へ出る。そこは中庭のような場所だった。そこでライダーが気づいたように呟いた。

「・・・そうか、成る程な。城に入る前から俺たちは、アサシンのフィールドに足を踏み入れていたというわけか」

「そういうことだ」

何処からか声がする。男の声。ライダーの呟やきに反応してたから、もしかして、

「アサシン!?!」

「後ろだ桜!!」

あと数秒後ろに振り向くのが遅れていたら確実に死んでいた。礼装の機能をフルに活用しアサシンを迎え撃つ。

「Es flustert Mein Nagelreist Haus
声は祈りに、私の指は大地を
!」

「これは!?!」

私の影から紫の影が飛び出し、地を削る。アサシンはそれをギリギリ交わすけど驚いているみたい。

「ど、どうですか!?!これがBBちゃんの力です!」

「ただの礼装ではないか」

「桜、あとは任せろ」

ライダーに促されて距離をとる。ライダーは前に宝具の一つを破壊されたらしい。となるとあと二つ。そしてライダーはその中でも最強を取り出す。

「友を救うため、もう一度正義を!!」

ライダーは銀色の仮面の戦士へと姿を変えた。まるで変身ヒーローみたいなのその姿は頼もしい限りだ。

「それがお前の武器か?」

「ふざけた武器だろ?だが破壊力は気に入っている」

「その武器が足手まといにならないようにね」

次の瞬間アサシンの姿が消える。宝具を発動したのだ。超高速で動くアサシンに対してライダーがとった行動は、

「迎え撃つ!!」

自身も超高速でアサシンを真っ向から迎え撃つというものだ。ライダーなら真っ向から挑むこともでき、更に相手の動きを遅くすることもできる。しかしライダーは真っ向から迎え撃つ。

「成る程ね。たいしたスピードだ」

「俺のこの速さは変身しているからこそだ。お前のように生身で動くことはできない」

「それでも凄いなと思うけどね?」

ライダーの斧とアサシンのナイフがぶつかり合う。パワーならライダーの勝ちだろう。しかしアサシンはライダーの攻撃をナイフで反らしている。必要最低限のパワーでライダーの攻撃を交わしている。

(徐々にスピードが上がっている?これも本当の英雄の成せる技か。アップデートされていない俺では無理だな)

(徐々にパワーを上げている?少しずつだけど捌くのが難しくなってきた。このままだとナイフごと首が飛ぶね)

(仕方ない。本気を出すか)

それぞれ距離をとり、対人奥義の準備をする。ライダーは斧にバイク型のアイテムを装填する。一方アサシンはコンテンドーに最強の一発を装填する。英霊となったことで本当の『必殺技』となった互いの技。

「起源連弾!」

先に仕掛けたのはアサシン。放たれた弾丸から無数の弾丸が射出される。不規則な軌道を描きながらライダーを狙う。

対するライダーは待っていた。赤から青に変わるときを。そして『イツテイーヨ』の音と共に、最大級の一撃が放たれる。

「食らってみるか?・・・ハアツ!!」

斧から放たれた斬撃は弾丸を全てかき消しアサシンへと一直線に進んでいく。アサシンはそれを上空へ回避するが、それも分かっている。

たのかライダーに地面に叩きつけられる。

「ぐっ！・・・」

「ふん、その程度かアサシン？」

「どうだろうね」

（しかしおかしい。ここがアサシンのフィールドなら、少しはアサシンが有利でなくてはおかしい。桜にも異常はない。単なるはったりか？）

「考えるだけ無駄だ」

アサシンの謎の自信に不安を抱きながらも攻撃を続けるライダー。アサシンは同じように攻撃を反らし続ける。

「そこだっ！」

アサシンは懐から8本のダイナマイトをとりだし発射する。さしずめロケットダイナマイトと言ったところだろう。

「無駄だ！」

ライダーは銃で全て撃ち落とす。しかし煙幕でアサシンの姿が見えなくなる。ライダーは急いで桜の元に戻る。

「けほっ・・・けほっ・・・大丈夫ライダー？」

「ああ、しかしこうも姿が見えなくなるとは。室内じゃなくて助かった」

外のため風が煙幕を消してくれた。しかしアサシンの姿はなくなっていた。霊体化したか、それともマスターの元に戻ったか。ライダーは警戒をしたまま城の内部へと戻る。

「どうするのライダー？」

「・・・帰るか？」

「どっちかと言うと賛成だけど、ライダーはいいの？」

「アサシンの姿が見えない以上お前の身の安全が優先だ。姿の見えない敵ほど厄介な奴はいないからな」

「じゃあ急いで出ないと。ここはアサシンのフィールドなんですよ？」

「そうだな。急ごう」

ライダーは桜をお姫様抱っこで城を走る。しかしここはアサシン

のフィールド。簡単に出られるはずもなく。

「おのれ言峰……くそつまだ口がヒリヒリする」

愚痴を言いながら歩くのは英雄王ギルガメッシュ。目指す先には大きな城が見える。殺るなら今しかないが。

(どうせ気づいているか)

しかし何故ギルガメッシュはあの城を目指すのだ？既にバカマスターが城に潜入しているが、奴が目的とは思えない。

「さて、私の勘が正しければもうすぐか」

城を眼前にしてギルガメッシュは空を見据える。雲一つない晴天だ。しかしサーヴァントの目には見える。晴天の中に光る金色の光を。

「さあ、裁きの時だぞ復讐者？」

「!？」

私の一瞬の気の緩みをとらえたのか、ギルガメッシュは宝具を飛ばしてくる。成る程な。奴のもくてきは私ということか。なら丁度いい。中のサーヴァントにもとばつちりを受けてもらおう。

「ここがクリーザのアジト？」

「案外綺麗なのね」

「でもまあ獣くせえな」

「まあ化け物がいるのは間違いないですよ？」

俺たちは今クリーザのアジトに潜入している。そして目の前には巨大な石像。いや訂正、動く巨大な石像だ。その名は『スプリガン』。面倒な敵が現れたな。

《ふん、邪魔な石像ね。焼き殺されたいの？》

《ジャンヌ殿、そうでなければ我々の前には現れないかと》

《殴りがいはありそうじゃん？》

《センスの欠片もないわねクリーザは》

《バラバラにしていいんだよね!!》

《……た……お……す》

「さて、派手に殺つちやう？」

「ふふっ、殴りがいがある」

「固そうだが、まあ刺さるだろ」

「皆ポジティブだねえ。まあ殺るしかないんだろうけど。沖田さん、最強の剣豪の力、お借りします」

この時スプリガンは悟っただろう。『あ、詰んだわコレ』と。

ムーンセル

「……………」

「ねえライダー」

「なんだ？」

「もしかしなくてもね」

「安心しろ、迷子だ」

ライダーは私をつれて城を出ようとした。でもライダーは同じところをグルグルグルグル回っている。多分アサシンのフィールドつてやつなんだと思うけど。

「しかし困ったな。バカデカイ魔力がこっちに近づいている」

「ライダーも感じた？なんかお城全体が魔力に包まれているような」

「城全体か……………いやまさかな」

ライダーは部屋を片っ端から開けていく。さっきまで部屋を壊して回っていた人とは大違いだ。とか思ってたけど何もないと確認すると部屋を銃で穴だらけにした。

「やっぱり壊すんだ……………」

「……………見る桜。この部屋頑丈だぞ」

「え？」

確かにライダーは部屋を穴だらけにした。でもその穴はすぐに元通りに直ってしまった。それこそ部屋が生きているように。

「もしかしてライダー」

「ああ、この城そのものが魔力で変化されている。だから部屋を壊してももとに戻るんだろう」

ライダーが指差す方向には見たことのあるオブジェ。それはライダーがこの城にはいつてすぐに壊したものだ。それが何故かここにある。まるでオブジェが動いてきたように。

「怖いよライダー……………」

「心配するな。トリックは分かった」

ライダーは窓の側へと歩いていくとガラスを割った。しかしガラスは元に戻った。

「やはりな」

「何が分かったのライダー？」

「桜、パラディオンだ」

「え？どうするの？」

「ぶち破れ」

「いや無茶言わないでよ！」

「はあ。たまには働いてくれマスター」

悪かったわね、と心の中で毒づきながらライダーにパラディオンを渡す。ライダーはパラディオンで壁一面を吹き飛ばす。てかその槍にそんな力があるなんて。

「でるぞ」

「え？きやあー！」

ライダーは私を抱えると城の外へと飛び出す。そのまま森の中へとダイブ。

「ふう。なんとかあったか」

「イタタタ。もうちよつと心の準備とか」

「あの城の再生スピードは中々なものだ。あれぐらいの穴を開けないとすぐに再生されてしまうからな」

「だからパラディオン？てかそんなに強かったのパラディオン!？」

「当然だ。なんせアテナの槍だからな」

「理由になってないよね？」

「まさか出ていくとはね」

アサシンは城の内部のモニターでライダーが壁を破壊して出ていくのを確認した。本来ライダーたちは招かれざる客。ならば無闇に追いかける必要はない。

「でも奴は何処にいる？」

本来この城を改造したのはとある人物を逃がさない為だ。何度も何度もこの城に攻め込み、この城の宝を盗もうとする極悪人。

「早く探し出さないとイリヤが危ない」

アサシンはモニターをもう一度見る。イリヤの部屋は異常なし。

つまりイリヤはまだ大丈夫だ。次に嚴重に監視された部屋を見る。まだ異常はない。

「……………まだ異常はない？違う。もう異常が起きていますしたら」

いくらなんでも異常が無すぎる。第一奴は風のように現れて煙のように消えていく。初めてあったときも同じだった。アサシンはイリヤの部屋を目指す。

「イリヤ!!」

しかし最悪なことにイリヤがいなかった。次に向かったのは嚴重に鍵がかけられている部屋。中に入るとそこには『なくてはいけないもの』がない。

「カメラに流れていた映像は…………クソッ」

後悔する暇はない。幸いにも城から出れば警報になる。これだけは絶対だ。まだ警報がなっていないということは奴は城にいることになる。アサシンはイリヤと奴を探すうちに大広間に出る。そこは大勢の人を集めればパーティーでも出来そうなぐらい大きい場所だ。

「!イリヤ!!」

その真ん中にイリヤは倒れていた。

「イリヤ!しつかりするんだ!」

「……………めん、取られ…………ちやつた」

アサシンは睨み付けるように階段の上を見つめる。そこにいるのは一人の男。青い四角の箱を手に持っている。あれこそがアインツベルンの秘宝だ。

「カメラの映像がおかしいことに気づくのが遅れたなアサシン」

「クリーザ…………!」

クリーザ。アヴェンジャーのマスターだった。

「やはりそれを盗むために」

「正直ライダーが乱入してくるとは思わなかった。俺にとってはラツキーだったがな。おかげでコイツもゲットできた」

「それを返せ」

「嫌だね。コイツが偽物なら返してやるよ。そうだな。まずは俺の命

を増やしてもらおうか」

クリーザは四角の箱を上に掲げ叫ぶ。

「ムーンセルよ!!我が願いを叶えたまえ!!」

四角の箱が青く輝き、クリーザが光に包まれる。光が晴れるとクリーザは笑い始める。

「フッフッフハハハハ!!どうやら本物みたいだ!見ろ!俺の命は更に六つ増えた!!」

クリーザはアサシンに胸の六連男装を見せつける。そこには左胸とは逆に右胸に模様が浮き出ている。つまり命が更に六つ増えたということだ。

「まあ俺が興味あるのはムーンセルの副作用だ。さて、今回はどんな『ありえない』ことを起こしてくれるのかね?」

ムーンセルが赤く発光する。真逆の光は七つの光の柱を立てる。そのうち一本がアサシンの目の前に落ちる。その光の中から現れたのは人間。黒い肌到头のてっぺんから布を被っている。そして手には弓。

「ほう。今回は『七騎のサーヴァント』を呼び出したか!」

「何!?!」

「う・・・そ・・」

「これは面白いな!!」

黒い肌の男が弓に矢を添える。狙いはイリヤ。そしてそれを許すアサシンではなかった。

「させると思うか?」

アサシンは超高速で背後に回り込みナイフで首を狙う。タイミン
グはバツチリ。ナイフは男の首に突き刺さった。そう、確かに突き刺
さったのだ。

「何?何故止まらない!」

男の手は止まることなく矢を引き絞る。アサシンは何度も何度も
ナイフで急所を断ち切った。それでも男は止まらない。まるでその
存在はロボットのようだった。

そして無慈悲にも矢は放たれてしまう。確実にイリヤの眉間を

狙った一撃。アサシンのスピードでもそれには追い付かなかった。しかし男の矢に追い付くものが一つ。黄金の槍が矢を弾いた。

「はっ、誰の許しを得て雑種の血を流させようとしている?」

声が聞こえたと思ったら、男に向かって大量の武器が飛んでいく。ほとんどが男に直撃し爆発していく。

「ふん、その力・・・おおかたヘラクレスか? いやそれにしても小さな。アルケイデスか?」

「その声・・・英雄王か」

「誰だ? 我の名前を呼ぶのは。ああ貴様か雑種。復讐者なら外でくたばっているぞ?」

「アヴェンジャーが? いやまさかな。セイバーを倒したのだぞ? お前相手でもなんとかなると思うが?」

「違うな。あれは手を抜いただけだ。本気を出せば星ごと砕けようぞ。さあ、裁きの時だ」

黄金の王ギルガメッシュは鎧を纏う。その鎧は全身を纏うものではなく、一部肌が露出している。これは動きやすさを重視した物。若き頃の姿だ。そして片方の髪をかきあげクリーザを睨み付ける。

「貴様が相手するのは英雄の中の王だ。心してかかってこい」

鎧に付いていた双剣を構える。クリーザは笑い、アサシンはイリヤを抱え離脱する。そして男、アルケイデスはもう一度矢を引き絞る。

しかしそれより早くギルガメッシュが動く。双剣を連結させ弓にする。そしてそこから放たれる黄金の矢。それは光の早さでアルケイデスの胸を貫いた。

「これで一つか?」

ギルガメッシュが口元が緩む。どうやら静かに笑っているようだ。

「・・・オモシロイ」

アルケイデスが口を開いた。しかしその言葉は片言でどこか言葉ではないように聞こえる。

そして始まる神話の再現。それは我らが知らないモノとなる。

「おいおい、マジかよ」

スプリガンをフルボッコで倒したあと、空から二本の光の柱が落ちてきた。そしてそこから現れた二人の女。

一人はピンク髪で黒い鎧を纏い赤い槍を持っている。ランサーと親しげに話している、ように見えるけど……多分ランサーの生前の敵だ。

「久しぶり、クーちゃん」

「メイヴ……テメエその槍はなんのつもりだ？」

「ふふっ、クーちゃんの力を使ってるんだから、この槍を持って当然でしょ？」

もう一人は黒い着物を身に纏い骸骨の仮面を付けている。そして何より目がいくのは大きい胸……と狐の尻尾。しかも三本。手には二本の刀を持っている。

「もしもし、おたく誰ですか？」

「名乗るほどの者ではない。私はただの獣よ」

「ふーん。取り合えず……胸大きいから敵ね」

「いや敵の判断のしかただろ……」

バゼットさんとランサーはメイヴを。俺とアーチャーは骸骨仮面を相手にする。とにかくさっきの戦いではあまり消耗はしていない。戦力は充分。やるきやねえ。

「行きますよランサー!!」

「おう、バリバリ行くぜ」

「掛かってきなさい!」

「マスターは援護をお願いね」

「あまり期待はするなよ?」

「では……参りましょうか」

「ラ、ライダー!」

「下がれ桜!!」

敵の攻撃を交わす。しかし俺の宝具は一つ潰されてしまった。ますますもって不味い。

「ハハハハハハッ!!!!それで終わりか?」

「まだ、終わらない!!」

相手は俺にとって、そして俺のダチにとって最悪の敵。コイツだけは倒さなくてはいけない。目の前の金色の仮面ライダーに勝つにはこれしかない。

「友を救うため、もう一度正義を!!」

「仮面ライダーチェイサーでも、私には勝てない!!」

「あの時とは違う。今度は俺が倒す! 蛮野!!」

—————

「嘘でしょ……」

「なんとということだ……」

凜とアーチャー、そして士郎の前に現れた女性が一人。黒い鎧を身に纏いしその姿。全員見間違える筈はなかった。つい最近まで一緒にいた仲間だ。

「セイバー……」

「また会いましたね……シロウ。そして……さようなら」

そして黒き聖剣が三人を襲う。

終末剣VS射殺す百頭

アインツベルン城内

「……………オモシロイ」

「ぬかせ、貴様に楽しむ余裕などなからう」

ギルガメツシユの放った矢は確かにアルケイデスを貫いた。しかし彼は生きている。それは何故か。

「イヤ、貴様ニモ楽シム余裕ナドナイダロウ？」

「甘いな、我には全てを楽しむ余裕がある。余裕がないときはそれこそ『世界』が相手でなくてはな」

ギルガメツシユは再び弓を構える。更に自身の回りに王の財宝ゲイト・オウ・パレロンを展開する。ギルガメツシユ自身はアルケイデスの頭を、財宝はアルケイデスの急所を狙う。

「消え失せよ」

同時に放たれる黄金の財宝。アルケイデスはそれらを全て弓で弾いていく。しかし弾けないものが一つ。ギルガメツシユ自身が放った黄金の矢だ。それだけは彼の頭を貫いた。

「ふん、その程度か？」

「ナルホド、ソノ弓ノ力ダナ」

「気づくのが遅かったな」

ギルガメツシユは不敵な笑みを浮かべる。そう既にアルケイデスの背後には無数の財がアルケイデス目掛けて発射されていたのだ。

「グ、グオオオッ!!」

「はあ、ヘラクレスなら少しは楽しめたが……………人の名の貴様では相手にならん」

「……………ナラバ、コレハドウダ？」

そういうとアルケイデスは背中に突き刺さった財を全て飲み込んだ。まるで背中が食べているように。そして手を前に翳す。掌の肉が歪みそこから剣の先端が姿を見せる。

「……………貴様、それが我の財と知っての行動か」

「フン、本来財宝ハ馬鹿ミタイニ撃ツモノデハナイ」

アルケイデスの手から財宝が連続で射出される。しかもその財は黒く変質している。それにギルガメッシュは少し驚くが気を取り直し全てを粉碎する。

「イイノカ？オマエノ財宝デハナイノカ？」

「貴様の泥がついた物など、最早我の財ではない。第一何故貴様が『湖の騎士』^{10年前の狂犬}の技を使える？」

「教エタトコロデ意味ハナイ」

「ならば質問を変えよう。貴様、ヘラクレスでもアルケイデスでも、ましてやランスロットでもないな？」

「ソレハ正解ダ」

次の瞬間矢がギルガメッシュの頬をかすめる。もう少し避けるのが遅れていたら今ごろギルガメッシュの首はなかっただろう。

「ほう、ならば話は早い。人でも英雄でもない貴様には、我の裁きが必要なようだ。本来なら復讐者の為に残していたが……まあいい。貴様がどこまで耐えられるのか見るのもまた一興か」

弓を分離させ元の双剣にする。そしてそのまま斬りかかる。

本来ギルガメッシュは遠距離から財宝を連続で射出する戦法を多用する。接近戦はそれを掻い潜った者に対応するだけであり、自ら接近戦をすることはあまりない。それこそ彼の『友』ぐらいだろう。

だが10年間の間で慢心をほとんど無くした彼は自ら接近戦を繰り広げる。この鎧もその為に奥から引つ張り出したのだ。

「はっ、その程度か獣よ！これでは槍兵よりも点数が低いな!!」

「点数ナドドウデモイイ！タダ貴様ヲ殺セレバヨイ！」

「つまらん奴よな。それも混ぜすぎた結果だ」

ギルガメッシュは剣を獣の胸に突き立てる。そのまま押し通し壁に縫い付ける。そしてもう一方の剣で布の上から顔に突き刺す。

「これで六つか。あとは一撃で事足りる」

「ナニ？」

剣を引き抜き距離を取る。もう一度双剣を連結させ弓に変形させる。

「さあ、終末の時だ。本来ならコイツは『水を呼ぶ剣』だが……まあこういうのも悪くはない」

「ナラバ本気ヲダソウ」

ギルガメツシユも、獣の互いに構える。ギルガメツシユは黄金の矢を。獣の矢には膨大な魔力が込められていく。

そして互いの切り札を発動する。

「ナインライプズ射殺す百頭!!」

弓から放たれたのは矢ではなかった。見ようによつては9本のドラゴン型ホーミングレーザー。それはギルガメツシユ目掛けて発射された。

しかしギルガメツシユの黄金の矢はその合間をぬってアルケイデスに突き刺さる。そして、

天から裁きが落ちた。

ギルガメツシユの放った黄金の矢が刺さつて約1秒後。獣目掛けて天から光が落ちたのだ。それはずっと前にギルガメツシユが天に

向けて放った矢が、数日かけて強大な『裁き』となって天から帰ってきたのだ。

光が晴れると城はなく、瓦礫の上にギルガメツシュが立ってついている。

しかし彼自身ノーダメージではなかった。ホーミングレーザーはギルガメツシュの左腕を持っていったのだ。つまり今のギルガメツシュには左腕がない。

「チツ、最後の最後で自身の英雄としての技を使うか。だが貴様は複数の英雄の力だけを取り込んだ贗作にすぎない。我の嫌う贗作にな」
ギルガメツシュは城を後にする。その足取りはふらつくこともなく、しつかりと地を踏みしめていた。

◇

「あーくそ。折角の命がもう4つも持っていかれちゃった。しかも折角のサーヴァントまで。でもまあいいものが見れたぜ。おいアヴェンジャー」

「チツ、生きていたか」

「お前もな。外で何してた？」

「鎖で身動きが取れなかった。あいつ『天の鎖』を惜しみ無く使ってきたぞ」

「だらうな。俺も見てて思ったがありや慢心捨ててるな。10年で何があつたんだ？」

◇

そして時は少し進み……

冬木教会

「ほう、お前が腕を持つていかれるとは、フフ面白い事もあるのだな」

「ふん、これが面白いか？我は面白くない」

「だらうな。誰にやられた？」

「復讐者のマスター……が召喚した獣だ」

「ほう、獣に……それはまた随分と凶暴だな。それで、今後はどうする？まさかお前がそのまま終わるのか？」

「戯け。少しここを空ける」

「何処へ行く？」
「雑誌で見た人形作りの所へな。名は……蒼崎だったか……」

黒き日輪よ、死に随え

アーチャー、真琴サイド

「おいおい……これ、俺が参加した方がアーチャーに不利になるんじゃない」

アーチャーはいつも通り弓と矢の二刀流。対する狐の尻尾の女も二刀流だ。そして刃を交えるスピードが馬鹿みたいに早い。

「はああっ!!」

「……」

でもアーチャーの方が不利だ。相手はまるで二刀流の使い手みたいだ。骸骨仮面で口元しか見えないけど、あいつは油断なんてしていない。例え有利だとしても、あの狐の尻尾の女は手加減なんてしない。

「ぐはっ!」

「……その程度か」

「はん、言ってくれるじゃない。胸が大きいのは許せないけど、実力はこの聖杯戦争で随一ね」

「当然です」

「少しは否定しなさい、よ!!」

アーチャーは弓に魔力を集中させて狐の尻尾の女に打ち出す。

アグニ・ガンデーヴァ
「炎神の咆哮!!」

炎神の咆哮を連続で放つ。それに対して狐の尻尾の女は二刀を捨て、

「真の英雄は……目で殺す」

目からビームを打ち出してきた。

「はああ!?!」

矢を全て撃ち落としそのままビームはアーチャーに直撃する。

「アーチャー!」

「まだ行けるわマスター」

とか言っているが少々限界が近づいている。こうなりや少しは足止めをして、トドメまでアーチャーを温存するしかない。

「騎兵の槍は雷を纏う！」

一本の槍を取りだし雷を纏わせる。こいつはデイルムツドと金太郎の力を合わせた一撃。決まればそれなりのダメージは与えられるはず。

「アーチャー援護!!」

「かしこまり！」

「ゴールデン・ジャルグ槍騎・破魔黄金疾走!!」

アーチャーが敵の足下を狙う。そしてそれを避けるために少し体を動かしたのが狙い目。この一瞬は見逃せない!

「そこだっ!!」

「!!」

しかし俺の槍は謎の爆風で防がれてしまう。そして敵はなんなく体勢を調べてしまう。

「筋は悪くありません。それに狙い目も。しかし私は元キヤスターです。今はビーストとはいえ、それでも出来ることはあります」

「ビースト?それもサーヴァントのクラスか!？」

「ビーストなんて『666の獣』と『マザーハーロット』ぐらいしか聞いたことないわよ!？」

「これも混ざりすぎた結果です。私とてこのクラスは不本意なのです」

「混ざりすぎた結果?・・・ハハーン成る程ね。貴女『ハイサーヴァント』ね?」

ハイサーヴァント?なんか強そうだな。

「さあ、よく分かりませんが。まあ聖杯戦争には本来私は呼ばれませんが。これも『ありえない』事象です」

「ならなんで『ありえない貴女』がここにいるのかしら?」

「確かに。本来呼ばれないならなんで」

「・・・お喋りが過ぎましたね」

狐の尻尾の女は槍を取り出す。それも巨大な槍。しかも彼女の腰辺りから紫の炎の尻尾が6本。これで合計9本・・・9本の狐の尻尾・・・

「まさか……九尾の狐!？」

「ヴァアサ黒き日輪よ、ヴィンク死に随え!!」

ビーストの槍に膨大な魔力が込められていく。最悪なことに交わす術がない。万事休すか!?

「マスター!後ろに下がって!」

アーチャーの服が変化する。さっきまでは『どつかのインドの大英雄の第三再臨』の姿から『この前の対アヴェンジャー戦の衣装』になる。

「それ、意味あんの?」

「モチベーションの問題。それにこれならアレが出来る」

アーチャーのスカートが燃える。おいまさか。

「これが本当の太陽面爆発フレアスカートってね!!」

「うわーやっぱり!!」

ビーストの槍からビームが放たれる。それに対してアーチャーはスピッキックで対抗する。

激突する二つの奥義。余波で回りの森が吹き飛んでいく。俺も地面に槍を突き刺して吹き飛ばされないように踏ん張るので精一杯だ。

「たあああっ!!!」

「……本当の太陽面爆発は」

「嘘!？」

「こういうものよ!」

ビームの出力が更に上がる。そして俺達はレーザーに飲み込まれ、辺りは大爆発を起こした。

少し時は遡り、

ランサー、バゼットサイド

「今ほど戦いずれえのはなかったかも、な!!」

「私ありません、よ!!」

ランサーとバゼットは苦戦していた。敵の数は28。数だけをみれば二人にとってはさほど苦戦することはないだろう。しかしこの28は強すぎた。

『クラン・カラティン』二十八人の怪物』。それは女王メイヴがかつて生み出した最強の怪物。今二人はそれを相手にしている。

「そらっ!!」

「せいやっ!!」

ランサーの槍とバゼットの拳が怪物の頭を貫く。しかしそれでも怪物は止まらない。全ては女王のために。彼女のために怪物は動き続ける。

「フフ、クーちゃんが苦戦してる。前はなんなく倒してたのにね」

「前だつてそれなりに苦戦したさ。今回程じゃねえけどな!!」

「ランサー! 貴方はメイヴを!」

「オメエ一人で大丈夫なのか!」

「なんとかします!」

「・・・任せたぜ」

ランサーは二十八人の怪物をバゼットに任せて一人メイヴの元へ向かう。メイヴは不適な笑みを浮かべたまま槍を構える。

「ふん!!」

「アハハ! 素敵よクーちゃん!」

「チイッ!」

メイヴはそこまで槍の扱いが上手いわけではない。それこそ槍の扱いならランサーに分があるだろう。しかしそれでもランサーは苦戦している。そうメイヴのパワーがランサーを遥かに上回っていた。

「よくそんな細せえ腕でそんな馬鹿力がてるなメイヴ!」

「そんな褒めないでよ。照れちゃうじゃない」

それでもメイヴは力を緩めない。次第にランサーは苛立ち始めた。

「この野郎!!」

「あらやだ怖い。そんなに怒らないの」

「クソがつ!!」

ランサーは一度距離をとる。そして構えを低くとり力を込める。この距離なら全てを貫ける。そう確認したランサーは一気に跳躍する。

「ふーん。確かにそれなら勝てるかもね」

「避けるよバゼット！」

「無茶言いますね」

「突き穿つ死翔の槍!!」

ランサーの投擲した槍は次第に矛先が分裂していき、二十八人の怪物の心臓を全て潰した。そしてメイヴにもその一撃が迫る。しかしメイヴは避けようとしなない。なぜならメイヴ自身にも、

「砕き穿つ愛しき槍！」

メイヴも槍を投擲する。因果逆転の呪いどうしがぶつかり合う。そしてこのとき矛盾が発生する。ランサー自身こうなるのは初めてだ。

「知ってた?こうなるって」

「俺が知るわけ、ねえだろうがぁ!!」

ランサーは更に宝具を解放する。バゼットにはまだ充分に魔力がある。でも無駄うちはバゼットに負担となる。

「刺し穿つ死棘の槍！」

「はい、ぎーんねん」

しかしメイヴは再び槍でゲイ・ボルクを防ぐ。こうなってはランサーに打つ手がない。まさかここまで追い込まれるとは思っていなかっただろう。

「ランサー!構いません、何度でも叩き込んでやりなさい!!」

「……わりいな」

槍にルーンを刻んでいく。ランサーの最強の宝具を解放するため。本来サーヴァントは成長することなく、また新たに宝具を作ることは不可能だ。しかし『対人奥義』なら、

「どうなるか分からねえが……やるしか、ん?」

「この魔力……宝具!」

「あのバカ狐……見境なく!!」

しかし三人は突然の爆発に巻き込まれてしまう。ランサーとバゼットはルーンを使いなんとかダメージを軽減しようとするが……

—————

「バツカじゃないの!?!こつちのことも考えなさいよ!!」

「む、すみません」

辺り一面は焼け野原。倒れている三人。アーチャー、ランサー、ランサーのマスター。

「一人足りない……」

『私のことでしょ？気づくの遅すぎ』

ビーストは槍を声のするところへ投擲する。それをなんなく蹴り飛ばすものが一人。

『なんとかなるものね。真琴の足でも』

「貴方は……アーチャーのマスター？」

『ええ体はね。中身は泣く子も黙る『ジャンヌ・ダルク（オルタ）』よ！』

「……」

『恐怖のあまり声もでなくなつたかしら？』

「いや、あまりにも馬鹿っぽいので。バカっぽいので」

「うわストレート!？」

『バカつて言つた？バカつて言つたよね？あーもうせつかく出てきたのにやる気なくしたわー』

「殺る気がないなら消えろ」

『ハイハイ消えますよつ、と……つてえな。いきなり変わったと思つたらすぐ交代かよ』

人格が入れ換わつたように、ジャンヌ・ダルクからアーチャーのマスターに戻る。しかし彼自身もう戦えないはず。あの一撃を食らつて生きているとは、アーチャー共々厄介ですね。

「堕狐の一撃を食らつて生きてるなんて。いいわね貴方。特別に私の配下にしてもいいわよ?。」

「はあ?ふざけんなよ。ここまでしといて興味が湧いたら即率いれるつてか?冗談じゃない!誰がテメエの所に行くかよ!!」

「ふーん。そんな風に反抗するのね。いかにもテンプレね。それは詰まらない。もっと嘆きなさい!!」

「お待ちなさいメイヴ。今の彼はもう戦う力はないはずです。戦わずして勝つのは貴女の中身が許さないと認めますが?。」

「うつ、それもそうね。私はクーちゃん意志も尊重するから。それじゃあ先に戻るわ。どのみちクーちゃんと決着つけられそうにないし」
そういうとメイヴは戦車で去っていった。残ったのは私とアーチャーのマスター。

「あんたは帰らないのか？てか帰ってくれ疲れたんだよ」

「貴方は何故・・・その三人を守ろうとするのですか？」

「俺のダチだから。ダチは守らないとな」

ああ、成る程。こういうのが私は好きなんだ。だからあの『月の聖杯戦争』も・・・でも私はアレとは違う。同じ存在だが違う存在。矛盾した存在が私。それでも確かなのはある。

「イケ魂ですね」

「え？」

「分かりました。今日は帰ります」

「どうしてだ？どうしていきなり」

「私・・・良妻ですから」

少し時は流れ、

???

「ん？あれ・・・ここは」

「気づきましたか真琴君」

「バゼットさん・・・俺は」

「どうやら一番ダメージを受けていたのは貴方たち二人みたいですね」

「アーチャーは？」

「そのアーチャーから伝言です。『暫く休むから探さないでください』
とのことですよ」

「なんだよそれ・・・で、ここは？」

「ああここはですね」

「なんだ？やっと目が覚めたのか」

「あ、あんたは！」

「よう、アーネンエルベですれ違って以来だな」

そこにはアーネンエルベですれ違ったあの『着物に革ジャン』の女性_がいた。

説明と衛宮邸決戦と金髪十赤い瞳

正直、ライダーに勝ち目は無い。力の差は歴然としていた。

「ハハハ!!どうしたどうした!!」

「ぐっ、おのれっ!!」

それでもライダーは立ち向かう。何度蹴られても。何度殴られても。何度地面に膝をついても。

「それではあの女が死んでしまうぞ?」

「がはっ!」

「ライダー!!」

「ハハハ! 貴様は何度挑んでも私には勝てない! 勝ちたいなら泊進ノ介と剛を連れてくるんだな!!」

ライダーは蹴飛ばされ、動かなくなった。でもライダーはまだ生きている。でもこれ以上は、

「もう一度死ね、チエイス」

「やめてえ!!」

とっさにパラディオンで殴る。不意打ち十単純なパラディオンの攻撃力が重なって、思った以上にダメージを与えた。でもそれは私に倍返しで返ってくるってことだった。

「痛いじゃないかお嬢さん?」

「ぐっ、がはっ!」

首を捕まれて中に持ち上げられる。酸素が入ってこなくて苦しい。これが死に近づくってことなのかな。

ああ、ここまでなのか。ごめんねライダー。貴方の願いが叶えられなくて。ごめんなさい……先輩。

こんなことなら、ちゃんと思いを伝えるべきだった。

「華奢な首だ。まあ死んでおけ」

「させると思うかい？」

途端に私は死から解放される。そして敵の腕が飛んでいた。

「え？いったい・・・なにが」

「悪いが君に関わっている暇はないんだ。大人しく死んでくれ」

「貴様・・・アサシン!!」

「時のある間に薔薇を摘め」

アサシンは宝具で敵を連続で切りつけていく。その一撃一撃は大したことはないだろう。普通の部位なら。アサシンは暗殺のプロ。急所だけを狙うことなど造作もないことだった。

「ガツ、き、貴様!」

「後は君の仕事だライダー。決めるとこは決めておけ」

「いいだろう」

ライダーは斧に魔力を貯めている。そして加速。目に見えないスピードで敵の目の前まで移動する。

『イツテイーヨ!』

「どうやら、行っていい、らしい」

「おのれ!私はまた、このふざけた武器にいいいい!!」

「終わりだあ!!」

斧を降り下ろして敵を両断するのも早かった。

◇

「ここだ」

「こんなところに隠れ家があったなんて。良かったねライダー。少しは休めるよ」

「しかし良かったのかアサシン。俺たちは敵だぞ?」

「でも今は協力しなくてはいけない。マスターがそう言うからね」

アサシンに連れられてやって来たのは古い隠れ家。かれこれ築50年ぐらいかな?その隠れ家のベッドにアサシンのマスター、イリヤさんがいた。

「連れてきたのねアサシン」

「ああ、途中でサーヴァントも倒した」

「アサシンが助けてくれて助かりました。ありがとうございます」

「勘違いしないでよ。私はこの事態を止めるためにあなたたちを助けたんだから。別に気に入ったとかないから！」

「うちのマスターは恥ずかしがりなんだ」

「余計なこと言わないのー！」

「なんだかとてもいい関係だな。まるで家族みたい。」

「それで、『この事態』とはどういうことだ？」

「そうね話しておくわ。簡潔に言うのであれば『ありえないサーヴァン

ト』よ」

「ありえないサーヴァント？」

「そう。あれはアインツベルンに代々伝わる秘宝の『ムーンセル』の願いの代償よ」

「ムーンセル？日本語だと『月の細胞』？」

「ムーンセルとは、簡単に言うと聖杯よ」

「聖杯!?!」

「ムーンセルが作られたのは今から約60年前。第三次聖杯戦争の最中にアインツベルンの魔術師によって作られたの」

「アインツベルンの魔術師って凄いな。あれ？でもそれだと、

「ちよつと待て。ムーンセルは聖杯。そして作ったのがアインツベルンなら、アインツベルンは聖杯戦争に参加する必要はないのではないか？既にムーンセル^{聖杯}を手にいれているのだから」

「あ、言われた」

「確かにそうなのよ。でもきつと先祖もそれはやったはず。でも願いが叶わなかったから今もこうして聖杯戦争に参加しているのよ」

「つまり叶えられる願いと、できない願いがあるってことですか？」

「大体は叶えられるけどね。そしてムーンセルで願いを叶えると『ありえないこと』が起きるの。第三次聖杯戦争の時に使用したときは、新都と深山町の位置が入れ替わったらしいわ」

「ええ？つまり本当なら新都と深山町の位置は逆なんですか!?!」

「確かに、普通なら『ありえない』な」

「第三次聖杯戦争以後は私が使うまで封印されていたわ。でも第五次聖杯戦争の始まる前の日、アヴェンジャーたちが襲撃してきてね。その時に使ったわ」

「じゃあその時の代償は？」

「それが分からないのよ。強いて言うなら『アーチャーが二人』いることかしら？でもそれは片方が嘘をついていたら出来ることだから」

「ならば今回はいったい何を？」

「今回はアヴェンジャーのマスター、クリーザが叶えたもの。願いは恐らく『命を増やす』ってところかしら。そしてその代償が『もう七騎のサーヴァントの召喚』よ」

「なんということだ。つまりあと追加サーヴァントは六騎いることになる。もしさっきの敵と同等の強さだったらかなり大変だ。」

「それに対抗するために、今は貴女と手を組むのよ桜」

「勝てるんですか。あと六騎に」

「多分ギルガメッシュが一騎倒した。あと五騎だ」

「勝たなきゃ、本物の聖杯はとれない」

「確かにそうだ。これは聖杯戦争。新しく出てきたサーヴァントに聖杯を取られるなんてライダーは嫌だろうし。勿論他のサーヴァントも嫌のはず。」

「分かりました。私でよければ力になります！」

「ありがと桜。いいえ、BBちゃん？」

「や、やめてくださいよー！」

こうしてイリヤさんと同盟を組むことになった。あと五騎を倒すためにはもつと戦力が必要だと思うけど、どうするんだろう。そう考えていたとき、

「あつれ〜？ここ何処だろ？」

外から女性の声が聞こえた。しかもかなり近い。とつさに身構える。もしかしたらサーヴァントかもしれない。

「あ、彼処に人の気配！たのも〜！」

隠れ家のドアを思いつき開けたのは、金髪に赤い瞳が特徴的な女

性。背中には大きな籠を背負っている。

「だ、誰ですか！」

「え？私？私はアルクエイド！なんか道に迷っちゃって」

衛宮邸

「はあ……はあ……まさかこれほどとは」

「どうしたアーチャー。早く本気を出せ」

「これが本気とは考えないか、君は」

既にアーチャーは満身創痍だった。左腕は使い物にならず、投影も苦しくなっている。

対するセイバーはその場から一步も動かずにアーチャーを追い込んでいる。全てが強すぎる一撃のためアーチャーも回避するのが精一杯だ。

「王も一步間違えば悪になる。分かっていたはずだが、いざ君が暴龍となると、ゾツとするな」

「私を暴龍と言うか……確かに今の私はそう言えるかもな」

尚もセイバーに挑むアーチャー。しかしセイバーの背後から現れた『黒い影』がアーチャーの行く手を阻む。

「せいやっ!!」

連続で投影を続け影を払っていく。更に四本の干将・莫耶をセイバーに投げつける。そしてそれらがセイバーに当たるよりも早く背後に回り込むアーチャー。

「鶴翼三連!!」

そして繰り出されるアーチャーの絶技。もつとも得意とするアーチャーの十八番だ。だがしかしセイバーには全てを見切られ、

「くだらん」

「があっ!!」

逆に深傷をおってしまう。しかしアーチャーにとってはそれも計算のうちだった。こうして時間を稼ぐことさえできればこちらのものだ。

「いけー凜!!」

「おっしやあー！ど真ん中ストレート!!」

凜の細腕から放たれる豪速球。それは宝石類を集めてガムテープでぐるぐる巻きに補強したものだだった。形はふざけているが威力は絶大だ。

「小賢しいー!」

セイバーはそれを剣で両断するが、同時に爆発に巻き込まれてしまう。これで少しはダメージを与えた。だれもがそう確信した。

「どんなもんよセイバー。ちよつとは驚いた?」

「ええ、驚きましたリン。まさか貴女の宝石がここまでのものとは」

セイバーの顔からバイザーが外れる。セイバーの金色の瞳が三人を見る。満身創痍のアーチャー、戦闘体制の凜。そして真っ先にやられた土郎。

数分前、土郎はセイバーに挑んでいった。無謀にも一人で。そしてセイバーの一振りですべて終わった。投影も通用せず、たった一振りに負けたのだ。そしてセイバーはこう言いはなった。

『そう、貴方は弱い。弱い故に何も守れない。そして後悔する。でもそれは仕方ないこと。貴方が弱いことから』

その言葉を聞きながら、土郎は気を失ってしまった。

「さて、今回はこれまでにしましょう。アーチャー」

「なんだ」

「次は貴方とリンで挑みなさい」

「どういう意味なのセイバー」

「彼は足手まといですから。では」

セイバーは黒い影に包まれながら姿を消した。誰が見ても完敗だった。

時刻は日付が変わる寸前。俺は縁側で一人たたずんでいた。

『貴方は弱い』

「……………くそ」

セイバーに言われた言葉が頭の中を埋め尽くす。自分でも分かっていたはずだった。自分はまだ未熟で弱い。だから特訓は怠らないし、努力も続けてきた。

それでも面と向かってハッキリと『弱い』と言われた。しかもつい最近まで共に戦った仲間。正直泣きそうになった。俺はまだ強くないんだって。

「どうすればいい……どうすれば強くなれるんだ」

「ふん、どうせ貴様はもうセイバーに相手にされていいない。ならば無理に強くなろうとしなくていいだろう。なんなら聖杯戦争を下りればいい」

「アーチャー……」

「それがお前のためでもあり、凜のためでもある。第一セイバーを持つていないお前と共にいたところでこちらには何の利益もない」
「な……」

「事実だろうか？ 違うと言うなら『貴様と共に行動してメリットになること』を言ってみろ」

そんなお前にメリットになることなんかはない。俺はそう思った。でも声には出さなかった。声に出さなくてもこの男が一番理解している。

「……確かに、メリットなんてものはない」

「……」

「でも、俺は強くならなくちゃいけない」

そう、それはセイバーに認めてもらうためでも、アーチャー達の利益のためでもない。

「俺は……正義の味方だからな」

そう、俺は正義の味方になるんだ。そのためには強くならなくちゃいけない。それにあの時約束したんだ。爺さん夢は俺が叶えるって。そしてそれはいつしか俺の本当の夢になっていたじゃないか。

『授けられた人の夢』から『自分が叶えたい本当の夢』に。

「……まったく、それでは答えになっていない。何が正義の味方だ。下らない。そんな理由で強くなりたいと？」

「でもそんな下らない理由で、オレはそこまでたどり着いた。より多くの人の命を救うために。オレは力を求めたんだろ」

「……はあ。これほどまでお前を殺したいと思ったのは久しぶりだ。最近はその衝動もなかったのだが」

「なあアーチャー」

「なんだ」

「俺に……投影を、教えてくれ」

「……ついてこられるか」

「……当たり前だ」

俺は強くなる。より多くの人を救うために。そしてまずはセイバーと……。そのためにもオレを越えないとな。

ネバー・セイ・ネバー

「久しぶりだな」

「久しぶりって……俺はもう会わないって思ってたぞ」

「そうか？俺は会うと思っただけだな」

女性はそう言うのと俺にコンビ二袋を渡してきた。中にはアイスが三つ。全部ストロベリーだ。俺はチョココがよかったんだけど。

「そういえば自己紹介してませんよね？この人は両儀式。このアパートの住人です」

「両儀式……俺は狩野真琴です。助けてもらってありがとうございます」

「助けたのはオレじゃない。まあそいつは追々な」

俺はベッドから降りようとするが体中を痛みが走る。そうとうやられたな。

「道端で倒れてたお前たちをあのバカは連れて帰ってきたんだ。そんなの救急車を呼べば早いのにな」

「私はまだ大丈夫かもしれませんが真琴君は恐らく死んでいました。それを見越して治療を施してくれたのでしょう？」

「へえ、オレが治療したって分かるんだ？」

「ええ、彼はあまり手先が器用ではなさそうなので」

「いいや、案外わからないぜ？幹也はやるときはやるからな」

いつの間にか話についていけなくなる。それにしてもよく生きてたな俺。ぶっちゃけ死ぬかと思っただけど。

あのサーヴァントは『玉藻の前』と『女王メイヴ』だろうな。まああの狐尻尾の真名は怪しいところだけだな。

それに今頃だけドランサーの真名は『クー・フリーン』だな。ケルトの英雄『クランの猛犬』。宝具から分かったことだけど……どのみち対抗策がないな。

「んで、どうすんだお前」

「うえ？」

「うえ？じゃないだろ。今からするのか？しないのか？」

「あーえーと（何の話してたんだ？全然わかんないけど）……」

する」

「そうか、それじゃあ加減はしないぜ」

そういうとバゼットさんと式さんは部屋を出ていった。これから何をするんだ？

◇

「まあここなら誰にも迷惑はかけないだろ」

「大丈夫ですか真琴君。本当ならベッドで休んでおくべきですよ？」

「心配するなら俺をベッドに縛るんだったな。あんたも大丈夫って思ったから止めなかったんだろ？」

「まあそうですが」

いまだに理解できない俺をよそに式さんはナイフを取り出す。え？ナイフ？ナンデエ!?

「で、どっちから？なんなら同時でもいいぜ？」

「そうですね。まずは私から「俺からやる」真琴君!？」

「別にいいだろ？（何するか分からないから）さっさと終わらせよう」

「へえ、案外元気だな。手当が効いたか？」

「多分な」

式さんはナイフ持ってるから俺もジャックにナイフを借りる。その瞬間式さんの目が輝いた気がしたけど気のせいだろう。

「じゃ……始めるか」

いきなり飛び出してくる式さん。なるほど殺る気か。マジで殺る気か……あれ？こんな話してたの？

「うわっ!？」

「（！今のを止めたのか？こいつ案外やるな）こいつはどうだ？」

「チッ！だあっ!」

ナイフ同士がぶつかり合う。確実に急所を狙ってくる式さん。それに対してギリギリナイフを止める俺。俺も戦闘慣れしてきたと思っただが、この人はその遥か上に行く。まるでいくつもの死線を潜り抜けた歴戦の戦士、みたいなの？

「そこだっ!」

「ッ！やるじゃん」

「ぐはっ！」

やるじゃんとか言いながら思いつき蹴りを叩き込んでくる式さん。メチャクチャ痛いんですけど。

(カモンツ！誰かいらないか?)

《それなら私の槍とジャック殿のナイフを合体させれば！》

《すらっがーらんすだよ！》

「(よし決まりだな!) ジャックさん! デイルムツドさん! 切れのいいやつ、頼みます！」

槍とナイフが合体して青い槍になる。光を越えて闇を切れそうな槍だな。

「スラツガーランス・・・どつかの光の戦士が使いそうだな」

「・・・分かるのか？」

「前に鮮花・・・オレの知り合いがそんな本読んでた」

「・・・いい友達になれそうだ！」

スラツガーランスで式さんを攻撃する。リーチ分もあって有利にことを進められる。式さんの表情から余裕が消える。そのかわり本気の顔になる。って不味いなこれ。

「直死・・・」

式さんの瞳が青く光る。綺麗な色だ。でもビームとかでないよな？

「殺られる前にやる！」

スラツガーランスのレバーを三回動かす。槍に魔力がためられていく。これなら一発ぐらい!!

「死が・・・オレの前に立つなよ?」

「トライデントスラッシュ!!」

スラツガーランスの超連撃。それを紙一重で交わしていく式さん。そしてスラツガーランスに一振り、ナイフを振り下ろす。それを受け止めると同時にスラツガーランスがへし折れる。

「お、折れたあ!!」

「ほら、隙だらけだぜ」

再び腹部を蹴られて吹っ飛ばされる。ヤバイ血が逆流してきた。

吐きそう。

「苦しいなら今のうちに吐いとけよ」

「はっ、可愛い女の子の前で吐けるかよ」

「可愛い？バゼットの何か？」

「いやバゼットさんはどっちかかという美人で」

「真琴君？それは私が歳をとっている？」

「いやいやそんなことないですよ？まあ可愛いのは式さんだけど」

「鉄拳制裁!!」

「へぼあっ!!」

バゼットさんにぶん殴られる。俺、怪我人なのに。

◇

式さんとバゼットさんはどうやら『組手』の話をしていたらしい。それで俺まで巻き込まれたと。普通大怪我してるのに誘うか？いや怪我ならバゼットさんもしてるな。

その後の『バーサーカーVSアサシン』は引き分けで終わった。ナイフを拳で止めるのは流石だよ。

それから式さんの彼氏の黒桐幹也さんと四人でご飯を食べて、俺たちはアパートを後にした。

◇

「何が『暫く休むから探さないで』だ。ここにいたら嫌でも見つかるだろう」

「それでも無視するのがいい男よ？」

バゼットさんの家の屋根にアーチャーはいた。お行儀よく体育座り。パンツ見えてるぞ。

「どうしたんだアーチャー？」

「別に。暫く休むだけよ」

「ほんとにか？」

「……ええ、そうよ」

嘘だな。ここのうのはよく見抜けてしまう。

「負けて悔しいんだろ」

「マスターは悔しくないの？」

「……どうだろうな。生まれてこの方負けたことはあまりなくてな。人生の勝負という勝負、あまり負けてない」

「何て言いながら、今日のはボロ負けじゃない」

確かにな。今までのアサシン、ランサー、アヴェンジャーは引き分けか勝ちで終わったからな。でも今回は完全に負けた。

「分からないのよ。今までは勝つビジョンが見えてたけど、今回は全然見えない。あんなの初めてよ」

「そんなこといったら俺だっけ見えてない。俺はサーヴァントじゃないからアーチャーほどの力はだせないし、誰かに頼らないと戦えないんだ」

「……お互い、全然見えてないわね」

「だな……」

二人の間を沈黙が流れる。再び口を開いたのはアーチャーだった。

「だからこそ『アーチャー』なのかもね」

「は？」

「ほらアーチャーって『弓』と『矢』がないと戦えないでしょ？私とマスターは弓と矢。どちらかだけだとダメなの。互いがいないと戦えないのよ」

なんてね、と言いながらアーチャーは顔を背ける。耳が赤いなこのアーチャー。

「いい言葉じゃないかアーチャー。青臭いぐらいが丁度いい台詞だ」

「やめてよ恥ずかしい……」

「要は二人三脚だろ？どつちかが見えてないならもう一人が見る。二人とも見えてないなら……」

「諦める？」

「ネバー・セイ・ネバーだ。『出来ないなんて言わないで』。どつちかが見えるまで互いに支え続ける」

「気長ね」

「それぐらいが丁度いいだろ？アーチャー狙撃主なんてターゲットが動くまでずっと待ち続けるんだから」

あれ？なんか語ってるな俺。でもアーチャーが元気になったなら

それでいいけど。今回の相手は二人とも勝つビジョンが見えていない。なら見えるまで待たないとな。

「真琴君！ランサーが何か食べたいと言っているので牛丼食べに行きましよう！」

「だからなんで牛丼!?!」

下でバゼットさんが叫んでいる。腹が減るのが早いねあの人は。

「んじやあ行くか矢^{アーチャー}」

「OK 弓^{マスター}！」

こうして再び進み始める。さあ弓矢コンビで反撃開始だ。

雪を染めるもの

どうやら昨日の夜中から大吹雪のようだったらしい。外一面は銀世界と化していた。こんな日は外で遊ぶのが一番だけど……

「あくここから出たくない〜」

「そんなこと言つてないでシヤキツとしなさい」

「そんなこと言いながらシエルだって炬燵に体埋めて。ちよつと邪魔なんだけど」

「ふん、大人二人が情けないわね。ここは子供の私に譲りなさい、よ!!」

「ちよつと蹴らないでよイリヤ!」

「痛たたた!どこ蹴つてるんですか!」

引つ張り出してきた炬燵に入る三人の女性。

一人はイリヤさん。アサシンのマスターだ。いつもは大人びているのに、ここぞというときには子供の特権を使ってくる。

もう一人はアルクエイドさん。昨日知り合った女性だ。キノコ狩りに山に来ていたらしい。でも彼女には変なキノコしかないと思う。

更に増えたのはシエルさん。なんでも冬木に仕事で来ているらしい。アルクエイドさんもその手伝いに来ているとか。

「まったく。一人で行動するなどは言いませんがそれにも限度があります。何故キノコ狩りなんですか!」

「えーいいじゃんキノコ。なんか食べたくなつたのよ」

「でも彼処変なキノコしかないわよ?」

「え!?食べなくてよかつた。あ、でも昨日のシエルのカレーにいれちゃつた……」

「どうりでお腹が痛いはずですよ……」

なんとも微笑ましい場面。でも私は……

「あの……そろそろ冷えてきたんですけど。炬燵に入れてもらえないでしょうか?」

「「あ……」」

どうやら本気で忘れ去られていたようです。

◇

昨日アルクエイドさんと出会ったあと、

「私はシエル……って人の仕事の手伝いでこの冬木に来てるの。今は勝手に自由行動中」

「勝手に動いていいんですか?」

「多分ダメかな。さつき連絡あったし。jeepeeです位置情報送ったからそのうち来ると思うけど……取り込み中だった?」

「ああ現在取り込「いいえ問題ないわ」イリヤ!」

「いいじゃないアサシン。きつとそのシエルって人の仕事と、私たちの目的は多分一緒だから」

「え?どういうこと?貴女もシエルと同じ?」

「はあ、巻き込むのが上手いねイリヤは」

こんな会話が私とライダーを置いて繰り広げられていた。そしてシエルさんが到着したあとも何やら難しい話をしていた。というか参加させてもらえなかった。

イリヤさんにはただ『サーヴァントは任せたわよ』とだけ。いまだに私だけ話の輪に入れていない。ついでに炬燵にも入れていない。あげくの果てにはライダーと一緒に買い出しに出された。

「もう、少しぐらい話してくれてもいいのに」

「相手が普通の人間のマスターなら良かったのだがな。なにせ相手は化け物だ。桜には相手をさせたくないのだろう」

「化け物?」

「桜は知らないか。まあ話しておく。アヴェンジャーのマスターは死徒と呼ばれる、まあ簡単に言えば吸血鬼、そう認識しておけ」

そんなのが存在するんだ。でもまあライダーみたいな存在もいるのだから不思議に思う必要もないのかな?

「俺の存在していた時代にも死徒という存在が囁かれていた。だが前よりはその存在も薄れているようだな。こうして見たのは二回目だ」

「一回目は?」

「俺が死神……魔進チエイサーとして戦ったはじめての相手だ。さほど苦戦もしなかったが」

「じゃあ勝てるの!？」

「それはわからん。昔の死徒とは戦ったことないからな」

ライダーは私にヘルメットを渡してきた。今から家に帰る。きつと三人とも寝転がってぐうたらしてるんだろうな。

「桜、少しよるところがある。構わないか？」

「え? いいけど」

ライダーはそのままバイクを走らせた。その先は町外れの森だった。

◇

「はいはい。あれ間桐、とライダー」

「あれ狩野先輩? どうしてここに」

「おおかた同棲中か?」

「間違いじゃないけど、同盟関係って言ってほしいな」

洋館にたどり着いたらそこには狩野先輩がいた。彼がアーチャーのマスターとライダーから聞いている。特に驚かないけど、

「どうかしましたか真琴君。な!?!何故ライダーがここに!」

「そんなに驚くなよバゼットさん」

「お前たちに話があつてきた」

そう言うときライダーは勝手に上がり込んだ。靴は脱ごうよ……

「はいブラックジャック!」

「だぁーまたバースト!」

部屋のなかではアーチャーとランサーがブラックジャックで遊んでいた。同盟中とは言え敵同士なのにここまで仲がいいとは。

「はいカードは片付けてください」

「おいおい負け越してるからってなあ!」「そうそうとカードを片付けるのは」「大人げないぞ!」

「だそうですが?」

「ごはん抜きです」

「別にい〜ご飯食べなくてもサーヴァントは大丈夫だし?」

「そうでしたね。ではホットドックでも食べますか?」

「調子のもつてスミマセン」

なんかコントを見ているみたい。

「話をしているか？」

「「どうぞどうぞ」」

「では単刀直入に言う。クリーザを倒すのに協力してほしい」

「クリーザを」「倒すのに」「協力して」「ほしい？」

「クリーザの配下には強力なサーヴァントがあと五騎いる。それらを倒すのに協力してもらいたい。どうだろうか」

「俺はいいぜ。あの狐尻尾にリベンジしなくちやな」

「私もマスターと同じ」

「我々も負けてますからね。名誉挽回といきますか」

「だな。野郎は俺が潰す」

アーチャー、ランサー陣営は賛成のようだ。これでこちらはライダー、アサシン、アーチャー、ランサー陣営。更にアルクエイドさんにシエルさんがいる。これで先輩と姉さんがいれば。

「これで、アヴェンジャー陣営以外が仲間というわけだな」

「え？先輩たちがまだ」

「そこは昨日のうちに声をかけておいた。二つ返事だったぞ」

いつの間に。いやそういえばライダー、夕方ごろいなかっただけど……

◇

洋館をあとにして家に帰る。案の定三人は炬燵でゴロゴロしていた。外とは段違いの温さだ。

「もうゴロゴロしてないでご飯の準備ぐらい手伝ってくださいよ」

「そうですね。少しぐらいなら手伝えます。ほら二人も動いてください」

「ガンバレー」

しかしイリヤさんとアルクエイドさんは動かない。炬燵に入っている二人の顔はフニャフニャしている。つまり幸せそうな顔。

「まあやりますかシエルさん」

「そうですね。で、メニューはカレーですか？」

「や・り・ま・す・か？」

「……はい手伝います」

◇

今度はおやつが食べたいとのことで商店街まで足を運んでいた。

「これぐらいあれば……足りるかな？」

「なにやってんだよ桜」

「あ、兄さん？」

丁度公園に差し掛かったところで兄さんと出会う。そういえば今日は朝から見ていなかった。

「兄さんこそどうしたんですか？」

「バカと一緒にの空間にいたくないだけだよ」

多分あの三人だろうな……

「またバカみたいに買ったな」

「これぐらいないと足りませんよ」

「だろうな……あんまり無理するなよ桜」

途端に兄さんの口から出たのは私に対する心配の言葉だった。とても珍しい。だからまた雪が降ってきたのだろうか？

「なに驚いた顔してんだよ。僕だって心配ぐらいするさ。お前の兄貴なんだから」

顔は不機嫌そうだ。でもそれでも心配してくれている。なんとなくうれしい。兄さんに心配してもらったのはいつぶりだろう。

「聖杯戦争は大変だろ？なんなら僕が変わってもいい。いや変われ。僕だって叶えたい夢があるんだよ！」

「ふふっ、ありがとうございます兄さん。でも一度やり始めたことは最後までやりとげないと」

「はあ、相変わらずめんどくせえなあお前は。いいよ。なら最後までやりとげろよ。少しは手伝ってやるから」

気持ち悪いぐらい優しい兄さん。でも間違はなくこの人は私の兄だ。間桐慎二だ。たまにはこんな日も悪くないかな。

そして私は一歩踏み出す。

でもその足取りは止まる。

理由はすぐには分からなかった。

そして分かった。

お腹が痛い。お腹を触ると手が赤くなっている。

喉をナニか熱いものが込み上げてくる。間違いない。血だ。

「兄……さん？」

「手伝ってやるよ。お前がさっさと死ぬように」

「……なあ」

「どうしたのマスター。今すんごくイライラしてるんだけど」

「それは多分ここにいるやつ全員だから安心しろ」

俺達四人はテレビの前で怒りをためていた。理由は簡単。間桐桜が何者かに襲われて重傷らしい。襲ったのは分かっていない。でも俺達には分かる。

「ねえ、これって」

「一人ずつ、確実に、ですか」

「気に入らねえな。こういうのも戦法ってわかるんだが、どうも気に入らねえ」

「もう場所は分かってるんでしょバゼットさん」

「ええ、新都のホテルです。勿論」「今から殴り込みだ。もう誰もやらせねえ」

俺達は静かに雪が降る外へと出た。そこから向かうのは一ヶ所。今度こそ倒す。

「衛宮君、まさか一人でいくつもり？」

「止めても無駄だぞ」

「バカね。誰も止めないわよ。私が言いたいのは、私も連れていけつてこと」

遠坂と外へ出る。そこにはアーチャーがオープンカーに乗って待っていた。

「はあ、まったく。私は運転できないぞ？」

「だからって私たちに運転させるの？それこそ一発で捕まるわ。ある程度大人に見えるあんたに運転させるのよ」

「やれやれ。どうなっても知らんが……それでもいいなら乗るがいい」

「よし……いくぞ！」

アーチャーの運転のもと、俺達は新都に向かった。桜の敵を取りに。

「クリーザの場所が分かりました。新都のホテルです」

「桜をこんな目にあわせて。ただじやおかないんだから！」

「桜はイリヤとアサシン、ライダーに任せておきましょう。私たちは私たちの仕事を」

「ほら出来たよ。こいつで完成だ」

「ほう、流石といったところか。妹が魔法使いなら姉も化け物か」

「誉め言葉かい？だがまあ英霊の腕を作ることになるとはね。いい経

験をさせてもらった」

「ではな、代金は冬木教会に頼むぞ」

「おや？案外ケチなんだな英雄王」

「あまり詮索するなよ蒼崎橙子。禁句を言われたくなければな」

「言われたところで、お前をぶち殺すから問題ないさ」

「さて、もうすぐか。アヴェンジャーはここに残れ。あとは潰してこい。さあ楽しい愉しい祭りの始まりだ」

それぞれの壁

ベアー号を走らしホテルを指すアーチャーと真琴。しかしここで問題発生。

「あれ？ガス欠!？」

「はあ？マジかよ!？」

ベアー号がガス欠をおこしたのだ。運転はできるがバイクそのものには無知なアーチャーと真琴。こんなときにバゼットがいればなんとかなっただろう。

「仕方ない走っていくか」

「そうするしか・・・いいえ、走らなくていいみたいよ」

アーチャーの見つめる先には狐尻尾の女、サーヴァント『ビースト』が立っている。手には大きな槍と白銀の剣。真琴は菊一文字を抜刀、アーチャーは弓と矢を構える。

「さて・・・始めますかお二人方」

「対抗策は？」

「今のところは・・・殺られるまえに殺る。これしかないわ」

「まあ、何も無いよりはマシだな！」



真琴とは別ルートでホテルを指すバゼットとランサー。しかし彼らの前にも敵は立ちふさがった。

「あれえ？また来たんだ。今度は死んじゃうよ？」

「はっ、サーヴァントつてのは既に死んでるだろ？今さら二回目の死が怖いなんて言わねえよ」

「今回は切り札を用意しました。絶対に負けません」

「そう、確かに今は私一人。でもねクーちゃん」

メイヴの体が黒い霧に包まれる。そしてその黒い霧はメイヴから離れると形を形成し始める。

「私がクーちゃんの槍を使えるわけじゃないじゃない。それこそ使えるのはクーちゃんとスカサハぐらい」

「じゃあなんで使えんだよ」

「答えは簡単。私の中に」

霧は次第に形を整える。その形にランサーとバゼット、二人ともが驚きの表情を隠せていない。

「クー・フリーンがいるからよ」

霧はランサーと同じ顔をしている。違うのはその格好。ランサーのような青い服装ではなく、黒い禍々しい鎧に身を包んでいる。

「これで二対二。どちらか一方が潰れば、その時点で敗北は確定するわ。それでもやる？」

「まあ負けるわけねえからな。なあバゼット！」

「当然です！ここで足を止めておけません！」

◇

これまた違うルート。アーチャーの運転のもとホテルを目指す士郎と凜。このまま何事もなくなるとどり着けばよかったが、

「……どうやら黙って通してはくれないようだ」

セイバーオルタが立ち塞がる。その金色の瞳には士郎たち三人を見据えている。

「シロウ……貴方は足手まといだとリンに伝えたのですが」

「セイバー……」

「悪いわねセイバー。今の衛宮君は私なんかよりずっと強いわ。もしかしたらアーチャーより強いかも」

「それはないぞ凜」

「いいのよ。こういうのはビビらしたものの勝ちなの」

あのセイバーは普段よりも攻撃に容赦がない。下手をすれば三人でも潰される。現に前回敗北した。それでもこの男は、

「遠坂、アーチャー。ここは俺に任せてくれ」

「……言うと思った」

「悪いな。先に行つててくれ」

「こうなると頑固なんだから。行くわよアーチャー」

「了解だ凜。それと衛宮士郎、私の言ったことはキチンと守れよ」

「分かつてる」

凜とアーチャーはそのままホテルを目指す。それをセイバーは止

めなかった。否、止める必要がないからだ。

「どうやら死にたがりにはシロウのようですね」

「言ってるセイバー。俺は前より強いぜ」

「その慢心が命取りです」

「少しは自分に余裕を持つておきたいんだよ」

◇

「あのおスミマセン。間桐桜の兄の間桐慎二ですが」

「ああ桜さんのお兄さんですか。桜さんなら五階の五〇四号室ですよ」

「ありがとうございます。じゃあ死んでね」

え？という表情をしながら血を吹き出す看護師。当然その場は大パニックになる。それでも間桐慎二はケラケラ笑いながらその部屋を目指していた。

「ビーコーカーナー？ここだっ！」

わざと別の部屋を空けて中にいる人を殺していく。これほどまでに残忍な人間はいないだろう。

そうアサシンとイリヤは感じ取っていた。

「とんだ外道ね貴方」

「僕の生きていた時代にも奴みたいのが少なからず存在した。奴ほどじゃないが……見ていて吐き気がする。ここで殺しておくべきだ」
「はあ？何言ってるのおたくら？僕を殺す？ファーハハハハお笑いだね!!無理無理、お前ら凡人が僕を殺すなんて無理だね!」

「……夢幻召喚^{インストール}」

「時のある間に薔薇^{クッロノス}を摘め^ス」

イリヤはインストールで『魔法少女プリズマ☆イリヤ ツヴァイフォーム』に。アサシンは常時宝具を発動し速度を早める。これに対して慎二は、

「どうせ無理なんだよ。この僕にはっ!!」

二枚のカードを取り出す。一枚にはアサシンの絵柄。もう一枚にはライダーの絵柄。そしてそれを自分の腹に押し込んだ。カードは吸い込まれていき、慎二は光に包まれる。

「暗殺者と病ハサシ！これが僕の！マトウシンジの力だ!!」

「もう君は人間じゃない。それは自身でも分かっているんだろうけどね」

「もう・・・ぶち殺す!!」

「やってみなヨ。僕を殺してみなヨ!!」

◇

そして戦いは始まる。

真琴とアーチャーはビーストとの最強の耐久戦へ

バゼットとランサーは女王と凶王とのタッグマッチへ

士郎は最強の聖剣セイバーとの戦いに

イリヤとアサシンは最悪の屑を倒すために

『人払い』で人がいなくなった新都で繰り広げられるマスターとサーヴァントの戦い。脱落するのは・・・

太陽面爆発を凌駕する究極の女子力

それぞれの攻撃がぶつかり合い、火花を散らす。

「ツッ！だあつ！」「おうりゃあ!!」

「フツッ!!」

いまだにアーチャー、真琴には対抗策は思い付いておらず、いや考える暇もなかった。ビーストの巨大な槍、そして白銀の剣、共に振るう速度を上げてきている。

「ハ——ツッ——このっ!!」

「甘いですよ」

アーチャーの放ったホーミングアローをビーストは意図も簡単に鏡で防ぐ。しかしアーチャーは攻撃を受け止められたというのに、その表情に笑みを浮かべる

アグニ・ガンデーヴァ
「炎神の咆哮!!」

宝具を連続で打ち出す。ビーストはそれを剣の一振りから発せられた炎の渦で相殺する。

「……ふーん」

今度はビルをかけ登りちようどいい高さからビーストを狙う。今度は更なる宝具と宝具の組み合わせ。

一つは大英雄アラシユが戦を終わらせた絶技。しかし使用後は五体四散してしまう。

もう一つはアーチャー自身も関わりがある一撃。寧ろ彼にとってこれが本来の宝具。破壊神シヴァが■■■■に授けた鏃。

それぞれ強力な宝具に変わりはない。しかし無理矢理組合わせたためメリットはほとんど消され、ただの威力重視の宝具に成り下がっている。唯一のメリットはアラシユの宝具のデメリットも消えているところか。

パーシユバタ・ステラ
「破壊神の流星!!」

「無駄と分かりませんか？」

迫る一撃にビーストは落ち着いた表情で剣を放り投げる。するとビーストの周りが炎に包まれる。再び剣をつかんだ頃には炎はビー

ストの頭上で炎々と燃え続ける。まるで太陽のように。

「この剣は太陽の移し身。あらゆる不浄を清める焔の陽炎！」

剣、いや聖剣は更に輝きをましアーチャーにその一撃を振るう。

「エクスカリバー・ガラティーン転輪する黒き太陽の剣!!!」

敵を一掃する為の宝具。それは真横への放射型となっている。迫る一撃同士の激突。当然ながら衝突した瞬間の被害はとてつもなく、「うわっ!!」

「キッツ……!」

「くっ……」

三人とも吹き飛ばされそうになる。なんとか耐え抜くが周りのビルはほとんどのガラスが吹き飛び、一部崩れかかっている。真琴とアーチャーはなんとか物陰に隠れてビーストから逃げている。

「やりすぎだろ馬鹿力ども」

「加減は出来ないの。とマスター」

「どうした？」

「分かったわよ。対抗策」

「本当か!」

「ええ、まずは彼女の真名ね。彼女は『玉藻の前』。あー簡単に言えば……神様?そして彼女は『日本の英霊』だから、本当なら聖杯戦争には召喚されない。ここまでのいい?」

「まあ……なんとなくわかる。でも玉藻の前ってあんなバカデカイ槍とか聖剣なんて使わないだろ?」

「そう、そこなの。現在の彼女はもう二人の英雄の力を使える。一人は施しの英雄『カルナ』。マハーバーラタに出てくるわね。もう一人は太陽の騎士『ガウエイン』アーサー王伝説に出てくる円卓の騎士よ」
「カルナにガウエイン。その二人の力が玉藻の前に混ぜてるのか」

「かなり厄介よ。まずガウエインの『聖者の数字』。これは簡単に言えば『太陽が出ている間は力が3倍』になるの。まあ細かい時間設定もあるみたいだけど。」

もう一つはあの浮いている鏡。あれはカルナの鎧
『カヴァーチャー&クンダーラ日輪よ、具足となれ』でコーティングされてる。破壊するのは無理」

「鎧の真名まで知ってるのか・・・詳しいな」

「カルナの事はね。で、ここから導き出される答えは」

「勝つのは不可能?」

「そんなことはないわ。倒すことはできる。時間はかかるけど・・・私の一撃が決まれば確実に。でもその為には時間を稼がなくちゃいけない・・・そのマスター?」

アーチャーが期待の目で見ってくる。

「お願いできる?」

「俺が?・・・いや普通に考えて無理だろ」

「でしようね。下手したら即効で死ぬし。分かったわここはプランBでいきましょう。夜まで必死に耐える」

「夜まで!?今何時だと思ってるんだよ!最低でもあと六時間は耐えなくちゃいけないんだぞ!!」

「それしか方法がな痛っ!なにをするのよ!」

「ふざけんな。そんな長い間戦えるわけないだろ。俺が時間稼ぐ。どれくらいやればいい」

「マスター・・・十分でいい」

「んじゃ・・・いきますか」

真琴はそのままビーストの前に立ちふさがる。アーチャーは申し訳なさど不安を残したまま一時離脱した。

◇

(さてアーチャーはどんなの用意してくるのか。場合によっては少しは余力を残すべきか。いやあえて全力でぶつかって倒しちゃおうか?)
《大丈夫なの?相手は強敵よ?いくらマスターの中では強いとはいえ無茶よ!》

《今回ばかりはエレナ殿と同意件です・・・ですが、止まらないのでしようね、貴方は》

《いっつも無茶するよな大将は。いいぜ、最後まで付き合っつてやるぜ》
《うん!ぜったい死なせないよ!》

《皆で・・・助け・・・合う!》

(ありがとう皆。こんなバカについてきてくれて)

《ほんとバカね。私が言うのもなんだけど、アンタとびつきりに大馬鹿ね》

(じゃあジャンヌは反対か?)

《はあ?それこそバカな質問よ。私もバカなんだから、やりあうしか出来ないのよ。最後まで付き合うわ真琴》

(一番頼もしいなお前は。そういうの好きだぜ)

《はああ!?な、なにいつてるのよ!マジでバカじゃないの!?!》

(さあ、アーチャーが帰ってくるまでの辛抱だ。存分に暴れるぞ!!)

真琴は確かに強いマスターだ。しかしそれは頼れる仲間がいるから。いつまでも信頼してくれる仲間がいるからだ。

「はあああああっ!!!」

真琴の体から徐々に金色の魔力が放出される。地響きが続く、パラパラと破片が浮かび上がる。そしてそれは一気に解放される。

「超マハトマンゴールデン・・・お前を倒す者だ」

真琴は自身の周りに金色のオーラ、その内側に青いオーラをまとっている。髪は一部が金髪になり、バチバチと電撃が走っている。言うまでもなくエレナと金時の力だ。

「あら・・・なかなか面白い趣向ですね」

「だろ?」

真琴は菊一文字を構えると縮地を発動。今までよりも遥かに早いスピードでビーストの目の前までワープする。

そう、何を隠そうこの『超マハトマンゴールデン』は全身の筋力、精神力、気力、魔力など様々な部分を飛躍的上昇させる。いわば高次元的存在に近づいているのだ!

「鶴翼・二段切り!!」

体を捻りながら刀をビーストの右脇腹へと叩き込む。が当然それは聖剣で止められる。しかし聖剣で防がれた次の瞬間には剣は首の左側を狙っていた。それを紙一重、体を後ろへ反らすことで交わすビースト。

「ジャック!」《うん!》

次にジャックのナイフを取りだし宝具を発動させる。幾人もの女

性を切り捨てたジャック・ザ・リッパーの奥義ともいえるもの。

マリァ・ザ・リッパ
「解体聖母！」

しかし奥義はビーストの着物を少し掠めるぐらいだった。だがこれでいい。少しでも気を抜いたら確実に『死ぬ』ということに分からせればいい。ビビらせたもの勝ちとは『あかいあくま』の弁である。「まだまだいくぜージャックツインソード！」

今度はナイフを連結させ巨大な剣にする。これもマハトマの力だろう。

「ハ——ッ！」

「せいっ！」

聖剣と殺人鬼の剣が衝突する。何度も何度も繰り返し衝突させる。真琴もギリギリだがビーストもその表情から余裕が消えた。

「おうりゃあ!!」

「くっ——危ないです、ね!!」

ツインソードを回避し距離をとるビースト。回避しながら聖剣から槍にもちかえ魔力を充填する。尻尾が六本増えて最大威力までチャージする。

ヴァーサ
「黒き日輪よ、……」

「(あれを防ぎきる方法はない。だったら!) 槍騎・破魔黄金疾走!!」
ゴールデン・ジャルグ

「死に随え!!」
シャクティ

ヴァサヴィ・シャクティが放たれる前に槍を投げる。槍は一直線に進んでいきビーストの槍に命中する。その結果槍は上を向き宝具は上空へと放たれた。空中で大爆発を起こしている隙に真琴はビーストの懐に潜り込む。

「マハトマスラツガーランス！」

「なっ!？」

「一気に決める!スラツガーシユート!ビッグバンスラスト!!」

レバーを一回引いて魔力を貯める。更に二回引いてまた魔力を込める。そしてビーストのお腹に一気に解放する。

ブラステッド・ツリー
「まだまだ!磔刑の雷樹!吼え立てよ、我が憤怒!!」
ラ・グロンドメント・デユ・ヘイン

更にフランの戦槌とジャンヌの旗を取り出して宝具を発動させる。

ビーストの一瞬の間も見逃すわけにはいかなかった。

戦槌から放たれた雷撃はビーストに逃げ場をなくし、復讐の炎がビーストを焼き尽くす。それでも真琴は止まらない。既に体力に限界はきているだろう。それでもやるしかない。

「ツ——このお！」

「終わりだ！煌・突き通せ、誠の腕!!!」

真琴の右腕と菊一文字が光に包まれる。そのまま縮地でビーストに迫る。それに対しビーストはもう一度聖剣を握り擬似太陽を解放させる。今までよりも輝くように。そして繰り出す灼熱の一閃。

「この輝きの前に夜は退け、虚飾を払うは星の聖剣！
エクスカリバー・ガラティーン
転輪する黒き太陽の剣!!」

強烈な一撃同士がぶつかり合う。これには他の場所で戦っていたサーヴァント、マスターも感じ取れる程の魔力だった。そして誰もが思った。

『あー、当たらなくてよかった』と。

◇

真琴とビーストの攻撃が衝突してからすぐにアーチャーが戻ってきた。辺りの惨状は酷いものだった。いつビルが倒壊してもおかしく、辺り一体は火の海と化していた。多分隠蔽も出来ない。絶対に。

「マスター！」

「ん？ああ……アーチャーか」

「その……大丈夫？」

「問題おありだ……マジでヤバイ」

真琴は既に体力、魔力ともにほとんど使いきっており、こうして気絶せずにいられるのは単に気合いだ。アーチャーに魔力を回すのも辛そうだ。

「ビーストは？」

「まだ……倒せてない」

「そう……マスターは休んで。後から来てなんだけど、あとは私がやる」

「最初から……アーチャーにバトンタッチするまでが俺の仕事だ……」

暴れてこい」

真琴を一先ず避難させる。ビーストとの決着が遅ければ真琴は死んでしまう。これは時間との勝負でもある。マスターが危険になったらすぐにでも離脱しなくてはいけない。アーチャーはそう肝に命じてビーストの前に立つ。

「選手交替よビースト。いいえ玉藻の前」

「よもやここまでやられるとは思っていませんでした。ガウエイン卿とカルナさんの力をもつてしても、あのマスターは倒せなかった。不思議です」

「それには理由が三つある。」

一つ。マスターの中には七騎の英雄の力がある。まあ一つ消えて六騎になったみたいだけど。

二つ。貴女はガウエインとカルナの力を使いこなしているようで、実は使いこなせていなかった。混ぜすぎ注意ね。

三つ。最後の一つは……」

アーチャーが光に包まれる。その衣服も変わっていく。これはモチベーションの問題ではない。機能性を重視したモノだ。

「私のマスター、狩野真琴が最強だからよ!!」

いつもの白い服ではなく、赤い服になる。そして水色の髪の毛も金色に変化する。手にした矢と弓も銀と赤を基調としたものになる。

「フツ——ハッ!」

「!?」
疲れか、それとも異常なまでに進化したアーチャーに驚いたのか、ビーストの動きが少し遅れてしまう。それでもアーチャーの連撃に対して聖剣と槍を駆使して防ぎきる。

「なるほど……マスターに押し付けて一時離脱しただけはありますね」

「そのことは後悔してる。あんな事するんじゃないかった。でももう過去には戻れない。ならマスターに稼いでもらったこの時間、無駄にはしない!!」

「あの人もよくこのサーヴァントを使い続けますね。私なら絶対にマ

スターをこのような時間稼ぎはさせませんが」

「だから後悔してるって言ってるでしょ！」

いつも以上にムキになるアーチャー。息も上がっている。さつきまで離脱していた割には苦戦している印象が強い。疑問に思うビーストだが、

「なるほど……全額勝負ですか」

「ツ——だあっ!!」

「ならばこちらも、全力でやるしかないようです、ね!!」

矢と聖剣、弓と槍が衝突する。そして一度距離をとる二人。ビーストは聖剣と槍を捨て鏡に魔力を貯める。これこそが玉藻の前としての宝具。

アーチャーは右手に魔力を貯める。これがアーチャーの宝具。そしてアーチャーの全ての対人奥義はここから派生していたり。

「これで決める！」

「攻・水天日光天照八野鎮石」

「破壊神の手翳!!」

アーチャーは宝具を発動したままビーストに突っ込む。対してビーストはアーチャーに向けて鏡から魔力を解放させる。一直線に進んでいく魔力はもうすぐアーチャーに命中する。それでもアーチャーは速度を緩めることなくビーストに向かう。そして魔力がアーチャーに命中する寸前、

「ここで、殺られるもんですかっ!!」

体を捻り間一髪交わす。驚くビースト。それでももう一度アーチャーへと鏡を向ける。が、既にアーチャーの姿はビーストの目の前にあつた。

「サーヴァント、マスター共々……入り込むのが好きですね」

「……マスターのサーヴァントだからね」

ビーストに破壊神の手翳を叩き込む。世界を七回滅ぼせる程の威力を誇る宝具を超至近距離で食らえばどうなるか。当然その肉体はあつという間に滅びるだろう。しかしビーストはそれでも立っていた。

「ハア……ハア……なんなら、もう一発！」

「やれるなら……やってみてくださいよ」

「なら見せてあげる。進化した女子力を！」

もう一度距離を取り、右足に魔力を回す。次第に右足は炎と電撃を纏う。アーチャーはそこから一気に走りだしビーストの手前で跳ぶ。

そして空中で一回転し放つ飛び蹴り。その真名は、

「太陽面爆発を凌駕する究極の女子力!!!」

以前破られた対人奥義。その強化版。以前の対人奥義でもそれなりに威力はあった。しかしビーストには通用しなかった。それからアーチャーはどうしたら対人奥義を強化できるか考えていた。

本来宝具は聖杯戦争中に新しく追加することは出来ない。しかし少しアレンジを加えるなどして宝具を使うことはあるらしい。それは対人奥義でも同じこと。少しのアレンジが最大の破壊力を生むのだ。

「はああああっ!!!」

「ぐっ!——がはっ!」

ビーストはアーチャーの対人奥義に対して以前のように宝具で対抗をしなかった。負けることが分かっていたのか。それとも宝具を用いても防ぎきれないと判断したのか。受け入れるように対人奥義を食らったビースト。アーチャーはこの行動に疑問をもった。

「どうして防がなかったのかしら?やる気なくなった?」

「……ふっ、自分でも分かりませんよ。ただ、」

「ただ……何よ?」

「貴方のマスターが気に入ったから、でしょうか」

「それ、理由になってない」

「そんなことありません。好きな人が幸福でいられることを願う。それが良妻ですから。それにもう避ける気力も魔力も体力もありませんし。それに貴女は女子力ゼロですし」

「好きな人が幸福で……って、ええ!?てか私の女子力はいいでしょ!?!」

「さて……ここまででしたのですから、奴を倒して、マスターを幸せ

にしてくださいまし。そうでないと末代まで呪って……」

「わわわ！タンマタンマ！わかったわよ！必ずクリーザを倒して、少しでもマスターの肩の荷を降ろしてあげる。それでいい？」

「ええ……安心……しま……し……」

ビースト、いや玉藻の前は最後まで言うことなく消滅した。

「凄いなあアーチャー。倒したのか」

「マスターのおかげよ。いろんな意味で」

「まあ俺も……頑張っイテテテテ」

「無理しないの。まずは病院に行きましよう？このままクリーザは無理よ」

「だろうな。足引つ張るだけだ」

「そうよ……あーごめん。私も無理っぽい」

「え？っておいおいおい！上に倒れグハツ!!」

凄まじい戦いのあとかアーチャーは俺の上に倒れてきた。もう少し胸があつたら役得だったのに。

「って、無理ないな。お疲れアーチャー」

《あんたもお疲れ、まあ良かったんじゃない？》

(皆もお疲れ。サンキューな)

《これは真琴殿がしたこと。我々は武器と力を貸しただけです》

《こればかりはヒヤヒヤしたわよ。でも無事でよかった》

《まあ大将ならもつと上に行けるかもな!》

《おつかれ、まこと!!》

《おつ……かれ……》

「沖田さんも……おつかれさん」

菊一文字を眺める。羽織りはボロボロになってしまったが、この刀だけはなんともない。まさに幕末最強。流石だな。

「あー眠い。アーチャーも起きないし……少し寝るか……」

仕方なくだぞ？動けないからここで寝るのであってだな。別にアーチャーの少しある胸の膨らみを楽しみたいがためにこのまま寝るんじゃない！断じて違うぞ!!

とまあ、玉藻の前との戦いはここで終わった。いやあ今までで一番しんどかったぜ……」
「道路冷たっ……」

俺と私の一番の英雄

シヨツピングモール『ヴェルデ』

今現在ここは戦場と化している。食品売り場ではバゼットとメイヴが。地下の駐車場ではランサーとクー・フリーン・オルタが戦闘している。

食品売り場

バゼットとメイヴの戦闘はメイヴが優勢に見えた。実際バゼットはメイヴの鞭に翻弄されている。どこから来るかわからない変則的な動きに障害物が多いこの食品売り場ではバゼットにとって不利なステージだった。

「アハハハ！ほらほらもつと鳴きなさい!!」

(不味い、このままでは。この状況をなんとかしないと)

「もう終わりなの？いいえ終わらせないわ。もつとよ!」

バゼットに考える隙も与えないメイヴ。鞭はバゼットの左腕に巻きつき離さない。そしてそのままパン売り場に投げ飛ばされる。

「このままでは…このっ!」

「何よ死に損ない!」

それでもバゼットは立ち上がりメイヴに拳を振るう。メイヴ自身もそれに対応するがいくつかは当たってしまう。それがメイヴにとって致命的なミスになる。

「そこっ!!」

「いたっ!なにをするの、よ!」

「甘いっ!」

メイヴの攻撃を交わし、なお拳を叩き込み続ける。メイヴは一撃一撃確実にバゼットにダメージを与えるに對して、バゼットはメイヴに隙に連続で攻撃を叩き込みまた隙を見つけるまで必死に耐える。

実はこのやり取り、もう10回目なのである。

「くっ!このやり取り、もうやめにしない?」

「自慢ではありませんが、私普通の人間なのでサーヴァント相手にこのような戦法しかできないんですよ」

「頭から血を流しながら殴って来るのが普通の人間なら、こんな提案しないわよ!!」

そう、バゼットはメイヴの攻撃をほとんど食らっているために全身へのダメージが凄まじいものになっている。頭からは血を流し、左腕の骨はヒビが入っている。更に全身の力をフルに活用した攻撃をしているために全身の筋肉が悲鳴を上げていた。

「そう、もう限界でしょ? ツライんでしょ? だから楽にしてあげる」
「やれるなら、やってみてくださいよ!!」

バゼットは硬化のルーンを両足にも発動させてメイヴに突進する。更に両手のグローブに炎のルーンを刻む。燃える拳がメイヴを襲う。

「アンサズ: クーちゃんも得意だったっけ」

「せいやっ!!」

「だからこそ」

炎のパンチを交わすと同時にバゼットの左腕に鞭を強く巻きつける。ミシミシと厭な音をたてる。

「ぐっ、うああっ!」

「勝手にクーちゃんの特技をとらないでっ!!」

そしてそのまま何度も地面にバゼットを叩きつける。何度も何度も。初めのうちはバゼットも叩きつけられる度になんとか振り解こうと抵抗した。しかしそのうちバゼットは抵抗をやめた。そしてグシャっという音を聞きメイヴは叩きつけるのをやめた。

「なんだ: クーちゃんのマスターなんだからもう少し頑丈と思っていたのに」

虚ろな目を開いたまま倒れたバゼット。その手には落ちていたチーズが握られていた。

◇

地下駐車場

「ハア: ハア: クソッ! 野郎なんてモンまどってやがる」

ランサーは車の陰に身を潜めていた。彼自身右腕を負傷していた。更にオルタとでは相性が悪かった。ランサーとオルタの宝具は共に『ゲイ・ボルク』。能力は『因果逆転の呪い』。しかし呪い同士の衝突は

さらなる矛盾を発生させる。つまり宝具では勝負は決しない。

しかしオルタにはもう一つ宝具が存在した。それはとある海に存在した海獣。魔槍の素材となった化け物の鎧。その名も『噛み砕く死牙の獣』。魔槍を捨てることで発動できるオルタの宝具。「あーあんな宝具があるなんてな。ありやスカサハ師匠でもキツイかもな」

一台一台車を破壊して回るオルタ。魔槍を自ら封じている今がチャンス、なのだが。クリード・コインヘンは自身の攻撃力、防御力、素早さ、魔力など全ての機能が大幅にパワーアップしている。負傷している今、のこのこ姿を現せば宝具を放つ前に殺される。

「でもまあ、あれを倒したら師匠を超えるってことか？」

それでもこの男、諦めが悪いのである。

「しかし左で投げられるか？一応投げられるには投げられるが、ほとんど右で投げたからな」

右腕は負傷していて左腕ではあまり投げたことがない。万策尽きたかと思つたとき、ランサーの脳裏にとある日の出来事が蘇る。それは影の国で修行を始めてスカサハから槍をもらったときだ。

◇

『馬鹿者。槍を力任せに投げるな』

『んなこと言つたつてよ。現に今までこのやり方で倒してきたんだ。今更直せるかよ』

『そうか。ならば直す必要はあるまい。別に新しい投げ方を覚えれば良い』

『新しい投げ方？』

『ゲイ・ボルクも無敵ではない。いずれはその槍も砕かれよう。だからこそ因果逆転の呪いに頼らない、普通の投げ方を教える』

『普通の投げ方つて…俺のは普通じゃねえつてのかわよ？』

『まあ聞け。槍は普通に投げてもいずれは地面に落ちる。心臓目掛けて投げたはいいが、心臓に刺さらず地面に落ちたでは示しがつかんだら？』

『じゃあどおするつてんだよ？』

『槍を少し高めに投げろ。そうだな……これくらいの距離なら左肩を狙え。そうすれば槍は心臓に刺さる』

『マジかよ……本当に刺さりやがった。てか練習用の人形が粉々に』
『万物は全て重力に引き寄せられる。槍も同じだ。少し高めに投げれば槍は重力に引き寄せられ、丁度心臓に突き刺さる。だがまあこれの調節が難しくてな。高すぎても低すぎても、右や左にずれてもダメだ。それに距離やその時の風の流れ……とまあやることが多くて結局は力任せになる』

『いやダメじゃねえか!!』

◇

「んなこと言ってたな。結局殆ど力任せになっちまったが」

もうすぐオルタがやってくる。

「まあこの際小細工は無しだ。おもいつきり投げてくるか」

そしてランサーは車の陰から姿を現した。それを確認したオルタはランサーに迫る。

「ひい、ふう、みい……よし」

ランサーは槍を構える。崩壊覚悟で右腕で投げるつもりだ。この右腕が潰れるか、自身が潰れるか。このままだところの二択だ。

オルタはランサーの槍に警戒したのか更に速度を上げる。もうすぐランサーにオルタの爪が迫る。時間にしておよそ10秒。

既にカウントダウンは始まっている。ランサーはその腕に力を込めて、

「この一撃……手向けと受け取れ」

槍を投げる。槍は一直線にオルタへと進んでいく。このままいけば確実にオルタの心臓を抉るだろう。しかしオルタは気づいていた。これはただの投擲であると。魔力もまとわせず、因果逆転の呪いも発動していない槍。だが交わすには距離が近すぎる。これは防ぐしかない。そのままオルタは左腕で心臓の位置をガードした。

しかしこれまではランサーの思惑通りだった。

槍は左腕を貫通したが心臓までは届いていない。ランサーの槍は届かなかったのだ。最後の後押しがない限り。

「そおらっ、ここからだ!!」

ランサーの飛び蹴りが槍を押し出し胸に深く突き刺さる。そしてランサーはここで真名を解放する。

「蹴り穿つ死棘の槍!!」

槍はオルタの心臓をズタズタに破壊した。しかしそれでもオルタは止まらない。生前の戦果から会得した『戦闘続行』のスキルが発動したのだ。

「チッ！我ながら鬱陶しいぜ！」

槍を引き抜き首を撥ねようとする。がオルタはそれを爪で防ぐ。さつきまでの勢いはないがそれでも確実に防いでくる。

「（心臓を破壊したのに……我ながらスゲエもんだ）でもなあ！」

「!!」

「師匠の技を信じなくて、テメエの未熟な技を信じてどおするってんだよお!!」

オルタを蹴り上げる。そのままランサーも跳躍。そして最後の一撃を放つ。狙いは必中、穿つは心臓。

「突き穿つ疾風の蒼き槍!!」

魔槍はオルタの心臓をもう一度貫いき、そのまま地面に縫い合わせた。更に地面から無数の棘がオルタをズタズタにしていく。その様子を見てランサーが一言、

「わりい、やっぱ今の宝具の名前なしだわ」と言った。

どこか遠くから大きな魔力を感じた。このシヨツピングモールの外から。多分宝具と宝具のぶつかり合いのような。あ、そうだ。この魔力の感じは……真琴君ですね。成る程……彼はまだ諦めていませんか。

なら私も……立ち上がりましょう。

「なんで……あんた死んだでしよ……」

「切り札は死ぬときに使うものです」

「まさか……蘇生のルーン!?」

「ぐ名答!!」

手に持っていたチーズをメイヴに投げる。メイヴは心底嫌そうな顔をしてそれを避ける。ですがこちらにはまだ大量のチーズがあります。それに気づいたのか更に嫌そうな顔をしたあと、怒りの表情になった。

「わかっついてやってるでしょ」

「それも正解です」

「……もう一回死ねえ!!」

メイヴは鞭を振り回しながらこちらへ走ってくる。辺りを更に滅茶苦茶にしているところを見ると、相当怒っているようですね。それでも冷静さを忘れない辺り、流石クー・フリーンを倒しただけあります。

「はあー………ふうー………」

呼吸を整える。蘇生のルーンはただ蘇るだけで傷は治してくれない。つまり満身創痍なのは変わらない。どのみち打てるのはあと一回が限界です。

「終わりよーバゼット!!」

「いいえ、まだ終わりません!!」

攻撃の一瞬の間を見つめる。迷わずそこへ左ストレートを叩き込む。がメイヴの鞭でそれは防がれる。まあいいです。所詮左はフェイク。本命は、

「右ストレートなんでしょ!!」

「その通りです!!」

メイヴは鞭を捨てておもいきり振りかぶる。このままいけばクロスカウンター、つまり相打ちになってしまう。

「うおおおおおっ!!!」

「たあああああっ!!!」

互いのストレートが交差する。

私のストレートはメイヴの頬に命中し、

メイヴのストレートは私には届かなかった。

「とおりやあああ!!!」

そこから全身の力を振り絞り殴り飛ばす。そのままメイヴはチーズの山に突っ込んでいきました。

「たくつ、しぶといにも程があるだろ」

「……それ、美味しいのか?」

「美味くはねえよ。まず食いもんじゃねえ。形は変わったが葉巻だよ」

「なるほどな……お前は俺の技を未熟って言ったな」

「言ったな」

「いつまでもあの人の技を使っても仕方ないだろ。いずれは自分の技を持たなきゃいけない。それなのにお前は未だにその槍に頼っている。貰い物でしか戦えないお前も未熟だと思おうが?」

「……まあ確かにな。ハッキリ言って未だに自分自身の技を持ってねえ俺からしたら、お前の技を未熟っていう資格もねえ。

でもな、師匠から教わったこの技をしつかりと後の世に刻み込んでおく必要があると思うんだ。まあただの言い訳に過ぎねえが」

「……お前にとってその技はなんだ」

「……師を忘れないための……絆か?」

「ではお前にとつての師とはなんだ?」

「んなもん分かってんだろ」

◇

「ここまで……やるとは……想定外だったわ」

「もう動けません、ね」

「はあ、貴女が羨ましいわ」

「???私ですか?」

「だってクーちゃんのマスターなんですよ?つまりずっと、いつでも、どこでも、クーちゃんといられるわけですよ?羨ましくないわけじゃないじゃない!!」

「そうですか?私の彼へのイメージは3日で崩れましたが」

「それでもクーちゃんをサーヴァントとして従わせてるのは何故?やっぱりクーちゃんが好きだから?」

「どちらかという『愛』というより『友』としては好きですね。まあ昔から彼の本を読んでいたからなんですけど。今回の聖杯戦争だつて、彼と共に戦いたいから呼んだのです。それに」

「それに……なによ」

◇

「スカサハは俺の一番の英雄だよ」

「クー・フリーンは私の一番の英雄ですから」

◇

メイヴ、オルタの消滅を確認した両者はすぐに合流した。

「お互い派手にやられましたね」

「ここまでとは思わなかった。ああ格好つかねえ」

「ですね……」

そしてお互い地面に倒れる。しかし二人の顔には笑顔があった。

赤枝の騎士は決して負けない。そう、彼らがこうして笑っていられる間は。

無限の剣製 unlimited blade
works

「——ハッ！」

「ッ！」

物静かになった新都。その中で響いているのは剣と剣のぶつかる音のみ。士郎は投影した剣を駆使してセイバーと対峙していた。

セイバーの振り下ろした聖剣を交わして少しずつ攻撃を加えていく。今のセイバーの聖剣は風の結界をまとっておらず、黒い刀身が見えていた。まるで反転したような黒。士郎はそれが気に入らなかった。

「くっ——ハア——っ」

「（息が上がっている。しかし止まる気はありませんか）ふん!!」
「っ!!」

そろそろ士郎の体力は限界に近かった。それでも士郎は諦めなかった。いや諦めたくなかった。ここで諦めたらアイツに笑われる。『所詮そこまでだった話だ。やはりセイバーは救えないか』

アイツに言われることが嘘のようにわかる。まったく嫌なことだ。そう考えながらも、

「でも…俺にはこれしかできない」

士郎は前へ腕を突き出す。

「トレス・オン投影、開始!!」

◇

新都センターホテル

その最上階の一室にアーチャーと凜、アヴェンジャーとクリーザーが対峙していた。

「生きていたのか遠坂凜、普通頭が割れるか脳に異常が起きてもおかしくないんだがな」

「異常はなかったわよ。でも傷が残ってね」

凜は髪をかきあげる。そこには傷が残っていた。恐らく生涯消え

ることのない傷だ。

「宝石をあらかじめ呑み込んでたからまあ良かったけど。それでも頭は痛かったわ。だから、」

「だから、なんだ？」

「ぶっ潰す!!」

マスター同士は戦闘態勢だ。そしてサーヴァント同士も。

「悪いがマスターのオーダーだ。ここは倒させてもらう」

「私に対抗策でもあるのか？」

「ある」

それだけ言うとアーチャーは武器を投影する。アヴェンジャーもナイフと拳銃を取り出す。

「さあ、始めようか」

そして始まる戦闘。アーチャーとアヴェンジャーが同時に刃を交え、凜とクリーザが同時に拳を交える。

アーチャーとアヴェンジャー。白兵戦ならアーチャーに軍配がある。それでもアヴェンジャーは殺人を繰り返してきた反英雄。それに食らいついていく。

「(セイバーの時もこいつは推されていた。ならば反撃の際も与えずに攻撃を叩き込み続けろ!) せいやつ!!」

「(私が復讐殺人のプロなら向こうは戦闘のプロ。読み合いをするだけ無駄。ならば取るべき行動は一つ。殺人鬼のやり方で) 殺す!!」

再び刃と刃が交わる。時折弓と拳銃の狙撃も交えながら。

凜とクリーザ。格闘戦ならクリーザに軍配があがる。それも当然だ。クリーザは人間ではない、死徒だ。それを知ってか知らずか凜は攻撃をやめない。ただ自分の顔に傷がつけた相手に一矢報いるために拳を振るう。

「このっ!!」

「ハハッ!やるじゃないか!今回は準備できているからか?それとも足手まといがないからか?」

「足手まとい?それって衛宮君のことかしら?確かに前なら足手まといだったわ。でも今は違う。案外もうセイバーを倒してるかも」

「ほう、セイバーか……まあ真名を知らないからそう言えるのか」

「真名？あんたは知ってるって言いたいの？」

「まあ俺に勝てたら教えてやる」

「そう。アーチャー!!」

瞬間、クリーザの胸が三回撃ち抜かれた。アーチャーが狙撃したのだ。

「な、アーチャー!?!」

「あら？これは聖杯戦争でしょ？ならサーヴァントがマスターを狙っても文句は言えないわよ？」

「ク、クククハハハハ!!そうか、そうだったな!!……殺れアヴェンジャー!!!」

凜の背後からアヴェンジャーが襲いかかる。しかしそれを交わして拳、いや掌底を叩き込む。怯んだアヴェンジャーに更に攻撃を叩き込んでいく。これこそ凜の得意とする八極拳。言峰から教わった技だ。

「アーチャー、追撃!!」

「人使いが荒いな」

毒づきながらもキチンとオーダーには答えるアーチャー。投影した無数の剣。それを全てアヴェンジャーへ向けて発射、そして魔力を暴走させて爆破する。着実にアヴェンジャー陣営を追い詰めていった。

「くっ……アーチャー、本気だな」

「おや？いつから私が本気だと？」

「アーチャー、見せてあげなさい。貴方の本気、貴方の世界を!!」

「了解だマスター。決めるに行くぞ!!」

◇

「トレス・オン
投影、開始!」

「憑依経験、共感終了」

「工程完了、全投影待機」

「停止解凍、全投影連続層写!!!」

士郎は投影した剣を連続でセイバーに発射する。セイバー本人も

これを食らえばタダではすまないと感じたのか回避に転じる。しかし士郎はそれを見越した上で更に投影した剣を発射する。

「まだだあっ!!」

「くっ!!」

遂にセイバーに命中する。一つがぶつかる度に更に投影した剣が叩き込まれていく。セイバーの鎧が少し損壊している。頭から血を流しているところを見ると相当ダメージを与えられたと見える。

「なあセイバー。お前言ったよな。俺は弱いつて。確かに俺は弱かった。だからお前を失った。だから後悔した」

「……」

「でも俺はもう後悔しない。その為に俺は強くなった。その為にオレの世界を受け入れた。その為にセイバー、お前を取り戻す」

「私に勝てるん？」

「勝てる勝てないじゃない。勝って、一緒に帰るんだよ」

士郎は魔力をフルで回す。全身にとてつもない魔力が駆け巡る。

◇

そして世界が書き換えられる。

「I am the bone of my sword」

「——体は剣で出来ている」

「Steel is my body, and fire is my blood.」
血潮は鉄で、心は硝子

「I have created over a thousand blades」
幾たびの戦場を越えて不敗

「Unaware of beginning」
たつた度の勝利もな

「Now aware of the end」
UnknowntoDeath, NowknowntoLife
「ただの一度も敗走はなかつたの一度も理解されない」

「Withstood pain to create weapons」
剣の丘で、鍛え、
「彼の者は常に独り、剣の丘で勝利に酔う」

「My whole life was」

『故Yet, those hands will never hold anythingに、生涯のに意味はなく』
「” unlimited blade works”
『その体は、きつと剣で出来ていた』』

◇ アヴェンジャーが立つのは荒れ果てた荒野。そこには無数の剣が突き刺さり、分厚い雲の隙間から夕焼けと歯車が見える。その剣の丘に立つ男が一人。

「アーチャー……これはお前の心情風景か」

「ここは荒れ果てた夢の先、夢破れた男の世界だ。そして今から挑むのは無限の剣だ。恐れずしてかかってこい」

◆ セイバーが立つのは草原の広がる朝焼けの世界。そこには無数の剣が突き刺さり、雲のない空が広がり、剣の丘からは朝日が顔を出していた。その剣の丘に立つ男が一人。

「シロウ……これが貴方の世界ですか」

「夢の始まり、目指す先の世界だ。そして今から挑むのは剣撃の極致だ。恐れずしてかかってこい！」

◆ 二人の立つ世界は違えど、

二人の理想は同じだった。

助っ人

病室の外では既にイリヤとアサシンが戦っているらしい。相手はマトウシンジ。別世界の間桐慎二だ。ムーンセルでこの世界に呼ばれたのだろう。

「行ってくる桜。これはお前がもっておいてくれ」

未だに目覚めない桜にマツハドライバー炎を託す。俺はシンゴウアックスを担いで病室を出た。

無限の剣製 アーチャー

「くっ!!おのれっ!!」

アヴェンジャーは圧倒的不利な状況に追い込まれていた。この空間は無限の剣製の中でアーチャーはストックされて無数の剣をいつでも使うことができる。それはつまり『一対一の切り札相殺』が十八番のアヴェンジャーにとってそれは最悪な状況だった。

「せいやっ!!」

「チッ!」

アーチャー自身剣の扱いも上手い。それこそセイバーに匹敵するかもしれないレベルだ。少しナイフの扱いが上手いだけのアヴェンジャーではそちらも負けてた。

(この固有結界をどうにかしないと。恐らく莫大な魔力を消費するこの結界。ならば魔力切れを待つかない。だがいつ魔力がなくなる?もしかしたら私の方が先に力つきるかもしれない。そうなっては元も子もない。どうすれば…)

(この固有結界…無限の剣製は莫大な魔力を消費する。カタをつけるなら速攻で。それほど時間もかけられない。外には凜も待っているのだから)

アーチャーとアヴェンジャー。理由は異なれど時間が無いのはどちらも同じだった。しかし焦ればその時点で敗北してしまう。そんな緊張感が続く。



ホテル

「ハア——ハア——まいったわね」

「それはコッチの台詞だ。強すぎないかお前？」

凜とクリーザ。互いにボロボロの状態だった。凜は八極拳や宝石魔術を駆使してクリーザの命を削ることには成功している。しかし一つ削るのにダメージを食らいすぎた。

クリーザも慢心していた結果、命を削られる失態を犯していた。自分分は死徒だ。負けるはずがない。そんな慢心が命を削られる結果を招いていた。

(アーチャーに回せる魔力も考えて……あと数回か)

(アヴェンジャーの奴、かなり苦戦しているな。いつもより魔力を持っていつている。そんなに凄いのかアーチャーの固有結界は?)

そしてこの後、とある起点で戦況はひっくり返る。

◇

冬木総合病院

「落ちろ！この蚊トンボ!!」

「アツヒヤハハハ!!落としてみなヨ!!落とせるならネ!!」

「無駄に早い。僕の宝具についてくるなんて」

「僕が早いんじゃない。お前が遅いんだヨ!!」

紫の煙が充満する病院の廊下。イリヤとアサシンはシンジ相手に苦戦していた。この紫の煙のせいでイリヤは魔力の質、量が減りマトモに攻撃が出来なくなっていた。

アサシンも全ステータスがワンランクダウンしてしまっている。しかもシンジはハサン・サツバーハと呼ばれる英雄の力を駆使している。恐らくクラスはアサシン。アサシンの嫌いな相手はバーサーカーとアサシンだった。アサシン同士だとどうにも部が悪くなってしまう。

(今ここでバーサークアサシンにしてま勝機はない。せめてこの霧をどうにかしないと、私たちに勝ち目はない)

(残る装備は起源弾が八発。それに刃こぼれしたナイフ二本に予備のナイフが一本。ダイナマイトと手榴弾はそれぞれ五個。攻めきるに

は少し足りないな)

(ここで多元重奏飽和砲撃は使えない。かといって普通の魔力弾では倒しきれない。だったら)

(一か八か全ての装備を叩き込むか?でも失敗したときのリスクが高すぎる。となると)

(援軍が来るのを信じるしかない)

「待たせたな二人とも」

「ライダーキターーーツ!!!」

「ライダー?なんだ桜の付き添いかと思ったけど、ふーんやるんだ」

「悪いが今の俺は大して役にはたてない。だがもう少し待て。最高の援軍が来てくれる」

◇

無限の剣製 士郎

セイバーの黒い聖剣から魔力の塊が放たれる。しかしそれは士郎の操る刀剣類に阻まれる。この無限の剣製内ならばいくらでも剣を作り出せ、操ることはできる。

「うおおおっ!!」

「っ!はああっ!!」

剣技の差ならばセイバーの方が圧倒的に上だった。それでも士郎は刀剣と担い手の記憶、そしてアーチャーの技を頼りにセイバーと対峙していた。

「ぐっ!うおおおっ!セイバー!!!」

「っ!はああああっ!シロウ!!!」

士郎は己の残り魔力も気にせずにセイバーに挑む。

セイバーは己の肉体の限界も気にせずに士郎に挑む。

セイバーの黒い聖剣を上にあわす。固有結界内ならば全ての身体能力、いわばステータスがプラスされる。それは魔術師の士郎も例外ではない。

そして上空からセイバーを狙う。それに対してセイバーは聖剣から魔力の剣を伸ばして士郎を撃ち落そうとする。

「(星の聖剣…これを防ぐなら最強の盾を持って来るしかない。俺の

記憶で最強の盾は…）トレリス・オン 投影、開始!!」

士郎が展開するのは七枚の花弁の盾。投擲武器ならば必ず防ぎ切る英雄の盾。

「熾ロ・アイ天覆アう七つの円環!!」

聖剣の黒い一撃と最強の紅い盾がぶつかる。その衝撃で再び距離が離れる二人。

（今ので四枚が割れた。ならば）

（もう少しイメージを完璧にしろ。そうすれば絶対に防げる!）

セイバーは聖剣に魔力を集中させる。自身の鎧も聖剣への魔力に変換する。士郎は再びイメージする。あの時見せたアーチャーのよりもより固く、より強い盾を。

「最果ての光よ、我が闇に飲まれよ! 其方エクスカリバー! ヴォーティガーの勝利を否定する卑王鉄槌!!!」

「世界を覆う無限の円環!!!」

竜の形をした騎士王の鉄槌。それに対抗するは無限の花弁。一つ一つが古の城壁に匹敵する。衝撃で周りの剣、地面が吹き飛んでいく。それでも両者は止まることはなく、

「はあああああっ!!!」

「うおおおおおっ!!!」

◇ やがて剣の世界は崩壊する。

ホテル

「うおおりゃ!!」

「がはっ!」

死徒相手に凜は一步も引かずに戦っていた。古傷が開き、新しい傷からも血が止まらない。体を動かすたびに全身が悲鳴をあげる。それでも弱音は吐かない。誰かに弱みを見せるなんて嫌だ。

（こいつ、宝石で体を強化しているとはいえ常人なら死んでるレベルだぞ!?）

「まだまだあ!!」

（このままだとリアルに負ける。仕方がないが使うか。アヴェンジャー

は怒るか?)

そしてこの時凜は気がつかなかった。

「飛んでけえ!!」

クリーザの令呪が光ったことに。

「令呪をもつて命ずる。今すぐここに帰ってこいアヴェンジャー」

そしてアヴェンジャーが現れる。クリーザはアヴェンジャーを盾がわりにしたのだ。力なく吹き飛んでくアヴェンジャー。その体は傷だらけだった。

「凜!無事か!」

続けてアーチャーが結界を解いて戻って来る。アーチャーの方も少ないながら傷を負っている。

「バカ……帰って来るの……遅いわ……よ」

緊張が解けたのか凜はアーチャーに倒れかかる。アーチャーは後悔した。自分がもう少し早く帰ってこれば凜はここまで傷つかなかったと。同時にクリーザに対する怒りも。

「クソマスターが……」

「随分とやられたなアヴェンジャー」

「少しはお前のせいだぞ」

アヴェンジャーも立ち上がる。これで二対一。しかもアーチャーの魔力も残りわずかだった。

「まあその詫びだ。こいつで終わらせる」

そう言ってクリーザが取り出したのはムーンセル。アーチャーが不味いと感じた時には遅かった。

「ムーンセルよ、あのアーチャー……いやフェイカーを消せ!!」

「!?フェイカーだと?」

「……チツ」

「分からないのかアヴェンジャー?聖杯戦争でアーチャーが二体なんてありえないだろ?となるとどっちかが嘘をついている。そこまできれれば分かるだろ?とまあウソが得意だなフェイカー!」

そしてムーンセルから大量の魔力がフェイカー目掛けて放たれた。

◇

冬木総合病院

ライダーが参戦しても戦況は揺るがなかった。しかもライダーは変身していなかった。否変身出来なかった。二つは破壊され最後の一つも桜に託している。

ライダーはシンゴウアックスで近接戦。それをイリヤとアサシンが援護していた。それをシンジは同時に相手していた。異形の右腕と投げナイフ。たったこれだけの戦力でサーヴァント二体とマスターを相手しているのだ。

「確かにお前役にたたないナ!!いない方がマシじゃないのか?」

「俺はただの繋ぎだ。あいつらが来るまでのな」

「繋ぎい?繋ぐ前に死んだら笑いもんだなオイ!!」

シンジの右腕がライダーの左腕を吹き飛ばす。それでもライダーは止まらない。

「ツ!?なんで止まらないんだヨ!!」

「だったら止めてみる!俺はまだ死なん!桜を救ってくれる、そいつが現れるまで!!」

「伏せろライダー!!」

アサシンが起源連弾とダイナマイト、手榴弾でシンジを攻撃する。爆煙に包まれるシンジ。その中から飛び出る異形の右腕。それは確実にイリヤの心臓を狙っていた。

「イリヤ!!」

いくらアサシンのスピードでも追いつかない。万事休す。誰もがそう思った時。

青い矢が右腕を消しとばした。

「間に合ったわねマスター!」

「そのまま行けアーチャー!!」

「かしこまり!!」

更に加えられる矢の雨。それはシンジを確実に貫いていった。

「アーチャーに……狩野真琴?」

「なんで二人がいるわけ？」

「別に？元々病院に行く予定だったしな。それに、」

病院の廊下に足音が響く。それは確かな足取りだ。そしてシンジの前で止まる。シンジは心底嫌な顔をし、そして足音の犯人は怒りをあらわにしている。

「助っ人を連れてきた」

「お前が…桜を……」

「あ？なに？そうだけド？」

「そうか。だったら許さないぞ!!この僕が!!」

怒りの間桐慎二がマトウシンジの前に立ちふさがる。

決着と正義の味方と世界

「絶対に許さないぞ!!この僕が!!」

「って言ってたの誰だよ!!」

「仕方ないだろ!攻撃用の本なんか全然なかったんだぞ!!」

とある病室に姿を隠す俺たち。あんなカッコいいこと言ってたのに情けないぞ慎二。

「この本で毒を緩和してるんだから、あとはお前達がやれよ。桜は僕が守るからさ!!」

「今兄貴っぽいこと言ってももう手遅れじゃないかなあ?アレ見たあとだとねえ?」

「うるさいなメイド女!ありやあ僕じゃないって言ってるだろ!!」

「しかし慎二にはもとよりこの毒を緩和させるために呼んだんだ。戦力には数えていない」

「うわこのライダー、さりげなくディスプレイやがった!」

「ワカメだし」「ワカメだからか」

「魔法少女とガンダロ包帯男は黙ってるよ!」

流石慎二。ツッコミスキルならきつとEXだ。

「でもまあこれくらいふざければなら大丈夫だろ」

「でしょうね。でどうするのマスター?」

「イリヤとアサシン、慎二が援護、俺とアーチャー、アーチャーのマスターで突撃する。これが妥当だと思うが」

「だそうだ。俺は今のところ問題ない」

「無茶したらダメよマスター」

菊一文字はさつきまで使っていたから強度が落ちているはずだ。あの素早いシンジを捉えるためにはジャックのナイフと金時のグローブが最適か。といつても長時間は無理か。

アーチャーは魔力を使いすぎたのか戦闘服ではなくメイド服を着ている。それでも戦闘はできるが……それも魔力で編み込まれてるんじゃない？

ライダーは片腕がないが、それでもデカイ斧を持っている。変身してないけどどうしたんだ？

イリヤの魔力の羽も短くなってるし、アサシンの装飾品もボロボロになってる。

何はともあれ時間はかけられない。

「おいおい。何処にいるんですカー」

「ほらほらコッチだぜ!!」

「コッチだぞクソワカメ!!」

アーチャーと共にシンジの前に立ちはだかる。距離的に病室五つ。シンジが今駆け出しても少しは時間がかかる。それくらいあれば。

「総員構ええ!!」

イリヤは魔法のステッキ、アサシンはロケットランチャー、慎二は攻撃用の魔術本。アーチャーとライダーは既に駆け出している。

「ファイアアア!!」

一斉に攻撃を開始する。それは先に駆け出したアーチャーとライダーを追い越してシンジを狙う。さて俺も行くか!

「無駄無駄無駄ア!!」

シンジも駆け出して攻撃を掻い潜る。そしてアーチャー、ライダーと刃を交える。サーヴァント二体に対して互角にやりあっている。背中からはなんか黒いガスみたいのでてるし……怪人の類か？

「ツ!?……ヤバ」

「少し退がれアーチャー!!」

アーチャーを下げてシンジと刃を交える。シンジが英雄二体分ならコッチは英雄六体分だ。フルに使えば勝てないことはない。

それでも俺の方がヤバイんだけど、な!!

「ハツハハハハ!!どうした?もう終わりかヨ!!」

「んなわけ、ねえだろ!!」

シンジに拳を叩き込むが、シンジの体が煙のように消える。これじゃあ物理攻撃が通用しない!?

「やつと完全に馴染んだ…もう終わりダア!!」

今度はシンジが分身する。廊下を埋め尽くす勢いだ。正直キモい。いやマジでキモい。マジありえねえ。

「ぐはっ!!」

「アツハハハハハハハハ!!」

しかも全員が全員同じ強さ。三人でも倒せなかったのにこんなにも増えたら対処できないぞ。それとその笑いやめろ。ムカつくから。

「もう無理だろ?死んで楽になれよ」

「まだだ!アーチャー!!」

「正直これが最後の一発よ。これ以上は私が現界できない!」

そんなことはわかってる。だから俺も手伝うんだよ。

「ドライブ・リッパ騎殺・疾走解体!!」

「パーシユバタ・ステラ破壊神の流星!!」

金色の斬撃と青い矢が分身シンジを消していく。病院の廊下も消し飛んでいくけど……大丈夫かな?今更だけど桜以外の患者もいなかったな。

「だから無駄なんだよお。僕が死なない限り無駄なんだよ!」

「嘘!?奥まで届いてなかった!?!」

「途中で消されたのか…それにしても」

「このままでは負けるか……」

病室の外から爆発音が聞こえる。

「……………ん」

うるさい……………うるさいなあ……………

「……………あっ」

ふと意識が泥に呑まれる。

「……………」

色が変わる。黒く染まり意識が遠のく

「……………フフツ…」

「う……………やば」

イリヤの変身が解ける。

「ツ!?ぐはっ!」

「うわっ!」

アーチャーとアサシンが吹っ飛ばされる。残ったのは俺とライダー、あと慎二。シンジの数は減らない。それどころか増えている。このままじゃ全滅だ。しかし、

「(なんだこの魔力……………!?) 全員病室に入れ!!」

ライダーの咄嗟の発言。よく分からないが俺たちは病室に入る。次の瞬間廊下を走る黒い影。それはシンジ達を飲み込んでいく。

「なんだ今の……………って、桜!?!」

慎二の目の先には間桐桜が立っていた。でもおかしい。間桐は黒い服をまといっており、髪は白く変質している。

「……………兄さん?」

「なんだあ?自分から死にきたのかあ?」

「……………うん、死んで」

「は?」

直後シンジの半身が消し飛ぶ。それはシンジが死んだことを意味した。倒れるシンジだった物。徐々に黒い影に飲み込まれていき、姿を消した。

「……………あれが…間桐?」

「なんか…黒いね」

「大丈夫なのかい?あれ」

「わかんないわよ。どんな魔術を使ったのか」

「さ、桜?」

「何をしている桜」

「大丈夫よライダー。ちゃんとベルト巻いてるから!」

さっきまでの間桐と打って変わっていつもの口調になる。一体何

があつたんだ？てか間桐さん……その黒いのをめぐってベルトを見せるのは、

「マスター？」「アサシン？」「慎二」

「は、はい？」

「何を見ている？」

「ねえシエル!!」

「なっ！……こんなところにもサーヴァント!？」

「む？なんだまた珍しいのがあるな」

「はあ？何あんた？偉そうに!!」

「我か？当然だ！我は王だからな！偉いのは当然だ」

「……友達いないわね」

「友ならいるが？それより足をかせ。我はあそこに急ぐのでな……ん？」

「!?今度は何？」

地獄を見た。

地獄を見た。

この世界の終わりを見た。

オレはその中である男に助けられた。いや、その男のほうに助けられたのかもしれない。あの惨状で唯一生きていたオレを見つけて、助けて、助けられたのだろう。

それから、??オレはあの人と約束した。

『任せろって!??の夢はオレが叶えてやるから』

それから数年後。

『問おう。貴方が私のマスターか』

運命の夜に、運命に出会った。

今思えばあの時に運命に出会っていなかったら、オレの未来は変

わっていたのだろうか？

また数年後。

オレは世界を旅した。そんな中、オレ一人ではどうにもできないことが起きる。このままでは全員が犠牲になる。そんな時に一人の男に出会う。

『救いたいか？ならば俺と契約しろ。死後『守護者』として働く』
後先考える暇はなかった。オレはその男と契約し、人々を救った。
その後も世界を巡り人々を救っていった。見返りなんか欲しいから救ったんじゃない。ただ、みんなが幸せに生きてほしいから。そんなオレを人々は『贗作者』と呼んだ。投影した武器で戦う偽善者。まさしく贗作の塊と言えるだろう。それでもオレは人々を救った。
そんなオレの最期は、救った人々による処刑だった。気味が悪かったんだらう。でもオレは後悔しなかった。

守護者になるまでは。

オレは英霊の力でより多くの人々を救えると思った。だが現実はその『掃除屋』にすぎなかった。

信じた理想に裏切られたオレは……徐々に過去の自分を恨むようになった。そして考えた。

『いつか聖杯戦争に呼ばれたら……昔のオレを殺す』

そうすればこの現実から解放されると考えた。だが登録された英霊は消えることはない。それでもオレはそれにすがるしか方法がなかった。自分を保てなかった。ただの八つ当たりだとしても。

そしてオレは……聖杯戦争に呼ばれた。

◇

しかし、呼ばれた結果……あいつを殺すどころか、あいつに投影の仕方を教えてやるなんて、

「オレも……ヤキが回った……な！」

魔力の塊を食い止める。徐々に押されていく。このままだといずれ盾も破壊されてオレは消える。いやここですぐに消えた方が凜に被害がいくこともないだろう。

「ぐう……うう……」

「しぶといな…アヴェンジャー、腕落としてこい」

「……そんな必要はない」

耐えきれずオレは吹き飛ばされる。窓を突き破り空を飛んでいく。その先には……

—————

「ヤベエ…全然動けねえ」

「なんか私たちだけ多くない？」

「サーヴァントを二体も相手してるんだから当然よ」

真琴やイリヤ、桜たちは疲れて動けないでいた。恐らくあとはクリーザを倒せば終わる。いや聖杯戦争はまだ終わらないが…

しかし、ほんの少しの休息も

「!?何…この魔力……だんだん近づいてる!?」

「!?アーチャー！イリヤを守れ！」

「慎二…桜は任せたぞ！」

ライダーとアサシンが窓から飛び出る。しかし次の瞬間には戻されてきた。しかもアーチャーのオマケ付きで。

「な!?アーチャーまで!?てかなんだよこれ!!」

アーチャーが展開している盾をライダーとアサシンが共に押さええている。しかし盾は一枚一枚と割れていく。このままだと三人もサーヴァントが消滅する。

「アサシン!!」「ライダー!!」

「アーチャー……ここから狙えるか！」

「やってみ、きやあ!!」

瞬間三人以外が吹き飛ぶ。魔力の渦が威力を増したのだ。盾の割れるスピードが更にます。そして遂に……全て割れた。

—————

「ハハハハハハハハ!!見たかアヴェンジャー！吹き飛んだぞ!!病

院が!!ハハハハハハ

「…………マスター。いやクリーザ」

「あ?」

ナイフで一閃。両腕を切り落とす。

「あ、がああああああ!!?」

「言ったはずだ……いずれお前も殺すと!」

◇

無限の剣製 アーチャー

「この際聞いておこう。君も私と同じ、守護者なのだろう?」

「?まさかアーチャー、お前も」

「ああ。ま、守護者になった結果がこの世界だが。お前は何故この聖杯戦争に参加した?」

「…………何故か。強いて言うなら……私の家族を殺したジャックを殺すことか…………あとは」

「なんだ?二つあるのか?」

「世界が…平和になるように……つて」

「…………なんだ…私と志は同じか」

「そ、そうなのか?それは……なんというか」

「ああ、そう…だ…?何処に行った?」

◇

「それが今だというだけだ」

「テ、テメエ!令呪……!?そうかだから腕を!」

「令呪は面倒だからな」

「いいのか!?ここで殺したらお前は現界できなくなる!魔力も供給されなくなつて消える!願いも叶わないんだぞ!!」

「セイバーは2回目だろ?なら私にもチャンスはある」

「テメエ!!ぶつ殺してやる!!」

「…………?…………ああそうか。英雄王、お前が裁きを下さか」

—————

「うわー!派手にやったわね」

「噂ではその剣は認めた相手にしか使わないのでは?」

「ふん。宝を使わずに放置では宝が腐るだろう？」

「イッテテテ、おい大丈夫か？」

「イリヤは無事。気を失ってるけど。桜は？」

「なんとかな。傷はない」

あれからどれくらい経過したのか。俺たちは目を覚ます。病室は
跡形もなく消し飛び空が見えていた。

「アーチャーたちは？」

「姿が見えないな……おいライダー！」

「アサシン！アーチャー!!」

返事がない。まさか全員やられたのか？

「くっ……」「ふう……」

「アサシン！ライダー！」

瓦礫を押しつけてアサシンとライダーが出てきた。しかしアー
チャーの姿が見えない。まさか、アーチャーだけが消えたのか!?

「アーチャーは……これをアーチャーに渡してくれて。アーチャー
がアーチャーについて……ややこしいな」

「アーチャーの紅い外套……の切れ端？なんで私に？」

「いづれ必要になる。と言っていたが」

「肝心のアーチャーは何処なんだよ？」

「分からん。俺たちも気づいたら、と言った感じだ」

つまりアーチャーは行方不明か……ん？この魔力は？

外を見ると冬木ホテルから赤い波動が出ている。てかほとんど
ぶっ壊れてるじゃねえか!!てかこっちに波動飛んできてない?てか
このままだとヤバくね?

「みんな避ける!!」

だが俺の号令は遅かった。俺とアーチャー、イリヤが当たってしま
う。ううっおお!!なんか体が熱いぞ!!それとなんか体から大事な
ものが抜けそうな感じ!?

そして

「いったあゝ」

ボンッ!と間の抜けた音と共に

「痛え……ん?今の声……」

「ええ!?なにこれ!!!」

事態はおかしくなる。

「ジャ…ジャンヌ!?!」

「真琴………真琴!?!」

「ちよつとマスター!!これ………てか私、今どうなってる?」

「え?アーチャー……ん?イリヤ?え?え?どっちだ?」

◇

「………ん…あれ?」

「おや?起きましたかシロウ」

「セイバー……え?セイバー!!」

「はいセイバーですが?」

時刻は進み……夜

「ハア………なんとか逃げ切れたか」

「……ん?戻ってきたか」

ソファにふんぞりがえる男。白い帽子に白いコート。とにかく白
ずくめだった。

「は?誰だお前?」

「誰?俺はお前の呼んだサーヴァントじゃないか」

「サーヴァント?そうだったな。あの時光は7つだった。そうかお前
は俺のサーヴァントか!」

「ハハッ。俺をサーヴァントと呼ぶか!いやサーヴァントって言った
のは俺の方だったな」

「まあいい!早くあのクソサーヴァントを殺してこい!あの野郎、こ
こまで来てやがる!」

「殺す?その必要はない。お前がこの世界からいなくなればいいんだ
から」

「はっ」

男が指を鳴らす。するとクリーザは一瞬で消えた。まるで最初か

らそこにいなかったように。

「面白くなると思つてこつちに呼んだが…もういいか。お前たちも帰れ」

更に指を鳴らす。それによつて四人の人が消えた。いや一人は人と呼んでいいのか。

「ハア……ハア……お前…は？」

「派手なやられようだなアヴェンジャー。いや??????????と呼んだ方がいいか？」

「な!?!何故その名前を……いいや思い出した。お前あの時の」

「ん??分かった? そうあの時の俺さ」

「何故……ここにいる」

「それは……暇だったから。それと面白いのが二人いてな」

「面白いの?」

「アーチャーとアーチャーのマスター、狩野真琴だ」

男はそう言うのアヴェンジャーの前まで歩いていく。

「まあこれからは俺がお前のマスターだ。よろしくなアヴェンジャー」

「その前に……お前は……なんなんだ」

「知つてるだろ?……でもまあ信じれないか。なら改めて

俺は『世界』だ。サーヴァントに例えたら…『セイヴァー』か」

現状確認・サーヴァントとマスター その3

マッグ

店員がいないマッグ。今ならポテト食い放題だ。しかし今はそんなことをしている場合ではなかった。

「さて……現状確認でもしますか」

最年長のバゼットさんが口を開く。てか血は拭こうよ。

現状確認をするのは今現在何がおきて、何がおきてしまったのか、を確認するためだ。

「んじゃ俺から……ジャンヌができました」

『彼女ができました』みたいに言うな！

思いつきり足を踏まれる。すんごい痛いんだけど！ヒールでやりやがった！

「それは……真琴君が言っていた英雄の力ですか？」

「多分な……ほら自己紹介しなさい！」

「お母さんかあんた?!……ジャンヌ・ダルク「オルタ」よ」

「オルタ? さっきまでのセイバーみたいなもんか」

そう言う衛宮の隣にはセイバー。しかし髪はほどいており、鎧のデザインも違う。生まれ変わったみたいだな。

「あと、アーチャーとイリヤが……合体した」

「!? どういうことだ?」

「多分これらの状況はムーンセルの『ありえない事象』よ。クリーザがムーンセルを使って願いを叶え、その副作用でおきた……っていうのが考えられる」

イリヤアーチャー……イリアーチャーはいう。声的にイリヤが喋ってるんだろうな。

イリアーチャーは遠坂のアーチャーのように紅い外套を身につけている。アーチャーの外套の切れ端を持っていたせいかな?

「セイバーは……何があったわけ? 士郎が元に戻したの?」

「俺は……セイバーに負けて……それから覚えてない。気づいたらセイバーがこんな風になった」

それもムーンセルの副作用のせいか……前は七騎のサーヴァントの召喚。そして今回は…

「一部の人間の合体と分離ですかね？」

「多分あつてるわバゼット。私とアーチャーが合体して、マコトとジャンヌ・オルタが分離した。セイバーは……多分黒い部分が分離したんじゃない？」

「ええ、そうですねイリヤスフィール。私は黒い泥と分離し、そして聖剣と融合しました」

そう言つて右腕を見せるセイバー。普通の右腕から白銀の義手と変化させる。あれが聖剣なのか？

「ランサーたちは何も無いの？」

「ええ、私もランサーも時に異常はありません。ですよねランサー？」

「ああ、残念ながら何も無い」

「ライダーと桜はなんとも無いの慎二。てかなんであんたがいんのよ」

「なんだよダメなのかよ！……桜とライダーには異常はない。ライダーの右腕がなくなった以外はな」

となると異常が起きたのは俺とイリヤとアーチャーとセイバーだけか……てか、ちよつと待て。

「なあ、思つただけ……イリアーチャーつて…サーヴァント？マスター？」

「あ」「そういえば」「そうね」

「イリヤは僕のマスターだ。まだパスも繋がっている」

「俺とアーチャーもだ」

「私はどうなるのよ！真琴とはどういう関係になるわけ？」

ややこしい。つまり俺のサーヴァントはイリアーチャーとジャンヌつてことか？そしてイリアーチャーのサーヴァントがアサシン。

俺を守るのがイリアーチャーで、アサシンが守るのがイリアーチャー。うおおおお!!!

「スツゲエややこしい!!」

「こうなると拠点も困りますね。真琴君がアサシンの所に行くのか、

それとも私たちの元に来るのか……」

……黙り込む全員。そして約1名を除く全員の視線が降り注ぐ。

「なんでさ……」

◇

衛宮邸

「ええッ!? また増えるの? ……あら狩野君じゃない! 後の三人は? お友達?」

「どうも藤村先生。この金髪の子は……俺の妹で、この紅い服の子は友達……みたいなもんで、このオツサンは紅い服の子の……お父さんです」

「あらそうなの。で、どうして士郎の家なの?」

「ええつとそれは……ほら俺の家にはセイバーとか遠坂とか、とにかく人が集まるだろ? そこで外国から来たばかりのこの三人を連れて来て、日本人の温かさを知ってもらおうってことだよ!」

「あ、そういうことなの。それなら良いわよ!」

「話を通じる人でよかったわね」

「通じるっていうか……うちの担任はあれが平常運転だから」

衛宮に案内された部屋。ザ・和室だな。しかしこの人数は想定しておらず俺とジャンヌは兄妹ということで同じ部屋になった。

「てかあんたと同じ部屋とか最悪。てか妹ってなによ!」

「仕方ないだろ。なんなら何が良かったんだよ」

「そ、それは……か、かの……じよ……とか、って聞いてないし!」

「なあアーチャー。アサシンになんかされたら俺に言うんだぞ」

「失礼だな君は。イリヤがアーチャーと合体してるんだから攻撃するわけないだろ。望まずだが同盟を組んでいるようなものだ」

「確かにそ「ねえアサシン、私はベツ」的には殺し「ねえ聞いているのアサ」しようけど」

(同時に喋ることが出来るのか……)

しかしこの家はすごいな。俺にイリヤ、衛宮に遠坂、それに桜まで

通ってるんだから……

因みにアーチャーが

「確かにそうね。でも最終的には殺しあう仲になるんでしようけど」

と言つて、イリヤが

「ねえアサシン、私はベツトがいいんだけど。ねえ聞ってるのアサシン？」

と言つたらしい。

やれやれ……また難しい状況になったな……

—————

狩野真琴

本作の主人公。アーチャーのマスター。現時点ではランサーとアサシン陣営（仕方なく）と同盟を組んでいる。イリヤとアーチャーがムーンセルの副作用で合体してしまったためにややこしい状況に。

戦闘は大分強くなり、英雄の力も使いこなせるようになった。

宝具

ラグロント・メント・ツリイ
復剣狂・三段突き

ゴールデン・ジャルグ
槍騎・破魔黄金疾走

金太郎、デイルムツドの合体宝具。雷をまとった槍で攻撃する。主に投擲して使う。デザイン的にゲイ・ジャルグに雷マークを描いた感じ。

スラツガーランス／マハトマスラツガーランス

デイルムツド、ジャツクの合体宝具。要するにウルトラマンオーブのオーブスラツガーランス。攻撃もそのまま。エレナが力を貸すことでマハトマスラツガーランスに。

ランサーシユート、ビッグバンスラスト、トライデントスラツシユが必殺技。

超マハトマンゴールデン

エレナ、金太郎の合体宝具。要するに超サイヤ人。

鶴翼・二段切り

真琴オリジナルの技。防がれた瞬間、瞬時に逆方向から狙う。しかし玉藻の前には通用せず。

煌・突き通せ、誠の腕

真琴オリジナルの宝具。魔力を菊一文字と右腕に集中させて相手に叩き込む。

アーチャー

真名 不明

筋力 C 耐久 C+

敏捷 A 魔力 B

幸運 B+ 宝具 C+

対魔力 C 単独行動 A

真琴のサーヴァント。そろそろバレそうな真名不明サーヴァント。ムーンセルの副作用によってイリヤと合体してしまう。

宝具（宝具は一つのみ。しかし対人奥義が多い）

炎神の咆哮

太陽面爆発に比類する女子力の発露

破壊神の流星

とある英雄と英雄の合体奥義。互いのメリットを消した結果、ダメ

リットが消滅し、威力重視の一撃になる。

破壊神の手翳

アーチャーの宝具。アーチャーの宝具ではあるが、彼女の宝具ではない。とにかく面倒な設定である。

こちらでもかなりの威力を誇り、アーチャーの対人奥義はここから

派生している。

太陽面爆発を凌駕する究極の女子力

バンカーバスターの強化版。いわば強化マイティキック。威力も

はるかに上回り、玉藻の前を撃破した。

ジャンヌ・オルタ

真琴と一番話す英雄。基本的には昼寝が好きであまり口は出してくれないが、ここぞというときは的確なアドバイスなどをおくる。勝手に真琴の体を使って『憑依現界』してくる。

今回ムーンセルの副作用で真琴と分離、現界することになる。

基本戦力は剣と炎。

◇真琴の英雄◇

沖田総司

真琴の縮地先生。基本的に穏やかで団子が好きな人。戦闘においては自身は剣を貸すだけでなにもしない。

セイバーが負けたことで真琴の中からも消滅してしまう。

デイルムツド・オディナ

基本ツツコミの人。しかし何故か口調が少々キツイ。戦闘においてはゲイ・ジャルグとゲイ・ボウを真琴に貸している。真琴はゲイ・ジャルグだけで充分らしいが。

坂田金時

ゴールデンライダーその人である。戦闘にはまだ参加していないが真琴にベアー号を貸したりと気前がいい。

エレナ・ブラヴァツキー

真琴の中の英雄のママ。ジャックの遊び相手である。あまり表には出ないが、戦闘にはマハトマビームなどを真琴に教えている。人間バーサーカーには通用しなかったが。

ジャック・ザ・リツパー

ロリアサシン。バラバラにするのが楽しいらしい。真琴にはナイフを貸している。

フランケンシュタイン

通称フラン。何を喋っているかあまり分からないが可愛いからOK、とは真琴の弁。雷技はかなり真琴が使用している。真琴のお気に入り。

衛宮士郎

原作主人公。セイバーのマスター。アーチャーとの特訓。そして凜ともやることやったので最強シロウ君になった。簡単に言うときセイバーオルタとタイマンはれるぐらい。

戦闘は投影を駆使して戦う。投影するのはいつもの夫婦剣。

宝具

アンリミテッド・ブレイド・ワークス

無限の剣製

アーチャーとの特訓の結果使用が可能になった固有結界。使用者の心情風景を写し、士郎の場合『朝焼けの草原』になる。士郎の意思で簡単に剣を飛ばすことも出来る。

アンリミテッド・シールド・ワークス
世界を覆う無限の円環

ロー・アイアスの強化版。無数の花卉が攻撃を防ぐ。しかしセイバーの一撃は防ぎきれなかった。でもまあ相手が悪かった。

セイバー ↓セイバーオルタ↓セイバー

真名 不明

(セイバーから新生セイバーに変化)

筋力 B↓A 耐久 C↓B

敏捷 C 魔力 B↓A

幸運 A 宝具 C↓EX

対魔力 A 騎乗 B

士郎のサーヴァント。最初の脱落者になってしまったが、ムーンセルにやって汚染された『セイバーオルタ』として再び現界。その後士郎と激突、なんとか勝利するも再びムーンセルの副作用で汚染が解除され、右腕が聖剣と合体してしまう。

新生セイバーはプロトセイバーの鎧姿。

宝具(一新され2つになった)

エクスカリバー！ヴォーテイガー！
其方の勝利を否定する卑王鉄槌

セイバーオルタの時の宝具。いわばモルガン！と同じ。黒い聖剣ビームである。

遠坂凛

アーチャーのマスター。クリーザにボコボコにされた上に頭に傷を残された。それでもクリーザに一矢報いるなど活躍している。し

かしそれでも体に負担がかかり直後に倒れてしまう。八極拳は強かった。

アーチャー ↓フェイカー

真名 英霊^{????}

筋力 D 耐久 C

敏捷 C 魔力 B

幸運 E 宝具 ?

対魔力 D 単独行動 B

凜のサーヴァント。実はフェイカーのクラスのサーヴァント。なんだかんだで彼しか存在しない超激レアサーヴァントだよ！やったね凜ちゃん！アヴェンジャーと激闘を繰り広げた後にムーンセルによつて？

消滅したかは不明。

彼自身、世界と契約した守護者である。

宝具（あと1つある）

アンリミテッド・ブレイド・ワークス
無限の剣製

アーチャーの宝具。それは使用者の心情風景を写す固有結界である。アーチャーの場合は世界が『荒れ果てた荒野』になる。士郎のとほぼ同じだがアーチャーの方が剣が多い。

バゼット・フラガ・マクレミッツ

ランサーのマスター。たとえば頭から血を流そうとも、腕が砕けようと止まることのない戦う女性。遂にサーヴァントを拳で倒してしまった。

宝具

斬り抉る戦神の剣^{フラガラック}

お馴染みの切り札封じ。聖剣だろうが無限の剣だろうがなんでもかんでも『後出しジャンケン』で勝ってしまうおかしな宝具。しかし真琴の『後出しの後出し』で防がれる。

ランサー

真名 クー・フリーリン

筋力 B 耐久 A

敏捷 A 魔力 C

幸運 D 宝具 B

対魔力 C 神性 B

バゼットのサーヴァント。真名はクー・フリーリン。克蘭の猛犬である。メイヴに一度敗北するがバゼットと共にリベンジを果たす。その際師の技で勝ち抜いた。

宝具

刺し穿つ死棘の槍

突き穿つ死滅の槍

蹴り穿つ死棘の槍

突き穿つ疾風の蒼き槍

因果逆転の槍。いろいろなバリエーションがあるが結局は心臓を穿つ。しかも狙いが必中なんだからタチが悪い。

最後のゲイ・ボルク・アルスターは名前を変えようか検討しているとか？

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

アサシンのマスター。主に『プラズマ☆イリヤ』の力を使う。いやイリヤのリアルラックが高いのだ。しかもなんのデメリットもなしにツヴァイフォームを使える。

ムーンセルの副作用でアーチャーと合体してしまう。

アサシン

真名 不明

筋力 D 耐久 C

敏捷 A + 魔力 C

幸運 E 宝具 B + +

気配遮断 A+ 単独行動 A

赤いフードを被ったイリヤのサーヴァント。クールに銃火器を使用し相手を爆殺する。恐らくダイナマイトやロケットランチャー、コンテNDERやキャリコは序の口。

宝具

時のある間に薔薇を摘め

クリーザ

アヴェンジャーのマスター。死徒。勝つためには自分のサーヴァントを盾にしたりする。そのせいでアヴェンジャーの謀反にあい、ロボロになる。更に世界の指パツチンで完全に消滅する。

アヴェンジャー

真名 復讐者ジャック・ザ・リッパー

(クリーザから世界へとマスター変更で変化)

筋力 C↓B 耐久 C↓B

敏捷 A+ 魔力 D↓B

幸運 D 宝具 B+↓A

気配遮断 B 復讐者 A↓B

クリーザのサーヴァント。作者のお気に入り。復讐者であり、世界と契約した守護者でもある。クリーザの行動が嫌になり謀反を起こす。その後現れた世界と契約する。

宝具(別のクラスで召喚された場合は宝具も変更する)

復讐者は殺人鬼となりて

間桐桜

ライダーのマスター。BBちゃんという礼装に加えて『パラディオン』というライダーの作った槍を使う。しかしマトウシンジの襲撃で重症をおう。

ストレスが最大までたまると『黒ザクラ』に変貌する。『黒桜』ではない。どっちかというとなタよりである。

ライダー

真名 チェイス

筋力 A 耐久 A

敏捷 EX 魔力 E

幸運 D 宝具 EX

対魔力 D 騎乗 A

桜のサーヴァント。真名はチェイス。そう遠くない未来で『仮面ライダー』として戦った戦士。仮面ライダープロトドライブ、魔進チェイサー、仮面ライダーチェイサーとして戦う。

宝具

静止した世界の救世主

間違いを正すための死神

友を救うため、もう一度正義を

仮面ライダーチェイサーに変身する宝具。ライダーの最強の宝具。シンゴウアックスを最大限まで使用できるのはチェイサーのみである。黒ザクラを制御するための安全装置でもある。

間桐慎二

桜の兄。口ではあーだこーだ言いながらも心配するワカメ。間桐の家にある本を使って戦う。といっても形だけ。あまり役にたてなかった。それでもツツコミスキルは最強。流石ワカメ！

ギルガメツシュ

筋力 B 耐久 C

敏捷 C 魔力 B

幸運 A 宝具 EX

対魔力 E 単独行動 A+

黄金のサーヴァント。もう周りのことは気にしなくなった。しかも慢心を全然しない。まさに最強！しかしアルケイデスに左腕を吹っ飛ばされる。まあ義手作ってもらったけど。

宝具

ゲイト・オラ・パピロン
王の財宝

終末剣エンキ

プロトギルガメッシュの鎧についている二本の剣。双剣としてヤトンファーとして、そして弓としても使うことができる。

弓として矢を天空に打ち出したあと、約7日をかけて最大級の一撃として落ちてくる。

本来は水を呼ぶ剣である。

◇ムーンセルの副作用で呼ばれたサーヴァント◇

玉藻の前

彼女にはガウエインとカルナの力が混ざっており、真つ正面からはまず勝てない。しかしそれを倒した真琴とアーチャーはやっぱり主人公！

ちやかり真琴に惚れた模様。

宝具

ヴァサヴィ・シヤクテイ
黒き日輪よ、死に随え
エクスカリバー・ガラテイーン
転輪する黒き太陽の剣

攻・水天日光天照八野鎮石

上二つはカルナとガウエインの宝具。

下は玉藻の前の宝具。ブームにのり鏡からビームをだすように。

メイヴ、クー・フリーン・オルタ

コノートの女王と、彼女の求めた理想のクー・フリーン。バゼット、ランサーコンピを一度は撃破する。

しかしリベンジに燃える赤枝の騎士たちは止められなかった。

マトウシンジ

別世界のクズ若布。できればもつとクズくしたかった。ハサンとペイルライダーの力を使いイリヤ、アサシン、ライダー、真琴、アー

チャー、慎二を追い込むが……黒ザクラの餌食になりました。

アルケイデス

ヘラクレスの人としての名。ギルガメツシュと戦闘した。何故かカタコト。ランスロットの能力も持ちギルガメツシュの財宝を打ち出す芸当を見せた。

ゴルドドライブ

未来の仮面ライダー。未来ではチェイスを倒したが、今回はライダーに倒された。あつけない。

両義式

直死の魔眼を持つ少女。幹也の仕事の付き添いで冬木にやってきた。真琴と戦い興味を示す。しかし世界によって元の世界に戻される。

アルクエイド

真祖とよばれる存在。天真爛漫な女性。シエルと共にクリーザを追って冬木にやってきた。特に戦闘がないのは許してくれ。

シエル

カレール好きの女性。アルクエイドの自由行動に頭を痛める。クリーザを追って冬木にやってきた。特に戦闘がないのは許してくれ。アルクエイドとシエルが追っていたのは『月姫』の世界のクリーザ。この世界のクリーザはぶつちやけ人違い。

セイヴァー

真名 世界

謎の存在でアヴェンジャーのマスター。ムーンセルの副作用で呼ばれたらしいが。そしてクリーザを消して式、アルクエイド、シエルを元の世界に戻す。呼んだのこっちなのに。

後に彼の存在がとんでもないことに。

休息　　く薔薇の皇帝く

あの戦いから2日が経過した。俺やジャンヌ、イリアーチャーとアサシンはすっかり衛宮邸の一員と化している。現にこうして居間でくつろいでいる。

俺はニュースを見て、ジャンヌは机に突っ伏して寝ている。イリアーチャーは煎餅をバリバリと。アサシンは朝から姿を見ない。衛宮は台所で洗い物。セイバーはバイト、遠坂は家に戻っている。藤村先生は弓道部の練習を見ている。

「なあ衛宮、手伝おうか？」

「ん？いやもう終わるから大丈夫だ。そこでゆっくりしていてくれ」
流石主夫だ。手際がいい。

「ねえ真琴ー。ヒマー」

「だったら何だよ。俺にどうこうできる問題じゃないだろ」

「確かに暇よね。お兄ちゃんの家って何にもないから」

「悪かったな何もなくて…」

洗い物を終えた衛宮が居間にやってくる。

「でももうすぐ遠坂が面白いもの持ってくるって言ってたから。それまで待とうないりゃ」

「リンが？リンの面白いものってロクデモナイものでしょ？大丈夫なの？」

前回は宝石剣とか持ってきた。危うく冬木市が吹き飛ぶところだった。まあアレよりロクデモナイものなんてないだろ。

「ただいま衛宮君」

「お、早かったな遠坂。んでそれは」

「これ？ノートパソコンよ」

全員が身構えた。あの機械音痴の遠坂が、あの機械音痴の遠坂が！ノートパソコンを持ってきたのだ！俺は開いた口が閉じず、イリアーチャーは白目になっている。衛宮は既に投影を開始している。ジャンヌは寝ている。

「ちよ、ちよつとなによ。なんでそんなに身構えるわけ？これ普通

ノートパソコンよ?」

「なんで遠坂がパソコンなんて持つてるんだよ」

「あらいけないの?これでも現代っ子なんだし、それに魔術師が機械にいつまでも弱いなんて時代遅れでしょ。大丈夫よ前にアーチャーに教えてもらってるから」

それなら大丈夫か。全員が警戒を解く。遠坂は机にパソコンを置くのと電源をつける。おお、なんとという。まさかそこまで成長しているとは!

「それで、なんで持つてきたんだ?ただ見せたいために持つてきたのか?」

「違うわよ。それじゃあただの自慢じゃない。今後の方針をまとめるのに丁度いいかなって思ったからよ」

遠坂のことだからノートにでも書くのかと思つたが、恐らくいい機会なんだろう。古き遠坂はもういない。これからはデジタルな遠坂だ!!

しかし、遠坂はいつまで経つても機械音痴^{遠坂}だった。

「ああ!!もうなんなのよ!!これどうやるの狩野君!」

「俺!?!」

できない苛立ちからパソコンをバンバン叩きまくる。おいおいそんなことしたら。ほらバチバチし始めた。ん?バチバチ?ヤバくね?

パソコンが光った。いや正確にはパソコンの画面が光っている。最近のパソコンは画面が光るのか……光が収まると画面から何か

ニヨキツと飛び出してきた。まるでセイバーのくせ毛のような。

次の瞬間画面から人が飛び出してくる。赤い服を着たセイバーに似た人物。

「セ、セイバー!？」

「パソコンって…サーヴァントを召喚できるのか」

「嘘…私セイバー引いちゃった?」

戸惑う俺たちを余所にセイバーらしき人物は辺りを見渡している。そして一言「ここは…S.E. R.A. P.Hではないのか」と。

「あ、あのくセイバー?」

「ん? おお凜ではないか。ここは何処なのだ?」

「何処って、衛宮君の家だけど」

「エミヤ? 何者だそれは? 新しいマスターか? もしやそこの黒髪か?」

「悪いが俺じゃない。俺はそこのアーチャーのマスターだ。衛宮はそこの赤髪だ」

衛宮のことを知らないセイバーか。間違いなく別人。違う真名のサーヴァント。何処の英霊か分からないが多分セイバーの親戚だろう。しかし露出強だなこのセイバー。お尻見えてるや。

「貴女はセイバーなの?」

「うむ! 余こそがあのキャス狐よ・り・も! 至高にして曇りなき剣! 奏者の最優のメインサーヴァント! セイバーだ!」

言ってやったりとドヤ顔の赤セイバー。うん可愛いな。そして気になることがいくつか発生した。

「メインサーヴァントってなに?」

「よくぞ聞いてくれたな紅い外套のアーチャーよ! ん? 其方は不思議だな。一人なのに三人の気配を感じる。うち一つは何処かで出会ったような…:…まるでページをめくるような」

「ちよつと早く答えなさいよ」

「そう急かすな。うむメインサーヴァントとはだな、そのままの意味、メインサーヴァントだ！」

「メインってことはサブサーヴァントもいるの？」

「そうだぞ。真名を玉藻の前。メインサーヴァントの座を狙う狐だ」

玉藻の前。その真名には覚えがある。つい先日に関戦した敵。その時はガウエインとカルナの力もプラスされたサーヴァントだった。多分その二人の力がプラスされてない玉藻の前だと思うが。

「つまり貴女のマスターは二人のサーヴァントを従えてるのね」

「そうだ。と凜、何故今更確認する？知らないわけではなからうに」

「知らないのよ。多分貴女の知っている私じゃないのよ」

「ん？どういうことだ？」

分かっていない赤セイバーに今までのことを説明する。遠坂がパソコンを叩きまくったこと。その結果赤セイバーが呼び出されたこと。

「なるほど。つまりここは余の知らない世界というわけだな」

「別世界の聖杯戦争に呼び出されたセイバーと捉えるべきだな。そう考えるのが一番だ」

「別世界の聖杯戦争……少し気になるわね。そこにも私はいるの？」

「そうだ。凜はいるぞ。他のメンツは見たことないがな。凜のサーヴァントは青タイツのランサーだ」

ん？それってまさか……あのランサーが思い浮かぶ。バカ笑いうる最強の一角。まさか別世界の聖杯戦争でも呼ばれてるなんて。

「この際いい機会だ。余の参加する聖杯戦争について話そう。あと奏者のこともな！」

それから赤セイバーの語りが始まった。

時は西暦2032年。なんでも月に聖杯が見つかりそれを巡って百人以上のマスターが戦うトーナメントらしい。もつと言っていたが大雑把に言えばこうなる。

そして赤セイバーのマスター、岸波白野は記憶喪失らしい。セイバーは彼の助けに応じて彼のサーヴァントになったとか。しかも現

在はラブラブらしい。実に微笑ましい。

「これが余と奏者の激闘と愛の物語だ」

「凄いな。最弱のマスターがそこまで這い上がるなんて」

「どっかの誰かさんみたいだな」

「なんでこつちを見るんだ遠坂？」

「さて、余は話したのだ。其方らの話も聞かせてもらおうか」

「俺たちの？」

「うむ。余は今の聖杯戦争しか知らぬ。故にこのような聖杯戦争には興味があるのだ。ダメだろうか？」

そう頼んでくる赤セイバーはまるで『雨の中こちらを見つめてくる子犬』のようだった。率直に言って可愛い。控えめに言ってみちやくちや可愛い。

そして話した。教会での初戦、学校で行われた二回の激戦。ムーンセルの副作用で召喚されたサーヴァントとの死闘。そしてさらなるムーンセルの副作用。

「ふむ、そちらの聖杯戦争も大変なのだ。猶予が与えられるが避けられない戦いの月の聖杯戦争。戦わなくてもよく、同盟も組め、のびのびと戦えるバトルロワイヤルの聖杯戦争。どちらが良いかわからんな」

全くだ。聖杯戦争なんて誰が考えたのか……そういうや部屋に第三次聖杯戦争の日記があったけど……まさか。

◇

時刻は6時を過ぎる。赤セイバーを元に戻すために作業を開始して早……何時間だ？ 忘れた。とりあえず機械音痴に見えて意外と機械に強いバゼットさんに来てもらった。しかし何故こうなったかさっぱり分からず、こうなったのは何万分の確率の話らしい。

赤セイバーはジャンヌやイリアーチャー、遠坂や衛宮ともすぐに仲良くなった。みんなで談笑している時、

「ただいま戻りましたシロ……ウ？……キリ……アサシン！ 私は誰に見えますか!？」

「誰って…セイバーだろ？ああ、イリヤから連絡があつたもう一人のセイバーか」

セイバーとアサシンが外から帰って来た。セイバーは驚いている。無理もない。ほぼそっくりなのだから。そりゃ驚く。アサシンはイリヤから連絡があつたらしくさほど驚いていない。

「おお、其方がシロウのサーヴァントのセイバーか！確かに余に似ている。だが足りんなあ、赤さが足りん!!余のファンならもう少し赤くなければな!」

「赤さですか？確かに私のイメージカラーは蒼銀ですが…というより私は貴女のファンでは」

セイバーが否定しようとした時、

「フハハハハハ！ここか！セイバーの家は!」

とてつもなくイヤナヨカン。そしてさらなるバカの襲来。止まることのない暴風のようなナニカ。

「ハハハハハ、ハ!?セイバーが二人だと？いや騙されんぞ。その胸が無いのが我のセイバー!そして赤いのがセイバーのパチモンか!!ハハハハ流石我!」

「なんでいるのですか貴方は!!」「なんだ貴様は!!」

瞬間二人の鉄拳が黄金の英雄王に炸裂する。見事に暴風を破壊した。

「ギルガメッシュ!?!」

「なんで金ピカが!?!」

「私の城を壊したやつ!!」

「そろいも揃って吠えるではないかマスターども。貴様らに吠える許可は与えておらんぞ?」

上から目線の英雄王。きつとこれがいつもの英雄王。鼻血を流し

ながら英雄王は高らかに笑っている。

「何をしに来たのですか英雄王」^{ストーカー}

「ストーカー扱いするでない！我はただ奇妙な魔力を感じ取ってここまで来ただけだ！冬木の市長と契約している故な。月に一回町に貢献せよ、とな。ここがセイバーの家だったのは偶々だ」

冬木の市長とそんなこと契約しているのか。いや奇妙な魔力ってなんだ？まさか赤セイバー？別世界のサーヴァントだからか？

「感じぬか？ワラワラと湧いてくる虫のような魔力を」

『感じない』

満場一致。しかし感じないものは感じない。英雄王の眉がヒクヒク動いている。お怒りか？

『あーあー聞こえますかー』

途端に聞こえた声。この聞き慣れた感じはアーチャー……じゃなくって玉藻の前。まさか！

『おや？やつと繋がりましたか。ご主人様向こうと繋がりましたよ！』

「玉藻の前……うわあキャピキャピだ」

『ちよつとなんです！？初対面でそれはヒドくありません！』

「いやあ、イメージと違って」

『イメージ！？まさか私のイメージは昔の神様世代でストップしている！？』

「おおキャス狐ではないか！奏者はどこだ？奏者を出さぬか！」

「おいおいバンバン叩くな赤セイバー！」

そして感じた。英雄王の言っていた虫のように湧いてくる魔力を。このパソコンから。それは全員感じていたらしい。

「!?伏せるマコト！」

すぐに伏せる。瞬間機械の虫が画面から飛び出てくる。それを一閃、赤セイバーが斬りふせる。流石セイバーだ。これくらいは造作もないか。

しかし今度は黒い腕が飛び出てくる。腕はセイバーと赤セイバー、イリアーチャーを掴むと画面に引き込んでしまった。

「セイバー！イリヤ！」

「追いかけるぞジャンヌ！」

「その前にこの虫を潰さないかね！」

ジャンヌの言う通り、この居間には無数の虫、いやエネミーが湧いてくる。まずはこいつらを潰さないで。

赤セイバーとセイバー、そしてアーチャーを引き込んだもの。それはエネミーの大群だった。

（お願いアーチャー）

「お願いされたわイリヤ。ここは任せなさい」

「む？切り替わったように魂が変わったなアーチャー。お主何者だ？感じたことはあるのだがナニカ違うのだ」

「セイバー、アーチャー。話をしていない場合ではないようです」

セイバーは武装を完了している。赤セイバーもアーチャーも戦闘態勢を整える。敵は無数。しかしここに英雄三人。無双するには充分な戦力だった。

『もしもし聞こえますかお三方。そこは場所が安定しません。遅くて十分、早くて五分でそこは隔離されます。つまり帰る術をなくすことに。ですがその親玉を倒せばそれぞれのところに戻るかと。とにかく時間との勝負です。さあ急いでくださいまし！』

「悔るなキャス狐よ！ここには余を含めて三人のサーヴァントがいるのだ！負けることなどない！」

「全て斬り払います。アーチャーも準備できてますか？」

「できてるわ。今回はアーチャーらしく援護に回る。討ち漏らしはこっちで片付ける」

「な？このメンツで負けると思うか？」

『はあく。その慢心が何処かの誰かさんみたいな結果に繋がるのですよ？まあ分かりました。私もそちらには行けませんし、ここでご主人様と一緒にサポートいたします』

「な、奏者の部分だけ強調するとは。ズルいぞキャス狐！奏者よ、あとでいっぱいイチャイチャするからな！」

「来ますよセイバー！アーチャーも援護をお願いします！」
「かしこまり！」

セイバーは白銀の聖剣でエネミーを斬りふせる。赤セイバーも負けず劣らずエネミーを倒していく。アーチャーは二人が討ち漏らしたエネミーを確実に狙撃して倒していった。

この三人、まさに最強だった。

「なかなかやるではないかセイバー！」

「そちらもやりますねセイバー！」

「凄いわね二人とも。つとボスの登場かしら？」

エネミーが集合していき巨大な人型になる。黒い巨人だ。セイバーとセイバーの斬撃にアーチャーの狙撃を食らっても巨人はビクともしなかった。

「風穴を開けたのに…こいつやるわね」

「む？あれだ！」

赤セイバーが指差す方向には穴が開いていた。空にぽっかり開いた穴。そこからエネミーが溢れ出ており巨人の再生を手伝っていたのだ。つまりあれを叩かないとこの巨人は倒せない。

「セイバーよ！其方の聖剣、かなりの宝具と見える…アレを打ち消せるか？」

「お安い御用です。しかし時間がかかる。セイバー、アーチャーと足止めをお願いしますか？」

「足止めか。よかろう！余自らが足止めをしよう！」

赤セイバーに魔力が集中する。これこそが彼女の宝具。

「我が才を見よ！万雷の喝采を聞け！しかして讃えよ！黄金の劇場よ！！」

アエストゥス・ドムス・アウレア
招き蕩う黄金劇場。生前の彼女が設計し建設した黄金劇場。そここそ彼女、ネロ・クラウディウスの宝具だ。

「さあ舞うが良いアーチャー！」

「そこは人任せなんですわね！」

アーチャーの狙撃の威力は格段に上がっている。一撃が自身の宝具に匹敵するぐらいだ。しかし最後はこのセイバーに託そう。

セイバーの聖剣、そして右腕には多大な魔力が集められていた。まさに輝ける腕^{アガートラム}。そこから繰り出される最強の一撃。

「我らに勝利を与える太陽の聖剣！」^{エクスカリバー・ガラティーン}

星と太陽の一撃が巨人と穴を貫いた。

『エネミー掃討お疲れ様です。セイバーさんはこちらの扉へ。あとのお二人方はそちらの扉へと。ではでは無事のご帰還を』

「どうやら別れの時のようだ。其方らとはもう少し話していたかったな」

「私もです。貴女といると、不思議と心地よい気分になれる。今回の戦闘も貴女のおかげです。まったく貴女のマスターが羨ましい」

「案外いいコンビね貴女達」

「そういう其方もいいコンビなのではないか？」

「ご想像にお任せするわ皇帝陛下」

「結局分からずじまいか。まあよい。いずれまたな聖剣のセイバーよ」

「はい。今度は戦闘抜きで、ゆっくりと語りたいものですね薔薇のセイバー」

「おや戻ってきましたかセイバーさん」

「うむ！余は戻って来たぞ！留守を任せて悪かったなキャス狐よ」

「まあ戻ってこなくてもご主人様をGETできてたのでよかったですよ。まあ貴女が帰って来てくれて喜んでますよ」

「そうか。奏者よ！またせたな余は帰って来た！土産に向こうの話をしよう！」

「不思議なこともあるものね真琴」

「そうだな。でもバゼットさんが言うにはもうこんなことは起きないだろうって言ってたな」

「もしかしたらあの喫茶店ならありえるかもしれないわね」

「かもな」

「ねえ狩野君、ジャンヌ。なんかいっぱいサーヴァント出て来たんだけど」

「……………は？」

それはまた別のお話。

休息　　くあの夜の続きをく

今日こそ……聞いてみる。

◇

誰もが寝静まった夜。真琴とジャンヌは一緒の布団に。イリヤは早々に布団に入った。遠坂も自室に戻っている。

そんな夜の縁側に座る一人の男。その風貌からアサシンだと一目でわかった。アサシンはこちらには気付いているはず。しかし声はかけてこない。こちらから話しかけないと無言の沈黙のままだ。

「……」

「……なあアサシン」

「何かな衛宮士郎」

予想外にもアサシンはすんなり応答してくれる。イリヤからの命令でしか動いてくれなさそうな冷酷な男。それでも俺は気になっていた。

彼の『真名』に。

「単刀直入に聞く。あんたの真名についてだ」

「なんのことかと思えば……意外と好戦的なんだね」

「違う。これは俺の興味本位だ。あんたにはどこか他人のような気がしない。どこかで会ったことか」

「ないよ。少なくとも僕の覚えている限り」

アサシンは頑なに真名を明かしてはくれない。それも当然だ。聖杯戦争中に真名を明かすということは致命的な事態を招く。

「悪いが話はここまでだ」

「ちよ、待ってくれ」

「待ちなさいアサシン」

立ち去るアサシンを止めたのは、寝間着に着替えたセイバーだった。

「シロウに真名を明かしても構わないのでは？いえ、寧ろ明かすべきです。シロウにとっても、貴方にとっても、それは無駄なことではないはずですよ」

「サーヴァントはマスターに似るのかな。それなら君から伝えればいい」

「私より貴方の言葉で伝えるべきだ。それでなければ意味がない」
「……………やれやれ、このままだと処断されかねないね」

アサシンが諦めたように再び縁側に座る。そして赤いフードに手をかけてそれをのける。

「!!……………やつぱり、爺さんだったのか」

「あまり驚かないのですねシロウ」

「確信があつたわけじゃない。それでもあの教会で戦つた時から気になつてた。藤ねえも薄々気になつてたみたいだから」

アサシン、いや衛宮切嗣。十年前に俺を助けてくれた命の恩人。そして俺が正義の味方を目指すきっかけになつた男。あの約束をした夜に静かに息を引き取つた。

「それでも俺を知らないなんて……………どうしてなんだ」

「それは仕方ありません。彼は『別世界の衛宮切嗣』なのです」

「別世界の爺さん？」

「結局君が話しているじゃないかセイバー」

「貴方が喋らないからです」

セイバーとアサシンは随分と仲が良さそうだ。でも不思議とこの光景は珍しいと思わない。どこかで見たことがある。

「僕は、恐らく君の知っている衛宮切嗣とは別人だろう。彼とは歩んだ歴史が違う」

◇
そこからアサシンは語つた……………己がいかに反英雄になつたのかを。

事の始まり、というよりは『夢の始まり』と言つたほうがいい。まだ幼かつた頃のアサシンとはある島で父親と共に暮らしていたらしい。

そこで知り合つた一人の少女、名をシャーレイ。

アサシンとシャーレイとはある夜にお互いの夢を語つたらしい。

『ケリイはさ、どんな大人になりたいの？』

『僕はね、正義の味方になりたいんだ！』

迷う事なく、アサシンはそう答えたらしい。

それからアサシンは一人島を出た。正義の味方になるために。世界中の紛争地域を渡り歩いた。その中で一人の女性に出会った。

彼女の名はナタリア。フリーの魔術師だったという。

『君にはどうやら素質がある。どうだ、その素質を使ってみないか？』

『それを使えば…より多くの人を助けられるのか』

『さあ？助けるも殺すも君次第だ』

アサシンはナタリアの提案に乗った。そして起原弾を手に入れた。自らの肋骨を砕いて作った特製の弾丸。のちに『魔術師殺し』と呼ばれるアサシンの切り札だ。

それからアサシンはそれを使って大勢の人を救った。しかしそのために流す血も多かった。

それからアサシンはナタリアの元を離れ、フリーの魔術師となった。その中でとある事件に出会った。

そう、第四次聖杯戦争だ。

あらゆる願いを叶える『聖杯』。それに魅せられる者は少なくなかった。勿論アサシンもその一人だった。

そこでアサシンはサーヴァントを召喚した。

『問おう。貴方が私のマスターか』

クラスはランサー。真名はアーサー王。かの円卓の騎士王だ。手にしている宝具は聖剣ではなく聖槍。どちらにしても強力な宝具だ。

しかし彼らの関係は複雑なものだった。

まず召喚した直後にバーサーカーの襲撃を受け分断されてしまった。

しかも一度や二度ではなかったらしい。合流の度に分断をされてしまったらしい。

それにブチ切れしたランサーが冬木市を半壊させたと同時にサーヴァントを五騎も倒したらしい。

しかしそのランサーもとあるサーヴァントに倒された。黄金の

アーチャーに。

よって第四次聖杯戦争でランサーとマスターが会話をすることがなかったらしい。

そして第四次聖杯戦争は聖杯の暴走で冬木市を壊滅させて終結した。

そこで俺は勿論のこと誰も助けられなかったらしい。聖杯戦争での仕事仲間の傭兵も全員死んでしまった。生き残ったのはアサシンただ一人だったという。

それから十年後、第五次聖杯戦争が勃発した。アサシンは再び聖杯戦争に参加したという。その時は軍神の剣を持つセイバーを召喚した。真名は最後まで分からなかったらしい。

そのサーヴァントは強力で次々と他のサーヴァントを撃破していった。

しかし聖杯が現れることはなかった。

それから数日後、世界中に聖杯戦争の戦火が広まっていることを知ることになる。

『マスターは世界中にいる。世界を救うためには、全てのサーヴァントを殺すしかないのか』

それからアサシンはセイバーと共に世界を巡りサーヴァントを倒していった。道中セイバーを撃破されてしまうが、それでも世界を救うためにサーヴァントを倒していった。

そして最後の一人を倒した後、アサシンは反英雄になった。英雄を殺して回った反英雄として。正義の味方を目指した男の行き着く先はアンチヒーローという正反対のものになってしまった。

『こんな人生に、意味はなかった……』

◇

「これが僕が反英雄になった経歴だ」

俺もセイバーも言葉が出なかった。それこそまさに夢物語のような展開だ。正義の味方を目指したアサシンは夢に敗れたのだ。

どこかアーチャーを彷彿させるその人生。エミヤの人間はそうな

る運命なのだろうか。

「この世界の僕は君を助けて、そして夢を託せたみたいだね。悪いこととは言わない、その夢を追いかけるのはやめるんだ」

「……アサシン、その夢を追いかけるか否かはシロウが決めることです。貴方が指図することではない」

「いいや、これは指図してでも止めるべきなんだ。聞けばあの紅いアーチャーも同じことをしたそうじゃないか。彼も僕と同じような道を辿った人間だろう。だからこそこんな連鎖は止めさせなくてはいけないんだ」

アサシンの声は静かながら迫力があつた。どうやっても俺を正義の味方から遠ざげたいらしい。

「どうしてもやめないと言うのなら、手荒だが実力行使もやむを得ない」

「……それでも、俺は正義の味方を目指すよ」

「……一応理由を聞こうか」

「それは俺が諦めが悪いのもあるし、人を助けたいのもある。それに爺さんとの約束なんだ」

「分からないのか？君にとってそれは呪いと同じなんだぞ。今ならまだ間に合うんだ」

「そんなことを言われても俺は諦めない。それにアサシンやアーチャーが後悔したからって俺も後悔するとは限らない。

俺は絶対に後悔しない。たとえその道で多くを失うことがあっても、この道は決して間違いないんじゃないんだって」

「シロウ……」

「……」

「実力で止めるならそれでも構わない。俺も覚悟はできている」

緊張が走る。まさに一触即発だ。ここでアサシンが宝具を発動したらたとえセイバーでも対応できずに俺は死ぬ。

「……はあ、そうか。そうだよな。僕も君みたいなバカだったから正義の味方を目指したんだ」

「バカって……爺さんが俺と約束したんじゃないか」

「僕ではないけどね。分かったよ、好きにすればいい。でもこれだけは伝えておく。そこまで言ったのだから絶対に後悔するな。それと僕の真名はイリヤには伝えないでくれ」

「どうしてだ？イリヤはアサシンの真名を知らないのか？」

「それについてはまた今度ね。セイバー、君にも頼んでおくよ」

「わかりましたアサシン」

アサシンはそれだけ伝えるところのまま姿を消した。

「……シロウ、私は今複雑な気分です。前に聞かされていましたが再び聞かされると、この世界の切嗣とあのアサシンはやはり違うのだなと」

「どう言う意味だ？」

「この世界の切嗣は私と一言も言葉を交えることなく聖杯戦争を戦い抜いた。そんな切嗣は貴方に夢を継がせた。」

しかしあのアサシンは私とも会話しようとし、他のサーヴァントとも仲良くしています。しかし貴方の夢、切嗣の夢を否定し、やめさせようとしている。

同一人物でも世界や歩む道が違う結果、夢を否定するか否か異なっている」

確かにそうだ。俺の知っている切嗣とあのアサシンは同じ雰囲気だがどこが違う。根本的なものが違うのだ。でも、

「でもやっぱり切嗣なんだなって、思う」

「そうですね。どこかでシロウに甘いのですよ。切嗣もアサシンも」

切嗣爺さんに託された夢を切嗣アサシンに否定される。そんな夜。でも俺には、あの夜の続きが見れた気がする。

休息　く真琴を探してく

「……ん」

目を覚ますといつもの寝ぼけ顔はなかった。どうりで寒いわけだ。あいつ無駄に体温高いからいい湯たんぽだったのに。私の許可なく起きるなんて許せないわね。

「うう……寒い」

2月11日。建国記念の日。この日本では国民の祝日だ。それでも真琴が通う学校は今も訳あって休校中だ。

そんなお休み真っ只中だというのに。ずっと私の湯たんぽとして活躍できるというのに。

「おはようジャンヌ」

「ねえ真琴は？」

「真琴なら朝早くから出かけたぞ？なんでも今日は夜まで帰ってこないってさ」

朝ごはんを食べながら衛宮士郎の話を聞く。どうやら学校に向かったらしい。休校中だというのに何をやっているのかあのバカは。仕方ないから私がガツンと言ってやろう。何を？後から考えればいい。

「なあジャンヌも手伝ってくれよ。今日のパーティーの準備」

「パーティー？祝日だからってパーティーするの？バカじゃないの？」

「でも祝日だからじゃないよ。今日は真琴の誕生日なんだ」
「は？」

知らない、聞いてない、初耳だ。あのバカは今日が誕生日らしい。勿論復讐の魔女である私には関係のない話だ。むしろパーティーは妨害するのが魔女の役目だろう。

それと同時に複雑な気持ちも存在するが……

「ジャンヌはプレゼント買ったのか？」

「ぶれぜんと？」

「誕生日なんだし当然だろ？真琴ならなんでも喜ぶと思うぞ」

「あんたは何をあげるのよ」

「変身ベルト。真琴そういうの好きだからさ」

一人で変身ごっこする真琴を想像する。あのバカなら違和感があるまりない。一人で『お借りしまーす!!』とか言ってる。

でもプレゼントというのは面白いかも。変なもの押し付けてあいつの嫌な顔を見るのも面白そうだ。

「今ならまだ学校にいるかもな、って……もう出かけたのか」

◇

「真琴？ああ、マコツチなら今出てったよ」

「はあ？」

学校についてまずグラウンドに向かった。そこには走ったり、跳んだり、槍を投げたりと運動をしている学生がいた。恐らく陸上部とかいう組織だろう。校舎もだいぶ直っている。だからグラウンドで部活ができるのだろう。

「てか、真琴は何をしに来たわけ？」

「マコツチはあたしが誘ったんだ。今日ぐらいは顔をだせてさ。もしたら嫌味言いながら来てくれたよ……まあ練習には参加してくれなかったケドさ」

「真琴がどこに行ったかわかる？」

「んんーあいつに言いふらすなって言われてるんだ。てかお姉さんマコツチの知り合い？」

「知り合いって言えば知り合いね。身内よ」

「なんだそうなんだ。どうりで雰囲気似てるわけだ！でもこの前のレッドの兄ちゃんとも雰囲気似てるしなあ」

レッドの兄ちゃん？赤いやつといえればあのアーチャーが思い浮かぶ。

「まあ身内ならいいか！マコツチならデートに行ったよ、って姉ちゃん大丈夫か!?顔色悪いぞ!？」

◇

まさかあそこまでバスが難しい乗り物だったなんて。おかげで帰りの分のお金がなくなっちゃったわ。

「たしか……いた！」

銅像の前に真琴がいた。いつも通りの革ジャンにジーパン。妙に様になってるのが悔しい。あいつ中々カッコいいし。

そんな真琴に近づくと一人の女。黒髪のボーイッシュでクールな雰囲気を出している。彼女も中々可愛い。

そしてそんな二人は……似合っている。

「ふーん。狩野君も隅に置けないわね。まさか隣のクラスの朝田さんと付き合ってるなんて」

「!? あ、あんたか遠坂凜」

突然声を掛けてきたのは遠坂凜だった。手に荷物を持っているから多分真琴のプレゼントだと思う。

「貴女もプレゼントを買いに来たの？」

「ち、違うわよ！ 誰があんなバカのために！」

「ふーんどうかしらね。貴女狩野君と一緒に寝ているみたいじゃない」

「な!? そ、それはあいつが無駄にあつたかいから湯たんぽがわりに使ってるからよ！」

意地悪に質問してくる遠坂凜。違うのに。

「それでどうするの？」

「どうするって……なにを？」

「狩野君の後、つけるんでしょ？」

またしても意地悪に聞いてくる遠坂。どうやらこいつの中ではもう決定していることらしい。

「しょ、しょうがないわね！ あんたが後をつけるなら、私も手伝うわ」
「まったく素直じゃないんだから。それじゃ決まりね」

こうして真琴の追跡が始まった。

◇

真琴たちはまず喫茶店に入っていた。お洒落な喫茶店だ。私たちも入っていくと、まず目についたのはガングロハゲマスターだった。よくあんな厳つい姿で喫茶店のマスターなんかするわね。

「この席ならバレないし話も聴けるわね」

「本当に大丈夫なの？」

「問題ないわ、多分」

心配しか残らない。こいつの最大の欠点は『大事な場面でのうっかり』だ。それが一番心配だ。

真琴と朝田とかいう奴の会話はいたって普通だった。勉強の話、家族の話、最近の出来事、3日後の花火大会の話などなど。正直つまらない。

「これがデートなの……つまらないわね」

「そう言わないのジャンヌ。まだ始まったばかりよ」

喫茶店で30分過ぎた後、真琴たちは雑貨屋さん、ガンシヨップ、などなど。映画館では『そーどあーと・おふらいん』を見にいったよ。うだが、どうも甘ったるい予感がしたのでそこは遠坂に任せて私はプレゼントを買いに行くことにした。

「何をあげたら面白いかしら」

「おう、何やってんだジャンヌ」

振り返るとランサーがそこにいた。こいつも無駄に着こなしているからなんか悔しい。

「別に。ただブラブラしてただけよ」

「そうかい。あんたのことだからあの小僧に何か買うと思っていたんだがな」

「はあ？そんなわけないでしょバカじゃないの？死んじやええ？てか死ぬ！自分の槍に貫かれて自害しろ!!」

「なんか俺だけ酷い言われようじゃね!?!」

こうしてランサーを言葉の暴力で倒した後に私は気づいてしまった。

◆ そういえばお金なかった。

◆ その後も特に進展なしで終了した真琴のデート。彼女と別れた後真琴は自分の家に戻っていった。

遠坂はそこまで追うつもりはないと衛宮の家に戻った。そういえば今日は衛宮の家でパーティーだ。なのに真琴は自分の家に戻った。

つまり真琴はパーティーを知らない？

「まったくしようがないわね」

呼び鈴を鳴らす。しかし反応がない。もう一度鳴らす。やっぱり反応がない。

「勝手に邪魔するわよ。って暗っ！」

電気がついていなかった。まだ外は少し明るいというのに。まるでテレビで見た廃病院だ。

「あそこだけ電気が付いてる」

そんなホラーハウスの一室だけ明かりがついていた。中を覗くとそこは書斎のような場所だった。そこでパラパラとページをめくる音がする。

（何を讀んでるのかしら）

真琴はこちらに気づいていない。よく目を凝らすと真琴が持っているのはアルバムだった。写真が何枚か見える。しかし距離が距離で全然見えない。

（真琴の子供の頃か……少し気になるわね）

真琴はアルバムをしまうとこちらに歩いてくる。このままでは鉢合わせだ。急いでリビングに入り込む。真琴はそのまま外に出ていったようだ。

「はあ…危なかった」

私も帰ろう。しかし私の足は書斎へと歩を進めていた。私は書斎に入るとアルバムを手に取る。本当はこんなことダメなのに。いやいいのよ。私は魔女なんだから。むしろ相手の嫌がることをしないと。

「あれ。真琴の小さい頃の写真しかない」

最後の写真は恐らく小学生の頃の写真だろう。両親と一緒に入学式の看板の前でピースする真琴。今と違いかなり女の子のような顔をしている。中性的というのだろう。

「どうせならこのまま大きくなればよかったのに……って何を言ってるのよ私は」

真琴の写真は小学生の時が終わっている。まずそれ以降に写真が

ない。これ以外にもアルバムもない。でもこれでプレゼントは決まった。

◇

夜になって真琴の誕生日パーティーが始まった。真琴はサプライズパーティーに驚いていた。『あれ？今日俺の誕生日だっけ？』『みたいなクソ鈍感展開がないだけ評価は高いわね。』

そしてプレゼントを渡す時間になった。

衛宮は変身ベルト。

遠坂は誠と描かれたTシャツ。

セイバーは狼のぬいぐるみ。

イリヤは黒いマフラー。

アーチャーは『不思議の国のアリス』の小説。

アサシンは時計。

藤村センサーは虎のストラップがついた竹刀。

バゼットは黒いグローブ。

ランサーは色違いのアロハシャツ。

そして私は、

「これよーはいチーズ!!」

真琴とのツーショット。あんな幼いころの写真で終わらせてたまるもんですか。こいつの人生はまだまだこれからなんだから。もつと写真^{思い出}残しなさいよ真琴!

—————

そんなパーティーをおこなっている最中、冬木教会では、

「ほう、あえて本気か英雄王。この時期に上半身裸とか寒くないの?」

「貴様にはエアが一番効果があろう。エアは対界宝具だからな。世界である貴様には天敵と言える。あと無茶苦茶寒い」

「気を抜くなよギルガメツシュ。私も本気を出そう」

「立ちほだかるか神父。お前の相手は私だ」

白づくめの男Ⅱ世界。原初の姿に戻ったギルガメツシュ。カソツクを脱ぎ10年以來の本気になる言峰。黒いコートを脱ぎ白シャツに黒ベストの姿になったアヴェンジャー。

世界は竜殺しの剣を二本構え、

ギルガメツシュは乖離剣を構える。

言峰の拳はアヴェンジャーに向けられ、

アヴェンジャーは通販で買い、改造したトンプソン・コンテナダーを言峰に向ける。

そして、今四人が激突する。

冬木聖杯グランプリ

「ん……あー寝ちまってたか」

目を覚ますと布団、ではなく居間だった。机の上は散らかっており他の皆さんも寝ている。どういうわけかサーヴァントはいないが、いやアーチャーはいるな。

「げ、もう11時かよ。ほら起きろお前ら」

て言っても起きるこいつらじゃないよな。仕方ない、家に戻ろう。今ならお婆ちゃんもいるはずだ。昨日はいなかったけど、いるよな？

「おや真琴君。ふああ〜あ、何処か行くのですか」

「おはようバゼットさん。自分の家に戻るんだよ。多分お婆ちゃんいるから」

「お婆ちゃんに何か用があるのですか？」

「聖杯戦争についてね」

俺の部屋にあつた第三次聖杯戦争の日記について何か知っていることがあるはずだ。このありえない聖杯戦争を止めるためのヒントとかな。

「では私も行きます。私も聞きたいことがありますし。恐らく答えを知っているはずですよ」

「？まあいいけど」

◇

「ただいまー」「お邪魔します」

「あらお帰り真琴ちゃん。そちらのベツピンさんは？」

「あ、真琴君の……仕事仲間のバゼット・フラガ・マクレミッツです」

「あらマクレミッツさんの娘さん？どうりで似てるわね〜」

「バゼットさんの家族に会ったことあるのお婆ちゃん？」

「旅をしたころにね。ささ上がりなさい」

久しぶりに俺を出迎えてくれたお婆ちゃんは何も変わっていません。いつも通りのマイペースなお婆ちゃん。でも一人旅は程々にしてほしい。

「それで今日はどうしたんだい？もしかして付き合ってる報告かい

？」

「違うってお婆ちゃん。これについて聞きたくて」

俺はお婆ちゃんに第三次聖杯戦争の日記を見せる。お婆ちゃんの表情は変わらない。いつもの優しそうな顔だ。

「どこにあっただんだい？」

「俺の部屋。タンスの裏にあった」

「あくそういえば、そんなところにしまった記憶が……」

「それで、これを書いたのは誰なんだ？」

「私だよ」

「お婆ちゃん!？」

「まさか聖杯戦争に参加していたのですか!？」

まさかまさかの第三次聖杯戦争でのランサーのマスターはお婆ちゃんだった。いやいやマジかよ。俺の部屋にあったから少なくとも俺の家系の誰かだとは思っていたが。

「懐かしいね。あの頃は私もランサーもよく暴れてたからねえ」

「カルナってやっぱ強いのか？」

「カルナ!？あの大英雄カルナですか!？」

「おやまあ、真名まで知ってるなんて真琴ちゃんは物知りだねえ。どうやって知ったんだい？」

まあここまでできたなら教えるしかないよな。俺はお婆ちゃんに令呪を見せた。お婆ちゃんはそれを見ても表情は変えなかった。

「真名なら俺のサーヴァント、アーチャーに聞いた」

「そうかい、真琴ちゃんは聖杯戦争に。これで5回目かい？」

「はい。今現在行われているのは第五次聖杯戦争です」

「4回目からまだ10年しか経ってないんじゃないかい?」

「ええ、第四次聖杯戦争からまだ10年しか経っていません」

「それは大変だねえ」

それでもお婆ちゃんは顔色ひとつ変えなかった。

「それで聞きたいのはなんだい真琴ちゃん」

「聞きたいのはこの聖杯戦争で何が起きたのか。特に最後の時に」

あの日記には最後の事が書かれていなかった。切り取られた痕跡

もないし、お婆ちゃんが書いたならサボったわけでもないだろう。多分他に理由があるからだ。

「第三次聖杯戦争はインツベルンが終わらせただよ。最終日にランサー、アーチャー、アイドルの3騎は今の海浜公園があった場所で激突したんだ。でも突然光が落ちて私たちは同時に負けたんだよ」

「真琴君、これって」

「ムーンセルか…」

多分インツベルンがムーンセルを使って3騎のサーヴァントを撃破したんだ。そしてその副作用で新都と深山町が入れ替わった。聖杯は多分ムーンセルの余波で壊れたんだろう。

「それで第三次聖杯戦争は終わりだよ。お婆ちゃんは聖杯を取れなかったんだよ」

「お婆ちゃんは聖杯に何を願おうとしたんだ？」

「うーん…その時はもうちよつと裕福になりたいとか、あと第二次世界大戦がおきませんように、とかかな」

「そうですね。第三次聖杯戦争後に第二次世界大戦が始まった。ナチスやユグドミレニア、帝国陸軍が聖杯を奪取しようとしたと噂もあります」

「そうだったんだ。詳しいんだなバゼットさん」

「これでも協会の人間ですから。ある程度は知っています。ですがわからない事もあります」

「わからないこと？」

「ええ、聖杯の『泥』についてです」

「さあセイバー！我とレースしろ！」

「お断りします、帰ってください、目障りです、消えてください、早く英霊の座に戻ってください、警察呼びますよカリバァー!!!」

「うおお!?!」

ギリギリ白刃どりでセイバーの聖剣を掴む。もう少し遅かったら玄関が血の海と化していただろう。

「別にタダというわけではない。我に勝てたら江戸前屋の商品全て

買ってやろうー！これでどうだ!!」

「いいでしょう、やります」

「それでいいのかセイバー……」

「シロウ、これは私に対する挑戦状です。レースに勝ってギルガメツシユの財宝を全て売り捌けばこの家にもイリヤスフィールの城に負けないぐらいの調理施設が入ります。それでも余るぐらいですよ？」

「よしやろうセイバー！」

◇

というわけで始まった冬木聖杯グランプリ!!この冬木のスピード自慢がそれぞれの野望のために街を駆け抜ける!

第1コース、セイバー&衛宮士郎!

マシンは……『ダウン・スタリオン・バイク!!』

「行くぞダウン・スタリオン!トランスフォーム!」

「変形したあ!?てかバイク!」

「時代の最先端を行くのが我がダウン・スタリオンです」

第2コース、ギルガメツシユ!

マシンは……『ギルギルマシーン!!』

「たわけ、私のギルギルマシーンに勝てると思っているのか?」

第3コース、遠坂凜!

マシンは……『MAMAチャリ!!』

「ちよつとーママチャリでどうやって勝ってのよ!!」

第4コース、アサシン&イリヤ!

マシンは……『ラブラブオープンカー!!』

「行くわよアサシン!狙うのは優勝よ!」

「オープンカーか…悪くないか」

(マスターはいないのね……なんか残念)

第5コース、ジャンヌ!

マシンは……『ライオン号!!』

「ライオン号ってお金入れなきや走らないのか……てかあれ遊園地のやつだよな」

「シロウ、あれ欲しいです」
「なんでこんなマシンなのよ……」

さあ各選手スタート位置についた！

そして今スタートの合図が……今鳴った!!

先頭に躍り出たのは……ギルガメツシュのギルギルマシーンだ!!

「早いな英雄王、流石勝負を仕掛けてきただけはあるか」

「ハハハハハッ、鈍いぞ雑種ども！我など後ろを見ながら走れるわハハハハハ、ヘアツ!!」

そしていきなりコースアウト!!更に壁に激突して大破したあ!!

「ギルガメツシュが死んだ!!」

「やったねシロウ!!」

「心配しろお!!……我泣きそう」

◇

今現在トップを走っているのは……セイバー、士郎ペアだ!それに続くようにアサシン、イリヤペア!その遥か後方に遠坂凜のM A M Aチャリ、更に後方にジャンヌのライオン号だ!

「アーチャー、君なら撃ち落とせるだろ?コースアウトさせるんだ」

「仕方ないわね。さあセイバー覚悟しなさい!」

「シロウ狙われています!」

「と言ってもセイバーにしがみつかないと死んじゃう!!」

「そうですね。ダウン・スタリオン!トランスフォーム!」

おおっと!?!ドウン・スタリオンが変形してサイドカーになった!!そこに士郎を乗せて、なるほどこれで迎撃するわけだ!

「投影、開始!」

「げええ螺旋剣!」

「オレ程じゃないけど、な!!」

「二うぎゃあああ!!」

士郎の矢がアサシンチームを吹き飛ばした!これはセイバーチームの一人勝ちか!?

「そんなわけないでしょうがあ!!」

「リン!？」

「自転車だからこそできる近道か!!」

「ふふん、別にコースじゃないコースを走っても構わんのでしょ？」

ここにきて凜がトップに躍り出た!!しかしバイクには勝てなかった!

「なんでよ!?!少しぐらいトップを味あわせなさいよ!!」

◇

さあレースも後半戦。ギルガメツシユもマシンを修復してレースに再び舞い戻ってきている。アサシンチームは近くにあった自転車で再び挑んでいる!・宝具まで使っているぞ!

あ、ジャンヌはお察しです。

「このまま何事もなければいいのですが」

「!!セイバー、アレは」

「な、通行止め!？」

おおつと目の前に通行止めの看板だ!!目の前では工事の最中だ!しかしここを通らなければトップでゴールできない!迂回すればギルガメツシユに負けてしまうぞ!

「どうするセイバー?」

「仕方ありません。工事の人の邪魔をするわけにはいきません。迂回します」

ここでセイバーチーム迂回して別ルートで進み始めた!そしてギルガメツシユは迷わず直進したぞ!

「こんなものは強行突破だあ!!ハハハハハッ!痛っ!おい何をする!バカやめろ!コンクリートの塊を投げてくるな!すごく痛い!わかった、わかった謝るから!謝るからバイクにセメントつけないでえ!!」

「金ピカの断末魔が……」

「汚い断末魔ね」

「イリヤは厳しいね」

◇

さあレースも終盤戦！あとは長ーーーーーい直線だけだ！

トップは変わらずセイバーチーム！それを追いかけるのは薄汚れたギルガメツシュ！さらに宝石魔力でブーストをかけた凜！それに並行しているのはアサシンチームだ！

「この勝負、もらった!!」

「油断するなよセイバー」

「負けんぞ……絶対絶対絶対絶対負けんぞお!!」

「サーヴァントと張り合うなんて……凄いわねリン」

「色々とおかしいな」

（なんだろ、凄く嫌な予感がする）

「ハア……ハア……ま、負けない、わよ……」

全力セイバーに追いついてきたギルガメツシュ！

それを追いかける自転車たち！

もう必死なセイバー！

そしてここであいつが帰ってキタア!!

「ハハハハハッ！真琴の英雄であるこの私！他の奴らと連絡とれるの忘れてたわ!!」

ゴールデンベアー号を駆るのはジャンヌだ！ものすごいスピードで全員を追い抜いたぞ!!

「これが私の宝具！『復讐疾走・差呼亡羅』よ!!」

『ダツセエ……』

おおっとジャンヌ以外の気持ちが一緒になったぞ!?!そして一気に全員がスピードを上げる!!

「勝つのは！」「俺たちだ!」

「おのれブリキング!!」

「いっけえ!!」「うおおおおっ!!」

（何か、禍々しい魔力が近づいてる?）

「負けるくああああ!!」

「死に損ないめ！全員くたばってなさいよ!!」

全員横一線！そして最初にゴールテープを切ったのは……

「こいつあ」

散歩中に見つけた洋館。知っている。確かライダーのマスターの家だ。それにしてもこんな嫌な空気が漂ってたか？

「入ってみるか」

霊体化して内部に潜入する。中は薄暗くあまりよく見えない。アーチャーならよく見えるんだろうが……

「血生臭え。何があつたんだ？」

「ぐっ……ランサーか？」

「ライダー!?どうしたオメエ！」

「蟲に……マキリのバケモノに……気をつけろ」

「マキリのバケモノ？」

しかし考える暇もなく、突如奥の扉が壊される。中から飛ばされてきたのはアヴェンジャー。対峙しているのは……老人か？

「手伝えランサー！あのバケモノはライダーを使ってサーヴァントを召喚しようとしている！」

「はあっ!?どういうこつたそれ!!」

「フム、虫が二匹か……これは良いな」

老人は不敵に笑うと背後から大量の蟲を飛ばしてきた。見るもおぞましい大量のバケモノ。一匹一匹が明確な殺意を持っている。

「チツ！ライダーを連れて退避するぞ！」

「それが得策だろうか」

蟲をアンサズで燃やしながら屋敷を脱出する。まだ昼間だからか蟲は屋敷の外から出てこなかった。

「なんなんだあいつは！」

「間桐臓硯。マキリのバケモノだ」

「聖杯の泥、ねえ」

「何かご存知なのですか？」

「前の聖杯戦争が終わった後にマキリのクソジジイが何か言ってたね。欠片と泥があれば充分って」

「欠片と泥？それで何ができるんだ？」

「欠片は恐らく聖杯の欠片。なんでも前回は粉々に砕けたらしくてね。多分その時に欠片を拾ったんだろう。あのジジイならそれを保管できそうだしね」

「てかそのジジイって誰なんだよ」

「間桐臓硯……それがマキリのクソジジイさ」

最終決戦 序章

『ていうわけなんだ。これから祝勝会も兼ねてみんなで食べに行くけど、真琴はどうするんだ?』

「新都だろ?今から行ってもみんなを待たせることになるからな。お前らだけで食ってこい。あとお土産よろしく」

『ハイハイ。それじゃな』

衛宮め:レース大会するなら俺も誘えよ。ぶつちぎりの優勝だったのに。てか誰の祝勝会だよ。

「士郎君からですか?」

「新都で飯食ってくるってさ。俺たちもなんか食べようぜ」

「そうだね。もうお昼だしね。真琴ちゃんにバゼットちゃん、何が食べたい?」

「いやいいよお婆ちゃん。俺ら外で食ってくるから」

「遠慮しないの。ほらはやく言って」

「……………オムライス、あ」

「仲良しだねえ二人とも」

まさかバゼットさんと意見が一緒とは。嬉しいような……………悲しいや嬉しいことにおこう。何事もポジティブに考えないとな。

「まさか真琴君と意見が一緒とは思いませんでした。案外相性いいんですかね?」

「戦闘は相性いいかもな。他のことはよく分かんないけど」

「相性がいい方が嬉しいんですがね」

「ん?なんか言った?」

「いえいえ何も!」

それから俺たちは他愛ない談笑を続けていた。あの戦いが始まるまで。

「んで、何があったか教えてもらおうかライダー」

港。ウミネコが鳴いているそこでランサーとライダー、アヴェンジャーは身を潜めていた。なぜこのようなことになったのか。いや

なってしまったのか。

「臓硯、いやあの怪物は聖杯の欠片を使ってとんでもないバケモノを作ろうとしている」

「とんでもないバケモノだと?」

「例えるならば、『聖杯の擬人化』とでも言うべきか」

聖杯の擬人化。それはまるで聖杯が『生き物』に進化するような例えだ。

「あらゆる願いを叶える願望機。それはつまり『なんでもできる』ということだ。臓硯はそれで世界征服を目論んでいるらしい」

「うわくだらねえ。征服王イスカンドルなら受肉を願って、それから自力で征服に乗り出すはずだぜ。まあ他人の願いにケチつける気はないが」

「くだらないなどともう既に言っているわけだが?」

「それはノーカンだアヴェンジャー」

不思議と接しやすくなったアヴェンジャー。ランサーもライダーも彼女の雰囲気少しくなってきたアヴェンジャー。ランサーもライダーも彼女の欠片、そして蟲の中に保管している泥、更にサーヴァント4騎の魂。これでバケモノを呼び出せるらしい」

「んじゃ紅いアーチャーがやられてるからあと3騎か」

「いやあのアーチャー、いやフェイカーはまだ生きている」

「何?まだ生きているのか!?あの時消滅したと思っていたが」

「てかフェイカーって、エクストラクラスか!」

「まあその話は後でいいだろう。それより願望騎の擬人化した存在が手に入るというのに何故臓硯はライダーを使ってまたサーヴァントを召喚しようとした?」

確かにそれだけあれば他には何もいらなはずだ。しかし臓硯はライダーを使って更にサーヴァントを召喚しようとした。

サーヴァントの召喚術を確立させたマキリならそのようなことは造作もないだろう。

「奴が召喚しようとしていたのは太陽神オジマンディアスだ。奴の持つ神殿が目的なのだろう。聖杯を世界征服のために使う奴だぞ?そ

のための神殿は必要なんだろう」

「えー……」

「すつげえくだらねえ理由で消されかけてたんだなお前」

「だが奴の戦闘力は計り知れないものだ。お前たちも見ただろう、あの蟲たちを。臓硯自身は弱いだろう。だが奴の蟲は侮れん」

「確かにな。でもまあ昼間には出てこれねえみたいだしな。セイバーあたりに屋敷ごと吹き飛ばしてもらえば……ん？なんだもう夜か？」
突如として暗くなった空。それは、

「……あれは、まさか」

「おいライダー！後ろだ！」

「チツ!!」

最終決戦の序章に過ぎなかった。

30分前

「デザートを残すではない男子高生!!行儀が悪いではないか愚か者
!」

「行儀が悪いですよ女子高生!ほらそこにジュースが溢れてますよ
!」

「客というより店員よねあの二人。それに案外仲良いわね」

「そ、そんなことないだろ遠坂!俺だつてな!」

(妙に張り合ってきたわね士郎。まあそんなところも可愛いんだけど)

祝勝会を開始してはや一時間。セイバーとギルガメッシュはいつの間にか周りの客に注意を始めている。店員より店員しているとは謎の光景だ。

まあそんな二人もすぐに落ち着いたのでが。

「んんっ、それよりですねギルガメッシュ。何故我々をレースに誘ったのですか」

「ん、そんなことか。ただのテストというものだ。これからの決戦とやらの貴様が必要だそうだからな」

「その口ぶり、まるで何者かに頼まれてテストしたようですね」

「鋭いなセイバー。そらそこに張本人がいるぞ」

セイバーが振り返るとそこには白ずくめの男がテーブル席で麻婆豆腐をヒーヒー言いながら食べていた。

「ひはひふりひやな、しえいはー」

「貴方は……何故ここにいます！ここに存在してはいけないはずだ！」

「もぐもぐ……ん？それは仕方ないだろう？文句ならあの死徒に言ってくれ。あいつがムーンセルで俺を呼び出したんだ。俺だって不本意だよ。いやー人間にあんなもの作らせるんじゃないかな」

「お、おいセイバー。あの人だれなんだ？」

「初めましてだな衛宮士郎。俺の名は世界だ」

「世界？」

「そう世界そのもの。今お前たちが存在しているここ。ナウが俺だ」

世界はこういうのが恐らくセイバーとギルガメッシュ以外は全くわかっていないだろう。

「まあ俺のことはどうでもいいだろ。伝えることを伝え、試すことを試したら俺は帰るよ。もしかしたら助っ人を超越すかもしれないが」
「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！貴方はつまり世界、神だというの？」
「神様……いいや神もこの世界に存在するものだ。創造神が世界を作ったって人間は言ってるけど、どうなんだろうな？」

「あやふや!?!」

「まあ出来ることはある。神様まがいのことだってできるさ。例えばアーチャーとイリヤスフィールの分離だって、ほら」

世界が指を鳴らすとイリアーチャーが分離しイリヤとアーチャーに戻る。造作もない、赤子の手を捻るより簡単だと言いたげな表情の世界。というよりフリップに書いてる。

「凄いわね貴方」

「なんならアーチャー、更に分けてやろうか？」

「マスターがないのにそんなことできるわけないでしょ」

「そうか。まあそれよりもやることがある。さっきも言ったが俺のことはどうでもいい。作者だって面倒だと感じてるはずだ」

「作者？」

「こつちの話だ。セイバーとギルガメツシュは付いて来い。テストしてやる。最悪のバケモノを倒せるかどうかのな」

◇

世界に連れてこられたのは未遠川。セイバーとギルガメツシュは武装を展開しておりいつでも戦闘可能だ。

「寒くないのですか英雄王」

「寒い。だがこれでなくては奴に対抗できん」

「さあ準備できたな。行くぞ」

三人の様子を見守る士郎、凜、アサシン、イリヤ、アーチャー、ジャンヌ。彼らは不安そうに見守っていた。

「大丈夫なのかあれ？」

「分からないわ。でも奴の左手を見て。令呪がある」

「つまり奴もマスターだということのか？」

「可能性としては考えられるわ。多分アヴェンジャーぐらいのマスターなんでしょ」

（さっきの違和感はいいつのか。どうりでね。それとなんでジャンヌはこんなに不機嫌そうなのかしら）

（はあく帰って真琴と一緒にデザート食べたいわ）

それぞれが想いを秘めているなか、突如突風が吹いた。

それは世界がセイバーとギルガメツシュに一瞬で詰め寄ったからだ。瞬きをする暇もなく詰め寄った世界は二人に拳を振るう。

（チツ！相変わらずデタラメなスピードだ！）

（これが世界の速さだということのか!?!）

「防げよ二人とも」

世界の拳はギルガメツシュが展開した防御壁に阻まれる。しかし防御壁は粉々に砕け散ってしまった。

「またしても我の宝物を砕くか！」

「ギルガメツシュ！一旦距離をとりましょう！」

「戯け！それでも一瞬で間合いを詰められて終わりだ。だがまあそれしかないか」

世界の踵落としをバク転でかわすセイバーとギルガメツシュ。世

世界の踵落としては河川敷を破壊し川の幅を大きくしてしまう。

「くっ！プリドゥエン!!」

「世界最古のサーフボードをなめるなよ！」

セイバーとギルガメツシユはそれぞれサーフボードに乗り世界を攪乱する。

更にセイバーは『かなり神秘性を秘めた水鉄砲』で、ギルガメツシユは『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』で反撃を開始する。

しかしそんな二人の猛反撃を物ともせず世界は二人に迫る。

「さつきよりは遅くなっている。やはり効果的か」

「慢心するなよセイバー。まだ距離があるうちに仕留めるのだ！」

すかさずギルガメツシユは乖離剣、セイバーは白銀の剣を二本構える。未だに世界と二人の間に距離がある。魔力を充填し解き放つには充分だった。

「エヌマ・エリシュ天地乖離す開闢の星！」

「クラレント・オーバーロード燦然と輝く過重湖光！」

紅い暴風と赤と青の斬撃が世界に迫る。これに対して世界は、

「ザ・ワールドここが我が世界」

宝具で対抗した。そしてその時、この世界が止まった。

◇

「ここまでとは。無念です」

「いやー俺に宝具を使わせるとは。流石だセイバー、ギルガメツシユ。お前たちなら任せられる」

「あんな時止めが出来るなら世界一人でいいんじゃないかしら」

「それはいけない。世界が直接手を下すのはこの世のルール違反だ。俺に出来るのは助っ人を寄越すのと……っと時間切れだ」

「? どういう意味ですか」

「アヴェエンジャーがやられた。ライダーもな。ランサーも瀕死か。それと奴が来る」

瞬間空が暗くなる。海の方から空が暗くなったのだ。まるで海から何かが迫って来るように。

「いいか。世界の運命は決まっている。お前たちは必ず勝つ。だが挑

まなければ負けるぞ。あと助っ人はどんなのがいい？オススメは沖田ぞ」

「消えた！」

全てを言い終える前に世界は消えた。ここにいる全ての人間に不安と疑問を残して。

「ちよつとトイレ」

「トイレットペーパーないから足しといてね」

「ウイ、分かった」

オムライスを堪能したあと真琴君はトイレに行きました。今なら聞けることも聞けるかもしれない。

「あの、すみません」

「話ならお茶を飲みならね」

「あ、はい」

差し出されたお茶。心を落ち着かせるには充分だった。

「聖杯の泥のことでしょ？」

「ええ」

「どうして泥について知りたいんだい？」

「……簡単な話、私は聖杯の泥に汚染されているからです」

「……それなら、貴女は反転してるんじゃないのかい？」

「ええ恐らく。ですが私にはその兆候がないのです。体の調子も前よりいいです。サーヴァントを拳で倒せるようになりましたから」

そう、寧ろ良すぎるぐらいに

「そうだねえ。呪いはいつから？」

「10年前、冬木に観光で来ていた時です。その日は丁度第四次聖杯戦争が終結した日です。つまり」

「大災害の日だね」

「はい。大災害の時私は死にかけました。ですがその時誰かに助けてもらったんです。顔は覚えていませんが男性だったのは覚えていません」

「……………ただ言えることがある」

「なんでしようか」

「間違いなく死ぬ。恐らくあと3日ぐらいで」

自然と絶望はしなかった。恐らく自分の死期ぐらい分かっていたのだろう。でなければここまで落ち着いていなかった。

「あの時生き残った切ちゃんも何年かした後に死んだんだよ。多分士郎ちゃんも短命かもね。かくゆう私もだけど」

「対処法は……ありませんよね」

「それこそ聖杯だけかもね」

「そうですね。ありがとうございます。今日はここでお暇します」

「真琴ちゃんには言ったのかい？」

「いえ、真琴君には話しません」

話さないんじゃない。話したくないんだ。彼は優しい。だからこんなことでも悩んでしまうかもしれない。彼にそんな余計な負担を与えたくない。

真琴君のことが好きだから。

◇

「!!空が暗くなって…ランサー!どうしたんですか!」

「へマ踏んじまった。アヴェンジャーとライダーがやられちゃった。俺もヤバイかもな」

「そんな?!しつかりしてくださいランサー!」

「いいか、お前は聖杯を勝ち取れ。そして……長生きし……ろ」

ランサーはそのまま霊体化して消えた。まだ現界していることに安心しながらも内心焦っていた。

恐らくこれが最後の戦いだ。

「呪いって……マジかよ」

「マスター!」

「アーチャー!お前元に戻ったのか」

「ええ。いや今はそんなことより外が大変なの」

「外?そっういやなんか暗いな」

「いいから早く来て！大変なんだから！多分最後の戦いになるわよ」

最終決戦 開幕

「チッー！」

ライダーの背後に現れたのは蟲だった。しかしそれは蟲には見えなかった。

その姿は異形、化け物、恐らくこの世のものではない獣の姿。存在してはいけない物。奴はライダーの腹部を背後から貫いた。

「このー！」

「この野郎!!」

ランサーとアヴェンジャーは蟲の頭を吹き飛ばす。それと同時にライダーの腹部から蟲の腕が引き抜かれる。ライダーは人間ではないが血が溢れる。

「霊核をやられたか…」

「大丈夫かライダーー！」

「まだ問題はない。だがこれは」

「ライダー、ランサー。無駄話は後だ」

アヴェンジャーの視線の先にはさっきの蟲が大量に海から湧いていた。まるで海から生まれるように。

「こいつは」

「臓硯の蟲か…だがこれは」

「蟲というより化け物だな」

蟲は大きく成人男性を優に超えるほどの大きさ。更には恐らくセイバーの剣よりも鋭い剣。極め付きはその顔だろう。どんな化け物でも顔はある。しかしこれらには顔はあっても表情がなかった。あるのは歪な口だけ。歯をキシキシ鳴らしながら迫ってくる。

「こいつらだけで世界征服なんて出来るんじゃないやねえか？」

「かもしれないが、どのみち止めるしかあるまい」

「だがライダー。お前は戦闘できるのか？片腕で宝具もなく、更には霊核を傷つけられている。ハッキリ言うが足手まといだ」

「それでも俺は戦う。生きとし生けるものを守る。それが仮面ライダーの使命だ！」

家を出て数分後。目の前には大量の化け物。こういうのはSF映画にでてくる平気で人を殺す、いや遊び殺すクリーチャーだ。

「まさか……ビースト」

「ビースト？ 確かエクストラクラスだっけ？ ってそうなる所いつら全部「ビースト、サーヴァントクラスの強さになるわ」

俺が言い切る前にアーチャーが言う。焦ってるなアーチャー。確かにサーヴァントレベルの化け物がうじゃうじゃいたら逃げたくなるし、絶望もするだろう。

でも俺たちはいつでも諦めなかつただろ？

「いけるなアーチャー」

「当たり前よ。マスターもいけるわね」

「ああ、行くぞ！」

《大将に続くぜエレナツチ!!》

《分かったわ金時!》

《主の槍となりましょうフラン！ ジャック!》

《ウ……ン》

《解体、しても怒らないよね。ね?》

超マハトマンゴールデンに変身し『ブラステッドスラツガーランス』を構える。しかし超マハトマンゴールデンはすぐに解除されてしまう。

「ってアレ？ お、おい!？」

《そんな……》

《主殿、落ち着いて聞いてください。ライダーとアヴェンジャーが脱落したことで金時殿とジャンヌ殿が、消えました》

その事態をすぐに飲み込めなかった。ジャンヌと金時が消えた？
ライダーとアヴェンジャーが脱落した？

アーチャーが隣で叫んでる。でも聞こえない。周りの音が聞こえなくなった。まるで無音の世界だ。

「マスター!! しっかりしなさい!!」

「ブハア!?!」

アーチャーに引つ叩かれた。それでようやく意識が戻る。化け物

はすぐそこまで迫っていた。そうだ、こんなところで挫けたらダメだ。沖田さん、金時、ジャンヌ。あいつらの分も俺がしっかりするって、あの時決めただろ。

「サンキュアーチャー。目が覚めた。エレナ頼む！」

《分かってるわ真琴。いなくなった人の分も私たちが頑張る。そう決めたものね!》

超マハトマ人で化け物の群れに突っ込む。それに続くアーチャーの狙撃。

「はあっ!!」

『A A A A A A A A A A』

A A a a a a!!』

「嘘、空まで飛んでるの!?まるでゴキブリね！」

空を飛ぶ化け物をアーチャーが。陸を這う化け物を俺が仕留める。サーヴァントレベルの力があると思ったがそんなことはなかった。ただ数が多い。たったそれだけ。されどそれだけ。物量戦なんてこっちのスタミナが切れたら終わりじゃねえか!

「一気に片付ける!トライデントスラッシュ!!」

レバーを三回引き必殺の連続攻撃で化け物を蹴散らして行く。しかしこうも数が多いと嫌になるぜ。

「あつちはどうなってるのかしら」

あつち。恐らく衛宮のところだろう。心配だがまずはこっちの掃除が先だ。

—————

俺は走っていた。この冬木の町を。一人でも多く助けるために。

「うおおおおっ!!」

突如海から湧いてきた化け物たち。それらは町を蹂躪していった。俺とセイバーはそいつらを止めるために深山町を走っていた。

「そこですー!」

「消えろ!!」

セイバーも槍と剣を構え化け物を切り裂いていった。普通の特訓なら見惚れるであろうその剣技と槍捌き。しかしここは地獄一步手前の深山町。そんなことをしてはあっという間に死んでしまう。

「くっ、トレイス・オン 投影、開始！」

無数の剣を連続で発射する。もうあの長い詠唱は必要ない。ただ一言、オレも唱え続けたあの一言で、俺は戦い続けられる。

「シロウ後ろです！」

「このお!!」

振り向き様に化け物の口に剣を差し込む。そして魔力を暴走させて爆発させる。オレもやってた壊れた幻想ブローケン・ファンタズム。どうやら俺はオレに近づいているらしい。やる事全てに躊躇いはない。この化け物を倒してみんなを助ける。それが俺の今やるべき事。

「セイバー!!」

フェイルノート・アガートラム
「解き放て、弓の腕!!」

セイバーの右腕から無数の矢が飛んで行く。確実に化け物の命を刈り取る旋律。一体、また一体と絶命していく化け物。見渡す限り化け物の死骸だらけになり、生きている個体は無かった。

「ここはこれで終わりですね。次に……」

「どうしたセイバー？早くい……こ……」

見渡す限り化け物の死骸。そしてさっきまでそこにいなかった男。見覚えがある。いや忘れるはずがない。

遠坂のサーヴァント、紅いアーチャーだ。

「流石だなセイバー。騎士王とだけはある」

「アーチャー……何故貴方がここに。貴方は消滅したのでは」

「確かに消滅した。いやしそうになった。寸前であの忌々しい世界に救われたのだ」

「だったらなんで遠坂のところに戻らないんだ。あいつ心配してたんだぞー」

「凜のところに戻らなかったのは、本来の目的を果たすためだ」

「本来の目的？」

「お前だ衛宮士郎。お前をここで殺す」

こいつは何を言っているんだ。今この町が大変なこの時に。

「心配せずとも蟲は全て新都に向かっている。それに世界が言っていたはずだ。この勝負はお前たちが勝つと」

「それで何も問題ないからオレと勝負しろってか？ふざけるな！そんな事でお前と勝負出来るか！第一向こうには遠坂がいるんだぞ！」

「シロウの言う通りだアーチャー。いくら貴方でもそのような勝手は許さない。どうしても言うならまず私を倒しなさい」

「……………そうか。そうだな。俺はそういう人間だった。だがな衛宮士郎」

アーチャーは紅い外套を外し目を閉じる。その瞬間空気が震える。そしてアーチャーの半身が黒く染まっていく。

「貴様も泥によつて半分侵された身だ。聖剣の鞘でも取り除くことのできないぐらい微量の泥。その結果オレみたいに汚染される」

その姿はまるで、

「この言動もその結果だ。汚染されたこの身は私の意思など関係なく、ただ本来の目的を果たすために動き続けるだろう」

「じゃあどうしろって言うんだ」

「オレを倒せ。それが出来るのは俺だけだ。出来なければお前は死に、この町をあゝの蟲ごと焼き払うだろう。お前がオレを倒せ」

衛宮士郎俺じゃなかった。

—————

そこは惨劇だった。

遠坂凜とイリヤスフィールは倒れ、

英雄王とアサシンは膝をついていた。

ジャンヌの姿は見えなかった。恐らく倒されたのだろう。

あの蟲を操る封印指定、マキリ・ゾオルケンに。

「また、虫が一匹」

「害虫は貴方でしょうマキリ。聖杯の泥を使った悪事は全て分かっているんです」

「ほう、例えば？」

「聖杯の泥を使い、時間を無限に加速させ世界の終焉を観測することで起源に至ろうとした。万能の願望機である聖杯から溢れたそれなら可能でしょう」

「ほう、そこまで分かっておるか」

「ええ、ですから私は私の仕事を遂行し聖杯戦争を続けます。バゼツト・フラガ・マクレミッツ！封印、執行します!!」
斬り決る戦神の剣を全て投じる。これが私の最後の戦いだ。

誰かの為の物語

「うわー！また爆死だよ。またアーチャーいねーよ」

「爆死乙。俺ナイチンゲールあたってたぜ？」

「クソツタレめ。やっぱ初めからリセマラしようかな？」

「はあ？ジャンヌオルタもってんのに贅沢言ってるじゃねえよ！セイバーなんてジャンヌとバーサーカーいりゃいいじゃねえか」

「サポートが埋まらないんだよ！誰かさんがクリア報酬のタビデ売却してマナプリにしたから！」

「いいじゃん。そのマナプリで買った呼符でカレスコ当たったんだから」

「もう六枚だよ？もうお腹いっぱいだよ。アーチャーと交換してくれないかな？」

「回転数が全てだ。ほらまだ石あるんだから引こうぜ？俺も引くから」

「くそ……でもアーチャーが当たる希ガス」

「お、虹回転」

「はあ!?どのクラスだよ！」

「アーチャー」

「クソツタレ!!!」

「しかもアルジュナ。これでカルナと並べられる」

「ふん。いいし、ギルガメッシュ当たるし」

「いやギルガメッシュ限定鯖だし。お、金回転じゃん」

「アーチャーアーチャーアーチャーアーチャーアーチャー」

「キヤスターだな」

「……まあエレナじゃなかったらいいか……誰これ？」

「ナーサリー・ライムだな」

「……………ん、あれ？」

寒い風で目を覚ます。周りには蟲の死骸だらけ。俺の体も返り血でベタベタしている。

「今の夢は……また前世の夢だったりして」

痛む体を起こし辺りを見渡す。何処も蟲、蟲、蟲だらけ。幸いにもここらは家もないし人通りも滅多にない。誰かに見られたこともないだろう。

「目が覚めたのねマスター」

「アーチャー。どれくらい寝てた？」

「ほんのちよつと、十分ぐらいかな」

「そうか。さてみんなの所に行かなきゃな。場所わかるか？」

「衛宮士郎とセイバー、アーチャーが固有結界の中に入っていたわ。あとは新都で蟲のボスと戦ってる。今はバゼットとギルガメッシュ、アサシンで戦ってる」

アーチャーの奴、生きていたのか。それにバゼットさんが戦ってる。無茶しやがって。

「衛宮は大丈夫だろ。新都に行くぞ」

「分かったわマスター」

――
蟲は沸き続ける。臓硯の体から無数に。

「せりやあー」

ジャケツトを脱ぎ捨てていよいよ本気になってきたバゼット。臓硯に拳を叩き込むも、叩き込む度に蟲が這い出てくる。まさに臓硯を叩けば蟲が一匹である。

「阿呆が！その肉塊を叩いても蟲が湧き出るだけだと何故わからぬ！」

「私にはこれしか出来ないのよ」

「不器用もここまできたら清々しいね」

這い出てきた蟲を切り捨てるギルガメッシュとアサシン。状況は変わらず、相変わらず不利である。

それに問題は無数に這い出てくる蟲だけではなかった。

「チツ、また重なったか。有象無象が積み重なったところで!!」

「AAAAAA

aaaaaa

!!」

およそ3メートル。かのダレイオス三世に匹敵する巨体。蟲が文

字通り重なり合い同化したのだ。これで5度目。またしてもギルガメッシュとアサシンの前に立ちはだかる。

「アサシン！」

「なるほど剣を使えと。英雄王、一本借りてもいいかな？」

「暗殺者に貸す宝物などない、と言いたいたいところだが今回は特別だ。壊すなよ」

イリヤの魔術で剣の力を得た『セイバーアサシン』。ギルガメッシュから魔劍グラムを借り蟲を切り捨てる。その剣技はかつて共に戦った破壊の大王と同じ剣技だった。

「ほう……貴様なら軍神の剣の方が良かったか？」

「僕は暗殺者だよ？それこそ殺しやすい武器を好む。正直剣は使いにくいな」

「ならば返せ」

立場から見れば『狙う者』と『狙われる者』だ。しかし暗殺者さえも自分のペースに引き込む。これがカリスマの力か。

「(これでは拉致があかない。いつそ奴を燃やしてしまうか)だああつ!!」

臓硯の頭に踵落としを炸裂させる。メリメリと食い込んで行く。普通の人間なら即死だ。しかし相手は化け物と化している。この程度では死なない。だからこそ更に叩き込む。

「燃えろ!!」

炎のルーンを何度も臓硯に刻みつける。流星に炎には勝てないのかもがき苦しんでいる。何はともあれこれで終わりだ。

「失せろ雑種!!」

ギルガメッシュの宝物が蟲に風穴を開けていく。そのまま灰となり消え失せた。あとは臓硯の後処理だけだ。

「バゼット、後ろよー」

「なに?」

臓硯の右手がバゼットの体に突き刺さる。溢れ出る鮮血。更に臓硯は弄ぶようにバゼットの体の中で指を動かす。その度にバゼットはもがき、血を吐き、目が虚ろになっっていく。

「ぐっ、あああああつ！」

「ふむ、お主の泥、少ししか取れなんだわ」

バゼットから手を引き抜く。意識を失ったのかバゼットはその場に倒れる。臓硯の右手には黒いドロドロした物。ギルガメツシユにはそれが何なのか一瞬で理解できた。

「聖杯の泥。雑種め、それで何をやる」

バゼットの前に立ちはだかるギルガメツシユ。それを見て臓硯は悪趣味な笑みを浮かべる。言峰よりも気味の悪い笑み。ギルガメツシユはここまで吐き気のする笑みを見たことなかった。

「随分と変わったのお英雄王よ。前の慢心王の姿は何処へやら」

「慢心を捨てたのはこの現世に住み続けた結果だ。彼女と出会ったおかげだ。我は彼女と結婚するために慢心を捨てたのだ！」

（彼女って誰なのかしら……セイバー？バゼット？それとも私？いや桜の可能性も）

「アイドルに現を抜かすとはの。王も落ちたものよ」

「虹架ちゃんを愚弄するか雑種!!」

（全く知らない人だったー!!）

「まあそれだけではないがな。奴と決着をつけるためだ」

ギルガメツシユは宝物庫から乖離剣を引き抜く。既に回転を始めている乖離剣。その出力は河川敷でセイバーと共に放った比ではなかった。

「ともあれここで消えてもらうぞ蟲ケラ。貴様がいては我の邪魔だ」

「じゃが……一足遅かったのお」

臓硯は聖杯の欠片と聖杯の泥を自身の体に食い込ませる。そしてそのまま体に喰われていく。

「欠片には既に4騎のサーヴァントの霊基が詰まっておる。ようやく僕の悲願が」

「4騎だど？やられたサーヴァントはアヴェンジャーとライダーだけの筈だ！」

「僕がそこまでボケたと思うてか？既に10年前に湖の騎士を贄にしておるわ」

「それでも3騎だ。やはりボケておるな老害。我があの世に送ってやろう」

「ボケはお主じゃ英雄王。既にセイバーはやられておろう。あのセイバーはムーンセルで呼び出したにすぎん。いわばムーンセルのサーヴァントじゃ。じゃが儂はあの時にやられたセイバーの魂を欠片に詰めておる。ほれ、これで4騎じゃ」

「そうか。解説ご苦労、消え失せよ雑種!!」

乖離剣から暴風が吹き荒れる。文字通りの全てを飲み込む原初の地獄は臓硯を飲み込んだ。しかしギルガメツシユの表情に余裕はなかった。

そう、手応えがなかったのだ。まるで無に地獄を放っただけ。ただの無意味な行動。

「残念じゃな。これで儂の悲願は達成……され……」

「何処に行った!?!」

臓硯の姿はなかった。悲願は達成された。そう言葉を残して。

◇

地獄の釜に人影一つ。

「ふふっ臓硯よ、大義であった」

黒い礼装を見に纏い、女は姿を現した。

「役目は終えた。果たし得なかった理想を夢見ながら逝くがいい」

暗い洞窟でその瞳はある一点を見ていた。方向から見て新都。

「しかし我の姿を見るのが長年の夢だったとは。愚かなのかそうでないのか。だが英霊4騎では足りぬなあ。劣化しているのもあれば、欠けているものもある。光に包まれたものもあれば、復讐の塊もある」
足取りは外へと向かっている。

「まあよい。我を目覚めさせた褒美で体の芯まで吸い尽くした。ゾオルケンもさぞ嬉しかろう」

そしてその姿が外へ出る。

「さあ、捧げよその魂、その命を!」

「ギルガメツシユ!」

「我の名を叫ぶは……アーチャーのマスターか」

「終わったのか？」

「戯け、ここからだ」

途端、禍々しい魔力がこちらに迫ってくる。いやもう来ている。真上から感じる魔力。手足の震えが止まらない。上を見上げると、

「姿を現したか」

「何なんだよアレ」

「この魔力量……サーヴァントを優に超えてる」

「ユステイーツア・リビライヒ……」

「まさかこんなところで、あんな化け物と出会うとはね」

「ユステイーツア!? それってイリヤのご先祖様!?!」

「……愚かな末裔よ。なんなのだその姿は」

「ああ……これは……その……えへへ」

イリヤが照れている。それにイラついたのか無言のままユステイーツアは右手をかざす。掌には既に魔力の塊が造られている。

「もしかしてビッグバンアタック!?!……もうダメだあ、おしまいだあ」

「ふぎけないでマスター! ふぎけたい気持ちは分かるけど!」

「それほどデタラメというわけだ!!」

ユステイーツアのビッグバンアタックとギルガメツシュの天地乖離す開闢の星が激突する。恐らくギルガメツシュの宝具は本気だ。しかしギルガメツシュの宝具はあつという間に押し返され、

「マスターお願い！ありす、アリスを。不思議の国のアリスをイメー
ジして!!」

「はあ!? あ、アリス？アリス、アリス、アリス」

突然のアーチャーの頼み。妙な迫力があつて断れなかった。

不思議の国のアリス……………アリス……………ありす……………キヤスター
……………キヤスター？……………いや確か真名が……………

『誰これ?』

『ナーサリー・ライム。extraに出てくる『ありす』のサーヴァン
トだよ』

「ナーサリー……………ライム」

その名を呟いた瞬間、アーチャーが光に包まれる。そしてユス
ティーツアのビッグバンアタックを押し返した。いや正確にはアー
チャーの呼び出した数人が押し返した。全員がアーチャーに注目し
ている。それもそうだ。

黒いゴスロリ。銀色の髪。手に持った誰かの為の物語^{ナーサリー・ライム}。全てが今
までのアーチャーと違っていた。唯一同じなのはデカイ弓だけだ。

「アーチャー……………なんだよな」

「ええ、私はアーチャーよ。真名はナーサリー・ライム」

「貴様、我の一撃をものともせぬとは」

「当たり前でしょ。私のトランプ兵は最強なんだから。私と貴女では
差があるのよオバサマ」

挑発するように指を指すアーチャー。これなら、

「勝てるかアーチャー!」

「え、無理よ」

「はあ？」

恐らくアーチャーを除いた人の気持ちが一つになった瞬間だった。

最終決戦 真実

「いやいやいや、今の雰囲気は確実に『私が倒してやるZ E ☆』ぐらいの勢いじゃねえか!!」

「無理無理無理! あんなB B A倒せるわけないじゃ無い! 年期が違うのよ!」

「じゃあどうするんだよ!」

アーチャーが真名が分かって『さあ、ここから大逆転!』って時にこのザマだ。ギルガメッシュもアサシンもイリヤも、つかか全員呆れてる!? ユステイヤーさんも呆れてるよ? 敵も呆れてるって何!?

「分かってないわねマスター。倒せないけど、退けるぐらいはできるわ」

そう言っ手をかざすアーチャー。アーチャーが手に力を込めた瞬間ユステイヤーの足元が爆発する。まるでアーチャーが起爆スイッチを押したかのように。

しかしユステイヤーは簡単に避ける。流石はバケモノだ。アーチャーも避けられることはわかっていたのか表情に変化が、

「あれ、楽しそう」

「ほらほら、もつと遊びましょう!!」

無いと思っていた。今の今までこんなバトルジャンキーのような表情はしたことがなかった。多分なかった。しかし今の表情はまるで『遊んでもらっている子供』のようだ。その表情の中に邪悪な笑みが混ざっているのには目を瞑ろう。

「あれがアーチャーの本当の力なの?」

「普通のサーヴァントではないと思っていたが……成る程、そういうことか」

「何か分かったの金ピカ?」

「まあなウツカリ娘。これまた常人には理解できん内容になってくるぞ」

アーチャーは更にトランプ兵を大量に召喚してユステイヤーにけしかける。トランプ兵はそれぞれ武器が違い、剣、弓、槍、トン

フアー、鉄球、マシンガン、ロケットランチャー、チェーンソー、釘バットetc……てかトランプ兵物騒だな。

「雑兵がぞろぞろと……我の前では無意味と知れ！」

「無意味かどうかは分からないわよ！はいこれマスター！」

「え、え!？」

アーチャーに渡されたのは一本の剣。無骨なその剣はメルヘンチックなアーチャーには不釣り合いだ。いや中身がバイオレンスだから普通なのか？

「私が暴走したらその剣で、よろしく！」

「分かるように説明しろ！」

「行くわよ、ジャバウオック!!」

そのジャバウオックという名は聞いたことがある。名もなき勇者に倒された怪物。最近読んだ本にのっていた。そんなことを考えるうちにアーチャーの体に変化していく。

背中から二本の腕、翼が生える。アーチャーの表情も凶悪になっていく。まるでアーチャーもバケモノに変化しているみたいだ。

「破壊神の流星アアツ!!」

普通の腕で弓を持ち、異形の腕で矢を射る。アーチャー最大最強威力の遠距離攻撃。それが2つ、2倍だ。しかも今のアーチャーの状態から見てステータスも更に上昇しているはずだ。つまりトンデモナイ技だ。

「戯け！地球ごと破壊するつもりか弓兵!!」

「とか言いながらあんたもさつきより乖離剣回してんじやないわよ！」

「おつとエアが回ったか。我もウツカリだな天地乖離す開闢の星!!!」

3つの地球破壊攻撃がユステイツァに迫る。それでもユステイツァは交わす素振りを見せない。あくまで正面から対抗するつもりだ。

「無茶でもやるしかない！遠坂！イリヤ！」

「ああーもう！分かったわよ！」

「あれには及ばないけど、全部のせでやってやるわよ！」

俺はエレナの力を解放し、遠坂は所持宝石を全て投じた一撃、イリヤは全てのイリヤの可能性を集結させる。体操服＋ブルマで魔力の羽が生えている。

「行くぞー」「行くわよー」「行っけえ!!」

「スターバースト・セブンカラーズ」
「二魔術三大七色重奏飽和砲撃!!!」

地球破壊攻撃を受け止めるユステイーツアに更に3人の攻撃を加える。流石にそれは想定外だったのか驚きの表情を隠しきれない。

「ちっ、今は「逃げられると思ったのかい？」な、アサシン!？」

「マスターが戦っているのにサーヴァントが逃げると思っていたのか？ならばそれは計算違いだ」

逃げようとするユステイーツアにアサシンが宝具で追撃する。しかもユステイーツアは一瞬アサシンに意識が向いた為攻撃を防ぐ力がゆるまった。そしてそれを逃す俺たちではなかった。

「魔力を全部使いきれ!!」

「とつととぶっ飛びなさいよ!」

「さっさと碎けなさい!」

「ちっ、財を汚す汚染物が!いつまでも我の前に立つてない!!」

「これなら、どうだ!!」

更にアーチャーが攻撃を押し込むように連続で魔力弾を撃ち続ける。いわゆるダメ押しだ。

「こ、この愚か者どもがああああ!!!」

遂にはユステイーツアを飲み込み超地球破壊攻撃は天高く打ち上がっていく。ある程度まで登るとそこで爆発した。こんな光景を見たらあの台詞しかない。

「へっ、汚ねえ花火だぜ」

◇

「さてと、それじゃあ歩きながら話しましょうか」

アーチャーの提案が出たのはユステイーツアを倒して全員へたり込んでから5分後のことだった。

「確かに貴様について気になることがある。貴様は本当に弓兵か？」

「それは本当よ。私はアーチャークラスのサーヴァント、ナーサリー・ライムよ」

「だが前の貴様は他の力が前に出ていたであろう。恐らく授かりの英雄か」

授かりの英雄。俺にも思い当たる節がある。英雄アルジュナ。施しの英雄カルナの異父兄にして宿敵。それなりに有名な英雄だ。

「それも正解ね。私の力の殆どはアルジュナの力。彼の力でここまで戦ってきたの」

「どうしてアーチャーはアルジュナの力が使えるんだ？」

「それはマスターとムーンセルのせいね」

俺？俺が何かしたのだろうか？これは思い当たる節が……あー、なんとなく、分かるような。

「本当ならマスターはアルジュナと聖杯戦争を戦うの。でもイリヤがムーンセルを使ってアヴェンジャーを撃退した時の副作用で私がマスターのサーヴァントとして呼ばれたの」

「じゃあ私のせい？」

「そのおかげでマスターと出会えたんだけどね。結果私はアルジュナと合体する羽目になったわけ」

俺の所に来る途中にアルジュナとムーンセルの副作用で呼ばれたナーサリー・ライムが激突、フュージョンして俺の所に来た。簡単に説明したらこうか。

「それでこの姿だけだね。私はマスターの心を映して、マスターが夢見た姿の疑似サーヴァントとして現界するの。マスターの場合理想のアーチャーを想像していたからあの蒼髪の姿で現界したの」

つまりナーサリー・ライムは俺の心情を映してこの姿になったと。成る程、だからあの時想像通りの姿になっていたのか。

恐らく俺がこうして想像しても、アルジュナと融合してなければ別のクラスで現界したのだろう。もし俺が想像せずにアルジュナとナーサリー・ライムが融合して召喚されても別のクラスで現界しただろう。

アルジュナと融合、なお俺の想像の2つの事象の結果ナーサリー・

ライムはアーチャークラスとして現界できたのだろう。

まあ、ムーンセルの副作用がなければナーサリー・ライムに出会うことすらなかったが。

「とにかく、狩野君がデタラメなサーヴァントを所持しているのは分かったわ」

「時に人の想像力は恐ろしいものよな」

遠坂とギルガメツシュが荒んだ目で見て来る。なんだよ！まるで俺が常に妄想してるみたいじゃないか。失礼な目で見ないでもいい。たい。

「じゃあ今の姿は不思議の国のアリスなんでしょ？なんで狩野君にそれを想像させたの？」

「それは……遠く深い海の記憶から拾い上げたの。こうして別のマスターに呼ばれてもあの子だけは忘れられない。あの子が見た姿ならなんとかなるような気がしてね」

アーチャーは空を見る。空はまだ分厚い雲に覆われている。それでもアーチャーは何かを見つめているような気がする。

「さて、それじゃあエミヤの元に合流しますか」

「まったく、セイバーがいながら何処をほっつき歩いているのか」

「いや、まあエミヤのせいだな」

「衛宮君ったら、やっぱり私がいないと駄目みたいね」

「贗作者は贗作者だ。同じ名では分からぬだろうよ」

周りの顔を見るに遠坂以外は気づいているのか？いや遠坂のことだから気づいていないフリをしているのかもしれない。まったく意地悪な『あかいあくま』だ。

収斂こそ、我が理想の証

「がはっ！」

また双剣が砕かれる。これで68本目。俺の投影はそんなに脆いのか？いいや強度ならオレと一緒にだ。

「く……くそっ」

「シロウ!!」

まさか彼奴がここまで強くなってるなんて。まさかセイバーまでやられるなんて。これも内に潜む聖杯の泥とかと言う力か。正直、これほどなんて思わなかった。

「もう終わりか衛宮士郎。私を止められるのはお前だけだぞ」

「だったら、俺に倒されるよアーチャー」

今のアーチャーは左半身が黒く染まり、紅い外套は右腕だけとなった。左目も焦点があっておらず、髪の毛の一部は赤く染まっていた。つまりいつものアーチャーとは違う。それが一目でわかる姿だった。

だいたい武器もおかしい。奴が持っているのは日本刀にも洋剣にも見えない。どのカテゴリにも入らない一本の剣。それにセイバーは負けたのだ。

「だいたいなんなんだよその姿。それも宝具なのか」

「親切丁寧に貴様が固有結界を張った後に、しかも真名解放までしてから発動してやったというのに」

「俺にはいつもの詠唱にしか聞こえなかったぞ」

「そうか、なら声が小さかったとみえる。すまなかったな。それは私の責任だ」

一々癩に触ることばかり。どうやら俺をイラつかせるのは得意中の得意らしい。今に分かったことじゃないが。

「収斂こそ、我が理想の証。今回は聞こえただろうか？」

「リミテッド……」「ゼロ、オーバー……」

「このクラスになってから発現した新しい宝具だ。本来英霊になってから宝具を覚えることなどないが、私の場合はどうもおかしくてね。こうして発現したのだよ」

だったら俺にできない道理はない。英霊エミヤにできて、俺にできないことなんて。

「貴様では不可能だ。これは言わばセイバーとの繋がりを断ち切った後に手に入れた力だ。今現在セイバーと繋がりを持っている貴様ではこの力、固有結界の結晶化など不可能だ」

「固有結界の結晶化……そんなことが可能なのですかアーチャー！」
「現に私ができている。他にもジャンヌ・ダルクもできるだろう。狩野真琴のジャンヌではない、本当の聖女の方ならばな」

「だったらやっぱり俺にできない道理なんてないじゃないか！俺だっ
てお前と同じように結界を張れるんだ。尚更できないなんて」

しかしアーチャーの表情は変わらない。泥で表情が読みづらくなつて実は本当は怒っているのかもしれない。つまりはいつもの顔。全て分かりきって、俺に文句ばかり言って、邪魔ばかりしてくる嫌な顔。嫌な態度。

それでも、俺はオレから全てを教わった。投影の真髄まで。そう思い出すと無性に悔しい。まあそれは向こうも同じだろうが。

「やはり夢ばかり見る青二才では不可能だ。それを思い知らせてやろう」

次の瞬間アーチャーの姿が消え、俺の目の前に現れる。アーチャーはそこから剣を振るう。俺もなんとか投影して防ぐが完全には防ぎきれなかった。投影した双剣も砕け、致命傷程ではないが痛手を負った。

吹き飛ばされた反動を生かしてアーチャーと距離を取る。そこから剣を数十本抜きアーチャーに連続で掃射する。

アーチャーはそれら全てを一振りで粉碎する。でもそれでいい。この一瞬の隙ができたなら充分なお釣りだ。

「うおおおおっ!!!」

「無駄だと言っている。お前では私は倒せない」

泥のせいとはいえ『俺を倒せ』って頼んできた奴が『それでは私は倒せない』なんて、矛盾してやがる。しかもあの余裕の表情。尚のこ
と俺を苛立たせる。

鏢迫り合いが続く。俺は全力だが、恐らくアーチャーはまだ全力ではないはずだ。セイバーが万全なら優勢だったが、あの蟲との戦闘で疲弊したセイバーから狙うなんて。相変わらずのリァリストだ。

「ふうっ!!」

「がっ!?!」

鏢迫り合いを制したのはアーチャーだった。更に蹴りを叩き込み俺を吹っ飛ばす。こんなに吹っ飛んだのはランサーの時以来だ。あの時も命の危機だった。

「くそっ…まだだ!」

81本目と82本目を投影する。何度だって食らいついてやる。そう意気込んだ瞬間だった。

投影した双剣が砕け、目の前が真っ暗になったのは

「シロウ!!」

「ふん、やっとくたばったか」

「アーチャー! 貴様何をした!」

「これに関しては私は無関係だ。倒れたのは奴が投影をしすぎた結果だ。ただでさえ投影は精神と神経が段々とおかしくなっていく魔術だ。それを続けていたら倒れるのも当たり前前だ。むしろこの状況でも固有結界が崩壊してないのは小僧の力だ。そこは褒めてやったらどうだ?」

「くっ! (すみませんシロウ。私が不甲斐ないばかりに)」

街が燃えていた。

人が死んでいた。

空が闇に覆われていた。

俺は……死にそうになっていた。

(これは……あの時の)

やがて一人の男が俺を助けた。

男の顔は嬉しそうだった。無理もない。やっとなんか生き残者がいたのだから。やっとなんかを救えたのだから。

◆ 地獄を見た。

地獄を見た。

地獄を見た。

人が死に続ける地獄を見た。

殺して、殺して、殺して、殺して。

黒い弓で全てを殺した。

俺にはそれが正しいのか分からなかった。

そのまま続けられれば世界を滅ぼしかねない。だから『掃除屋』が全てを排除する。多分それは世界を救うためだろう。

だからと言って罪のない人まで殺す必要はあったのか？

お前はそれで納得するのか？

第一殺す必要なんてないんだ。

お前が、いやオレが夢見たのは『全てを救う正義の味方』のはずだ。皆んなを、全てを救う為に戦う。そんな正義の味方を目指したはずだ。

◆ そうだ、それこそが……俺の夢だったんだ!!

『おい、その先は地獄だぞ』

焼け野原となった地に俺とオレが立っている。俺はオレに背を向けて歩み始める。

「お前のおかげだ。俺もやっと思いついた。俺の本当の夢。ずいぶん昔だから忘れてた」

『……………』

「悪を倒して弱きを助ける。それが正義の味方じゃないんだよな。悪も正義も、弱い人も強い人も助ける。そんな奴を人は本当の正義の味方って言うんだよな」

歩む先に一本の剣が突き刺さっている。

『分かっているのか？それは私よりも過酷な道を選ぶということだ』

ぞ』

「俺は元々過酷な道を選ぶ予定だったんだ。それが少しずれてオレになった。だからこれは俺にとって計画通りなんだよ」

『後悔するぞ』

「お前は後悔しているのか？ いや、しているから俺にそう聞くのか」

その剣を掴む。

『私でさえ弱きを助けられず後悔した。それなのに悪も正義も全て助けるだど？ 全てを助けるなど不可能だ。必ず犠牲は出る。それでも後悔しないというのか！』

「しない。だって俺は」

そしてその剣を引き抜く。

「必ず全てを助けるから！」

◇

「ぐっ！……全て、助ける」

「やっと起きたか小僧」

「全て、助けてやるよ。この世界も、セイバーも、お前も」

「まだほぎくか。やれやれ、本格的に殺さなくてはな」

「俺が殺すのは、理由のない悪意だ。だからお前の泥は俺が殺してやる」

「ならばシロウ、私はそれを手伝いましょう。私は貴方のサーヴァントですから」

「ありがとうセイバー」

「泥を殺す、か。果たしてお前に出来るかな？」

「………体は、いや俺の全ては、全てを救う剣で出来ている！」

魔術回路をフルで活動させる。今までにない動き。やがて固有結界は崩れ始める。その中に立ち尽くす3人。

「アーチャー、お前言ったよな。俺には不可能だって。セイバーとの繋がりを断ち切らない限り無理だと」

「では違っても？」

「ああそうだ。セイバーとの繋がりがあからこそ、俺は理想を身に纏える！」

「!?この光は……聖剣の鞘か!」

「収斂こそ、我が理想の証!!」

固有結界は完全に姿を消し元の冬木の町に戻る。

そして俺の姿はアーチャーとほぼ同じになる。左腕には紅い外套。髪の毛は一部が白くなり、肌も一部が褐色になっている。

これでやっと、同じステージに立てた。

「行くぞアーチャー。武器の研ぎ具合は充分か?」

「ほごげ、小僧!」

絶対なる勝利をもたらず星の聖剣撃

結界は砕け三人は深山町に舞い戻る。空を覆っていた暗雲は既がないが、日は落ち夜になっていた。

「いくぞアーチャー」

「こい小僧！」

互いに心情風景をまとい剣をぶつける。その気迫に押され私は少し出遅れてしまう。同じ存在とは言えサーヴァントとマスター。力量の差は一目瞭然のはず。しかし理想の高さは違う。それだけでシロウはアーチャーと対等に戦える。

「はあっ!!」

「せいっ!!」

二人の剣技はそれこそ円卓の騎士が一人、サー・ランスロットに勝らずとも劣らず。少しでも気を緩めれば私でも討ち取られるだろう。

「援護しますシロウ！」

「頼むセイバー！」

切り替わるようにシロウと入れ替わる。それと同時にアーチャーの剣を受け止める。セイバーであるこの私でさえ押し負けそうになる。アーチャー、いやシロウはいつも追い詰められると底力を見せてくれましたね。

あの時、私が初めて召喚された夜も。

◇

「これから我が運命は貴方と共にあり、我が身は貴方の剣となります。さあマスター、指示を」

「え、ええ?」

「ちっ、まさかここでセイバーが来るとはな。正直予想外だったぜ」

あの運命の夜。私はシロウに召喚されてランサーと対峙していました。

「どうする槍の英霊。退くと言うなら見逃すが?」

「戯け。敵前逃亡なんてうちのマスターが黙っていねえからな。まあ今は小手調べだ」

ランサーが駆け出すのと同時に私は剣を振りました。彼の姿が見えてからでは遅かった。タイミングは丁度。彼の槍と私の剣がぶつかり合う。

「おっと、見えねえ武器か。てつきり武器を持っていねえかと思ったが」

「それは違うだろうランサー。貴方のことだ、警戒ぐらいはしていたはずだ」

「それなりにはな。それで、テメエの武器はなんだ？ 剣か？」

「さあ、斧か槍か剣か。もしかしたら弓かも知れぬぞ？」

「ハハッ！ 言うじゃねえかセイバー！ 冗談は通じねえ相手と思っていが、まさかそっちからシャレを言ってくるとはな」

「私とてシャレぐらいわかる」

再び距離を取り互いに武器を構える。彼の真名ももう少しで分かる。後何か一手足りない。そう考えていた、

「うおおおっ!!」

「!?!」

その時でした。シロウが武器を構えてランサーに挑んでいったのは。ランサーも突然の行動に反応が遅れ、直撃こそしないものの攻撃がランサーを掠めました。

「つと、やるじゃねえか坊主。まさか俺が不意打ちを食らうと、ああ？

何帰ってこいだ？ ああ、わーったよ！」

「逃げるのかランサー！」

「マスターが五月蠅くてな。見逃してくれるんだろ？」

ランサーはそう言うとそのまま去っていった。恐らくあのスピードは私では追いつけないだろう。

「大丈夫なのか？」

「それはこちらの台詞です！ マスターが単身挑んでいくなど何を考えているのか」

「でも、女の子一人で戦わせるわけにはいかないだろ？」

「……………」

開いた口が開かないとはこの事でした。そんな理由でサーヴァン

トを助けるマスターなど今まで見たことがなかった。これからが心配だ、と思っていました。

しかし今となっては彼がマスターで助かりました。私と共に隣で歩んでくれる。それだけでも嬉しかった。王としての時代も、それ以前も、第四次聖杯戦争も。共に歩んでくれる人はいたものの、隣で歩んでくれる人はいなかった。

◇

だから私は負けるわけにはいきません。共に歩んできた彼を守るため。そしてその理想を叶えるため。シロウが理想を実現するその日まで。

「私は負けません！アーチャー!!」

「やはりこれが本来の君の力かセイバー」

「俺もいることを忘れるなよ!」

シロウの奇襲を受けるアーチャー。反撃を許すことなくアーチャーに攻撃を加えていく。

「くっ!おのれっ!!」

それを逃れ空中に熾天覆う七つの円環を展開しその上に立つ。更に泥をまとった左腕から弓を作り出し、剣を添える。恐らくこの一撃で決めるつもりだろう。ならばこちらもそれ相当の一撃で答えねば。

「I am the bone of my sword.
体は剣で出来ている」

「貴方が全力なら私も全力を尽くしましょう!」

「告げる、」

アーチャーは弓を引き魔力を貯めていく。矢の数は9。しかしそれらは確実にこの冬木市を吹き飛ばすだけの威力を持ち合わせている。

「星の聖剣、封印解除。第一の宝具、ナイツ・オブ・ラウンド円卓の騎士発動」

第一の宝具を全解放する。円卓の騎士達の技を使うこの宝具。それら全てを解放し右腕に閉じ込められた聖剣を解放する。これにより私の右腕は星の光を放つことが可能になる。

「誓約解除。聖剣抜刀、第二の宝具!」

「これで終わりだ!偽・射殺す螺旋剣!!」
ナインライブズ・カラドボルグ

「行きますよシロウ!!」

「ああ、行くぞセイバー!!」

私が右手を、シロウが左手をかぎす。その方向には最後の一撃を放とうとするアーチャー。これで決着がつく。立っているのはどちらか片方のみ。

「絶対なる勝利をもたらす星の聖剣撃!!」

黒く染まった絶技と星の光が激突する。私たちが負ければこの冬木市が消滅する。だが私たちが勝てば!

—————

海浜公園に差し掛かった瞬間、深山町でビームとビームが激突した。

「うおっ!?なんだありや!」

「この魔力の質量、宝具ね」

「これほどの魔力を持ったサーヴァントとなると」

「もしかしてセイバー!?!」

「流石と言うべきか。あれほどの星の光、奴の聖剣でなければ解放できまい」

「セイバー………アーサー・ペンドラゴンね」

「ほう、分かるか弓兵。だが彼女はアルトリア・ペンドラゴンだ。そこを間違えるとネチネチと文句を言われるからな」

「めんどくさいなそれ」

「ならばセイバーの宝具も自ずと分かるう。星の聖剣。この世で最も有名とされる聖剣エクスカリバー。その威力は絶大だ。前回の聖杯戦争で海魔を打ち払った一撃だ。悪しき者ならよりその力は増大するだろう」

「ていうかセイバーは誰と戦ってるのよ?アーチャーは目がいいんだから見えるんじゃないの?」

「やれやれ注文の多い小娘だ。どれ………ハハハハハッ。これは愉快だな!!」

「?な、なに笑ってるのよ!教えてくれないじゃない!」

「これは貴様自身の目で見よ。その方が色々と文句が言えよう」

「つてかあれヤバくないか？だんだん光が強くなって」

「む、不味いな。おい全員伏せろ」

しかし英雄王、言うのが遅かったな。光はそのまま爆発し深山町を飲み込んだ。

ように思えた。

宝具同士の激突で空中で爆発がおきる。しかしその爆発の瞬間に宝具『偽・^{フェイク}全て遠き理想郷』を発動する。

本来アヴァロンは使用者を妖精郷に隔離してあらゆる攻撃、能力を遮断する。これはいわばその応用。爆発を妖精郷に隔離することでこちらの被害をゼロにしたのだ。

まあ向こうは大変だと思うが。

しかしこれでも決着がつかないとは。いまだアーチャーは健在。私とシロウも辛うじて立っている。しかし私もシロウも魔力がほとんどない。それはアーチャーも同じだろうが。

「案外しぶといな衛宮士郎」

「それはお互い様だろアーチャー」

二人の間にさつきまでの緊張感はない。一安心ですか。

「アーチャーアーチャーアーチャー!!!」

「うおおああああああつ!!!」

「?!?!」

そんな時に聞こえる聞き覚えのある声。それは空から聞こえた。

「セイバー！空からいろいろ降ってきた!?!」

「人はいつから空を飛べるようになったのでしょうか」

よく見ると空に金色の光が点々と……なるほど、彼も丸くなりましたね。

「騒ぐな阿呆ども!!」

アーチャー、アサシン、ギルガメツシユは華麗に着地。リン、マコトはギルガメツシユの宝物に助けられながら着地した。

「こらアーチャー!!あんたまだ現界してたら連絡ぐらいしなさいよ!!
どんだけ心配したと思ってるのよ!」

「いやこれには深いわけが、イタタタタタ!!同じところを何度も蹴るんじゃない!」

「あわゆくばセイバーと、契約しようと思ったんだからね!!」
「だからすまなかつたと……凜伏せろ!」

リンとアーチャーの微笑ましい光景を壊す1発の銃声。

「な、なにやってるの!!」

この状況でそんなことをするとは到底思えなかった。彼はそういう人間ではないのだから。

「聞いているのアサシン!!」

「……………」

「なんとか言いなき「近づくなイリヤ!!」

マコトがイリヤスフィールの手をひく。アサシンがイリヤスフィールめがけてナイフを振るつたからだ。

「……………フッフッフフ、ハハハハッ!!愉快だな貴様らは」

「!?まさか……テメエ生きていやがったのか」

「我が簡単に消えるはずがなからう?」

アサシン?がフードと包帯を退ける。彼の素顔を知る者からしたらそれは驚愕だった。

「ユステイーツア。暗殺者の体に乗っ取ったか」

「運良く我の近くにいたからな。こやつは魔術回路に入り込んでジワと乗っ取ってやったわ」

アサシンの顔は別人の女の顔になっていた。

倒してしまっても……

「嘘……」

「こいつはヤバイな」

ユステイーツアは俺たち全員を見て笑い続ける。それほど俺たちの表情が愉快だったのか。だがこちらとしては全然愉快じゃない。絶望的状况だ。

なんとかフルパワーで倒したのに。衛宮たちが万全な状態ならまだ勝ち目はあったかもしれない。だが衛宮たちも満身創痍。あの英雄王も苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「さあ、どのように食らうてやろうか」

「真琴！まだ行けるか？」

「あーもう!!やれるだけやってやる！」

俺の超マハトマ人と衛宮のリミゼロモード。並みのサーヴァント：がどれくらいか分からないがなんとか対応できる俺たちの持てる全ての力を解放した状態。

まあ俺は中にいるメンバーをほとんど無くし、衛宮は恐らく魔力はスツカラカンだろう。

「行くぞ衛宮！」「行くぞ真琴！」

同時に駆け出しユステイーツアに攻撃を叩き込む。バゼットさん仕込みの格闘術。衛宮は多分アーチャーから教わったか。

攻撃は全て決まった。しかしユステイーツアの表情に変わりなし。

寧ろ奴の笑顔が更に深いものになる。つまり嫌な笑顔だ。

「ほれ、手が止まっておるぞ?」

「チツ、これならどうだ!!」

女相手ならジャックの宝具が効果的はずだ。避ける気がないなら確実に叩き込んでやる!

「殺狂・斬解聖母!!」

「告げる、是・射殺す百頭!!」

宝具を発動。倒せなくても多少はダメージが入るはずだ。衛宮の8連撃の後に俺がナイフですれ違いざまに切り刻む。さすがにユス

テイツアにもダメージが通ったようだ。なら次の一撃を、

「うむ、悪くない。だが」

「ガハッ!?」「ぐっ!?」

――

宝具を発動しユステイツアにダメージを与えられた。それは事実だ。しかしそれ以上の攻撃を真琴と士郎に叩き込んでいるのも事実だ。つまり士郎は8連撃の時に、真琴はすれ違いざまに既に攻撃を受けていたのだ。

士郎は胸に、真琴は両肩にそれぞれナイフで切られたのだ。

「マスター!!」

「シロウ!!」

「安心せい、殺してはおらん。殺しては質の良い肉と魔力が食らえない故な」

「タチの悪い性悪女め!」

セイバー、アーチャー、ギルガメッシュ、フェイカーが同時にユステイツアに攻撃を仕掛ける。その隙に凜とイリヤが真琴と士郎を回収した。

セイバーとギルガメッシュ。トップクラスのサーヴァントが2騎。これだけでも普通の敵ならあつという間に殲滅させられるだろう。

更にセイバーは円卓の騎士の力と聖剣を文字通り体と一つにしている。ギルガメッシュは慢心を捨て乖離剣で対応している。

アーチャーとフェイカーも他のサーヴァントにも引けを取らない。アーチャーはアルジュナの力を中心に他のアーチャーの力を使うことも可能だ。更に本来のナーサリー・ライムとしての宝具も使える。フェイカーは無数に投影した武器で様々な状況に対応できる。神造兵器などは投影出来ないがギルガメッシュと同等の物量戦が可能だ。

これほどのサーヴァントが4騎。しかしそれでもユステイツアには余裕があった。体の元になっているアサシンの宝具で常に高速移動、高速攻撃が可能になり、ユステイツア自身の膨大な魔力量で攻撃力をプラスする。故にユステイツアには彼らと対峙しても余裕があり、尚且つそれ相応の力を持っているのだ。

「行くぞセイバー!!」

「はい!!」

さつきまで敵対していたとはいえセイバーにとってフェイカーは未来のマスター。フェイカーにとってセイバーは過去のサーヴァント。タイミングや息の合わせ方などはバッチリだった。

セイバーとフェイカーの連撃をユステイーツアはナイフで捌いていく。

「元は我もアーチャーだ。援護ぐらいはしてやる。タイミングを合わせろよ弓兵」

「分かってるわよ英雄王!」

終末剣エンキと宝物、アーチャーの援護射撃がユステイーツアに襲いかかる。数の暴力とはこのことだ。

しかしそれもユステイーツアの力で強力なレールガンと化したサブマシンガンで撃ち落とされていく。その間にもセイバーとフェイカーの連撃をナイフで捌いている。

「もう種切れか?では終幕だ」

次の瞬間、

「ぐあっ!」

「なに!?!」

「バカな!?!」

「うあっ!」

次々と突き飛ばされるサーヴァントたち。凜とイリヤも感じ取った。今のは宝具だと。

「時のある間に血を食らえ。見切れるものはおらなんだか」

「あれ、アサシンの倍以上のスピードよ!?!それこそ光も超えてる!!」

「なによそれ!デタラメにも程があるわ!!」

ユステイーツアはナイフについた血を舐めとる。するとユステイーツアのキズが次々と治っていく。

その行為に戦々恐々とするマスターとサーヴァント。

しかしそれがチャンスと踏み込んだ男が一人。

「!?!狩野真琴!?!」

ジャックのナイフですれ違いざまに頸動脈を狙う真琴。しかし彼の体は既にボロボロ。碌に当たることも出来ず、逆に反撃を食らい吹っ飛ばされる。

「バカの一つ覚えが。その手は通用しないと文字通りその身に刻んだというのに」

「…………その油断が命取りだ」

「油断？これは余裕と言うものだ」

「言ったそばからまた油断…………バカは死ななきや治らない!!」

1 発の銃声。それはユステイーツアの左肩を貫いた。

「まさか…………アサシンの起源弾!」

「狩野君、もしかしてアレを狙って?」

「流石真琴だ…………ぐうっ」

「コラ士郎、無理したらダメよ」

真琴はユステイーツアとすれ違いざまに頸動脈を狙ったと同時にアサシンのコンテナダーも狙ったのだ。どちらか一方の目的が達成できればユステイーツアに確実にダメージを与えられる。しかしどころも失敗すれば最悪死んでいた。まさに一か八かの勝負だった。

そして真琴はその勝負に勝ち、ユステイーツアに隙を生み出すことができた。

「今しかない!!」

更にその隙を活かすためにフェイカーが魔力を働かせる。固有結界の準備だ。そしてその発動にさほど時間はかからなかった。

「なっ、固有結界だ?!」

「ようやく貴様に墓標を作ることができた。ここからは一対一だ」

「違うわよ。一対三よ」

「私たちもいるんだから」

「…………帰れと言っても帰らないだろうな」

「ていうかあんたが私たち追い出さないとダメなんじゃない」

「…………やれやれ、死なないでくれよ二人とも」

「あら、それはナイトのお仕事でしょ?」

「ふっ、仰せのままに」

剣の丘で最凶の敵と対峙するのは一人のサーヴァントと二人のマスター。

錬鉄のサーヴァント、フェイカー。

紅い魔術師、遠坂凜。

白銀の魔術師、イリヤスフィール。

「今度は絶対に最後まで戦うんだから」

「自分のサーヴァントの後始末は、マスターがしないとね！」

「ところで凜。ひとつ尋ねるが」

「なによアーチャー」

「別に、アレを倒してしまっても……構わんのだろう？」

最終決戦 途中休憩

「……………腹減ったな……………」

もう夜の10時か……………あの子の記憶がないとなると、まあぶつ倒れたんだろうな。それにしてもこんな包帯グルグル巻きの半ミイラ状態になるとは。

隣には布団が2つ。1つはバゼットさんが寝ている。もう1つに人はいない。多分衛宮のだろうな。

「起きてるのかあいつ」

起きて居間に向かう。案の定衛宮は起きていた。包帯姿が痛々しい。てかさっきのバゼットさんシャツはだけてエロいかった。

「おはよう真琴」

「早起きだなお前。いや俺がずっと寝てただけか」

「そんなことはないぞ。俺もさっき起きたばかりだし」

「あれサーヴァントたちは？」

「なんでも別室で作戦会議だった」

アーサー王にナーサリー・ライム（アルジュナ）、ギルガメッシュ……………なんともカオスな作戦会議だ。

「ほれ、今はそんなに食べれないだろ」

「鮭茶漬か……………悪いな衛宮、いただきます」

「どうぞ召し上がれ」

鮭茶漬。誰でも作れそうな料理だが意外と奥が深い料理、ってアーチャー言ってたかな。バゼットさんの館にいた頃はアーチャーがよく特訓終わりに作ってくれたよな。

「……………ごちそうさん。うん、美味かったよ。家庭の味っていうのか?」
「それはどうも。よく自分でも夜食で作るからさ」

「そうか……………いやー美味かった。美味かったんだが……………机にこれがないかと思ったらもつと良かったんだがな」

机の上にはアサシンの拳銃。いやまあ俺が取ったんだけど、それでも飯時に机にある物じゃないよな。

「ああ、悪い。って言っても誰に返せばいいんだろうな」

「……あの性悪女には渡せないだろ」

「そうだよな。でもこれはアサシンの物だし」

「だったらあの野郎を倒すしかないだろ。勝算は低いけどな」

遠坂とフェイカー、イリヤは俺たちを逃がすために残ってくれた。あいつらがいつまで戦えるか分からない。最悪なことを考えると俺と衛宮、セイバーにアーチャーとギルガメッシュの五人で戦わなくちゃならない。

そしてこの中で戦力にならないのは俺と衛宮……いや俺のほうが戦力外か……衛宮は自分の力をあそこまで解放出来たつてのに。俺は皆んなの力を借りないと戦えない。

「勝算は低くてもやるしかない。だろ？」

「お前ならそういうと思うってたよ衛宮」

せめて……俺自身の魔術が使えれば……

「結界、張り終わったわ」

「ご苦労だったな弓兵」

帰ってきたアーチャーを労うギルガメッシュ。本当に十年で何があつたんでしようか。

「して貴様の結界とやらは奴が攻めてきて何分稼げる」

「うーん、まああいつが自分の名前を思い出すまでは時間が稼げる。でも今の私じゃそれが限界。本当の『名無しの森』なら次第に記憶がなくなつて存在が消えるけど……今の状態じゃせいぜい名前を忘れる程度」

結界を張る前にアーチャーが言っていたが、名無しの森に入った瞬間にまず自分の名前を忘れる。

次に全ステータスが3ランクダウン。この時点でユステイツアを袋叩きに……出来れば良いのだが。

因みに私たちはアーチャーに少し結界を弄ってもらい名前を忘れること、全ステータスの3ランクダウンは免れている。それはシロウトとマコトもだ。

「まあこの名無しの森は固有結界とは似て異なるものだから、暴れた

ら速攻で壊れるわ」

「では名を思い出さずとも結界からは出られると」

「そういうことね。だからハッキリ言っただけは逃げる用の結界よ。ただの時間稼ぎ。一応なかなか壊れないように補強はしてるけど」

「構わん。第一奴がここを攻めるとも限らん。もしかすると大聖杯のところに行くかもな」

大聖杯。ユステイーツアはそこから来たとギルガメツシュが言っ
ていましたね。となると家に帰って休憩をすると。我々と戦うこと
は楽なことかもしれないが、それでも疲弊しているのは確実だろう。

「……ねえ英雄王さん？」

「なんだ弓兵」

「なんでセイバーは……さつきから寝転がって黙りこくってるのかし
ら？」

「英気を養うため……らしい」

なんだか二人の視線が痛い。『あれ？なんでお前そんなに偉そうに
寝転がってるの？』という顔だ。よく私もマーリンに対してそんな顔
をしましたね。

しかし、これは必要なことなのです。宝具を全解放するためには少
しでも英気を養うしかないのですから。

「これが騎士王とは……他の円卓の騎士に見せてやりたいものよな」

「案外皆んな知ってるかもよ？」
「なるほど」

何故二人とも意気投合したような顔をしているのですか！私がこ
うして黙っていることしかできない状況を遊んでいるようにしか見
えませんか！

「……………！ 奴め動き出したか」

「しかもこの方向……」

「大聖杯か…奴も英気を養うつもりらしいぞセイバー」

「そのようですね。ではこちらも動きますか」

武装を展開し外へ出る。外は既に暗闇に包まれている。街灯と月
の光、黒い流星が見える。リンにアーチャー、イリヤスフィールは無

事でしょうか。

「ふむ、あの三人は死んではいないようだが……戦線には復帰できんぞ」

「それじゃあ私たち五人だけ？」

「いいえ、この際マスター二人は置いていきます。向こうが寢床に帰っているならこちらにも出来る可能性があります。それもマスターがいないことで出来ることが」

「まさかセイバー、特攻でもしようっての？」

「それは最後の手段です。これから全額勝負なんですから、マスターを気にしては戦えないでしょう？ただそれだけです」

「……貴様がそう言うなら、そう言うことにしておこう」

「素直じゃないんだからセイバーは」

お見通しですか。そう、これ以降は彼らに戦わせるわけにはいかない。二人の未来をここで終わらせるわけにはいかない。

「では行くか……準備はよいなセイバー、アーチャー」

「勿論です英雄王」

「こつちもいけるわよ英雄王さん。そつちこそ運動不足で屋根の上で滑らないですよ？」

「戯け、我がそのようなことあるわけなからおおおお?!?!」

「言っているそばから……」

「こんな調子で大丈夫でしょうか……」

さあ、最後の戦いの始まりです。

最終局面始動

ムーンセルは何故私を選んだのだろう。

他にも真琴に似合うサーヴァントはいたはずなのに。

それなのに何故、私だったのか。

『空いたアーチャー枠』と名乗ったのは真琴の状況をムーンセルが教えてくれたから。

ならば尚更私のような仮初めのアーチャーではなく、本来のアーチャーであるアルジュナでも良かったはずなのに。

◇

「セイバー疲れたーおんぶしてー!!」

「もう少しなんですから我儘言わないでくださいアーチャー」

「セイバー、我也抱っこ!!」

「貴方は絶対にしません!!」

只今大聖杯に向けて走っております。正直近いと思っていたから全速力で走って来たからなんだか疲れた。サーヴァントなのに、走って疲れる。これはあつていいことなのかな？

「アーチャー、英雄王。見えましたよ。恐らくあれが」

「大聖杯……」

「ふん、予想通りあの女に汚染されているか。あるいは初めから汚染されていたか」

目の前に見えるのは、恐らく絵本に出てくる地獄の釜と言った方がピンとくるだろう。それをリアルにすればこんな感じだ。

「羽虫が三匹。ピーピー言いながらやって来おったか」

「ユステーツィア……」

そんな地獄の釜の前に1人の女。私たち3人の表情が険しくなる。こいつは倒すのではない。殺さなきゃいけない。まあセイバーと英雄王がどう思っているかわからないけど、少なくとも私はそう思っている。

「ユステーツィア、貴様はここで斬る」

「ほう、血の気が多い騎士王よな。慌てるでない、まずは前座を楽しも

うではないか」

次の瞬間地獄の釜から放たれた泥。それは私たち3人の周りを囲むように落ちてくる。そして泥は次々と形を形成していく。人、あるいは獣の姿に形を変えていく。

「これは、サーヴァント!?!」

「それに近いものではあるな。さしずめシャドウサーヴァントと言ったところか。どこまでも腐っているあの女らしい」

「てか数多くない?」

シャドウサーヴァントは大聖杯がある空間にいっぱいいっぱい。数は500超えてるかな?というかサーヴァント500体っておかしいでしょ!」

「やるしかありませんね」

「チツ、有象無象がゾロゾロと。我が一番嫌うものではないか」
「王様たちはやる気みたいね。これは私もやるしかないか」

そしてシャドウサーヴァントに立ち向かっていくのはほぼ同時だった。しかしこうして見てみるとシャドウサーヴァントもいろんなのがいるね。それこそ人の数だけ英雄がいるってやつなのかな。

英雄王は財宝を飛ばしまくってシャドウサーヴァントを一撃で倒している。多分この3人の中で一番貢献している。まああれだけ手数が多いんだから貢献してもらわないとね。

セイバーは一振り一振り聖剣に力を込めて一体一体確実に倒している。目にも留まらぬスピードっていうのは多分セイバーの剣技のことだろう。流石騎士王アルトリア・ペンドラゴン。

私はトランプ兵を召喚して狙撃します。これだけ数が多いと適当に矢を放つても当たるからなんだか嬉しい。

着々と数を減らしていく。でもユステーツィアにはまだ余裕の表情が浮かんでいる。まるでここまで全て計算通りだと言うかのよう。正直不気味だ。まるで時間稼ぎ……まさか、

そんな考える私の上を通り越してユステーツィアに向かっていく剣が6本。英雄王が撃つたものではない。ならばそれが出来るのは1人しかない。

「置いていくなんて酷いことするもんだぜ」

「セイバー、アーチャー！無事か!？」

俺と衛宮がサーヴァントがいらないことに気づいてからここに到着するまでにおよそ5分。まあ場所が近いのと裏道を知っていたからの時間だ。普通の道なら10分ぐらい時間がかかっていただろう。

そしてここに到着した時にはまさに地獄絵図。なんなんだよこの敵の数。まさか全部が全部サーヴァントとかいうなよ？

「来ちゃったねセイバー」

「どうして来たんですかシロウ、マコト」

「なんでって、俺のサーヴァントが戦ってるのに俺だけ家に引きこもってるなんて嫌だ。それに、剣と鞘はペアだろ？」

「シロウ……」

「まあ俺たちをこの戦いに参加させたくなかったらどっかに縛り付けるんだな」

「まあこの雑種どもが大人しくしているはずもなからう。今回はそれを見越してなかった貴様の負けだセイバー」

「そうでしたね。貴方たちは大人しくしていられない人たちだ。近くにおいてそれを忘れるとは。私も衰えましたね」

セイバーは向き直りユステーツィアと黒いサーヴァントたちに剣を向ける。ユステーツィアはそんな中でも余裕の表情を崩さない。

「フフツ、ここまでは想定通り。全てシナリオ通りの展開だ」

ユステーツィアはパチンと指を鳴らす。その瞬間に地面に穴が空きセイバーとアーチャー、ギルガメッシュがその穴に引き込まれていった。一瞬の出来事でアーチャーたちに手を差し伸べることもすらできなかった。

「ここからは我々3人のステージといこうか」

見れば黒いサーヴァントたちもいない。この空間には俺と衛宮とユステーツィアしかない。

「なにがステージだ。お前にとって見れば俺たちを喰い殺す皿の上だろうが」

「ほう、分かっていたか。ならばこの後の展開もわかるだろう?」

「ああ、あんたが俺たちに倒される、だろ?」

「ハハハハハッ……笑わせるなよ小僧!!」

突っ込んでくるユステーツィア。そのスピードは相変わらずバカみたいなスピードだ。つまり滅茶苦茶早い。でもまあその様子だと分かってないな。案外贗作も侮れないな。

「いまだ!!」

「せりやあああ!!」「とうりやあああ!!」

「なに!？」

虹色の宝石を纏ったライダーキックがユステーツィアの顔面に綺麗にヒットした。普通なら首とか顔の骨が粉々に砕けているだろうな。

「ナイスキック、桜」

「ありがとうございます、先輩!」

ライダーキックを放った張本人、間桐桜。前と違ってロングからショートへアーに変わっている。衛宮曰くこつちも可愛いと小声で言っていた。

そんな間桐の姿も変化していた。どことなくライダーを彷彿とさせる姿だ。いや腰に巻いているベルトはライダーの宝具か。ライダーが消えても宝具は残っていたのか。

そんな桜のあとからやって来たのはボロボロの遠坂とイリヤ、そして紅いアーチャー。俺自身フェイカーって呼ぶのは少し違和感があった。まあ呼び方なんてどうでもいいよな。

「さあ、メシが増えたところで悪いが、おやすみの時間だ。早く布団に入らねえと夜食で太るぜ?」

「戯言を。そのような問題はない。一瞬で食ろうてやる!!」

「ここで倒す。アーチャー、付いて来られるか?」

「バカをいうな衛宮士郎。お前が付いてこい」

「病院にいて少し体がなまっっているんです。すぐに倒れないようお願いいたしますね」

「あんたいつからそんな武闘家みたいになったのよ」

「人間何日かしたら変わるのよリン」

「よし。こいつが最終決戦だ!!」

そして、聖杯戦争最後の戦いが始まった。

取り戻す力

冷たい。第1感触はそれだった。記憶が曖昧だ。ジャリジャリした感触がする。状況的に俺は地面に倒れているらしい。意識がキチンと覚醒してから痛みが襲ってくる。

「やってくれる……」

「まだいけるよな、アーチャー」

「当然だ、と言いたいところだが。この状況を覆すには些か力不足だ」
立っているのは衛宮とアーチャー、そしてユステーツィアの3人だけだった。

そうだ、やっと思い出してきたぞ。

あの時、この戦いが始まった瞬間、いや戦い自体は俺たちが到着する前から始まっていたのか。上手い具合にリスタートできると思った。

しかし現実は一スタートなんてものじゃない。この戦いにルールなんてない。聖杯戦争にさえルールは存在するがコレはルール無用の殺し合いだ。

まず手負いの遠坂とイリヤがやられた。開始数秒の出来事だった。ユステーツィアが一瞬で遠坂とイリヤの懐に入り込み一撃。その一撃で2人は壁に叩きつけられダウンした。

「よもやこれで終わりとは言わぬだろう？まだ10分も経っておらんぞ？」

まだ10分も経過していない。これもまた事実だ。間桐と俺は多分5分ぐらいで地面に倒れた。10分も経たずに俺たちはほぼ負けている。いや状況からみて完全に負けている。

悪いけど、俺にも負けられないっていう意地があるんだよ。

「こんなところで……」

「ほう、1人立ったか」

「真琴!!」

「負けるか…負けるか…負けるもんか！絶対勝って帰る！」

デイルムツドのゲイ・ジャルグを呼び出し構える。接近戦が俺の得

手だがそれはユステーツィアもそうだ。だったら一撃で仕留める遠距離狙撃しかない。

俺が何をするのか分かったのか分からずに行つたのかは分からないが、衛宮とアーチャーはユステーツィアを左右から挟み込むように走り出す。

「うおおおっ!!!」

「無駄な足掻きを!」

2人の剣をそれぞれ受け止める。でもこれでいい。情けない話ユステーツィアの両手が塞がっている今しか奴に一撃を見舞えない。ならこのチャンスに逃す手はない!

「そこだあああっ!!」

恐らく人生で一番の豪速球、いや豪速槍か。そのせいで俺の右肩から変な音になる。多分骨がやられたのか?だが今はその痛みはない。それだけ夢中なんだろう。

でもなんだ、この嫌な予感。

「だから無駄な足掻きだと、言つたであろう」

もう少しで槍が突き刺さる。そんな時に、ユステーツィアは槍を受け止めた。手で受け止めたのだ。いやあれは手とはとても言えない。だって

「そんな……嘘だろ」

だってその手は、ユステーツィアの胸のあたりから伸びていたのだから。見た目はまさに血の手。血で手を形成しているのだ。

更に両肩からも血の手を伸ばし衛宮とアーチャーを殴り飛ばす。衛宮とアーチャーはそのまま地面に叩きつけられる。そこまではなんとなく見えたがその後は知らない。

「そら、返してやる」

そう言つて槍を投げ返してくる。スピード的には遅い。躲そうと思えば躲せる。躲せるのに……なんで体が動かないんだ。

「マスター!!!」

そんな声が聞こえた瞬間横から突き飛ばされる。今の声はアーチャーだ。向こう側から帰ってきたのか。

「アー……チャー……？」

でもそこに立っていたのはいつもの元気なアーチャーではなく、左胸に槍が突き刺さったアーチャーだった。

「ううっ……ああつ、くはっ!」

「アーチャー!!」

そのままアーチャーは力なく倒れた。急いで俺はアーチャーのもとに走る。意外にもアーチャーが突き飛ばす力が強くなり飛んでしまっている。そのせいでアーチャーまでの距離がもどかしく感じる。

「おい!何やってんだよお前!!」

「よかった……マスターが…無事で」

「何が無事だ!俺が無事でもお前が」

「そうだね……もう、限界…かな。ねえ、マスター」

「……なんだ」

アーチャーの姿が徐々に消えていく。アーチャーの表情にはいつもの元気がなく、瞳にも光が宿っていない。よく見るとアーチャーはもとからボロボロだった。そこに槍の追い討ち。こんなことって……

「……手を……握ってほしいな」

そつとアーチャーの手を握る。

「あったかい……きつと、ありすにも、この手が必要だ……つた」

光が霧散する。これでアーチャーはこの聖杯戦争から退場してしまつた。

「こんなことって……あんまりじゃねえか」

「なんだ?我が悪いというのか?貴様が躲しておればこのようなことにはならなかつた筈だぞ?」

「……………そうだな。これは俺の責任、俺の罪だ。だから俺は」
きつと今まで以上に歯を食いしばり、拳に力を込めて、ユステ
ツィアを睨みつける。

「俺は、俺のケジメをつける!!」

ユステーツィア目掛けて駆け出す。周りでなんか言ってるが気に
してられない。ただ目の前の女を倒す。今はそのことで頭がいっぱ
いだった。

「いくら人間が足掻いても、我には勝てぬ」

結論から言うと……………俺は負けた

—————◇—————

!?ここは……………どこだ?」

『ようやく目覚めたかい?』

誰だお前。

『世界、と言っておくよ。君は初めてだったね狩野真琴くん』

そうだな

『さて、単刀直入に言おう。君には奴に勝てる力を持っている』

奴に、ユステーツィアに勝てる力を?」

『まだその力を解放していない、いや出来ていないからこうなったん
だ。本当はこうしてアドバイスするなんてよくないんだけど、事情が

事情だ。上も許してくれるだろう』

勿体ぶらずに言ってくれ。

『そうだね。じゃあ思い出すんだ。君の前世、君の生きた世界、君の端末、君の世界を救う戦い、その戦いで共に戦った君の仲間を』

俺の前世……俺の生きた世界……俺の端末？

《うわー、アリス可愛いー！！！！俺ロリコンになりそう》

《いやお前、ほぼロリコンじゃん。アーチャーに恵まれないロリコンじゃん》

《うるせえ。これからギルガメ召喚すんだよ》

《当たらなかつたら？》

《リセマラだろ。あ、でもアリスは消したくないからこのデータは取っとくか》

ひきつぎコード……引き継ぎ……コード？

『ほぼ、ログイン勢だった君が本気を出した数少ない場面だね』

そうだ……ぐだぐだ本能寺から初めて、そこで沖田さん当てて、それからほとんどログインだけで、イベントもろくに回らずにストーリーもロンドンに到着したぐらいだった。

その中で俺が本気を出したのはジャンヌ・オルタとアリスを当てた時だけだった。

『さあ、これで君の戦う手段は分かっただろう？』

は？いやだからって分かるわけないだろ！

『ふむ、ならば最後にダメ押し。アリスの対己・対界宝具は？』

え、それって……

◇―――
「うっ、がはっ」

急な腹痛で強制的に目がさめる。目の前にはユステーツィア。多分後ろにはみんながいる。

「!?……相変わらずしぶとい人間だな狩野真琴」

「それが俺の取り柄、いや俺の家系の取り柄だ」

「どういう意味だ」

「やっとなんて分かった。なんでお婆ちゃんとか両親が何度も何度も旅に出

れるのか。そろこんなのバレたら闇の組織から狙われそうだぜ」

俺は右手を突き出す。やることは一つだ。

「令呪全部のせで命じる。戻ってこい……俺のアーチャー!!」

右手の令呪が全て消える。確かな手応え。そして穴が開く。その中から出てきたのは無数の矢。そしていつも聞いているあの声。

「ただいまマスター!!!サーヴァント、アーチャー!令呪全角でサーヴァントを復活させるとは考えたわね。やっぱ令呪の命令にはサカラエナイワー!!」

「おかえり、俺のアーチャー。早速だけどやってもらおうことがある」

「なにかしら?出来ることなら手伝うわ」

「俺の時間を巻き戻す」

「……………は?」

「いやだから俺の時間を巻き戻すんだって」

「あー出来ないことも……………ないか!」

「よし、やるぞ!!」

俺は左手を、アーチャーは右手を突き出す。なんかこんな感じの必殺技見たことあるぞ?まあそんなことはいいか。

「越えて越えて虹色草原、白黒マス目の王様ゲーム。走って走って

鏡の迷宮、はじめなウサギはサヨナラね♪」

アーチャーの唱える詠唱は『クイーンズ・グラスゲーム永久機関・少女帝国』とある少女の”

物語を終わらせたくない”という願望の具現化。

「飛んで飛んで空色草原、爆走・激走のアクションゲーム。辿って巡って魔王の迷宮、しつこいゾンビはサヨナラだ!!」

俺の唱える詠唱は……………はつきり言って適当だ。俺にとって詠唱は魔術を確実に発動させるための保険だ。熟練された魔術師なら詠唱なんて必要ないだろう?だろ?だろ?だろ?

「これで真琴の時間が戻るはず!」

「時間を戻すだど?そのようなことが貴様のような弱小魔術師が出来るはずがないだろう!!」

ユステーツィアが鬼の形相でこっちに迫ってくる。でもタイミン
グが遅かったな。

俺の中の英雄達が叫ぶ。

《沖田さん大復活!!ええ、バリバリ動きますよ〜!》

《さあ、リベンジと参りましょう!》

《フルスロットルで行くぜえ!!》

《まったく、みんな真琴が好きなのね。私もだけど》

《あれはバラバラ。真琴は守る!》

《もう、負けない!》

《ほら、向こうはやる気よ?ならこつちも》

「全力でやらないとな!!」

何日かぶりの超マハトマンゴルデン。いや今は超マハトマンゴルデン超マハトマン。この面倒さが俺の力だ。俺たちの力だ。

鷹作使いのマスターと聖剣使いサーヴァントが

「シロウ!大丈夫ですか?」

「ああ、俺たちも真琴に遅れを取るわけにはいかないな!」

「はい。さあ行きましようシロウ!」

『あかいあくま』と正義の味方が

「ほら大丈夫なのアーチャー」

「君の方こそ無事なのか?」

「最初にダウンしたからこそ、そのぶん休憩できてるから。さあ休憩終わり!本番行くわよ!」

世界最古の英雄王、冬の城の少女、仮面を身につけた少女が

「無様にやられているな雑種ども」

「ふん、今のは油断したのよ!もう負けないわ。ねえ桜!」

「はい!もう一回です!」

「ふん、頼るつもりはないが、期待している」

そして魔法に片足突っ込んだ俺と大切な俺の戦友と

「何回めのリスタートかわからないが……もう一回付き合えよ」

「どこまでもついて行くわ。たとえ地獄の果てでもね!」

最後の敵に立ち向かう。立ちはだかるは暗殺者の肉体を使いし過去の産物。

「どいつもこいつも!!今すぐ殺してくれる!!」

ユステーツィアとの戦いもこいつで最後にしてやる。そんでもつてこの聖杯戦争も終わらせる！
こいつが最後の戦いだ！

このバッドエンドに私達の気持ちを

「今すぐ殺してくれる!!」

「いくぞアーチャー!」「いこうマスター!」

ユステーツィアがさつきとは比べ物にならないぐらいのスピードで俺たちに迫ってくる。それでも俺には見える。あいつの動きが。

「はあああっ!!!」「うおおおっ!!!」

ユステーツィアのナイフと俺の菊一文字が激突する。超マハトマ
人ゴールデンを超えた超マハトマ人ならユステーツィアのナイフぐ
らいなら受け止められる。それでも奴の背中から生えている血の両
腕の攻撃は受け止められる気がしない。

「くっ!くああっ!!!」

「おうりゃああ!!」

菊一文字で一閃。距離をとったユステーツィアに追撃を仕掛ける。

高速の5連突き、斬り下ろし、斬り上げ、全力の上段斬りの8連撃。
更に剣を左に持ち替えながら左側から右へ回転しながら力任せに剣
で薙ぎ払う。魔力をまとったソレは絶大な範囲をもつ。

しかしそんな大技だとその後の隙が大きい。案の定ユステーツィ
アはこの隙を狙ってきた。でも俺は、いや俺たちには背中を支えてく
れる奴らがいる。

「せやあああ!!!」

ユステーツィアの攻撃を阻むように間桐がシンゴウアックスで攻
撃する。聖杯戦争で成長したかのように間桐の目には迷いがなかつ
た。次々と叩き込まれる間桐の攻撃。ユステーツィアもここまで反
撃してくるとは思わなかったのか、まともに食らい続けている。

「今の私に出来ることを!」

『行こうか、桜』

「行くよ!ライダー!!」

『イツテイーヨ!!フルスロットル!!』

シンゴウアックス最大の一撃が振り下ろされる。ユステーツィア
は流石に不味いと思ったのか血の両腕で受け止める。やはりあの両

腕が最大の攻撃方法で防御方法なんだ。だったらあれを潰せば、

「桜！早くどきなさい!!」

声を発した瞬間に攻撃のチャージを始める遠坂とギルガメツシユ。ギルガメツシユはエアで、遠坂は……なんだあれ？でつかい弓か？

「私の財を貸してやってるのだ。ウツカリするなよ凜！」

「あんたこそ肝心なところでへましないでよギルガメツシユ！」

「ちよ、ちよつと姉さん!?ギルガメツシユさん!」

「撃ち碎け！山脈震撼す明星の薪!!」

「死して拜せよ！天地乖離す開闢の星!!」

間桐の叫びは届かず打ち出される星を砕く攻撃。容赦無く間桐に迫るが間一髪衛宮が間桐を救出する。ということは、

「なっ!?そんなバカな！」

血の両腕でシンゴウアックスを受け止めるユステーツィア目掛けて攻撃が炸裂する。そのおかげでシンゴウアックス諸共血の両腕を破壊する。今の攻撃でこの大空洞が壊れないか心配になったがそんなことは……つてもう崩れかけてるぞ！

「こいつは時間との勝負になるな」

「ここが崩れる前に倒せばいいんだ。そうだろ真琴？」

「そうだ。ならやることは分かってるな衛宮？」

「ああ！」

衛宮もリミゼロモードになる。これで超マハトマ人の俺とリミゼロ衛宮の全力形態のコンビだ。ぶっちゃけ前もこのコンビでボロ負けしたんだが、このままノリに乗ってくしかない。

「遅れるなよ士郎!!」

「!!……ああ、行くぞ真琴!!」

血の両腕を破壊されてガードが崩れたユステーツィアに全力攻撃を仕掛ける。面白いぐらいに攻撃が決まっていく。2人合わせて合計27連撃。俺の方が一回多かった。

「そこだっ！」

強化した左拳でユステーツィアを殴り飛ばす士郎。外套の力もあってかユステーツィアはかなり飛んでった。さっきまでの威勢は

何処へやら。満身創痍もいいところだぜ。

そこへ追い打ちをかけるようにイリヤがアサシンのコンテNDERをユステーツィアの額に押し当てる。弾は装填してあるだろう。

「もう終わりよユステーツィア!」

「イリヤスフィール……いいのか? 貴様が殺そうとしているのは自分のサーヴァント、そして我は貴様の先祖だぞ?」

「……………」

「貴様がここで我を殺せばこのアサシンも消え去る。そうすれば貴様は聖杯戦争に敗退したことになり、聖杯を得ることが出来なくなる! それでもいいのか?」

「……………だから何?」

「なんだと?」

「人の願いは絶えず変わっていくの。人としての機能を既に失っている貴女ではわからないでしょうね」

それに、とイリヤは付け加える。

「サーヴァント、いいえ別世界とはいえ自分の親の不始末は、娘が片付けないとね」

グツと引き金を引く。その瞬間に立ち込める火薬の匂いと血の匂い。コンテNDERから放たれた弾丸がユステーツィアの額を貫いたのだ。

パタリと倒れて消滅していくユステーツィア。光の粒子となって消えていった。つまりこれで終わり。やっと終わった。

とは思えなかった。

「随分しぶといなアンタも」

アーチャーの投影した剣が壁に何かを縫い付ける。やっぱり、あれで倒せたとは思えなかったんだ。

「今度はオレの体を狙ったのかユステーツィア?」

「クソッ！この贗作風情が!!」

「訂正しろユステーツィア」

壁に縫い付けられたユステーツィア目掛けて光の斬撃がいくつも飛んでくる。間違いなくセイバーだ。白銀の聖剣から放たれたのだ。「アーチャーは贗作ではない。姿が変わろうと、理想が変わろうと、彼は私のマスターだ！彼の信念は本物だ！それを否定するというならば、」

右腕から星の聖剣が解放され、セイバーの手に収まる。その輝きはまさに星の光。闇を討ち払わんとする聖なる光。その真名は言わずもがな、

「彼のサーヴァントとして、貴女を倒します！」

「おのれえ……」

「約束された……」

「おのれえええええ!!!」

「勝利の剣!!!」

飛び上がりユステーツィア目掛けて剣を振り下ろす。星の光を解き放つのではなく、直接叩き込む。これだけでも与えるダメージは段違いだった。

「つていうか今ので大空洞が更に壊れそうなんです。それにまだユステーツィア生きてるんだけど！」

「クソッ、こうなったら、ここ諸共貴様らを吹き飛ばしてやる！」

「おいおいしぶとすぎるだろ。アーチャー、最後決めるぞ！」

「かしこまりー！」

悪の小物っぽい台詞を言いながらユステーツィアが大聖杯の淵に立つ。まさに鍋の淵だ。中はモザイクつけないと正直直視できない。とにかく、ここで倒さないと本気で不味い。

「これが最後ねユステーツィア。正直うんざりよオバサマ」

「だそうだ。俺もうんざりだからこれで終わらせる」

「ふん、だが貴様らでもこれは防げるかな？」

瞬間ユステーツィアの姿が消える。間違いなくユステーツィアの宝具だ。あれはアサシンの肉体を使っているから使えるのだと思っ

ていたが、どうやら違うみたいだな。流石に宝具となると見切るのは無理だぞ?!

「時のある間に血を食らえ!」

「マスター!後ろ!」

「つて言われても対応できないつての!!」

振り向いたときにはユステーツィアが迫ってきていた。顔が近い。まさに万事休す、形勢逆転、絶体絶命。ここまで来て負けるのかよ。

「そこで諦めてどうする狩野真琴。お前はどちらかと言うと諦めが悪い方だろう?」

「?この声は」

「復讐者は殺人鬼となりて」

ユステーツィアの攻撃は1人の女性に止められた。復讐者のサーヴァント、アヴェンジャー。なんだまだ生きていたのか?」

「貴様、私のスピードについてこられるのか!」

「私の十八番、いや唯一の取り柄になってしまったこと。それがこの模倣殺人。他の人にできて私にできないことはない」

ユステーツィアの攻撃を全て相殺したアヴェンジャー。成る程な、こいつの宝具は確かに厄介だ。

「あとはお前らが決めろ。私の役割はここまでだ。全くアイツも人使い、いや守護者使いが悪い」

追い打ちと言わんばかりにユステーツィアの胸にナイフを突き立てる。最後はゆずるつてか?いいいぜ、やってやる。

「アーチャー!これで終わらせるぞ!」

「動きは私が止める。トドメはマスターが!」

アーチャーに魔力を回す。ここでアーチャーに仕留めてもらっても構わないんだが、まあ頼まれた以上やるしかないな。

「繰り返すページのさざなみ……押し返す草のしおり……全ての童話は、お友達なのよ!」

アーチャーの開いた本から放たれる童話の欠片がユステーツィアを拘束する結界となる。クマのぬいぐるみとか人形とかペロペロキャンディーとかメルヘンチックなものに拘束されるとは、哀れユステーツィア。

「クソツ、おのれ狩野真琴！貴様の存在を呪ってやるぞ！」

「それはつまり敗北を認めるってことか？なら潔くやられる！」

右拳に魔力を集中させてユステーツィアに刺さっているナイフ目掛けて叩き込む。魔力が炸裂してユステーツィアの内部が爆発したような音になる。でもまだやられるつもりがないと？ならもう1発！

「今度こそくたばりやが「避けてください真琴君！」え!?」

聞き覚えのある声に振り向いたら、あら不思議。俺目掛けてフラガラックが5つも飛んで来てるではありませんか。

「うわああああ!!!」

急いで回避してフラガラックを全て避ける。つまりフラガラックは全てユステーツィアを貫いたということになる。更にダメ押しと言わんばかりに紅の槍がユステーツィアの心臓を貫く。

「おう、美味しいとかはもらったぜ！」

「最後の最後で出てくるのかよ！バゼットさん、ランサー！」

「ずっと寝たきりなんて私は我慢できませんから！」

ボロボロのバゼットさんとランサーが最後のトドメをもっていた。ユステーツィアは大聖杯の中へと落ちていった。最後に見たあいつの顔は「そんなバカな」って顔だった。つまりこればかりは完全に倒したってことになるのか。

「やっと終わった……」

眼下にはみんなが待ってる。俺の隣には相棒のアーチャーがいる。大空洞はもう崩壊寸前。今から走って出ないと巻き添え確定だ。

「マスター…帰ろっか」

「そうだな、帰ろう」

これでやっと帰れる。

「貴様だけは生きては返さん!!」

「なっ!？」

俺の右腕に鎖が巻きつく。ユステーツィアが俺だけでも道連れにするつもりか。引きちぎって逃げるには時間がない。だったら、

「アーチャー、みんなを頼む」

「え、ちよつと待ってよマスター」

「上等だぜユステーツィア!!地獄まで送迎してやる!!」

「マスター!!」

大聖杯の中を駆け下りる。ユステーツィアも流石に予想外だったのか呆気にとられている。その阿呆面に今からデカイの叩き込んでやるぜ！

「マスター!!離してよ士郎、バゼット!!」

「お前を行かせるかよ。俺が行く!」

「貴女は行かせません。私が行きます!」

「はあ!?!だったら私が行くしいいっ!?!」

「つて何後ろから3人で転げながら来てるんだよお前ら!」

崩れゆく大聖杯の中を走り抜ける。途中で体製を整えたアーチャー、士郎、バゼットさん。待ち構えるユステーツィア。全く、どうしてこうなるかなあ!!

「バカな……こんなこと、ありえない!!」

「残念!俺が実行している時点でそれはありえるんだよ!!」

ユステーツィアの顔面に拳を叩き込む。その瞬間に鎖が外れた。これで上まで駆け上がれば最高なんだけど、残念なことにもうそん

な体力ありません。

「そこまでですユステーツィア!!」

「真琴を道連れになんかささせないぞ!!」

「マスターを返しなさいあああ!!」

もう既に倒れかけのユステーツィアに更に叩き込まれる3人の拳。これがトドメとなって完全にユステーツィアは消失した。それと同時に大聖杯が嫌な光を放っている。

「はあくどうして最後はこうなるのか」

「あははーどうしてだろー……どうするのマスター?」

「ていうか逃げないと不味いよな」

「前に聞きましたか、この冬木の大聖杯。もし爆発したら冬木の半分は吹き飛ばらしいです」

「半分で済むのか?」

「どうでしょう……とにかく、私たちは確実に死ぬでしょうね」

「……マジか」

大聖杯の光が更に強くなる。そして次の瞬間俺の意識は無意識に飛んだ。

「ちよつと起きてよマスター」

「起きてください真琴君」

「ぶがつ!?少しでも現実逃避させてくれよ!」

「どう足掻いても絶望的なので最後にこれだけ伝えます。

「どう足掻いてもバッドエンドならこれだけ伝えとく。」

大好きですよ、真琴君」

大好きだよ、真琴」

「……………そういうのはもっと早くに言ってもらいたかったぜ」

――――

2月13日。丁度日付が変わったその時、冬木の一角が爆発で吹き飛んだ。

エピローグ

聖杯戦争から5年の月日が流れた。

「姉さん！コッチですよ！」

空港にてイギリスから一時帰国した凜を待っていたのは妹の桜だった。最終決戦の際にバツサリ切った髪の毛も元の長さまで戻っていた。それに対し凜はバツサリと髪の毛を切っており、まるであの時とは逆になっていた。

「悪いわね桜。わざわざ空港まで迎えに来てもらって」

「いいんですよ姉さん。私も姉さんに会いたかったですし」

桜の運転で冬木市へと車を走らせる。冬木市には空港が無いため桜は隣町まで車を走らせていたのだ。往復3時間。およそ4ヶ月前に免許を取得した桜とつてそれは決して楽なものではなかった。

それでも久しぶりに会う姉の顔を一足早く見るために片道1時間半の山道を走って来たのだ。

「そういえば兄さん、最近離婚したんですよ」

「はあ!?これで2回目じゃないの!?!」

「なんでも今回は向こうが離婚してくれって頼んできたらしいです。兄さんは離婚したくないって言ったんですけど、結局離婚しちゃいましたね」

「これからあと何回離婚するのかしらね、あいつは」

「そういう姉さんは結婚とかしないんですか?」

「その言葉、そっくりそのまま返すわ桜」

そう言われアハハと笑いながら目をそらす桜。凜も桜も好きな人が遠くに行っているために好きだという気持ちを伝えるに伝えられなかった。

「いつ帰ってくるんですかね、先輩は」

「時計塔で一緒にいた時は予定は未定って言ってたわね。狩野君とかなら知ってるんじゃないかしら?」

「狩野先輩もバゼットさんと結婚してからいきなり単身赴任ですもんね。もうお子さんもいらっしやるのに」

「女の子だったわね。確か名前が」

「木綿季ちゃんでしたね。写真を見せてもらっただんですけど、丁度狩野先輩とバゼットさんの特徴を少しずつ持つてましたよ」

「つと、狩野君のそんな話してたら見えてきたわね」

空港からかれこれ1時間と少し。見えてきたのは田舎っぽい風景とは不釣り合いなクレーター。大きくはないが小さくもない。

このクレーターの正体。それは聖杯戦争終盤に大聖杯が爆発したことによつて出来たもの。

「ほんと、よくこれだけの規模で収まったわね」

本来なら冬木市が丸々吹き飛んでもおかしくない程の爆発力を持つはずだが、どういうわけだか被害は少なめで終わっている。寺は巻き込まれたが。

どうしてこれだけの規模で収まったのか。それを知るものは今の冬木にはいない。この冬木から遠く離れた場所にいる。

「ああ、明日にはコッチを旅立てるよ」

『あまり無理はしないでくださいよ。木綿季だっているんですから』
「分かってるよ。それより心配なのはパパの顔を覚えてるかどうかかなんだけど」

『それなら心配ないんじゃないですか？木綿季は記憶力もいいですから』

「そうか、それなら安心だな。つとお客さんだ。悪いけどまた後でな」
『気をつけてくださいいね、執行者さん』

電話を切ると同時に相手を数える。多分15人。5年前ならなんとかなったかもしれない。今の俺には少しきつい数だ。

「仕方ないよな。これも仕事だ」

嫌になるがこれも仕事だ。どういうわけか俺の家系が魔法に近い魔術を扱えることを協会の人間が嗅ぎつけ、封印指定ギリギリラインで踏みとどませる代わりに封印指定執行者という、それはそれはブ

ラックな仕事にお仕事をする羽目になった。

チクった奴になんとなく心当たりがある。最終決戦以降全く姿を現していない金ピカと神父。ギルガメツシユの方は何やら青の魔法使いにリベンジする為に色々と渡り歩いているとか。慢心を捨てたのもその為と言っていたが本当だろうか？

問題は神父だ。本当にどこ行きやがったんだ？

「まあ考える暇はないか」

よく見れば代行者まで混ざってる。これはこれは面倒な。

「つたく…これならまだ聖杯戦争中の方が楽しかったぜ」

思い出すのはあの爆発の後。2人の女性に告白された後だ。

◇

5年前。あの爆発で俺、アーチャー、バゼットさん、衛宮は死を覚悟した。しかし俺たちはあの爆発の中生きていたのだ。その原因はなんとなく、いや『アーコイツなら納得』と思わざるを得なかった。「よくぞ生き残った。さあ願いを言え！どんな願いも叶えてやろう」

「「……………」」

目の前に立つ白い服の男。『世界』を名乗るこの男ならあの爆発をこの規模で抑えることができるだろう。

「あれ？どうした？ギャルのパンティおくれー！って言わないの？」

「言わねえよ。だいたいなんで今頃出てくる」

「いやー。直接介入は基本許されてなくてね。ああやって君の夢に出てくるぐらいしか方法がなかった。でもそれでよかったね。後味の悪い結果を回避できたからね」

「なんなんだ後味の悪い結果って？」

「このユステーツィアとの戦いは絶対に勝利する。それは決められた運命と言ってもいい。ただその結果にたどり着くまでの過程が違ってたんだ。本来ならユステーツィアは聖杯の穴に引き込まれるんだけど、その時に狩野真琴君がダメ押しにユステーツィアの顔面に蹴りを叩き込むんだ。その時に彼も聖杯の穴に引き込まれて終わり。これが本来の結末だ」

つまり俺が死んで終わってたのか。それがまあ随分と過程を捻じ

曲げたまもんだ。

「つまり君達は運命に勝つたんだよ！そんなありえないことを成し遂げたのはこの歴史上で恐らく15人目だ」

「1人目ではないのですね…」

「そんな君達に敬意を評して、君たち4人にどんな願いも叶えられるチャンスを与えようと思う。さあどんな願いでもいいよ！だいたい叶えられるからね！」

俺たち4人は顔を見合わせてお互いに頷きあう。どうやら願いはだいたい決まってるみたいだな。

「じゃあ俺から。俺の願いはイリヤを普通の人間として生きられるようにしてくれ」

「衛宮士郎君、君は他人のためにこのチャンスを使うのか？」

「イリヤはホムンクルスで聖杯の器だってアサシンが言ってたんだ。だからこそ短命なんだって。それは嫌なんだ。もっとイリヤと、みんなと笑って過ごしたいから、俺はこのチャンスを使う」

「なるほど、確かにそれは君の欲望の願いだ。よし分かった。んじや次！」

次にバゼットさんが前に出た。

「では次は私が。私の願いは、もう一度ランサーに会うチャンスをください」

「確かに、大聖杯が爆発した今、ここにいるアーチャーと俺が呼び出したアヴェンジャー、元から受肉しているギルガメッシュ以外は消滅している。そこで君はランサーをもう一度使役するのではなく、出会う機会が欲しいと？」

「彼はきつとこの世界には来ないでしょう。それこそまた別の地の聖杯戦争で強者を求めて戦いに赴くはずです。そんな彼に一言言っておきたくて」

「なるほど、中々面白い。よし分かった。それじゃあ次！」

「先にいいかしら真琴」

アーチャーが俺に声をかけてきた。別に順番なんてどうでもいい。願いが確実に叶うならな。了承の意味を込めて首を振る。

「ありがと。私の願いは……この聖杯戦争の記憶を、ずっと残しておきたい。ありすのことを覚えていたからって、次に召喚された時に真琴のこと覚えているかどうか分からないから」

「確かに、システム的には覚えているか怪しいところだが……しかし驚いた。君のことだから受肉を願うと思っただけだ」

「それも考えたけど……私はナーサリー・ライム。人から人へ歌い継がれる存在。1つのところに長居するのは良くないと思うの。でも記憶ぐらいならいいよね？」

「……それが君の願いなら叶えよう。次」

最後は俺か。まあ俺の願いも今決まったとこだ。

「俺の願いは……」

◇

現在

吹き荒れる砂埃を抜けて町にたどり着く。この地域には珍しくキチンと整理された町だ。因みに現在の寢床もここだ。

町に入った瞬間、ボロボロの新聞が足に張り付く。とって読んでみると、こことはまた別の地域で英雄が現れたと書かれている。

「正義の味方、ねえ……」

ベンチに座る。隣にはフードを被った男が座っている。髪は白く、肌は浅黒い。まるでどこぞの贋作使いだ……

「随分とデカデカと取り上げられてるな」

「でも救えなかった方が多いんだ。これじゃあまだまだ」

「相変わらず理想が高いなお前は」

「それ、イリヤにも言われた」

「そーいや、イリヤは今頃中学か？」

「だった筈だ。最近も城跡で話してるらしいぞ」

「それ本当なのか？本当だったら」

「イリヤが言ってるんだ。本当だよ。まだアサシン、いや衛宮切嗣はいるんだよ。大事な娘と過ごすために」

「これも、ムーンセルの副作用か？」

「そればっかりは分からないさ」

男は立ち上がり笑いながら話す。

「願いを叶えるとか言いながら、結局ムーンセル頼りだもんな」

「正直呆れたけどな」

2人して笑い合う。通行人が何人か見ているが気にしてはいけ
ない。

「それじゃあ俺は行くよ。まだ助けを必要としてる人がたくさんいる
からな」

「そうか。んじやまあ俺もいきますか……また冬木で会おう、士郎」

「ああ、またな真琴」

再び真琴の前に立ちふさがる敵。今度は数を増やして……恐らく
は百以上ね。

「……こればかりは」

《ハイハイ！沖田さんの出番ですよね分かります！》

《いやいや、ここはこのデイルムツドが》

《何言ってるんだ！俺つちとゴールデン号で充分だぜ》

《超マハトマ人になるには私の力が必要不可欠なのよ？分かってる
？》

《真琴、お腹痛いの？お腹押さえてるけど……解体する？》

《ウウ……》

「ストレスでお腹痛い。漏れそう。マジでヤバイ」

《シャキツとしなさいよみつともない。そんなんじゃ戦えるの？》

「大丈夫だ、問題なああああ……つと危なかった」

危うく漏らしかけたマスターに声をかける。

《大丈夫？真琴の武勇伝がまた刻まれるわよ？》

「そんな不名誉な武勇伝はいらない」

一歩踏み出す真琴。お腹を押さえてるけどその表情はどこか嬉し
そうだ。それは決して漏らしそうだから諦めて嬉しそうにしている
のではない。きつとみんなと笑いあえて嬉しいのだ。

「まあ、今回も全部のせで。全員でぶつかるぞ！」

《それがマスターらしいわね。どこまでも一緒よ真琴！》

「頼むぞアーチャー！みんな！」

あの時真琴はこう願った。『アーチャーを俺の中の空いたアーチャー枠に入れてくれ』と。そのおかげで私は『ナーサリー・ライム』と『真琴のアーチャー』と2つの存在に別れた。

つまり『英霊としてのナーサリー・ライム』と『真琴個人の専属サーヴァント』とこの時点で別々の存在と別れてしまったのだ。そして今、真琴のアーチャーとして私は彼の中にいる。

まったく、これこそありえない。

でもそんなありえないことを成し遂げるのがこのマスターだ。

そのおかげで私は今ここにいます。

ほんと、無茶苦茶なんだから。でもありがと、真琴。

「みんなの力、おかりします!!なんてな！」

真琴の冬木の聖杯戦争は終わった。しかし彼自身の戦いは終わらない。次の聖杯戦争は果てしない聖杯探索か、それとも偽りの聖杯戦争か、それは分からない。

そう、未来は決まっていけないのだから。だから本当は『ありえない』『不可能』というのは早計なのかもしれない。もしかしたら未来では今の『ありえない』が『ありえる』ことになっているかもしれない。『不可能』が『可能』になっているかもしれない。

だからこそ真琴は進み続ける。『ありえない』を実現するために。

終わり